明治三十六年八月五日發行
每月一回五日發行

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

女學世界

第三巻第十號

口繪




地方よりの御註文は御手紙にて
御申越被下候はゞ小包郵便にて
發送仕る可く候尚ほ註文御
案内書は御一報次第御送り
可申上候
一切の商品は店内一
面に陳列致し置候に
付き御立寄り御
縦覧被下候様奉
希上候
東京日本橋駿河町
三井呉服店
大阪高麗橋三丁目

女學世界 第参巻第拾號 目次

最上 醬油 元祖

登録商標

千葉縣銚子町

釀造元 濱口儀兵衛

は開業二百五十九年
は品質の吟味嚴重也
は風味他品に超絶す
は最高の賞牌を有す
は日本一の釀造高也
は全國到處に販賣す

●醬油の鑑定法

素人や御婦人方に手輕なる醬油の良否判別方は二箇のカラス德利へ二種の醬油を入れ沸騰せる湯の中に五分間浸し置くときは鷄卵の中の白味が固形すると同じく醬油に含みたる滋養分も凝結して蛋白質を示す此量多き醬油は良品と識らるべし

●醬油の保存法

最上の醬油は決して腐敗する事なけれども夏季に置場所よろしからざる時は稀に白カビの發生する事あり之れを防ぐには醬油を攝氏七十度にて四五分間溫め置けば去る氣遣なしあまり高き溫度は風味と滋養分を害すべし

賣捌所 東京北新堀町七番地

濱口支店

（電話浪花二二五九四）

香魚



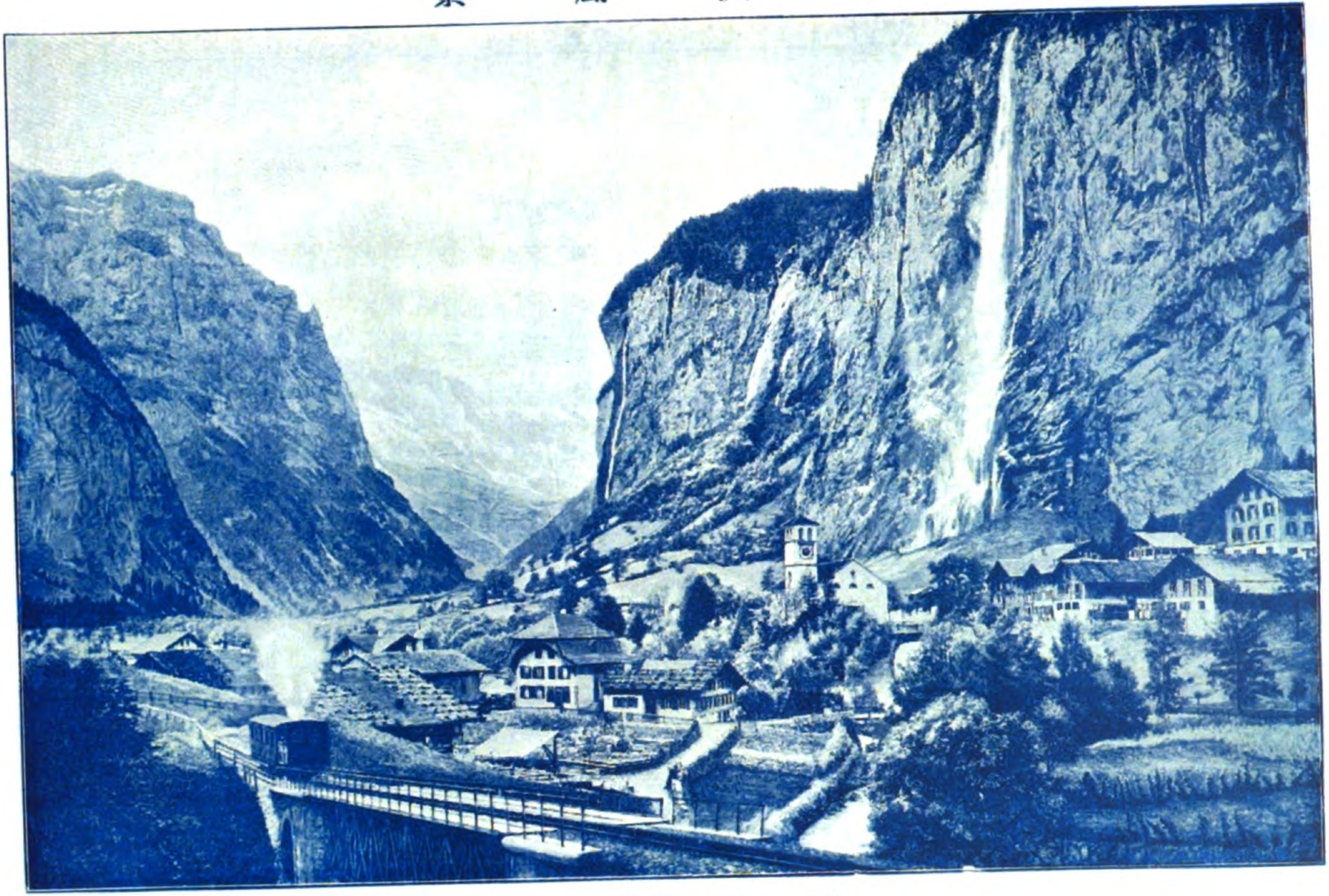
森脇雲溪氏筆

雪の銀閣



（京都小寺實氏撮影）

歐洲風景



瑞西の山村

メキシコの女樂師



受驗問答叢書

第拾三編

寺崎留吉君著（出來）

新撰動植物學問答

全壹册洋裝袖珍

正價貳拾錢　郵稅四錢

動植物兩界の學理は頗る深遠にして範圍又宏博なり、而して初學者の爲め能く楷梯の便を爲し斯學の研究に資するもの少し、本書は著者教授の傍ら諸官立學校の入學試驗に應ずべき兩學界の主要を問答懇示せり

第拾四編

木村定次郎君著（出來）

新撰地文天文問答

全壹册洋裝袖珍

正價貳拾錢　郵稅四錢

本書は天體の現象地球表面に起る作用等を一々簡明なる問題を設け受驗者の便に供せん爲めに悉く其要所を摘錄したれば諸學校入學試驗に應ぜんとする人此書を机上に備へなば利するもの必ず多大なるべし。

第拾五編

中村重造君著（出來）

新撰法制經濟問答

全壹册洋裝袖珍

正價貳拾錢　郵稅四錢

法制經濟の思想は國民として無かるべからずと雖方今之に關する良書に乏しく殊に中學生の爲めにものしたる問答書に至つては絕てなし本書は中學生は勿論苟も法律の下に棲息し經濟事情に支配せらるる者の必讀書也

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（甲の一）

源隆國著　藤岡作太郎先生校訂

五編 今昔物語選

一編　蝶夢作　幸田露伴先生校訂
芭蕉翁繪詞傳附句集

袖珍名著文庫

二編　近松作　饗庭篁村先生校訂
近松淨瑠璃三種

六編　石川雅望作　關根正直先生校訂
近江縣物語

三編　秋成作　芳賀矢一先生校訂
雨月物語

四編　曲山人補　小三金五郎　尾崎紅葉先生校訂
娘節用

七編　狂言記選　芳賀矢一先生校訂
狂言五十番

東京神田裏神保町　富山房

●全部百冊毎編紙數約二百頁毎編美麗口繪入●

正價　一冊廿錢●六冊一圓十四錢●十二冊貳圓廿二錢●廿五冊四圓六十錢●五十冊九圓●百冊十七圓五十錢

●上製一冊に付き八錢增●郵稅一冊金四錢●

時下炎暑に向ふ傳染病漸く流行せんとす衛生を重んずる者は先づ本書を讀め

衛生一夕話

東京鐘淵病院長橋本善次郎先生著

全一冊定價金三十五錢郵稅金八錢

兩書共大好評再版

家庭料理法

全一冊　上製六十錢郵稅十錢　並製四十五錢郵稅八錢

横井玉子女史著

食物と衛生とは[illegible]密接なる關係を有す本書の出づる蓋し亦時を得たるもの也

發行元　東京神田裏神保町　合資會社　富山房

（三の二）

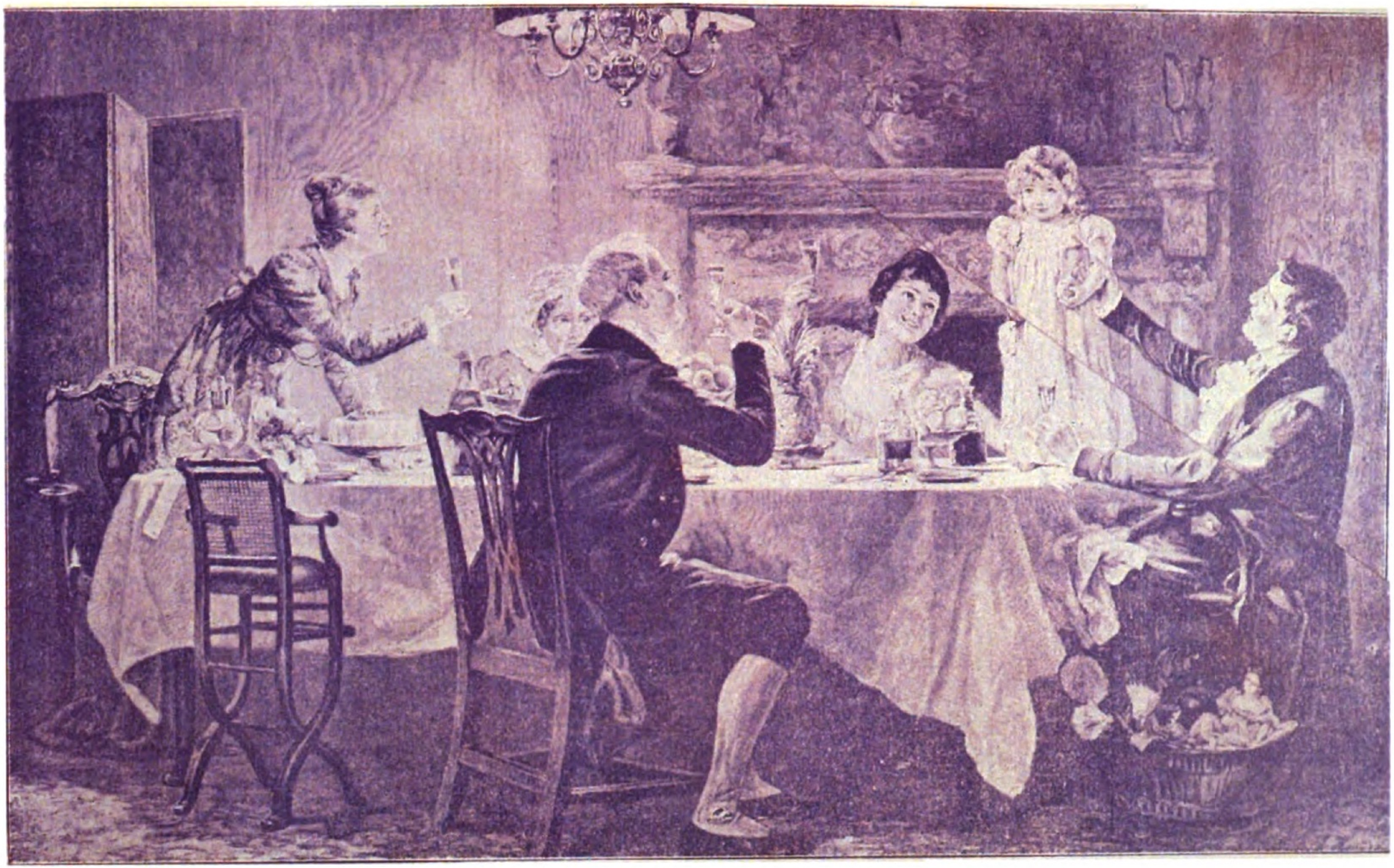
（甲の四）

鴛鴦



今尾景年氏筆

祝生誕

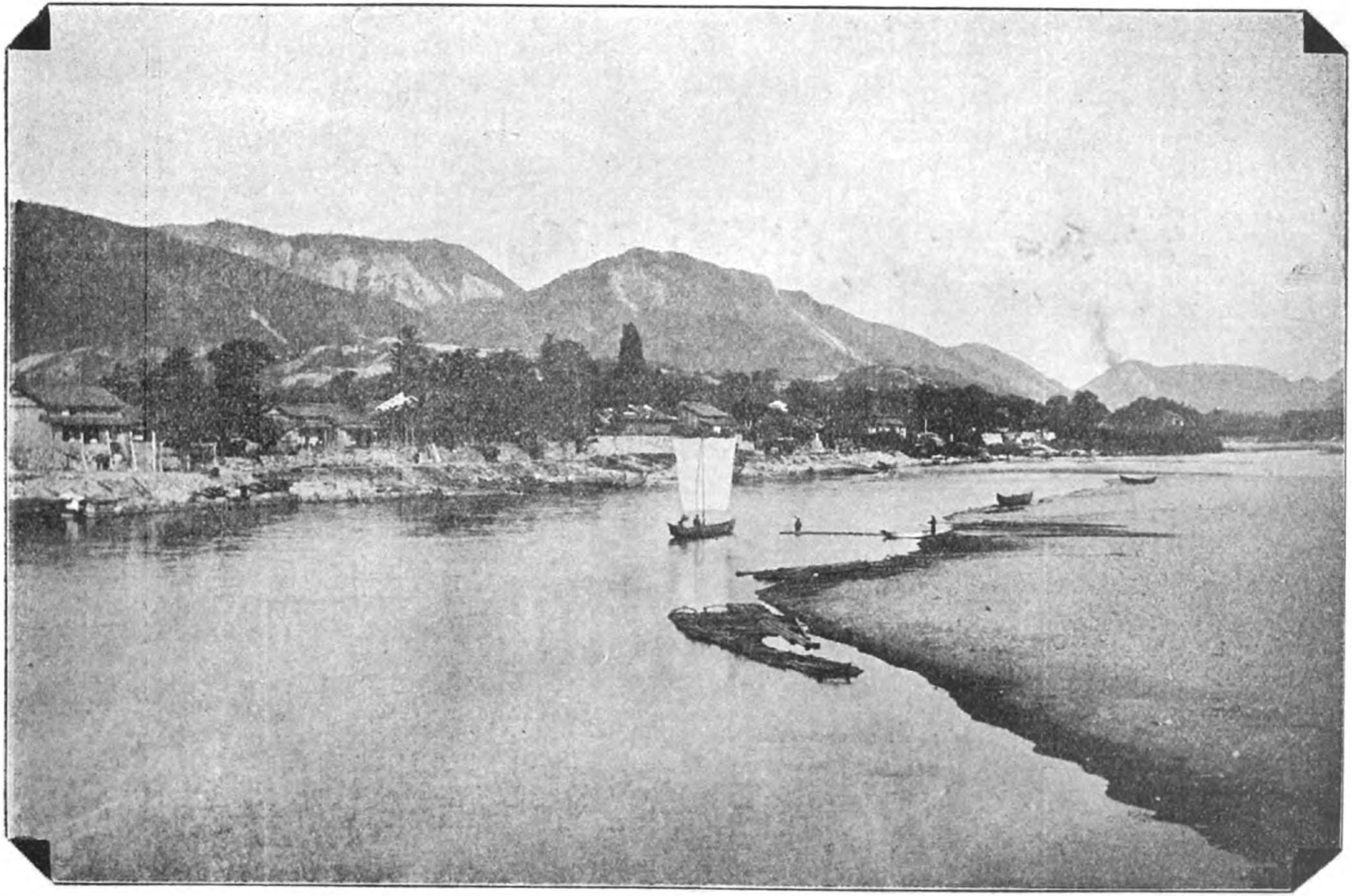


霧　　　　川



（熊本市山本壽次郎氏寄贈）

長良川の夕景



治肺新法

附錄 肺病全快實歷談

此書は拙者肺病全快に付其實地經驗の方法を詳記したる物郵劵三錢封入申込者に無代施本致すべし
東京下谷上根岸町百十一　藥學得業士 金澤巖
(電話下谷二一二五九番)

女學世界廣告の効力

は其販路の確實にして廣く其方面權家富豪の内庭は素より各地方女學校に多數の讀者を有するか故に此向に適する需用品の廣告は其効力偉大なり

博文館廣告部

消毒 純良

牛乳

▲牛乳は充分消毒し衛生に注意す年中の飲用には安全なる上等煉乳なり
▲牛乳は品質優等に比すれば無類の割安にして配達も亦た迅速精確なり

三五社
京橋本材木町三丁目十六番
電話 本局 三一四四番 三〇六六番

諸學校女生徒ノ寄宿ニ應シ夜間英語ヲ教授ス

近藤女子監督家塾

東京市小石川區春日町四十三番地

毛はへ薬

原名(ヘクネス)乙價貳圓甲價特別製參圓五拾錢二種共送料拾四錢●本劑を塗擦すれば皮膚は速に新陳代謝をなし皮膚を改造し毛根を發生せしむるを以て如何なる禿も甲價壹瓶で必毛髪發生す●近頃流行の禿頭やけど●できもの はつぼう等のはげ●まゆげ●口ひげ●はへ際うすき●婦人こまあたりのはげ其他男女有べき所に毛なきに可驚効験あり且抜毛を止め毛足を速む

根治確證

わきが

新治療薬 ラピヨン

程頑固劇烈の難症も甲價壹瓶にて必ず全治し決て再發せず丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢送料拾貳錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を潔清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最新發見の特種の新劑にて大家の醫療も効なき者も必根治す輕症は丙價如何

化學的

色白くなる薬

パンドロン溶液

を漂白すると共に皮膚を改造するが故に如何程色黑きも壹瓶で白色に變化し秀美艶麗の容貌となるを確證す乙價貳圓甲價特製參圓五拾錢送料拾四錢

本劑は貴女紳士淑女粋客間に大に高評を博し最新流行の秘方の奇劑にして本劑のを塗擦すれば主成分は皮膚グランラド氣孔より吸收せられ薬力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛ならしめ色素を吹出物を去り●にきび●

らい病

新治療薬 ダービン

治すべき者と斷定せらる依て弊館卒先し諸君に照會す試に一劑も用よ必大効あり三劑用れば誓て全治

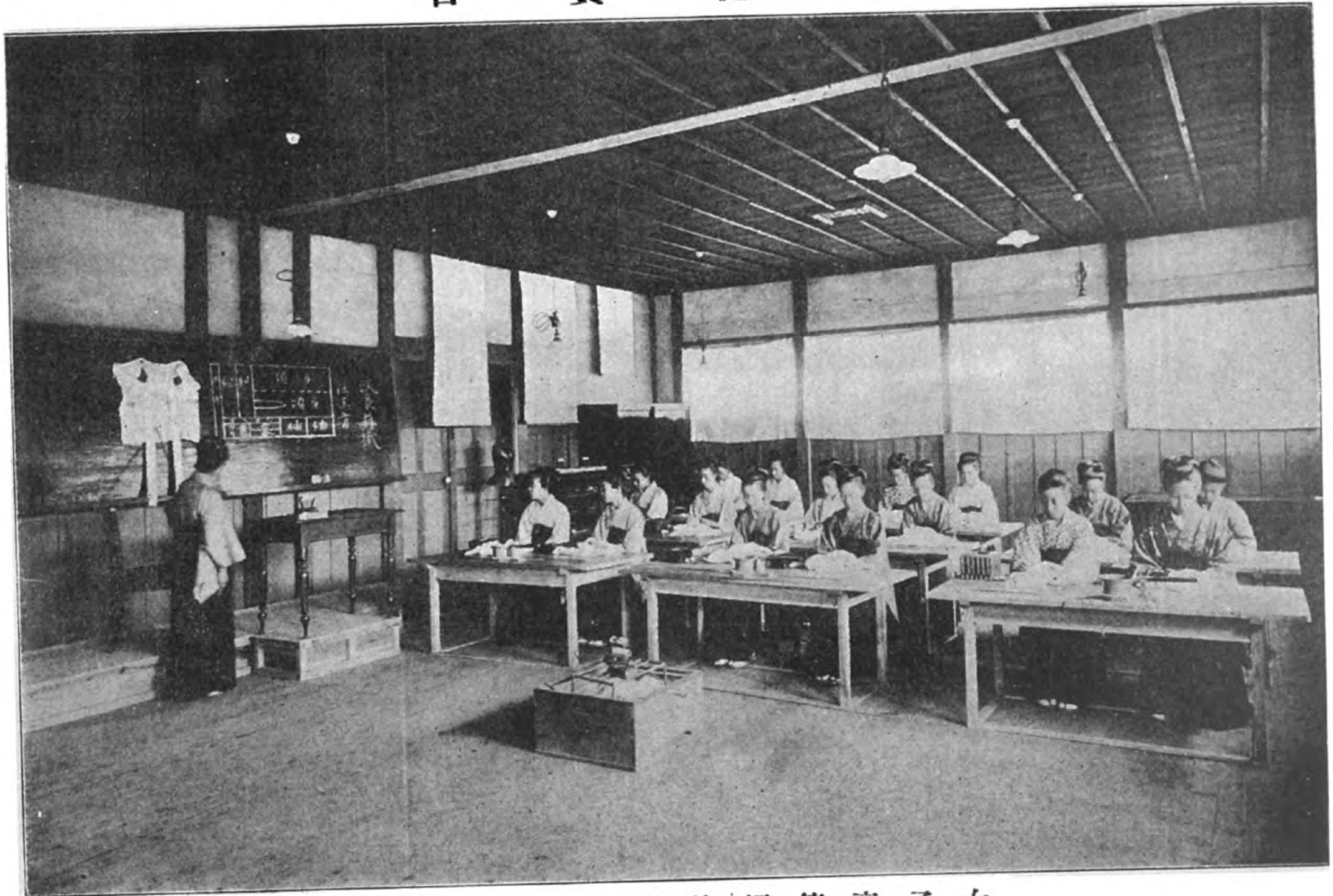
ダービンは多年の研究と實驗の結果途にルプラ菌に就て一大成功をなし本劑の發見により不治の癩病も必全治す

一劑參圓二劑五圓參劑七圓郵劵參錢送れ説明書進呈

●専賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

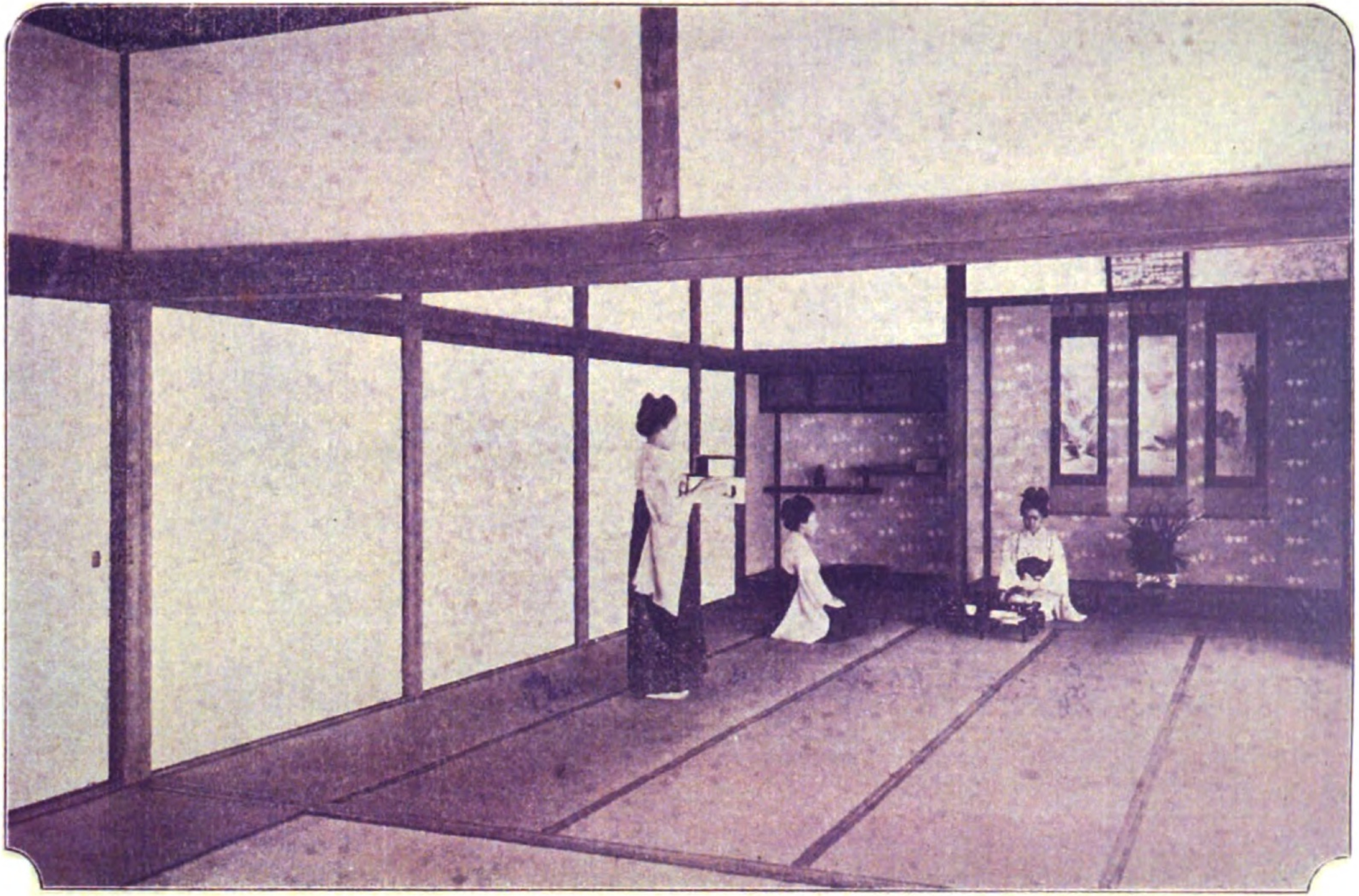
(乙の三)

裁縫實習



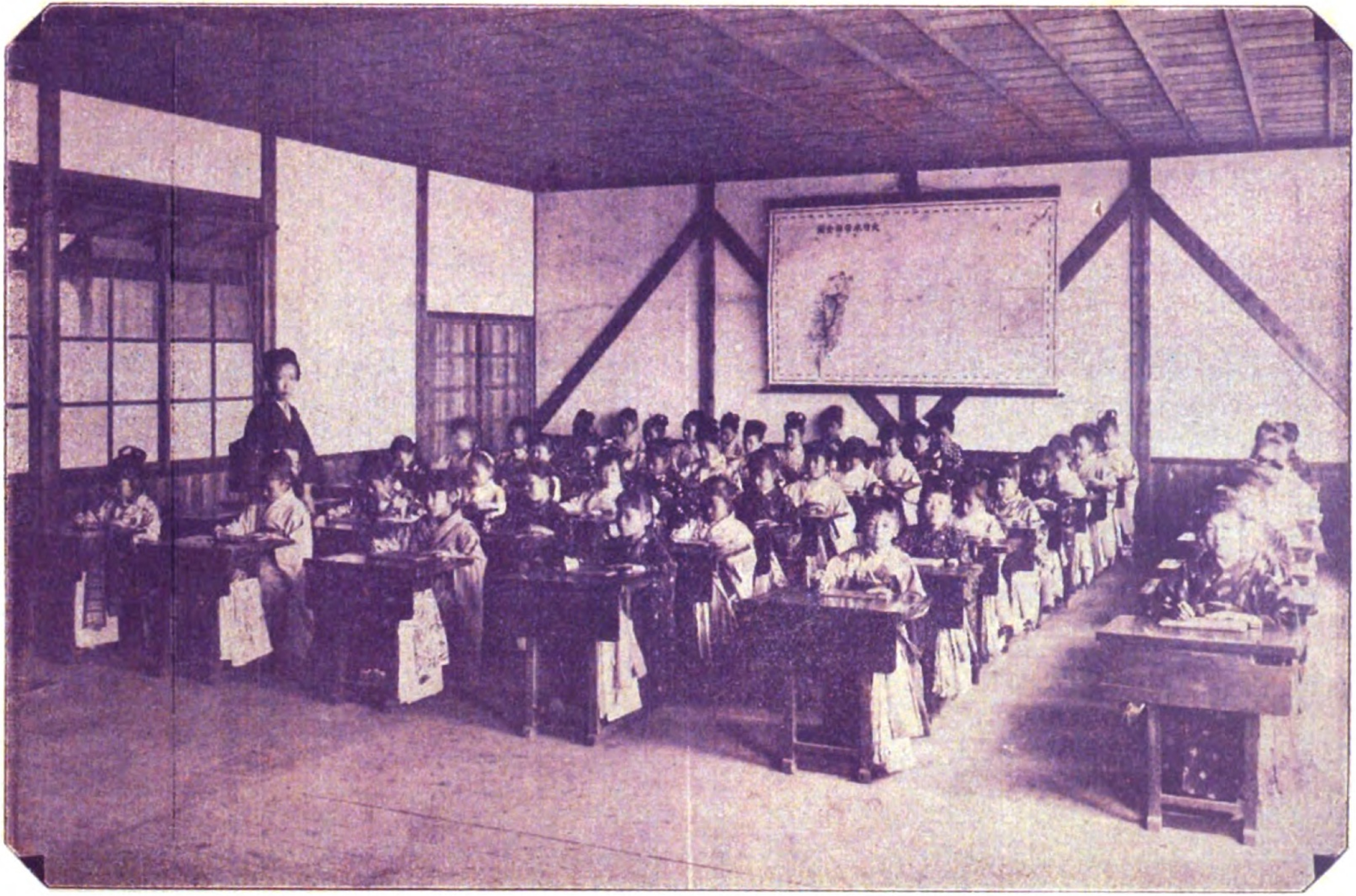
女子高等師範學校裁縫教室

作法實習



女子高等師範學校禮法教室

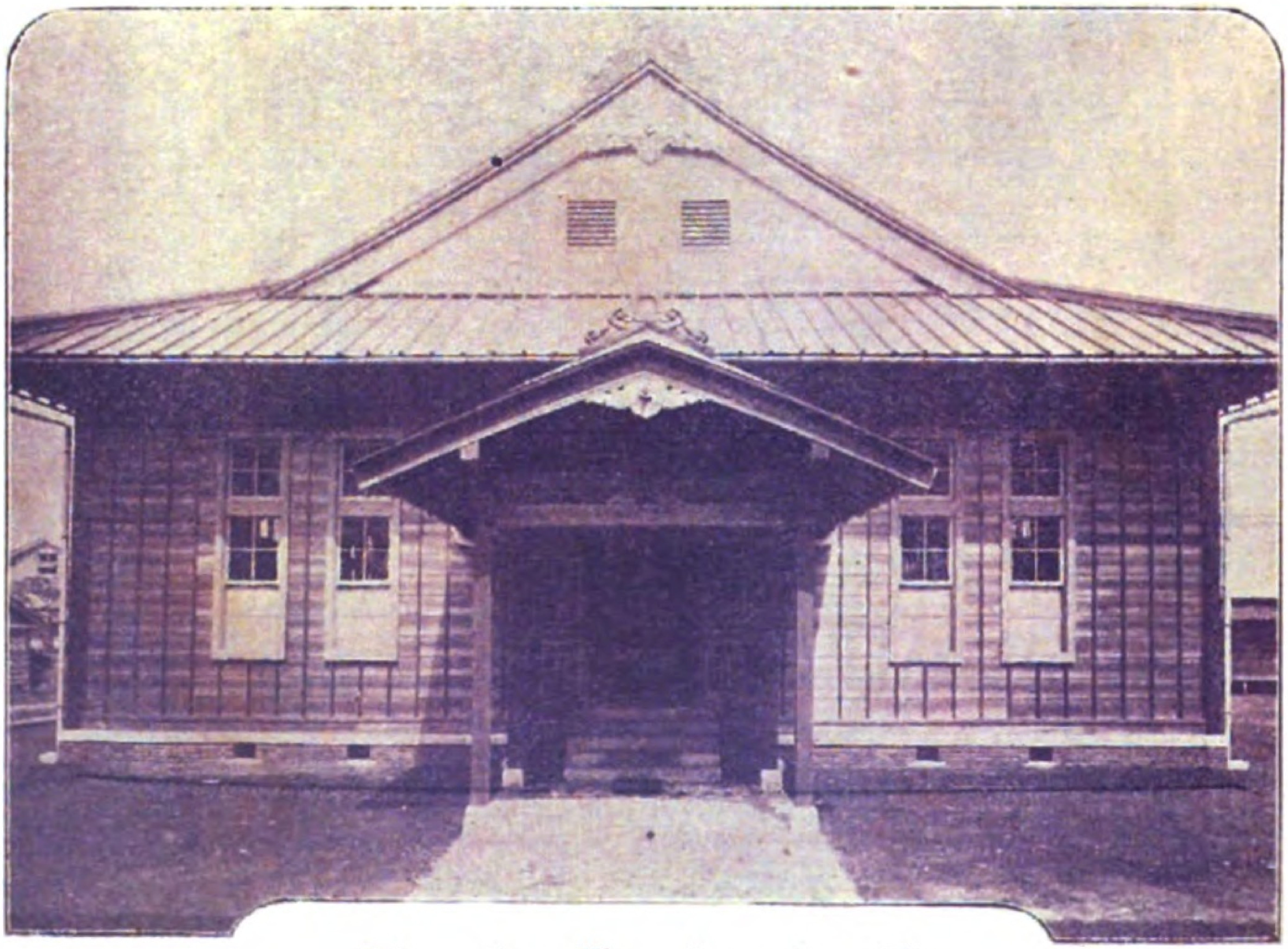
習講理地



室教校學小屬附校學範師等高子女

體操實習（女子高等師範學校）





同上玄關正面

銳利なる!!! 諷刺の光彩を見よ!!!

村井弦齋居士新著



（製本既成發賣）

全壹冊和裝上製
大判四百八十餘頁
正價金八拾錢
郵稅拾貳錢

玆に橫道曲なる、悖逆汚行禽獸にも劣るべき一人物を假作し配するに婦德正しき妻、孝操厚き娘、一家和睦、の夫婦等種々局面の異なる社會觀を以てし、以て此人物が女色の爲めに種々の惡德を恣にせる妄狀を叙し一身一家の破倫より延て上流社會內政の腐敗を諷刺し遂に女道樂の行末如何を警結す其回數百六十三題其間の千變萬化讀者をして悲喜哀怒に耐へさらしむ著者得意の教訓的小說近來稀有の活文字といふべし

三版 小說 酒道樂

村井弦齋居士著
（全一冊大判美本）
正價壹冊五拾五錢
郵稅壹冊八錢宛

本書に對する報知新聞批評の一節に曰く弦齋居士の小說が明治の文學界に一種の勢力を有し何人も侵入し能はざる一角の領域を有するは其小說が一種他に卓越する所以だ酒道樂の如き正に一個の禁酒演說として見るべく想ふに大酒家に苦む家庭の經典として尊重せらるべく通俗家庭講義として讀むが適當で單に小說として見んより通俗社會改良談として見るが適當の樣に思れる

東京日本橋區 博文館發行 本町三丁目

東京帝國大學文科大學長 文學博士 井上哲次郎先生述

巽軒講話集

洋裝菊判紙數五百頁

貳編 近日發行

正價郵稅……未定

本章目次

文學博士 井上哲次郎先生述 ◎巽軒講話集（初編） 正價金七十錢 郵稅金十二錢

文學博士 井上圓了先生述 ◎甫水論集（全壹册） 正價金五十錢 郵稅金十錢

文學博士 加藤弘之先生述 ◎天則百話（全壹册） 正價金三十錢 郵稅金六錢

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（丙の三）

新刊豫告

文學士 武島羽衣君著

美文韻文 霓裳微吟

(製本既成)

全壹冊

全壹冊洋装袖珍
紙數三百二十頁
正價金參拾五錢
郵稅金六錢

本書内容

秋風吟、人生、海嘯の歌、君を忘れん、優美と崇高、新年雪。(男なるものゝいとわけなくうせけるに、)海樓晴望、雲の音なひ、さゞれ水、海邊の曉望、わが故郷、牧兒、歌、戀、涙、鹽瀬ぶね、秋、立春、小夜砧、魂まつり、をとめ塚、江上送人、花の使、夏夕風、やまと琴、運命、漁郎、春の浦づと、夕づゝ、里川、盲女のうた、戀の乙女、(こその神月品川東海寺小林庵なる軽居大人の御にまうで、)詩人の像に題す(人丸、赤人、バイロン、業平、貫之、李青蓮、紫式部、少納言、ゲーテ、西行、定家、杜少陵、長明、兼好、テニズン、芭蕉、巣林子、白香山、眞淵、千蔭、蘆庵、ロングフエロー、景樹、ユーゴー)折にふれて、墨染櫻、龍華寺の富士、浪かけ衣、思ひいで草煤はらひ、早春の詞、逗子の春色、旅のなぐさ、綾都の手ぶり(新橋停車場日本橋、歌舞伎座、淺草の里)

文學士 大町桂月君著

美文韻文 黄菊白菊

全壹冊洋装袖珍紙數四百頁
正價金二十五錢郵稅金六錢

文學士 鹽井雨江君著

美文韻文 暗香疎影

全壹冊洋装袖珍紙數四百頁
正價金二十五錢郵稅金六錢

(丙の四)

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

多田親愛先生筆

鴨長明

秋風のいたりいたらぬ袖
はあらじただ
我からの
露の夕暮

多田親愛先生筆

西行法師

[illegible]

坂正臣先生筆

湯晒檐行　立秋

七夕　梅ふぎり

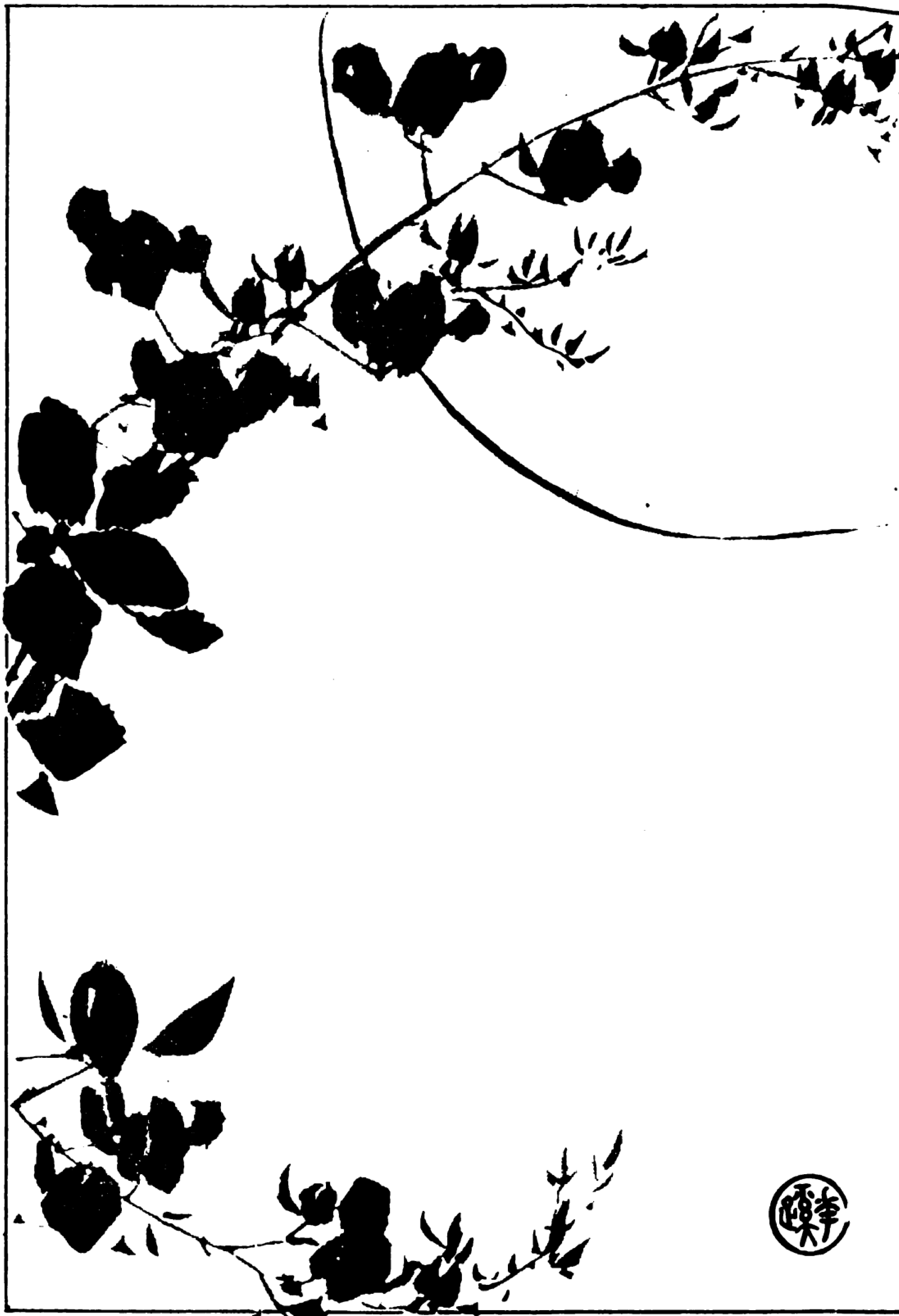
百日紅　草の露

西瓜　殘暑

坂正臣先生筆

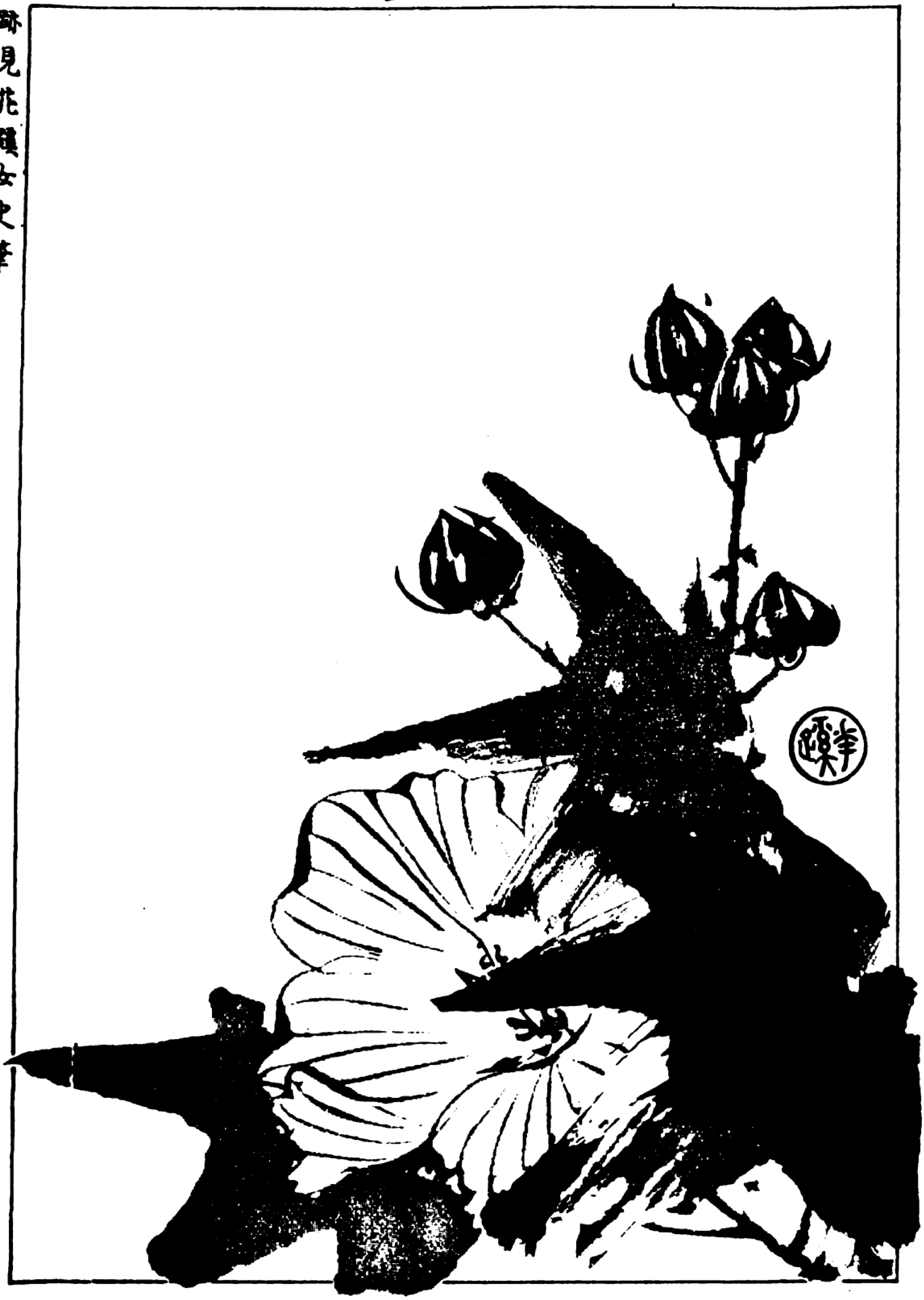
執筆地は座しいは
よりて頭しきさろぶ趣
数種書画之下され風
味を申すまでもなく形も
おもしろく一同貴覧致
しし候のしこ

月前萩



跡見花蹊女史筆

芙蓉



跡見花蹊女史筆

蓮鷺



野口小蘋女史筆

芙蓉　野菊

野口小蘋女史筆



(丁の二)

嬋妍窈窕

東京の花柳界、大小五千の藝妓、櫻あり梅あり海棠あり、何れあやめと引きぞ煩らふ其中より、美中の美なる者を選みに選み美人撮影を以て當代に第一たる小川寫眞店が、一々其人を訪ふて其姿勢を注文し、苦心慘憺二年餘を費して始めて成れるもの即ち此東都百美人!!!曾て東京上野と大阪博覽會場前とに陳列して天下の才人をして流涎の川を爲さしめたりしに今は更に鮮明なる寫眞版となし、通客坐右の友と爲す、幸ひに一本を備へ給はゞ、また酒樓に妓を呼ぶの必要なかるべし

美の中の美
愛の中の愛
此巻中に
收まる
笑て
之を

繙けば佳人微笑むが如く想ふて之に對せば佳人亦怨むが如し



全壹册洋裝四六倍形新意匠摸樣縮表紙美本用紙アートペーパー正價金壹圓五拾錢 郵稅金八錢

東京日本橋區本町三丁目
發賣元 博文館

松永新之助君編

化粧品製造法

正價貳拾五錢
郵稅八錢

文明の社會男女交際の場誰か容貌の美なるを欲せざるものあらんや蓋し容貌の醜美は本と天賦にありと雖も之に人工を施せば醜も亦美に化すべし本書白粉燕脂は言ふまでもなく香水香油發毛藥に至る迄萬種の化粧品丁寧に其製造法を說く實に是れ交際場裡貴女紳士の珍寶同品製造業者の羅針盤なり

博文館發兌

大橋乙羽君著

衣服と流行

正價二十五錢
郵稅八錢

衣服は體を蔽ひ寒を防ぐ實用の外又美を添へ氣品を加ふ故に社會の進步に隨て衣服彌美に流行益盛なり本書は和洋兩服の製法用法より模樣色合を始め古來流行嗜好の變遷及今時の流行等を詳敍し又足らざる所は畫を用ひ懇切丁寧に說明す紳士貴女若し本書を參考に資せば風采彌々優美高尚なるべし

博文館發兌

(丁の二)

女学世界

第三巻第拾號



避暑旅行と公共心

夏季に向つて避暑地へ家族同伴の旅行をするのは極めてよい事であつて、恐らく是れは何人も希望さるゝ處ろでせうが。今日の處それを實行して果して十二分の快樂と利益とを得たものが幾人あらう。夏季一週間乃至二週間の避暑旅行に一ヶ月乃至二ヶ月の生活費の全部を費して而して其の得たものは、不愉快と不適意であるのが多い。何故かといふに、今日上流社會で經濟上に不足のない人々は別として中等社會一般の生計費からいふと今日避暑地に於ける宿泊料、物價、交通費は甚だ不廉である、不廉はまだしもだが客を見懸けて貪り取るといふ惡風、即ち非公共的風俗が跋扈するからである、斯る有樣では客は避暑旅行を思ひ立ながらもその不愉快を顧て一考せねばならぬ。殊に日本の汽車賃は生活費に比較して非常に高い、又車夫などに至つては家族旅行と見懸けると足許を狙ふのがあつて、不親切夥しい、されば一歩世間へ踏み出すと金を蒔かなければ身動がつかぬといふやうな次第では、娯樂を目的として居ながら始終スリや、盗賊の用愼をして居る樣な不愉快が伴ふては折角の避暑もトント有難くないからまづ見合といふ事になる。併し是は決して宿屋や、車夫や、鐵道會社に向つて不足をいふのではない。つまり社會一般の公共心が進まないからの事である。社會の公共心が進んで、各自の客が安心して愉快を取る樣にすべての機關が全備するまで猶豫するの外はない、嗚呼今日の公共心、何と情ない次第でありません歟。

精力の不經濟（依頼心の大弊害）

高等師範教授
文學博士　本田増次郎

或る學校で一人の教師が轉任するとて送別の紀念に寫眞を取つた。四百人ほどの職員生徒が設けの場所に來てから、まあお先きにさあ〳〵此方への挨拶より並び方の整頓、眼鏡帽子の世話から二度寫し終るまでにざつと三十分の時間を費した。さて此四百人が三十分づつ費したといふ事は、都合一萬二千分即ち二百時間で一日に十時間働くとすれば正に二十日の勞力を此撮影に投じたので、炎天に曝されて發汗疲勞した事寫眞の代價などは別としても、送られた教師は二十日分の勤勞時間を贈られた事になる。これを全く不經濟無益の事とは申さぬが、寫眞師も寫される人も能く注意して十分間に濟まし得たとしたら、十三日餘の勤勞時間を節儉した譯である。凡て世の中に何程人間の精力を不經濟に浪費して居るか、少し考へて見ると實に驚き入る次第である。

○客待ち供待ちをして居る車夫が一個所に五人十人廿人と、車を列ね爲す事なくして居るか然らざれば有害無益の話しをする。客を引くのは總代でやつて一部分は何か手仕事でも出來ぬものか。時折り書物でも讀んでるのを見て此方は感心するが、彼等の仲間では如何なる批評を受ける事か知らぬ。更に甚しきは汽車汽船の中などに無事に苦む人の多い事で、少し景色を眺め又は談話をするが關の山で、其の餘の時間は飲食と居眠吃煙と新聞讀みで無理に塞いでしまふ。十時間二十時間乃至幾日といふ旅行なら、男子は讀書をするとか婦人は編物をするとかしても、ポカンと精力を浪費するよりどれ程善いか分らぬ。毎日幾百萬人の人が東京から青森、神戸大坂京都から馬關、長崎、臺灣と、船車の中で何もせずに旅行して居る事を思ふと、其の浪費する時間精力を利用して軍艦を造るも銀行を立てるも容易であらうしかし猶ほ〳〵甚しいのは

○終日無職業の人

の極めて多い事である。先づ樂隱居とか御隱居樣とか稱する人は、年は成る程少し老いて居るが精神も身體も健全であるのに、碁將棋とか謠曲とか茶の湯挿花とか別莊遊び樂器いぢりの外、生產的の仕事を一つもしないで國家の居候喰潰しをして居るのが幾十萬人もある。親が子の財產に依賴して手を空くして遊食するのであるなら無論不都合であるが、自分の獨立の財產があるとしても何か有用な活動をしない人の多いのは國家の經濟から云へば甚だしい損失である。況んや若年血氣の輩がぶら〳〵して親の脚をかぢつてると云ふ事は、獨り經濟上の損失に止らず精神上に恐るべき害を生ずる基ひである。今日高等小學とか中學とかを卒業した者で、更に高等の學校に入る學資がないとか學力がないとかで、しかも親の業を助けて店に座り鍬を握るも馬鹿らしいと考へて、早朝から人の家に遊びに出かけ又は雜誌小說の濫讀位に其の日を送り、或は閒居して不善に陷るといふ例に漏れず、不平を唱へたり不品行になつたりする青年が亦幾萬人あるか分らぬ。

○所謂元老政客

などは甚だ不生產的の人間で、政治其のものが經濟學上から狹義に云へば不生產的であるのみならず、朝に立ち職を執る間は兎も角何か働きをして居るから善いとして、一旦官職を離れると忽ち遊食の民と化してしまふしかし、遊食坐食する資產のあるのは至つて少數で、多くは借財か如何はしい收入に衣食する。無事に苦んで早く役人に爲りたがつて躍起運動や乘取策を講する。全体政事家のみでなく凡べて役人の古手は大抵不生產的の生活をする國家の厄介者であるが、それが何か一定の職業を執つて、志を得れば進んで公職にも就かうが、志を得ざれば退いて何時でも有用な業務に從事し、一日も徒食するといふ事がないやうになつたら國力增加の上に莫大な影響が及ぶであらう。貴賤貧富を問はず凡ての人が一定の職務をもつて居る事は、國家經濟の上は勿論當人の精神の平和にも甚だ必要な事である。官吏になる月給取りになるばかりが決して名譽でも利益でもない、一日と雖ども有益な働きをせ

ずして過ごすは大恥辱である、土を掘り溝を洗ひ雜草を拔き園庭を淸掃しても既に有益に時間精力を消費したのである、況んや一年十年二十年と繼續した目的を確乎と立てゝ、農工商の一業に從事するなり學問上の一問題を研究するなりしたら、玆に始めて獨立自主の人格を備へた人間であるといふ事を、深く心に味ひ覺つて仕事の中に樂境を見出すやうでなくては困る。しかし人は

○餘裕娯樂の必要

がある。年が年中朝から晩まで職業にのみ首を突込んで、世間の交際もせず心に餘裕もなく、唯せか〳〵と働くばかりが人間の能事ではない。時には芝居見物花見遊山もよからう、避暑避寒の旅行も可なり世界各國の見物や探檢更に善し、人と往來交際して談笑歡娯する事も精神の保養に甚だ必要である。天下に有るとあらゆる正當な快樂は之を求めて適度に樂むが宜しいが、遊ぶ事の本當に愉快のは、熱心に勤め働く事の反射で、日曜日の誠の有難さは六日間時を定めて働く人でなくては分らぬ、湯に入り夕食をたべる快樂は終日能く働いた人に尤も盛んである。能く働き能く遊び能く財を貯へ能く之を使ふといふ事でなくてはいかぬ。今の世の風では働く人は殆んど身にも心にも餘裕なく悠々閑日月を送る人は遊びが專門で有益な職業を取らぬ。これは二つとも不可なりで、地位年齡職業の如何に拘はらず生涯を一貫して、有益な仕事と無害の快樂とを適度に加味調和し行く事が何より大切である。

○列國競爭の狂瀾怒濤

の中に立つて生存するとか雄を爭ふとか云ふには、日本の如く國民の大半が遊食の人であつては斷じていけない。しかも歐米の文明といふものが果して結搆なものであるかどうか、これは自ら別問題で、蒸汽電氣の力に追ひ廻されて悠々閑雅の美的生活が段々出來難くなる事は殘念の至りであるが、しかし獸力的文明が壓迫して來て國を亡ぼすとも更に搆はぬ、風月を賞し山水に吟じ、今日の樂むべきを知つて明日の恐るべきを問はず、列强相凌ぐの風潮外に超然として國亡びて、

山河を他國人の娯樂に供すといふ大度量がない以上は我々は猛然反省して今一段生產的の國民となり、依賴心遊食根性を打ち破つて大獨立心を起し、大欲望を立てゝうんと働きうんと財を作りうんと樂むやうになる必要がある。日本人は實に世界古今外に類例なき國民で、國家の存亡の爲めに其の美的生活を犧牲に供するを欲せず、猛虎悍鷲來つて其の肉を屠るも自若として花鳥風月の樂みを改めなんだと、萬國歷史中に書き殘さるゝを甘ずる積りであるか如何。もし此大覺悟なくて是非列國に幷び立たうとならば、先づ

〇家庭敎育の根本

から改めて依賴心を除き去るやうにせねばならぬ。小供の時に殿樣か病人のやうに諸事萬端外から世話をして、依賴心を起させ獨立心の出ないやうにして置いて十五とか二十とかになつてから急に古人苦學の例に倣はせやうとするは無理な注文である。貧乏な家に生れて志を立て必死の苦學をして大成した人は貴いに違ゐないが、中產以上の家に生れた子弟は到底依賴心を免かれぬ筈のものであらうか、貧窮不幸の人でなくては大成しないわけのものであるか。もし貧より外に人を刺戟するものなしとしたら、敎育の力は皆無と云はなくてはならぬ。王侯貴人又は大財產の子弟でも立派に身を立てる者が他國にあるからには、日本にも出來ない筈もない、幼少の時からの敎育法が先決問題である。

〇依賴心の養成

はどういふ風に行屆いて居るかといふに、先づ母か乳母かの添寢が發端である。一人で寢かす習慣を付ければ譯もない事であるのに、是非添寢をするから目を醒して人が側に居なければ泣き出す。又小供が泣きさへすれば乳を與へる食べものを與へる、少しも時間分量を限らずに與へるから、何んでも泣きさへすれば得られると信ずる依賴心が起る、少し身分のよい人の子とあれば付添人が世話をやき過ぎる、步ける道でも車に乘せてやるから自分で步けるだけ步くといふ精神が起らぬ。溝の緣か椽側へでも行けば危ないと引止め

るから、自分で危險の所を避けるといふ心が起り難い何でも自分で出來る事を下女下男にさせるといふ旦那樣風も一種の依賴心である。全體親が病人見たやうに衣物を着たり脫いだりまで人に世話してもらふ、それを子供に見せるのも既に依賴心の根元となるから、僕婢の數を少なくして大人が大抵の事は自分でするといふ手本を示すが宜しい。封建の遺風で殿樣然と手を叩いて人を使ふばかりが人間の價値ではない。も一つ依賴心の最大根元は

○財產世襲の制度

である。元來世襲制度といふものは色々の點に於て弊害を生じ易いものであるが、日本の家族制度では親の身分財產に依賴して、獨立自營の精神を起す事が困難であると思ふ。素より極端な個人主義を日本の社會に輸入するが善いとは申さぬが、一方からは財產の相續に制限を立て、一方からは獨立自營の尊い事愉快な事を感得させて行つたら、大に此依賴心を除く事が出來やうと思ふ、親が老後子の厄介とならず自分の財產で自活するといふ事になれば、子は自分の生れた地位社會に相當する敎育を授けられた後は、生活上の事で永く親に依賴すべきものでないといふ事にして、子の親に奉ずるといふ孝行は專ら愛情の上に於てして、財產を貰うたから親を養ふ義務がある、二三男は財產を讓り受けぬから親に奉ずる義務が薄いといふやうに、物質の授受を根本とした虛僞の孝道を止めにするが宜しい、病氣災難等の時親子相助くるは勿論の事ながら平素無事の時には親も子も生活上相依賴せぬが善いと思ふ。

○子弟の名譽心

を過度に挑發して敎育の助とするも不可である。親の財產に依賴して口を糊するに甘んじさうな子弟には、名譽といふ刺戟劑を呑ませて、芳を千載に遺すとか名を竹帛に垂れるとかいふ事を無暗に聞かすと、甲も乙も皆總理大臣陸軍大將乃至カーチギー、モルガンの候補者になつてしまふ、生きて功名が立てられさうもないと珍らしい自殺でもして名を殘さうなどゝ馬鹿げた

事をするやうになる。温健着實な人生觀を義務と人格の上に立てゝ、勤勞は人間の義務である特權である精神の練磨である、人と生れて他人に依賴し又は勤勞なくして生活し、時間精力を徒費するは人類の品格を墮して、自ら寄生蟲の列に入るものであるとの觀念を養ふ事が必要である。かく申せばとて

○婦人の獨立を主張

するものではない。所謂婦人の獨立とは結婚しないで自活する事を意味するやうであるが、結婚は決して眞正の獨立心と衝突しない、獨立自活をしやうと思へば出來ない事のない立派な敎育も精神もある婦人が、愛に於て男子と結合して、男女一體となり、子を育て家政を治むるといふ立派な勤勞、男子の能く爲し得ぬ働きをして男子と生活を共にするは、婦人の義務を盡し人格を全うする事である、決して依賴心でも寄生主義でもない、但し義務の觀念が明かならず品格の上らざる婦人が、男子の身分に倚つて己れ自ら高ぶり、男子の財產によつて歡樂を盡さうといふ心で結婚するなら茲に始めて恥づべき依賴心の發現が見ゆるのである。

前申したやうな立派な心得ある婦人が家庭の中心となつて、依賴心の奴隷たらず勤勞を生命とし快樂とする健全な男子女子を養ひ出さんと事は今日の最大急務であるまいか、依賴心の根本が家庭敎育の宜しきを得ぬにあるとすれば、婦人の心得態度が何よりの先決問題となる、婦人が家庭に健全な勢力を伸ばすに至ると、今日社交上の大弊害となつて居る虛禮の流行も追々改めて行く端緖が出來る、姑が無事に苦んで嫁いぢめに貴重の精力を傾注する事もなくなる、又女性全體が悔いて還らぬ事をくよ／＼と心配して徒らに精神を疲らすの愚を止め、進んで積極的に一身一家乃至社會の爲めに有益な働きを勵むやうにもなるであらう。日本人がどれ程精力を浪費して居るか依賴心に富んで居るか婦人諸君が自ら考へて御覽じたら、婦人と此問題との關係について私の申さぬ處まで研究なさる種となりませう。

（完）

女子と体育

メヂナーチ ドクトリス　川瀬元九郎

▲體育と美

往古希臘帝國の盛時には體育に重きを置いたことは智育に讓らなかつたといふが　男子のみでなく女子の體育も一樣に奬勵せられたのである。故に婦人にして武藝の達人あり、武勳を顯はしたのも珍しくない、武人が武藝を戰はす所の大演技會が開かるゝ時は、巾幗の婦人にして倘且つ此賞品を得んものと、凛乎たる勇氣を皷して立ち現はれる婦人競技者も多かつたとの事である、之に據て觀ても當時尙武の氣風盛んにして女子の體育が何程重んぜらて居たかゞ推知される、唯だ體軀充分に發達して武藝に長じて居た許でなく、容貌も亦甚だ美麗で、往古より今日に至るまで世の人々が美しく嫉ましく思ふ程で在つたといふも、全く體育の盛であつた爲であらう。

人間と生れて誰か美ならんことを熱望せざるものが有らうか、然るに我國人の美の觀念が間違て居るので女子の體軀充分に發達して筋骨の逞ましき者を見ると却て粗野下品なりとの觀念を抱くのである。其故女子は自己の身長の他に勝るゝを厭ひ、丈の高さを恐れて故に身體を屈めて短縮ならしめんと欲するものがある。我國婦人の美貌嬋姿と云へる觀念中には體軀骨格の善さは含まれてゐない樣である。單に皮膚の色白く頭髮黑く目元凉しく鼻高く口元尋常なれば美人を以て目せられ、よし肺病患者にても以上の條件を具備したらんには倘ほ美人たるの資格を得るのであるが、是は全く誤解である。體育に恊ふた發達をしたのでなければ眞正の美人とは言へないのである。如何に細腰柳姿の美人であつても循環器及呼吸器等が活潑に作用するのでなければ、決して林檎の樣な紅顏を見ることは出來ない、又た、消化力良好なのでなければ決して爽快な外貌を見ることは出來ない。吾人の謂ふ眞の美の特徴は體育に依つて初て顯はるのである、

近頃女學生は身仕舞といふ口實の下に白鉛を塗りて

僞の美を衒ふことに孜々としてゐる。然れども白鉛は婦人の容を粧ふものでないから、敢て無害無毒の白鉛を捜す必要も有るまい、眞に美ならんと欲するならば無一文にて得らるゝ法、即ち體育を勵むに若かず、是れ眞の美に近づく唯一の道である。

▲智育と體格

婦人の體軀發達の度は文明の度に反比例するもので未開國よりも文明國に到るに從ひ體格に申分がある。野蠻人中に在りては體軀發達の度合男子も女子も左まで差異を見ずと雖も、文明國に有りては男女の間に甚しき差異を見出すのである。是といふも生活法の然らしむる所で、野蠻人民の生活法は女子も男子に讓らぬ程勞働するからである。文明國の女子の內にも伊太利其他大陸歐羅巴の或る國の如きは、勞働の大部分を女子の手に行つてゐる、我邦に於ても或る地方の女子は野菜類を車に滿載して市場に運搬してゐるから、自然體格の發達も宜い。されば勞働に賴つて生活する下層社會の女子は槪して上流社會よりも强壯の躰軀を有つてゐる。近時女子敎育頓に發達して山間僻地に到るまで海老茶式部を見ざる所なきに至つたのは、實に國家の爲め慶賀すべき事である。けれども此等の女學生が日々の修學時間終りて學校を出で家路を指して歸りゆく姿を見よ、彼等の躰格は善く發達して健步し得るか、彼等の腕は肥え脊廣く胸部善く開けたるかといふに、吾人は遺憾ながらも否と答へざるを得ない。吾人が街頭に於て目睹する少女の大半は背部狹く胸部扁平たく、肩圓くして前方に屈み、頭細く腕瘦せ、細腰にして行步遲緩なるもの許である。斯の如く健康と躰軀の發達とを犧牲に供して得たる學問は何の役にも立たぬのである。彼等の筋骨は脆弱なるが故に活潑な運動をなすに堪へず、自然の結果として心臟弱く肺も弱く胃も弱く、神經も弱からざるを得ない、從て其の心志も微弱であると斷言するを得るのである。

筋骨の發達の不完全は子宮病を惹き起す最大原因であるから、注意を體育の上に拂はねばならぬ。如何となれば婦人の骨盤內の諸器管が夫々適當の位置にて作

用をなすは主として或る筋肉の作用に基くのであるのに、是等の筋肉が克く發達しなかつた場合には器管は其の位置を保つ事が出來ないで、下方に下り其作用を爲すことが出來なくなる。而して胃痛、胃弱、頭痛、手足の冷却、ヒステリー、肩の痛、腹の痛、等の諸病之に伴つて續發するのであるから、平生躰軀を養ふは何の道必要な事である。

試みに鍛冶屋の右臂を見るならば、其の左臂よりも一層强大なのを認むるであらう。是れ他なし、其右手を以て常に重大なる鐵槌を振舞はし其腕を運動せしめた結果である。天は人の身體中必要な部分は益々發達せしめるが、其の代り不必要に屬する器管は、其の儘存して置かぬといふ主義であるから、今茲に人體中の一器管が用ひられずして遊んで居るとすれば、天は之を破壞しに掛る。故に若しも不用の筋、即ち使はずに居る筋がある時は、其筋は細小となり蒼白となり弛緩微弱となり、幾何ならで脂肪變性の徵候を呈するやうになるから、出來る體丈を使つて、筋肉の發達を計らねばならぬ。

▲母と體育

婦人の社會に於ける地位の高卑を以て、文明の度如何を判斷するを得るといふが、殘念な事には我邦に於ける婦人の地位は未だ左程高くないのである。是れ婦人の智育の足らはぬからでもあらうが、一つは躰育といふものが無いからである。故に我邦の婦人にして自ら地位を高め、男子の片腕となり、重要なる助力者たらんと致さば、智育と共に體育に注意すべきである。のみならず躰軀の發達した强壯の母が生んだ子は母に似て體格の立派なるは無論、其の意志の力も從つて强大である。彼の英雄豪傑と稱せらるゝものを見よ、其の父は槪して世間並より拔出たでもなけれど、其の母は身强體壯にして烈しき勞働にも堪え得べく、意思の强き人物である。斯る母の生んだ子は體力强く勇氣あり、以て世の激浪怒濤に反抗もでき、優勝劣敗の競爭塲裡にも立たれるのである。此の如きは實に躰軀發達の母がその身心の美質を不朽に子孫に傳へたものであ

る之に反して社會の高位に居る者又は富貴なるもの丶子の多くが失敗の生涯を送るといふ樣になるは、畢竟其の母が强健の體格なき結果體力弱く氣力乏しく從つて强き感化を其子に傳ふることの出來なかつた罪である、故に賢良の母たらんと思はゞ、宜しく先づ己の體格からして丈夫にせねばならぬ。健全なる精神は健全なる身體に宿るとは誠に千古の名言、幸福なる生涯を送り、處生上成効を得んとならば、己の體格を作るが一番宜しい、是れ子孫に餘慶を貽すの道である。

▲成年婦人と體育

既に成年に達した婦人で其の幼少の折體力養成の事に不注意で在つた結果、身體各部の發育不充分にして器管虚弱となり、爲に痛苦を覺ゆるものも決して少くはあるまいけれども、落膽するには及ばぬ、是等の婦人といへとも相當の運動法を行ひ、勉めて怠らざる時は身體を强壯にすることが出來るのである。そこで運動の方法であるが、如何なる種類の運動が最も効果あるかといふに、人々によつて多少其の法を異にせねばならぬ。即ち體力の强弱、年齢の如何によつて加減を要する。運動萬能主義を唱へて濫りに運動すればとて其で善いといふものではない、過度の運動や激烈の勞働は寧ろ害あればとて利益はないのであるから、己の體質如何を顧みて十分に其法を撰擇すべきである。最も自然にして最も利益ある運動は、躰軀を勞働せしむべき職業に從事するのである、されば女子にとりて最も適當の良き運動は家事をまめ〳〵しく取扱ふことである、此の運動に依ると身體各部の筋を萬遍なく働かすの功あり、加之も女子當然の職責を盡しつゝ、行ひ得らるゝ運動であるから、一擧兩得の良法である。家事には種々樣々の仕事が有つて、諸種の運動を要し變化の多い勞働だから、身體の一局部のみを繼續して使用することなく、從つて疲勞の度も少いのである、然るに深窓の内に成長せる少女の如きは、些も家事向の事には關知せず、荒き風にも當てないやうにと、蝶よ花よと劬はり育てらるゝ御蔭で、その體質は益々虚弱となり、その体力は寒暑にも堪へられぬ樣になる。元

より良家の事であるから、御出入醫者といふ者が伺候して居て、注意に注意を加へるといへども一度失ひたる體力の缺乏は容易に補ひ得らるゝものでない。或は氣候風土の變つた所が善からうとて數週間も數ヶ月間も其母及召使に冊かれて轉地療養を企つると雖も、羸弱なる少女の体格と健康を恢復するのは甚だ六ヶ敷のである。

されば良家の士女をして一時「ピアノ」琴等の樂器を手にすることを禁じ、其の代用として食物の料理、衣服の洗濯、補綴、洒掃等の家事を立ち働かしめよ。斯くすると數日又數月の久しきに亘らば、藥餌を要せず、轉地を用ゐずして自然に健康を回復し得るのである。

當時、我邦に於て盛んに行はるゝ「ゴルフ」「テニス」其他西洋より輸入せられた諸種の遊戯法は皆躰育の上に有益のものであるから以上陳べ來つた家庭勞働の餘暇に、此の規律的體操を行つて、身體の姿勢を正し、畸形を矯め、不正なる發育を豫防し、各部均一の發達を計るは、是亦た極めて必要の事であるから、兩者併せ用ふべきである。（完）

婦女雜觀

大町桂月

妻君と女子

妻君には女子がなるものなれども、妻君といふことゝ、女子といふことゝは、全く相一致するものにあらざること、なほ亭主には男子がなるものなれど、亭主といふことゝ、男子といふことゝ、全く相一致するものにあらざるが如し。亭主として望ましきは、世間の公益に奔走せずとも、私を營み、妻を大事がつて、常に帶や着物を買つてくれ、家を富ますことのみを心掛けて、子孫の計をなしてくれるに在り。されど、男子一般に望むべき事に非ず。國家をよそに、社會をよそに、人道をよそに、全く私のみを營まれては、たま

つたものに非ず。女子の方は、男子に比すれば、女子としての要求少なけれども、妻女としてのみ要求すべきものにもあらざるべし。野郎のみのよりあひにては、餘りに殺風景也。女子は、社會の花たらざるべからず、交際場裡の花たらざるべからず、而かも藝妓酌婦の如く、男子の玩弄物たるべからず。心のやさしき女子、社會に幾多の慈善的事業あるべし。感情に熱して神經の過敏なる女子、文學美術をはじめとして幾多の藝能あるべし。社會は、女子を妻君としてのみ要求するに非ず、男子の玩弄物としてのみ要求するに非ず、男子に眞似の出來ざる外形、心情、技能に於て、男子の外に、女子を要求す。女にすたりものなし。顔が十人なみにして、體が不具でさへなければ、何は出來ずとも、誰かゞ妻君にしてくれて、飯をくはしてくれるなりとて、獨立心なき間は、白樂天の百年の苦樂他人に由るの境遇を脱すること能はざるべし。

女子と小人

女子と小人とは養ひ難しと言ひふらされたるは、餘りに女子を見さげたる言なるが、かゝる言の出づるには、多少その理由あるべし。

女子の天性は、或は無邪氣にして、快闊に、おとなしくして、さつぱりしたるものなりしやも知れざりしかど　東洋古來の教育習慣は、女子を無理におとなしからしめ、室ふかく瑣し、七歳にして、男と席を同じうすることなからしめ、社會と觸接せしめず、一生米を炊ぎ、衣を縫ひ、厨房にくすぼらせて、學問もせしめざりき。

學問なければ、理性發達せず。宇宙の眞理などゝ大袈裟な事はさて置き、事物の是非曲直がわからざる也。文字なきものゝ智恵は、所謂小利口にして、一寸氣が利きて、間が拔け、さがしうして、却つて牛實り損ふやうになる也。文字なきも、出でゝ世間を讀まば、わけもわかりたる人となり、自から智恵も出來、分別

も出來れと、室にのみおしこめられては、たゞ邪智邪慾のつのるのみ。且つ無理におしつくれば、表面や一時やはその効あれど、人は多少反動なきを得ず。故に猫をかぶるやうになる也、すねるやうになる也、ひがむやうになる也、邪推するやうになる也、抑裁がゆるめば、横着になる也、じだらくになる也、智淺ければ、むちや也。むね狹ければ、いつこく也、融通きかず。理性明かならざれば、無分別也。情ありて、意志なければ、軟弱也。



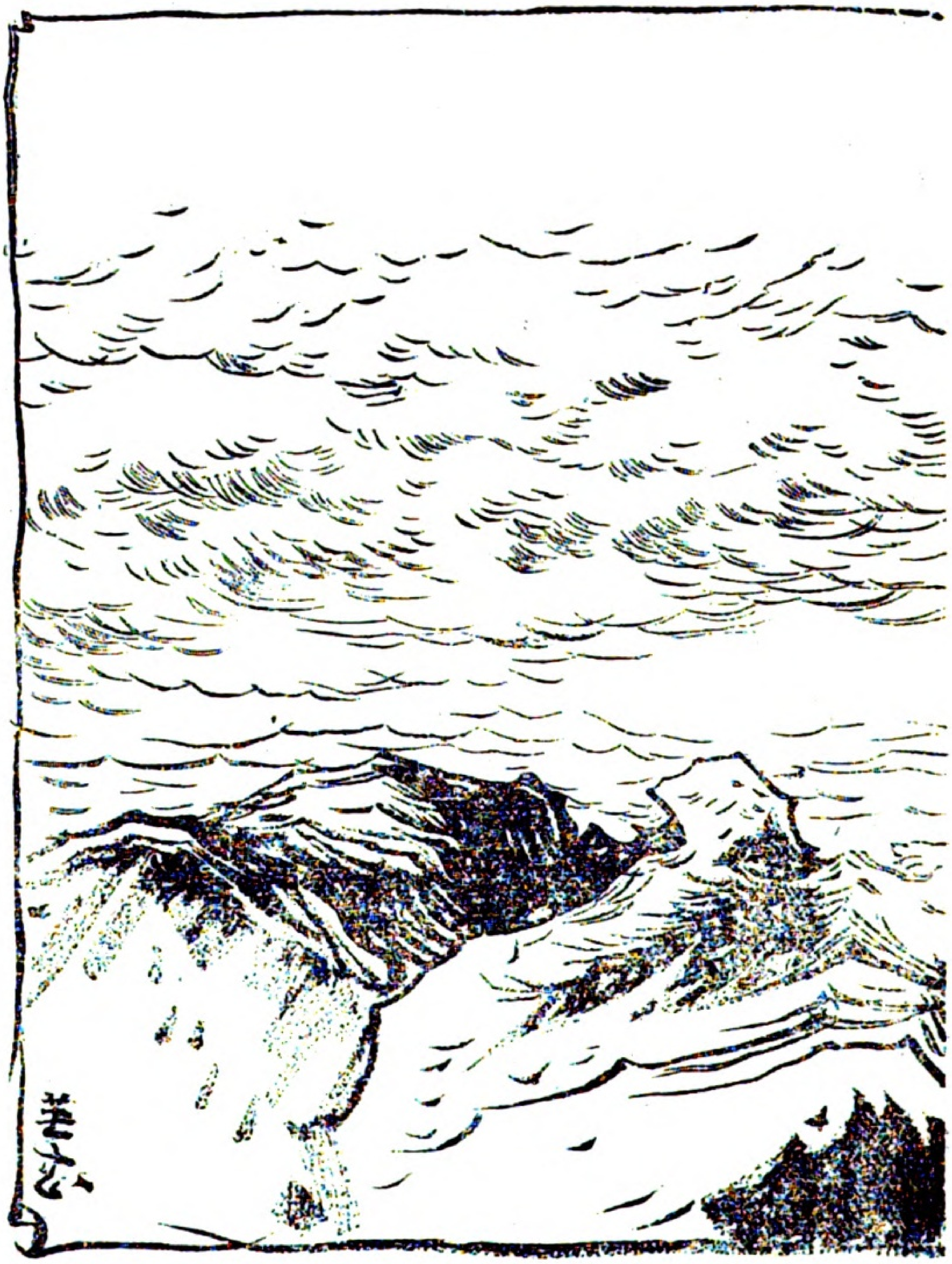
養ひがたしとは、斯る點に存す。而して、これ女子が先天的に有するもの乎。抑も社會がかくならしめたるもの乎。

〰〰〰〰〰

食物の戒

中等社會以下家事を司る女にありては、勿体なしの語を用ゐること多し。而かも、眞に之を用ゐるにあら

ずして、濫用す。勞働して歸りたる亭主が、流しの水をくんでくるゝを勿体なしと思はゞ、これ眞の勿体なしなり。されど、かゝることは、當然と心得て、勿体なしとも難有しとも思はず。明朝まで置かばくさるべき食物でもあれば、こゝにはじめて勿体なしの語を發する也。腹はり居れど、無理に之を平げつくす。食物の徒にくさることが勿体なくして、身體を害することは、さつぱり勿体なくなしと見ゆ。既にくさりて、舌をさすものあるも、なほ曰く、勿体なし、勿体なしとて、之を食ふ。一錢か二錢かの飯をすつるが勿体なくして、爲めに病をかもして、之に幾十倍せる藥代を出すことは勿体なくなしと見ゆ。否、爲めに命を損するも、なほ勿体なくなしと見ゆ。



無題十則

●子を生み、子を育つることは、啻に人間のつとめなるのみならず、あらゆる生物を通じての義務也。然るに人間以下の動物にありては、敎育なければ、育つることが易く、從つて親としての義務を果さゝるものなし。人間にありては、敎育を要することなれば、子を育つることむつかしく、從つて十分に親としての義務をはたさゝるもの多し。母は殊に直接に育兒の道にたづさはるものなれば、何はさておきその心掛なくてはかなはず。まづ我體をつよくすること、育兒の道の第一着也。次に生計のゆるす限りは、孕める時、乳をのませつゝある時は、成るべく滋養物を食ふべし。これ第二着也。愛におぼれて子に物をくはせ過ぐべからず、あたゝかに着せすぐべからず。

●子をそだつるに、ひとの乳あまりあるも牛乳少しづゝのませ置くことも必要なるべし、三四歳以上になれるものに、牛乳のませむとするも、嫌ひてのまざるもの多し。一朝人の乳のませることが出來なくなりたる時に不便也。生れたてより少しづゝでも飲みならはせて置けば、かゝる憂なし。また母親が用事の爲めに外出せむ時にも、牛乳のむ子ならば、牛乳あてがひ置けば、子をつれずに用たしすることも得らるべし。

◉子の年長ずれば、長ずる程、母も智識を要す。必ずしも多きを望まず、せめて八九歳前後の小兒の質問に馬鹿げたる答をなさゝらむまでの學識ありたきもの也。

●御褒美にて、小兒を釣りて、用をさせることは、考へ物也。かくて自然に報酬の念つよくなりて、報酬なき仕事には、精出さゝるやうになるべし。

●小兒の泣をとゞむるに、恐しきものをかりておどかすも、考へ物也。たとへば、鬼が來るぞ、幽靈がくるぞなといふの類は、自から小兒の心をひがむやうにすべし。

●日本の女子が、西洋の女子に比して、猫をかぶり過ぎ、うはべにおとなし過ぎ、愛想なく、趣味なく、快

闕、無邪氣、天眞爛熳のおもむきを缺くは、女子にも罪なしとせざれとも、實は社會の敎へ成せる所也。日本にては、女子をむやみにおとなしくするやうな敎育を施し來れり。男女七歲にして席を同じうせずとは、古來のをしへ也。かくて女子はよろづ束縛せられ、笑ひたきも笑はれず、物言ひたきも言はれず、自から愛想なく、趣味なきやうにならざるを得ざる也。もし處女が、年若き男に愛想ふりまきて見よ、忽ちよからぬうはさをたてられむ。細君が他の男になれ〳〵しくして見よ、忽ち浮名をながさむ。社會が斯くわけがわからず偏狹にすぐるを以て、女子自然にちゞまりて、天眞爛熳の趣あるを得ざる也。これをこれ察せずして、女子のみを咎むるは、思はざるも亦甚しといふべし。

●女子の特長は、よろづの事に周密なるにあり、丁寧なるにあり、よく小智惠のきくにあり、情のやさしきにあり。女子はよろしくこの特長を以て、社會に男子と對立せむことを求むべき也。文學や、繪畫や、もと女性的也。故に文學繪畫に長ぜる女子、古來その人に乏しからず。而かも折角この道に才能を有するも、人に嫁すれば、中絕して、更に進步せざるが常也。思ふに、一家を整理する細君の道と、藝術とは、相容れざる也。特別の藝能ある女子には、細君以外の境遇を付與すべし。必ずしも繩墨を以て律すべからず。

●古の淸少納言は家婦としてちと困りものなるべし。されど、文人としては、最も面白き性格を有せり。古來著書多けれとも、淸少納言の枕草子ばかり思ひ切つて筆を揮ひたるものは、男子の作にも之を見ず。淸少納言は、學深く、識ひろく、才敏に、氣銳也。眼中人なし。而して文才に長じ、かねて觀察奇警にして詩趣に富めり。その筆人を罵りて骨を刺し、詩趣を看取して、才情流露す、讀み去り、讀み來りて、痛快なると言はむ方なし。われ淸少納言の人となりを愛し、殊にその文章を愛す。されと、これ文人として取る也、家婦として取るに非ず。

●淸少納言や紫式部や、これ千歲はじめて見るの天才

也。か丶る人は生る丶也。作らるべくもあらず。まして之を學ぶべからず。女子にして、少し文才あるものうぬぼれの鼻を高うして、直に清少納言紫式部を以て自から任ずれば、とんでもない間違を生ずべし。か丶る天才は一代に一人いづるも、既に十分也。幾百千の清少納言紫式部が、一時に輩出しては、たまつたものにあらず、況んや清少納言紫式部の出來損に於てとや。

●われは日本の女子としては、最も靜御前を愛す。吉野雪中、夫義經と別れたるは、千古餘韻ある情事也。堀河館に於けるを丶しき擧動、鶴岡祠に於けるけなげなるしわざ、才色絶世、歌舞人にすぐれ、智あり、勇氣ありて、而かも情にあつし。されど、義經もし順境に處したらば、靜は恐らくはか丶る名は殘さゞりしならむ。世には名なくして沒する偉人才女多かるべし。

夏の家庭

僕は一家の和合が樂みの最上と考へて居るから毎日親兄弟と共に散歩するのだ。或時は非常に厭がつて少々氣の毒に思ふ時もあつたが無理にも同伴した。歸つて來ると五時半頃になる。そこで一同女中が掃除し終つた座敷でお出花を飲み。朝飯までは各自隨意に仕事をするのだが、僕は新聞を讀む（朝顏などの鉢物を列べて見るも面白い）それから、僕が庭へ水を撒き、樋から水の滴る前へ机を設けて、十二時まで讀書をする、小供の勉強も朝の內させるのだ。正午には一家族團欒して晝飯を喰べる、僕は飯の濟んだ後で冷水で身體を拭く、それから三時までは小說を讀むとか、紀行文を讀むとかして過す、雜誌も讀む。夏の午後にはよく晝寢をする人があるが、衞生上の利害は知らず起きてから心地が惡い、又時間の經濟から言つても甚だ不得策だ。これは習慣からして、その時刻になると眠を催ほすのだが、この習慣を治すには何か仕事をすればよい、僕もこの習慣に罹つたから手習をして治した。午後三時にはお茶受として、煎餅とか或は何か夏向の食物を取り寄せ家族を集めて笑ひ興じつゝ會食する。夕方、即ち大抵四時位には僕が室內を掃除する、それから庭、門前を掃き水を撒き、湯を浴み、浴衣に着換て、庭に對つた椽側へ出て涼むのだ。夕食後は銀座邊を散歩して歸り、十時頃になれば寢て仕舞ふ、斯ういふ風にして居ると、却て箱根、大磯などで混雜中に日を暮すよりも得策であると思ふ

家庭

兒童の教養

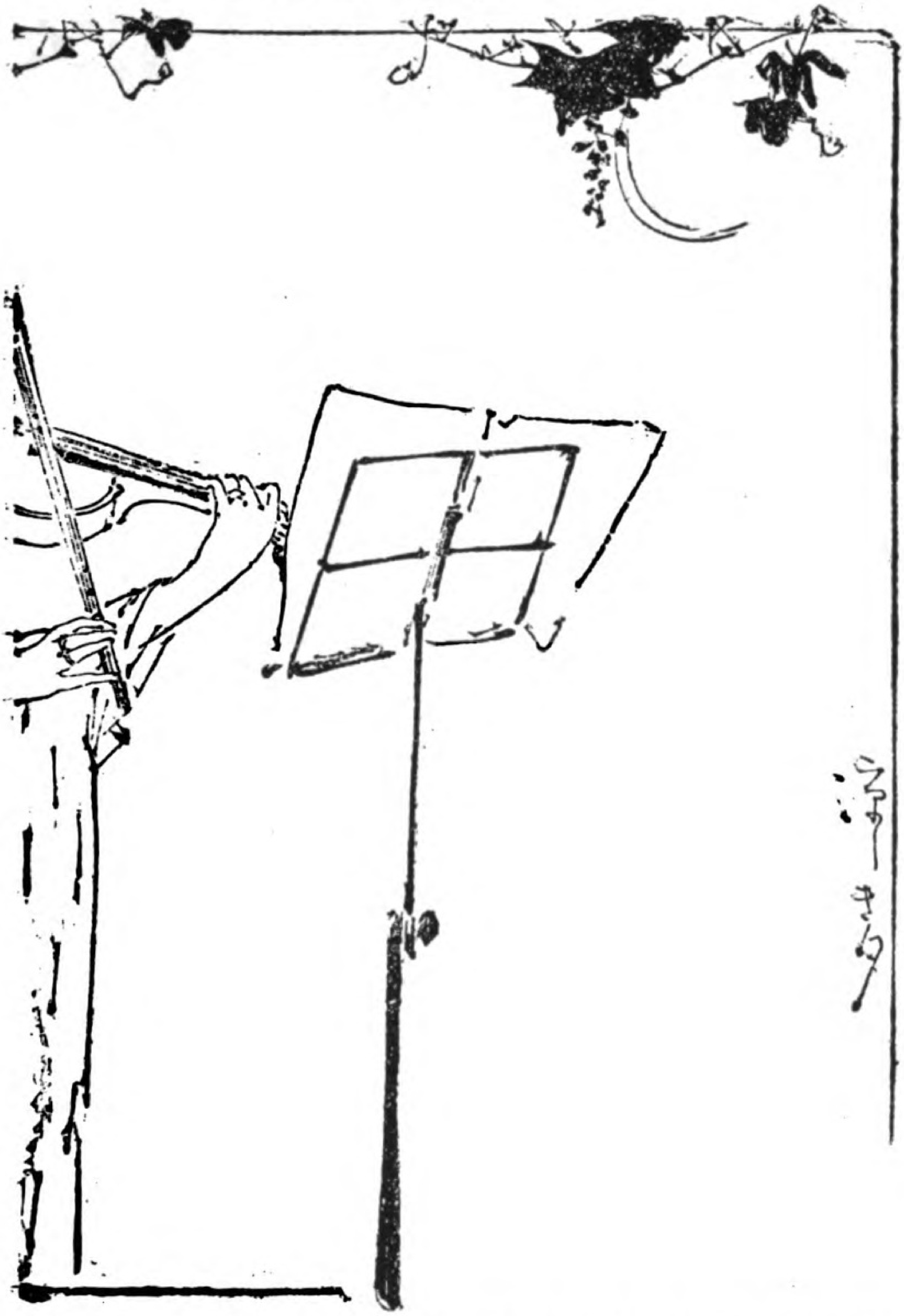
戸板關子

私は年中外に在るので、家庭教育とか兒童の教養とか云ふ問題は殆んどソッチ退けで、言はゞ自然の成行きに任せて居ります。で、お話申上げる樣な立派な經驗はありませんが、併し我が可愛ゆき幼兒の教育に就て、斯く爲し度いものだ位の希望は有つて居りますから、親たる者の注意すべき點に付きまして、聊か申述べ、世間の賢母良妻たる方々の實驗的御教訓を仰ぎたいのです。

(一)小兒は記憶力の強きものなり

小兒の時は無邪氣で、頑是の無いやうではありますが覺への能いもので、一たび其の柔かな心に、印象したることは容易に忘れません。アノ源の義經が常盤の懷の中で、平の宗清の額の黒子を見覺て居て、後に石屋の彌陀六待てと呼止めて、其の宗清なる事を見顯はしたのは、アレハ院本者流の作でありませうが、併し其れ位の事は無いに限りますまい。だから、東西も別へない子供だなぞと思つて、油斷をすると大きな間違の種となります。凡て家庭に於ける兩親の言動は、皆な其の小兒の耳に響き、眼に映じ。其が成長の後まで、消へ失せないのであります。古は胎教とか申して胎内に在る小兒をも教へる程に努めたのでありますから、まして一旦此世に生れ出でゝ、多少意思の働きのある者の前には、謹み愼んで居なければなりますまい左もなき時は、成長して後幾ら嚴しく小言を申ましても、中々以て兩親に心服する樣にはなりません、其所ですから、兩親は可成眼に惡色を見せず、耳に惡聲を

聞かぬ様に身を隔けたいものです。殊に母親たる者が此邊に注意を怠りてはならぬことゝ思ひます。例へば母親が、芝居の替り目には必ず歌舞伎座へ行くと云ふ様なれば、其娘は自然役者を贔負にするといふ様になり、飛でもない結果になります。昔時西洋で、他人の財物を盗み人の家を燒き人を殺したといふ極惡非道の強盗がありました。或る時、教誨師が獄中に於て其の男に「お前はあらゆる惡事を働いたが一番初め惡念の起たのはどういふ譯であつたか」と問ひましたら、其男が答へて云ふには「私の幼少の時に人から書を貰ひました、所が、其書には強盗が人を殺して財物を奪ふ所が書てありました。其時フト心の中に、成長したら一ツ行つて見やうといふ考が浮びました其が惡事の根原でありますと。斯う



云ふ譯ですから、タッタ一枚の畫でも氣を附けなければなりません考へて見ると子供を有つた兩親は、心配なものでムいます。モ一ツ注意の要るのは、迷信といふことを防がねばなりません。今の日本殊に此の東京は、此の迷信が盛んで、ヤレ星だとか、干支だとか、方角だとか又は婚儀などにも相性とか云ふことを申して居りまして、何事も皆な之から割出し



ますので、終には道理をも支配する位になりました。甚しいのは、醫者に掛つて癒らないと、アレは方角が惡いからだ、子供が學校で落第しますとアレは方角が惡るいといふ。ダカラ或る小學校の校長さんに、教育の妨げとなる者は何ですかと聞きましたら此の迷信が一番邪魔をすると申しました。マア斯樣な事は、教育の進歩するに從て追々と無くなるでもあ

りませうが、親たる者は決して子供にヶ樣な道理の無い、一種變則な敎育を授けないやうにしたいものと思ひます。

(二)小兒は遊戲の外何事もせぬものなり

小兒の時は食べるにも、寢るにも、浴するにも、皆な遊びにして居ります。頓と小兒の職分は、遊戲一點張りと申しても良い位でムいます。例へば學校へ行くにしても、書を讀み、字を習ひ、知識を養ふなど丶云ふ考へは無くて、只行けと云ふから行く、讀めといふから讀むのでありまして、又敎へる方でも兎角面白く厭きないやうに、云はゞ嚙み半分にして居るのでありま す、其ですから、敎科書にも舌切雀とか、桃太郎とか云ふ昔話を書てあるのでムいます、又運動とても其通りで「お月樣ゑらいな」とか、「池の緋鯉」とか云ふ樣な唱歌に合せて躍るのでありますから、如何にも子供に取つて愉快であります、大人方が胃が弱くなつてから、急にサンダウの體操式に倣つて、鐵の「ダンベル」を振り舞はすなどの次第ではムいません。小兒には、衛生の生理のといふむづかしい、問題は分りません、されば兩親たる者は、小兒を捉へて物の利害得失など、頗る難儀なる講釋を聞かせて、小兒を苦しめるよりも、何でも家庭を一つの遊戲場と心得て、淸く面白く、厭氣の念の起らない樣に遊ばせなければなりません、そうするには、兩親も我は親なりと無暗に威光を示さず、小兒の友達となつて、偕に樂しく、戲れ遊ばなければなりません、餘り嚴しく叱り飛して、やかましく致しますと、小兒がいぢけます、之は小兒の心身の發達に、大影響を及ぼすこと丶存じます、其の緩急加減がむづかしいことでムいます。

(三)小兒は習慣の附き易きものなり

小兒の時は、負へば負さりたがる、抱けば抱りたがる母親が添寢をする小兒は、獨寢さすると泣きます、西洋の小兒は抱寢をすると眠りません、凡て此の通りです、又心理上から考へても、矢張り善惡の習慣に染り易いのです。古昔楊子は岐路に立て泣き墨子は白絲を見て哭いたとか申しますのも、此の理に外ならぬで

と丶思ひます。小兒の時は殆ど善惡無差別ですから、之は善なり故に爲す、之は惡なり故に爲さぬ、といふ理屈理解は分りません、何でも周圍に支配されて仕舞ふのであります。

小兒の時には己れの本分、責任、義務などいふ事は分りません、私德とは何だか、公德とは何だかも分りません、(尤も之は事に寄りますと大人でも分り兼ねる位であります)此の小兒に五倫五常の講釋を聞かせても牛に美妙なる音樂を聞かせる樣なもので、格別感じのない者と想ひます。只々親は理屈無しに善事をさせるのであります。親が雷を恐がれば子も恐がる、親が幽靈を懼れると子も亦幽靈を在るものと思つて懼れる、親が惡事を惡み嫌へば、小兒も亦之を惡み嫌ひます、親が善事を好めば子も之を好む。そうして物心を覺へてから後に。成る程と其の譯が分るのであります。故に親たる者は、己れ先づ善人となつて、善事を行ひ義人となつて、義を行ふ樣に成れば、其小兒も自然に善き習慣が付きます。又親が其子を餘り汚く可愛がり過ぎると、其子はダヽ子となり。成長してから我儘勝手な私慾の人物となります。之は兩親の方寸の中に籠めて置て、氣を注けべきことであります、能くある事ですが、平素構はずに遣り放しにして置いて、客の來た時斗り、急におとなしくさせ樣としても、中々言ふ事を聽くものではありません。其はだめな筈です。モト其の習慣が附て居るのですから。

(四)小兒は兎角物眞似を爲すものなり

小兒の時は恥の外聞のといふことは無く、又良否に拘らず人の眞似を致しますだから、孟子の母も學校の近所へ引移つたのでありませう。小兒といふ者は仕方のない者で、寺の門前に住へば葬式や讀經の眞似をする芝居の近所に居れば、假聲をつかう、日清戰爭時分には必ず戰ごつこをして遊ぶ、まして朝夕側に在る所の親の眞似は爲ないでは居られんのであります。故に親の一擧一動は響の物に應ずる樣に小兒に眞似られるから、親たる者は餘程要愼しなくてはなりません。御覽なさい、小兒は大人の下駄を穿き、大人の帽子を冠り

大人の傘をさし、大人の樣な大きな茶碗で御飯を喰たがります、又大人が煙草を吸へば、自分も鼻の孔から煙を出して見たがる、お爺が趺踞坐をすれば、子も趺踞する、お爺が寐て本を讀めば、其子本を持てば必ず横はる、此の通り小兒と云ふ者は、何でも親は世界中、一番ゑらい、強い者だと思つて居りますかどうだか、知りませんが其爲す所は何でも眞似る。其が積り積つて其子の品性となるのであります。若し間違つた時は生長して後に悔んでも、致方のないものでありませう。

全體子を知るは親に如かずと申しますが、大概親は他人の子に對しては聰明ですが、我が子には盲目な者で能く觀察が届きません。から、他人の側に立つて見るのが必要です。そうすると我が子の性質、傾向、嗜好等が能く分ります。而して其の子の自然の發達を妨げぬ樣に、又其の惡しき所を矯めて行かなければなりますまい。親の役目は船長の船に於けるが如し、只其の子の進歩發達の妨害となる者を除き、生涯危險に遭はぬ樣に氣を附けるのであります。（完）

家庭雜話

羽仁もと子

◎先年台灣のある所に、十四五軒の官舍が出來ました何れも旅の上でありますゆゑ、此の新官舍に住む人達は、嘸ぞ朝夕に樂しく行きかふて、社會主義者の理想とするやうな、共同的の生活も出來るであらうと、心ある人々は皆待ち設けて居りました。ところが實際は大反對もありまして、一年ばかり經つ中に、官舍の中が丸で互に敵國のやうになりました。それは何せかと申しますのに、初めて此官舍に住んだ人達が約束して風呂も買物も可成一所にしようといふことになりました即ち風呂でも今日は一號の家、あすは二號の家と、代る〳〵にたきましたなら、各家が半月一度の手數を以て、毎日風呂に入浴れるので、買物も今日は向ふの奥

さんが魚の番で、此方の奥さんが野菜の掛りだといふ樣にして行くのです、暫くの間は大層工合よく實行されたさうですが、ポツ〳〵方々から苦情が聞えて參りました。アノ家のお湯はいつでも熱くつて困つて仕舞ふ、うめて下さいとも云へないし、とう〳〵風を引いて仕舞つた。あそこの風呂はいつも温い、薪を惜んで居るのだろう、此方の風呂場は汚なくつて氣持がわるい、向ふの奥さんは奇麗好きで氣が置ける、とそれはそれは騒々しいことで買物の苦狀と云つたら、一層ひどいのださうで、折角の共同生活も間もなく破れ、却つて相互の惡感情を殘すに終つたのです。以上は新渡戸博士の台灣でお聞きになつたお話でありますさうで、先日博士を御訪問申しました折、雜談の序に伺ひましたことですが、獨り台灣官舍の婦人たちばかりでなく、此の淡泊にないといふことが、私共日本婦人すべての上の欠點であらうと思ひます。

◎實は熱くつて困つて居ながら、誠によいお湯でと申すのが、普通の挨拶になつて居るやうな有樣でありますゆゑ、よいお湯ですと他人が云つても、少しうめませうか、それとも熱くいたしませうかと、二度も三度も聞かなければ安心出來ぬといふことになり、もしもよいお湯ですと云はれた時に、はい左樣ですかと早速に信じて仕舞ふと、あの奥さんはうつかりもんだと、直きに陰言を申されます。そして此方が問はれる方になつたときに、熱う御坐いますから、どうぞ少しおうめになつてと初めから申さうもんなら、ナンテ遠慮のない奥さんだろう、丸で書生見たやうだと云はれるのが殆ど普通で御坐います。何といふ煩はしいことでせう。お互にこの樣な事柄は成るべく淡泊にいたし合ひましたなら、私共の氣苦勞の半分は慥になくなるでありませう。そして他人との交通が大層たやすいものになり自と社交の趣味も分つて來るかと思ひます。

◎そしてまた日本婦人の淡泊でないといふ癖は、どの樣なところから、來たのかと考へて見ますのに、「自分の感情を有の儘に現はすといふことは、實にはしたないことである、女は何所までも謹みといふことを忘れてはな

らぬ」と申す昔の教訓が、その意味を誤解されて、思はぬ所に弊害を殘したのではあるまいかと思はれます併し女の謹みと申すのは、決して以上の樣な場合に於て、心にもなき取繕ひをしよといふのではなく、例へば大勢打集ふて遊んで居るとき、自分に氣にいらぬ事があると申して、他人の興を殺ぐのも構はず、直ぐと不快な顔をするとか、或は云つても詮のないことを、いつまでも愚痴つぽく口に出すとかいふ樣なことこそ、所謂はしたないと申すので、是等を謹むが即ち女の『謹み』であらうかと思ひます。

◎此頃或婦人會の席で、一人の婦人が他の婦人に、あなたは此次の會にもお出かけになりますかと云ひました。問はれた婦人は、家にいつて聞いて見なければ分りません、と申すのです。スルトまた他の方が、あなたにも此の本を一冊差し上げて置きませうかと、云ひますと、その婦人はまた矢張、家で聞いて見なければ分りませぬから、と何事にもすべて此の通に答えて居らるゝのです。人の妻たるものは、何事も自分勝手に所置せずに、すべて夫に計るのが美德であるといふ敎訓も、守り過ぎると一向効能のないものになつて仕舞ふかと思ひます。例へ人の妻でありましても、一個の人間である以上は、自分自身のことや、自分の責任であるべき筈の、一家の内政のことなどは、自分一人で差支なく所置する丈の覺悟を持たねばなりません。此の事の出來ぬ婦人は、妻となる資格のない人で、何事に就けても夫の命令ばかりをあてにすると云ふことは美德でも何でもなく、妻としては不名譽の甚しきもの、夫に取つては厄介此上なき事であります。誠の從順と申すのは、無考の爲に唯々夫に從ふと云ふのではなく、夫の意見に己が思わくと違ふ時に、大した不都合のない限り、我をすてゝ、快く夫の云ふ通にして行くことで御座います。で、私は何でも彼でも夫に聞いて〳〵といふ婦人を、あまり立派であるとは思ひませぬ。併しながらもとより親しき夫妻の間でありますゆゑ、何事につけても互に話し合ひ考あふのは、よい事でもあり必要なことでもありますが、それは唯夫と自分の間のこと

でありまして、決して他人の前に夫に尋ねる〳〵と申すには及ばぬことで御坐います。

◎昔は男子がその妻に、自分の事業に關はることを、一切打ち明けぬといふことを、大層立派な事のやうに教へて居りまして。從て妻たるものは、夫が何をして居るといふ事を知らぬと云ふのが、一種の婦德のやうに思ひ做されて居りました。これは何ういふ所から來たのかと申しますのに、昔には隨分氣節の高い婦人はありましたけれど、社會のことに就ては一向無智でありました（少數の例外はありましたけれど）、そして、殊に封建時代は、社會に敵味方が澤山でありまして、その間に種々の策略が行はれる時代でありましたから、社會の有様を知らぬ婦人に、うつかり男子のすることを知らせでもしたならば、よからぬ事になりはしないかといふ懸念からであつた樣に思ひます。併し今日の時勢は大體に於てその樣な有樣ではありません、そして婦人も出來る丈社會の事情を知るやうに敎育されて居るのです。そして夫の事業、行動に趣味をもち同情を表し得る婦人を以て、立派な妻といたして居る所でありますのに、昔の習慣が矢張婦人の腦髓に殘つて居ますと御良人は此頃お忙はしう御座いませうと聞かれますと私には分りませんが、何だか大層忙はしさうで御座いますと、殊更に答へる方々を澤山に見るやうでありますが、これも矢張間違つて居ると思ひます。もしも本當に夫のする事が、自分に分らぬのでありましたなら、人に吹聽するところではありません、自ら恥ぢて一日も早く、夫の行動を解し得るほどの女になることを勉めねばなりません、もしまた分つて居りますなら、何も僞つて私には分りませんなどゝ申すには當らぬのです。勿論解つても居らぬのに、解つたやうなことを云つたり、必要もない時に、夫の仕事に就て他人と語るのは、よくないと云ふ事は定まつて居ります。（完）

細君の處世法

水原翠香

▲悋氣といふ事の眞の意義▲燒餅を遠火に燒くといふ理由源氏紫の上の事▲氣慨ある妻を好むの例▲淫猥の書中より人情の徴を酌み取る事▲美人の正妻を得ながら醜婦の妾を愛するものある事等に就て我が所信をのぶ

女の妬心なきは百拙を覆ふと、古よりいふ言あれども。嫉妬は人の天性にて、男子にも甚敷きがあり、豈女子のみを誡むべき物ならずや、妬心は男女を通して有る事は、即ありと雖、只其用ゐ方の巧拙によりて雲泥の差をなすのみ、もし女として妬心なく、其夫が酒色に狂ひ日夜内を外にして亂行をなすに、些も念頭に置かずして他人視するならば　忽ち身代を潰し名譽をおとして其身も又末覺束なきに及ぶべし。是を婦德といはるべけむや。　抑、妬心なる物を分拆すれば元素は夫大切家大事と思ふ眞心より發するなれとも、深く案じ煩らふの餘りに次第に愚痴の凝結を來たして、終には神心腦亂の結果恐るべき擧動をも敢て爲めに至る也。賢明なる婦人は妬心を表に顯はさず巧に是を應用して男の心を感動せしめ、柔よく剛を制したり、彼沖津白波と口ずさびし井筒の女も、其閨に入りて胸の火を冷しゝを見てこそ業平の河内通ひは止たるなれ。又紫式部は克人情に通達して、其著はせる源氏物語中男女の情を細やかにいへり、卷中第一等の立者としたる紫の上の心用ゐ、ふるまいに、心をとめて讀み味はゝ、悋氣の極意は悟らるべし。俗に所謂燒餅を遠火にかけて焦さずにうまくやく物也　源氏を讀たる人は克知る所なれど、未よまざる女子の爲にいはむ。此紫上といふは其夫なる光君があまたの女にかゝりて放蕩を盡したるを。紫上が程よくやきて其やき方の面白く、いふにいはれぬ趣味あるが爲にます〳〵寵愛せられて、數多の女も是に及ぶ者はなしとみて、終に光君の浮氣心しづまり、生涯むつましく終れり。されば從來放蕩を盡しゝ男子にても妻を迎へては浮薄の遊女と事替り

一種いふべからざる眞の愛情あるが爲に、自然と浮氣は沈まりて身持正敷くなる筈なるを、猶も放蕩やまず、或は又始眞面目なりし息子の、嫁來りて後却而狂ひ出だすが如きは、其妻たる者が夫婦和合の情に疎くて、家庭の面白からぬより他に出て歡樂を求むるに外ならず。凡男子は日々外に出てゝ其勤務に心身を疲勞し、時に人と爭論する事あり、我が說用ゐられずして滿腹の不平怒氣を含んで家に歸るも是を迎ふるの良妻ありて溢るゝ如き愛情をもて克慰さめ、且諫めはげませばこそ一日の欝を散じ、反省して勤めもすれ、才智のはたらかぬ女は夫が心情を悟り得ず、たとひ語りたる其事情を解する程の腹力なく、談合相手と爲すに足らねば獨り快々として歎息する折柄、心なく下婢を相手に笑ひ興じ、又は今ならでもの事をいひかけなどすれば、いとゞ癇癪に障りて叱りちらし、終には自暴を發して飛出す抔するに至る。古言に夫は天に比して主君と敬ひ愼みて仕へよと敎へたるは、元來支那國は女子の性質かたましく、夫に從順ならざるが故に極力之を誡めたる言也。日本は昔より婦女子の性美にして和らかなるに、儒經の渡りてよりは女子を壓制するの甚敷が故に、中比戰國には女子に勇敢なるも有しかども、押なべては餘り柔順の度を過して氣慨といふ物地を拂ふに至れり。されば馬鹿正直に女大學一方に仕立られたる女は、只顧主君と敬ひ恐入るのみにて打とけず、親愛の情に疎ければ男子の心甚興なく、面白からず、女房を六ヶ敷究屈なる者に思ひて厭ふ心つくもの也。

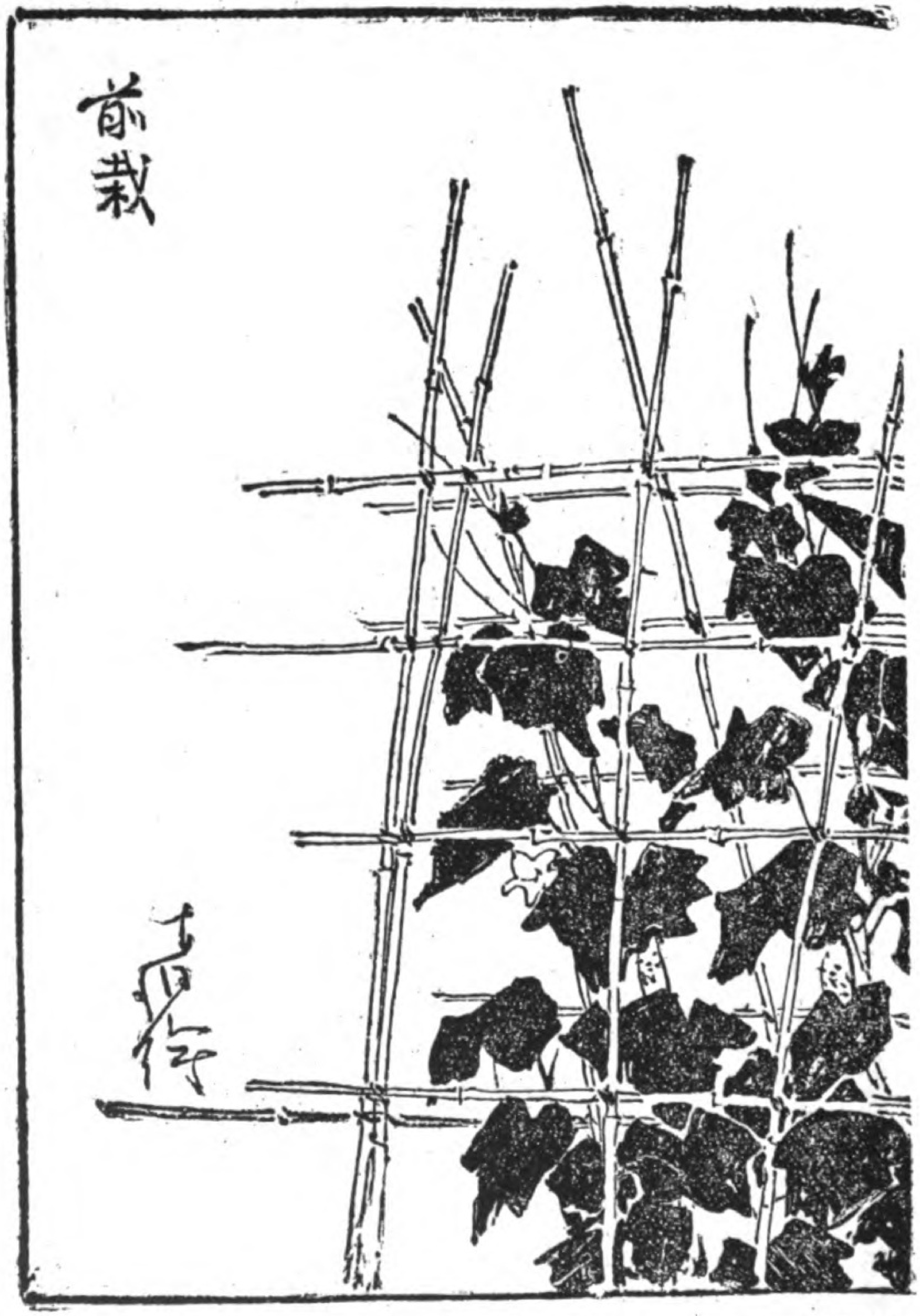
我が知りたる人に姉の死たる跡へ其妹を後妻とせしが夫の氣に入らずして常に苦慮しつゝ語るをきくに、姉はいつも旦那に反對して右といへば左に、上といへば下とするなれども、元來氣に入りて何事も其いふが儘に旦那の方よりまけてせらるゝを常とせしが、我は始より唯叱り付らるゝのみこわくて爭ひ處にあらず、一も二も其言を背かねど猶叱らるゝのみ、如何せばよかるべきと泣く、予を以て是を察すれば其情は他に非ず、其夫なる人は氣慨ある、女を好みて穩順一方手のなきを不興として嫌ふ癖ある人なりしに、姉は其氣質をよ

く呑込てわざと反對して其實夫の氣に適ふ樣につとめじ也、妹は其才智なくて其情を悟り得ず、只恐縮する故に叱らるればます／＼狼狽して爲す處を知らず、いよ／＼不興を重ねて終には離緣せられたりき。兎に角に男子が內を外にし其妻を閑却するは其事情は種々なるべきも、詰る處は宅の面白からぬに相違なけれは、妻たる者其情を察していかにもして家庭



團欒の娛樂あるやうに骨を折らざるべからず、憖に議論めきたる諫言など決していふ事勿かれ、却て夫の心を激して向ひ火を燒添ふる事はありとも、其言に伏して行狀を改むる男子は有べからず、捨てはおかれず、いへば諫言、耳に逆ふ、然らば如何せばよけむ、是に於てか大に妻たる者の伎量を要する處也。只彼紀有常が女、又は源語の紫上などの趣をよく

味はひて自然と夫の悔悟するやうに持かくるの外なかるべし。伊勢源氏等の物語を熟知せぬ人は只顧に好色淫猥の書也とおとしめ云ふめれど、式部の極意は人情の徴をうがちて婦女子の誡警を述べたる物也、淫猥の事多きは宜からねどもそは其當時の光景が實に如斯くありしが故に其實地を明白に顯しては憚り多きが故に殊更に作物語としていへるなれども、



其比の貴族は大かた光君的の人のみなりし也。紫上や明石上の如きは式部がかくも有りたしと思ふ理想の美人のみ、されば能くみる時は一廉の學問となり惡くみれば淫行の誘導ともなる事後世の演劇、又戀愛小說も同し、想じて書は讀者の心次第にて小說稗史の類にてもよき處のみを採らば有益なり、聖賢の經書すらも誤解すれば頑固唐變木と成りてなか

なかに身の害となる事なきに非ず。されば人情本たりとも強ちに擯斥すべきにも非ず。注意して其長ずる處を讀味はひ、是を胸中に畜して漫にいはず、顯はさず、我身を愼しみて他より批難を受ぬやうに家を治め、舅姑を始め人の見聞く處にては聖賢の教を守りて、いかにも夫をば主君の如く敬ふべしと雖、閨中の趣に至りては上品にいはゞ紫上の如く、下品にいはゞ娼妓の間夫に於けるが如く、情愛の熱情を竭して夫の心を滿足せしめむと勤むべし、斯の如くなれば表面には貞女賢妻の誉れを得閨中にはいふべからざる面白みありて其妻に心をかたぶけて外の浮氣はやむもの也。然れとも茲に注意すべきは人心は千差萬別決して同しからされは、其夫のいかなる女を好むかといふ事を克考へ知らざるべからず。我は誠意を竭しても夫の心に適はされば彼悪女が深情となりて竭せばつくす程嫌はるゝものなれば、西施が顰にならふべからず、只夫の好む處を知りて程よくあしらふべき也。此事あながち容貌の美にのみ拘はらず他よりみてあの女何處がよくてと思ふも其當人はさも思はぬ氣に睦ましきが在又正妻に美人をもちながらそれよりも貌の劣れる妾を愛する人もあり是其意氣の適不適によれるのみ。

▲我家と里方との區別▲里方を扶助する程度▲際限なき救助はなすべからざる事に就て

女子嫁して後其家の衰運となる時は勢ひ生家の助力をからざるべからず、又夫の家は榮えて生家の貧なるは其父母兄弟までも女兒の縁故にすがりて其扶助を仰ぐは世上一般の人情也。かゝる場合に臨みて婦女たる者大に注意すべき事あり、金錢上に關する事は勿論、其父兄と夫の權にあれば、婦女子は只双方の中にたちて宜敷願ふの取次に止り、事の成不成ともに決してさし出てゝ兎角爲べきに非ずと雖、家事向きの細事、たとへば衣服の類をはじめ他より到來の物品、及び臺所の用度、味噌、酒、漬物、菜の類に至る迄家日夜に支配する所の物品をば、其缺乏する方へ持はこぶ様になり易し、それも實家より夫家の方へするは婦女たる者い

かに我儘者なりとも一度他家に嫁したる以上は今更實家の物を他より自由に持出さるゝものに非ねば、いずれ其母なる人が女兒に泣きつかれては其愛におぼれて、不便の餘りにする事なれば、其悴や婦等は譏り憎むともしひて女兒の罪とは云ふべからず。是に反して夫家の物品を實家へはこぶは全く其婦の罪となる事なり。家身は榮えて在ながら生父母姉妹等の困窮するを搆はざるも不孝なれど、助力するには其分限を越て爲べからず。此わかちを濫らぬやうに注意すべき也。たとへば金錢を贈るとならば我が小使ひとして夫より與へられたる中の幾分を遣ふべく、寡しとても是が即家分限なるをいかにせば、家の經費として夫より預る處の金錢をごまかすは監守盗の罪といはるゝとも言なかるべし、衣服ならば自己既に派手になりて着られぬを實家の妹に讓與は苦しからず、是とても夫に妹ありて其衣を欲し氣に念掛おらばそれに與へて生家へは贈るべからず、何故とならば是を知らず貌して生家へおくれば元より我物を我勝手にするなれば、表だちていはれねど偏妬の心より必此事を心に含みてとやかくと尾鰭を添へて誹謗の種となる事あり、家の風波はかやうのさゝいの事より發るなればよく〱考へて後に事をなすべし。我物だに猶且然り、況や夫の古衣をや臺所の物品他家よりの進呈品等すべて夫家の物にて我私に使用すべきに非ず、姑や夫が情ある人にて氣をつけて是をおくれとあらば明白に遣すべし、我管理すればいさゝかの事爲たりとていか樣にもごまかさるべく、又夫程の事大家の障と成べきに非ねども姑夫に告ずひそかに物を實家に贈る事勿かれ、隱たるより顯るゝはなしの言に洩れず、かくすとすれば却て人の目をつけて家族下婢等はよく知るもの也、既に一人知りぬれば始秘密にせしだけ彌疑ひを深くし、其後は何によらず存外に早くなくなる物あれば、是も又いつの間にか贈られたるべし、是もまだ有るべき筈なるをなと然もなき事までいひはやし、動すれば其中には奸計おこなはれて他の私せし物までも婦の業とし塗附らるゝ事あり。然るも一度にても秘密にせし證跡なれば、爭

ひても明白には成がたし、況や數度隱して贈れるをや、夫は男子の心寛大にしてさる些細の事に頓着せざるも、家族等は然らず、一たび其心を惡くすればみる目、かぐ鼻、何をがなと思ふ矢先に得たりと附入りて、針小棒大に成、終にはかゝる嫁を置ては實家の爲にても身代を減らす家の爲には替がたしなどの物議おこりて、夫の心をもうごかし、一大事にも及ぶ也。豈愼しみ恐れざるべけんや。

されば他に嫁したる者は舅姑をもおくり終り、女公等も緣に付て、眞に我世となりたる上にては我生家の扶助も夫と計りてなすべし、夫なき後とても家の障りとならぬやうを思ひ考へて、證書の連印はいかにいはるゝともうかとする事勿れ、實家也とて餘りしつこく度重りては終に夫家の相續にも拘はる事なきに非ねば、さる時は譬ひ實家と絕交するとも夫家の方を大事と守るが女子の本分也。それ故にいかなる難に遭ともそれは是非なし、天命也と諦むるの外わらず、夫家と生家と孰といふ場合には生家を捨て夫家につくの覺悟を生涯忘るべからず。

上件に說來る理由なるが故に、もし夫の兄弟姉妹等が不幸にして零落する者わらばなるべく同情をよせて夫に取なし、扶助すべき也、是は我生家とは異なりてたとひ夫が然なせそと止めらるとも、我管理內の物品は家の障とならぬ程は仕送りて志をみするがよし。家族や雇人らが是を知るとも譽てこそすれ、譏る者は有べからず、全く生家とは反對の事情なり事柄は同しくても其用ゐ處と人によりて相違する事かくの如し、馬鹿正直に偏固べからず、然れども人を想ひ事につきては大に注意すべき事わり、凡人の、運不運は多く其人の勤惰にわり天無祿の人を生せずとて男女に拘はらず病の故に身體自由ならぬ人は是非に及ばねども、身體人並ならばたとへ不運にして發達はならぬまでも何をして成とも今日をすごすだけの事は出來るが當然にして、出來ぬといふは爲ざる故也。身に藝わらば藝によりて藝なくは男は勞動すべく女も又下婢奉公しても世は渡らるゝをや、然に生れのよき人は耻て身をおとす事を

ようせず、偶然一の事にありつきても遊惰に慣たる身は其事に甘んぜず又勤務に堪がたくて今少しらくにして割のよき事も有らむ玆ばかりに日は照らさず抔と不了簡をおこしてとかくに忍耐力なきが故にます〳〵窮して果は惡道へも墮落するぞかし然る人は自己の怠惰は思はずしてとかく人をのみあてにし若其人我意の如くなさゞれば不人情と恨むものなりされば人を救助するに臨みては先よく其人の心情を慮り、其事柄を察してたとへば天災に遭たるとか不時の病を發せし爲にとか苟も其人の怠惰より生ぜしにあらぬ困難ならば及ばぬ迄も力を竭して扶助すべしといへ共、怠惰より窮するに至りたる人は其妻は然らずとも其夫がもし如斯人なる時は今一時扶助するとも又やがてそれを消費して始の如く救助を乞ひに來る事必せり、如斯人を其都度々々救助して際限あるべからず然りとて扶助せざれば恨むべし、人の恨を買ふは家の爲にも身の爲にもよき事なし、されば始によく其人を察してもし末の見込なくいつまでも厄介をかくべき人と見たらば其始を甚敷十分に爲べからずいひ譯はいかやうにても有べし、只氣の毒とは十分思へども心にも任せぬよしをいひて當座の事に止るべし、かくて又來らば又惠みいつ迄も少しづゝ幾度にも割て程よく惠む時は其人も不足に思はず、義理もたちて恨もなかるべし、始をはづみて後に減ずれば惠みを受ながら不足心を生ずるもの也、是等の手加減臨機應變の活動は筆にも書取がたく教へらるゝものに非ず、各〻の才と技量にあらむのみ。（完）

母親の感化

茅原蘭雪

英國皇帝と故女皇——子供の晩餐會——桂首相の幼時——跡見花蹊女史

西洋の諺に、女は弱し、然れども母は強しとか申して家庭に於る母の嚴格なる態度は實に豫想の外だと聞き及んで居ります、日本では全く之れと反對で、啻に女が弱きのみならず、母も亦弱く、寧ろ母は子供に制

せらるゝといふ事實が無いとは斷言されませぬ、今の英國皇帝エドワード第七世陛下が、未だ御幼少で、漸く太子の位に登られた頃、故女皇に伴はれて、倫敦の博覧會を巡視されました、その時幼き太子は、母君陛下の訓戒を怠られて、しば〳〵陳列品に手を觸れられたので、女皇にはいたく怒られ、公衆の目前に於て、用捨なく將來の英國々王を打擲されました、以て如何に女皇の躾が嚴重であつたかゞ窺はれます、私共の愚かな考から申しますれば、幼き子供が、物珍らしさに物品に手を觸るゝ位のことは、いはゞ有りうちの事で、左までに懲罰されずもがなと、思はれぬでもありませぬが、又深く考へますれば、夫れは却つて子を愛する眞の道でないのみならず、殊に苟も將來の國王たるものが、さる卑しき心根を持つてはならぬとの女皇の思召かと察せられて、其大御心の深きに感嘆いたさゞるを得ませぬ。

下田先生が、歐米から歸られた當時のお話に、我邦及び支那朝鮮などでは、嚴父慈母といふ言葉があつて、父は嚴にして母は慈むといふことが當然の樣に考へて居るが、英國では之れに反して、小兒を可愛がるのは父親であつて、嚴なるは母親であるから、慈父嚴母とでも申すべきであらう、之れは英國の母は、小供を引受けて敎育するの役目を帶びて居るといふことを證據立つるもので、小供が十七八歳になるまでと申すものは、父親は聊かも干渉せぬといふ風になつて居る云々とありました、私はこのお話を聞き、且つエドワード陛下の御逸話を思ひ合せて、無量の感に打れました、而して女は弱し、然れども母は强しと申す言葉を合點したことです。

ナポレオンに向て、國家の富强を圖る策を問ふたものがありました時に、ナポレオンは言下に『母』の一語を以て答へたと申すことです、實に國家の强弱は、國民の强弱に依ることで、劍でも軍艦でもありませぬ、その將來の國民の母たるものゝ任務の重大なことは自から明かなることであるにも拘はらず、日本の家庭が亂るゝ今日の如くでは、到底帝國の富强を圖ること容易ではなか

らうと思はれます。
凡そ人間が立志の時機は、いふ迄もなく十歳頃から十七八歳頃までゞあるのです、而して其の時機は恰も母親の溫き翼の下に生育れて、最も多く母の感化を受くる時代であつて、強くも弱くも、善にも惡にも、一に母親の仕付如何に在りと申すも差支はありませぬ、然るに其の肝賢なる母が弱くして、教育が緩漫に流れては、亭々として天をも摩すべき偉材を、あたら日陰に痩せ衰へさせ、灌木雜草と伍を同ふせしむるの不幸を見るの外はありませぬ、聞きますれば泰西の家庭は、和氣藹然春の如きものであると申します、しかし其の和氣藹然たる所以は、決して謂れなく睦み合ひ狎れ合ふといふのではなくて、嚴肅の裏、眞に親子兄弟の情の、溢れて其處に到るので、飽くまで規律を正し、長幼の序、夫婦の間の禮を立派にした後の事であるのです、我邦の理由もなく、規律もなく、漫然として慣習に任みのすなるとは、大な差があるので、泰西では飽くまでも研究し、工夫した結果、こうやらねばならぬこうせねば不可ぬと、すべて理詰め、然らざれば實際の必要より來たので、決して無意味ではありませぬ、一例を擧げますれば、子供が衣物を裂くとか、汚すとかいふとは、少しも小兒の發育に惡結果を來さぬから一片の注意で濟ませる、しかし嘘を吐くとか、欺くとかいふ一段になつては、小兒が將來に大害を及ぼしますから、飽くまでも懲す、叱る、甚しきに至つては鞭つ、この場合母たるもの決して情を以て判斷しませず理を以てするので、情に於ては鞭つとの忍び難きとは誰しも同じとであります、道理が許さぬ、即ち今の英國々王たる時の皇太子エドワード殿下が、公衆の面前に於て、母君女皇陛下から打擲あそばされたのも、畢竟こゝに原因するので、女は弱し、母は強しと申すとも、苟も母となつては女子が先天の感情を以て子供に臨ます、嚴として道理の在る所に遵ふ、即ち強ひ意志を以て、母としての特別の使命を果すとゆふに外ならぬことゝ存じます。
一体我邦では、長幼序ありとか申して、大人と子供の

差別があるやうでありますが、泰西のは一層判然と立つて居つて、子供は如何に高貴な人の子でも、敬語を用ゐず、また一人前の取扱をしませぬとは、既に讀者の疾く御承知の事と存じますが、是れも前に申す道理から割り出されたので、斯くあるべきであらうと思ひます、此事に就て、西洋から御歸朝になつた方に承りましたには　來客のある時の晩餐の席などには、決して子供を列席させませぬ、其の代り子供には子供同志の晩餐の會を時々開いてやりますさうです、子供同志の晩餐會！何んと好い趣向ではありませぬか、この一事に徵しても、如何に家庭教育の方法が行き屆いて居るかゞ知られます、私はこの子供同志の晩餐會が、我邦にも盛んに行はるゝ樣に希望します、智識は知らず識らずの間に交換され、且つ將來交際場裏に立つ準備にもなり、ドンなに利益が多いか知れぬと存じます。

それから境遇は人を造ると申します、境遇の人に大切なると、選ばねばならぬとは勿論で、この程渡邊子爵にお目にかゝつた時、人が立志の動機といふものは、ホンの一瞬間に在るので、その一瞬間の刺撃で、人間の運命が定まるのぢやと申されました、實に御尤な御說で、現今朝野の名士が立志の蹤を尋ねて見まするど子爵の言と全く符合するのです、此等は家庭に在る母の大に注意する必要があらうと存じます。

今の內閣總理大臣伯爵桂太郎氏が、幼年時代に於る立志の動機と申すは、伯爵は今は一面に文字の地位に居られますが、出身は純然たる軍人で、その軍事思想を養はるゝに至つたのは、十歳のころナポレオン戰記を讀まれたのと、伯爵の叔父さんに中谷正亮と申さるゝ方があつて、坤輿圖式といふ地理書を一々說明して聞かされたので、始めて五大洲と云ふものがあるを知りそこで廣く世界に渉つて、自分の智識を磨かねばならぬといふ志を起されたとのことです、伯爵の直話に「……是れは今でも子供に言つて聽かせる事だが、斯ンな事が人間の見識と云ふものを立てる原因となるのである、私は青年時代に攘夷をしたに拘はらず、とう

しても西洋に行つて自分の志を遂しやうと決心するに至つたが、其起りを尋ねて見ると、此十歳の時の事が、餘程源因をして居るやうに思ふから、少年時代には見る事、聞く事、餘程大切である」云々とあります。

「私は此お話を承つて、中谷正亮と申さるゝ人の、兒童を啓發するに能く其の道を得たのに感じました、

私の世の母たる人々に望むのも、こういふ點にあるので、渡邊子爵のお言葉の如く、立志の動機はホンの一瞬間に在るのですから、能くこのお話を味つて、兒童の啓發に努められんことを望むのです、即ち世の母たる人々は、中谷正亮氏の心を以て心とすることが肝腎だらうと存じます。

また女子教育家として、書に、詩に、歌に、其名高き跡見花蹊女史は、攝津國西成郡大津村にお生れになつた方ですが、女史の家は代々大庄屋と神主を務められた名家でありましたが、お父さんの代に、惡い人の爲めに横領されて了いました、そこで母人が日々女史に向はれて、家の系統から、家道の衰へた由來を話され、何でもお前は勉強して家聲を揚げねばならぬと云ふことを懇々說き聞かされました、それ故女史は、小供心にも勉強して、家を興さなければならぬと考へられて、螢雪の苦を積まれ、遂に今日の名聲を博さるゝに至つたと申すことです、しかし是れ丈の事ならば、必ずしも珍らしくもありませんが、女史の母なる方は頗る教育に熱心な人、また大層しつかりした婦人であつて、この時分には、まだ時勢が、女子に文學や書畫を學ばせたりする風ではなかつたのですが、見識の高い方は、常に時勢より一歩を進めて居らるゝ所から、女史をして特に斯道に入らしめられました、また女史も、幼少から畵や書が、大さう器用であつたとのことで、能く其の子の長所を知り、且つ時勢より一歩を進めた教育に就かしめられた母人の見識は見上げたもので、この母にして此子ありと申すべきであらうと存じます。

今の母親が、その子女の教育を、一に學校に放任して更に顧みないのと比べますと、實に霄壤の差ありと申

すべきです、ドーモ目下の所、學校と家庭との聯絡が甚だ乏しくて、我は我たり、汝は汝たりといふ有樣であるのは、最も嘆かはしきことゝ、學校で學んだこと、家庭で爲す事とは、多く矛盾して、子女はいづれに隨つて宜いか、五里霧中に彷徨するといふやうな形があります、之れは畢竟するに世の母親が、教育に冷淡、否むしろ教育といふことを解さない故だらうと存じます、世の母たる方々よ、希くは花蹊女史の母人を學び、常に時勢に先んじて、女子の教育を全からしめられんことを。

以上の如き例はまだ〳〵澤山ありますが、餘り長きに失しますので、この回は是れに止め、更に名流の方々に就て、親しく其のお話を承はり、興味ある事實談を掲げて、家庭教育の一助と致さうと存じます。

家庭科學

理科應用 家政二十四時

（午前五時より八時まで）

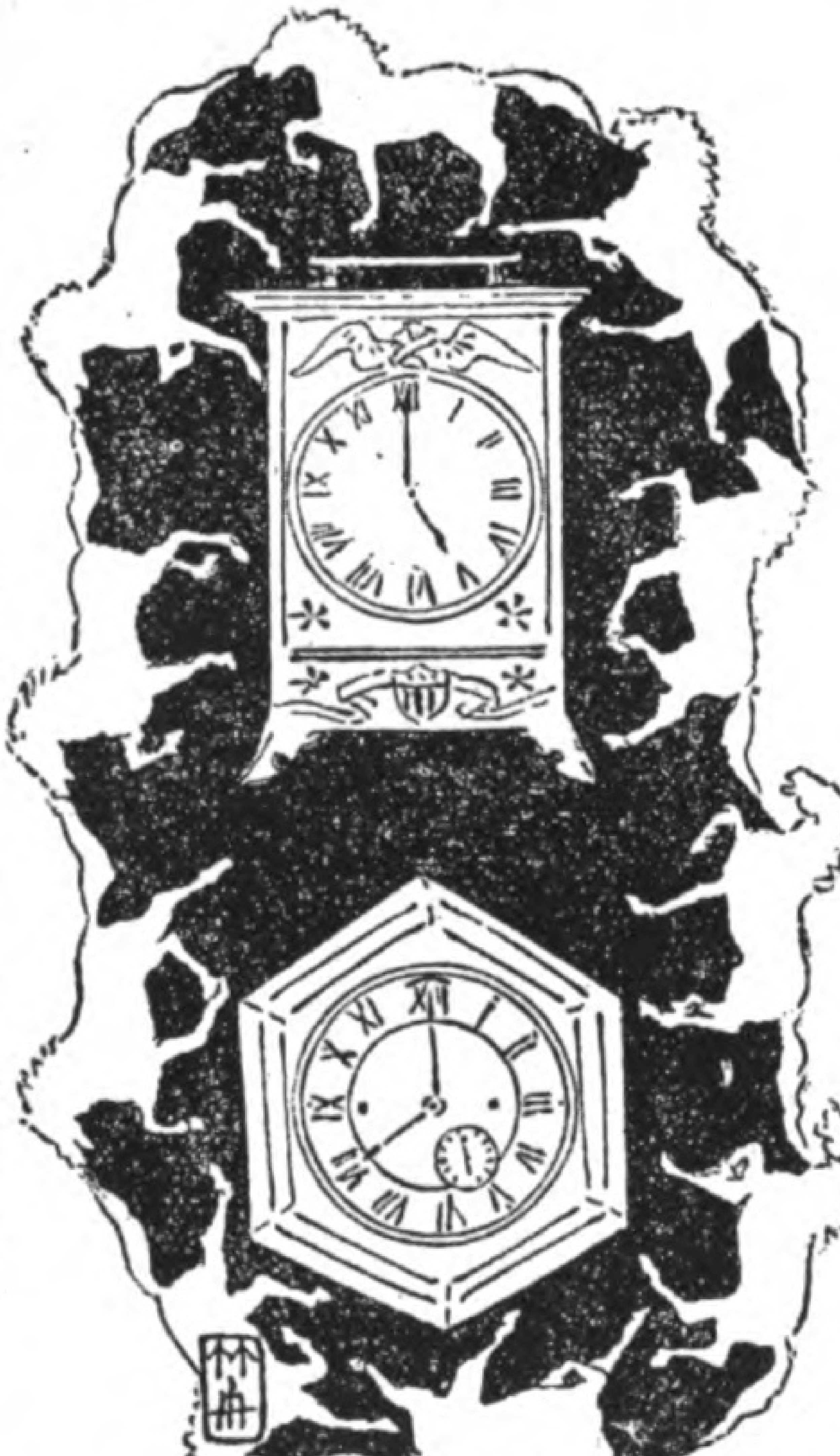
河西天放

記者の高囑により、こゝに家政二十四時といふ題目で、朝起きてから朝起きるまでの四六時中、皆樣の上に關係して起り來る種々雜多の事柄を、聊か理科の學理に照して、成るべく分り易く、そして成るべく應用的に申述べて見やうと存じます。なんだこんな分り切つたことを、男のくせに、と御叱りはもとより覺悟の上ですが、しかし世話にも「負ふた兒に淺瀬」とも、「岡目八目」とも言ひますから、又幾分御參考になる廉も無いとばかりはとこれだけが、廻らぬ筆の命でございます。

▲起床、着衣（衣服に關する物理、生理的事柄）、▲竈の下（竈

薪、マッチ、燃燒、煙、熱の行衛等を說く）湯を沸し飯煮（湯の沸く理其他、飯の煮ゐる變化云々、釜の蓋が鳴り等）、▲洗面（こゝに垢落しに關する事歯磨楊子石鹼歯の養生等の話をする）▲水汲み（こゝに井戸水と川水、汲上物理、井の深さ水廻等の事を）手桶の水（重心の話）煖爐又火鉢へ炭火を起す（炭水の理化熱の儉約灰の利用等）▲味噌汁（成分製法、汁の空豆腐、豆腐製法等）、▲香の物（ツクリ方種類、庖丁の事等）焚落し、▲掃除（心得いろ〳〵、戸障子のすべり等）、▲茶を入れる（茶の話、茶盆の黑みし等）▲煙草の火（煙草の話、火の付け方等）膳立食事（生理化學の事色々、食品の成分等も一日の養分及献立表等）▲食後の休み……

御互が踏まへて居る此地球が、一秒間に四五町、村田連發銃の彈丸よりも大きい速度で、西から東へ休みなき旅行を續けまして、あちら向いて居た日本の天地が段々太陽の方を振り返りますと、今まで天を支配して居た三千の星共は、一つ又一つと姿を隱して、あるかなきかの遠山は、刻一刻深い眠りから覺め來り、遂にはゆるく腰を繞つた層雲まで、事ありげに色めき立つて、吹き渡る朝東風の合圖に、雀の群は今日も樂しき千代の壽を配り、家雞の羽叩勇ましく東天紅を知らせます。次の横町らしい豆腐ウイーの聲、家の前で止る牛乳配りの氣配、けたゝましい汽笛、犬の遠吠え、秒一秒音が混雜して來て、天地が賑かになり、かくて主婦は先づ起き出でゝ、家政二十四時は始ります。



▲起床

誠に御氣の毒ながら、一家の口を預つて居らるゝ主婦、主婦の代理を勝手元に務める孃樣方は、いくら眠くもいくら寒くも、いの一番に起き出でねばなりませぬ。そして、一日の課は朝にありと申しますから、勉めて樂しい活々した心を以

て起き出でねばなりませぬ。起き出でゝ先づすべきことは、

▲着衣

着物を着かへますことで、暗がりに馴れて瞳孔の擴がつて居る眼は、戸の隙から漏れ入る薄明時の僅かな光を集め得て、着換には差支ないにも關らず、しどけなき寢卷姿で、これ見よと言はぬばかり、樞の音高く名乘りながら、道行く人の目の前で雨戸を繰るなどは、あまりたしなみ深くも見えぬものですから、これは後廻しになさつて宜しうございませう。

着物は暑さ寒さを凌げばそれでよいと言ふのは、勿論極端な仙人論で、これと並んで、人品を保ち、禮儀を重んずるといふところも、重く考へねばなりませぬ。が、しかし人によつては、この後の方をあまり重く考へて、時と處と場合の區別を忘れるまでに見えるのは却て人品を下し、禮儀を亂るものと評さねばなりませぬ。朝の服裝に於いて、折々さういふ例を見受けます下女を使つて奥座敷に新聞でも見て居る金持の奥樣嬢樣なら知らず、勝手元に火吹竹と親み、井戸傍に手桶を吊すもの丶絹布ぐるみ、丸帶の前懸無しが、誰の目に上品に見えませうか。奥州あたりの夏のしの丶め、時雨降りそふ晩秋の朝の五時頃、凡て夜明時といふものは、昨日受けた太陽熱は夜の間に多くは放散して、今日の太陽熱はまだ來ないといふ、一日中で一番寒い時である、その特に寒い此等の場合に、時候外れと笑はれはせまいかといふつまらぬ懸念で、震へながら單衣一枚で朝風に八つ口を任せ、着たい綿入も我慢して袷で竈の前へ蹲る。いくら皮膚の彈力を養ふがよいからと言つて、こんな不自然のことをして、それがかよわい婦人の健康に障らずに居ませうや。病氣は原則としては、どこかに原因を有する一種の犯罪ではありますが、これは又好んで自ら罪惡を犯す次第で、其罰として來る風邪、咽喉カタル、肺病、レウマチス、痔子宮病、流産などは、いくらも見ることとです。

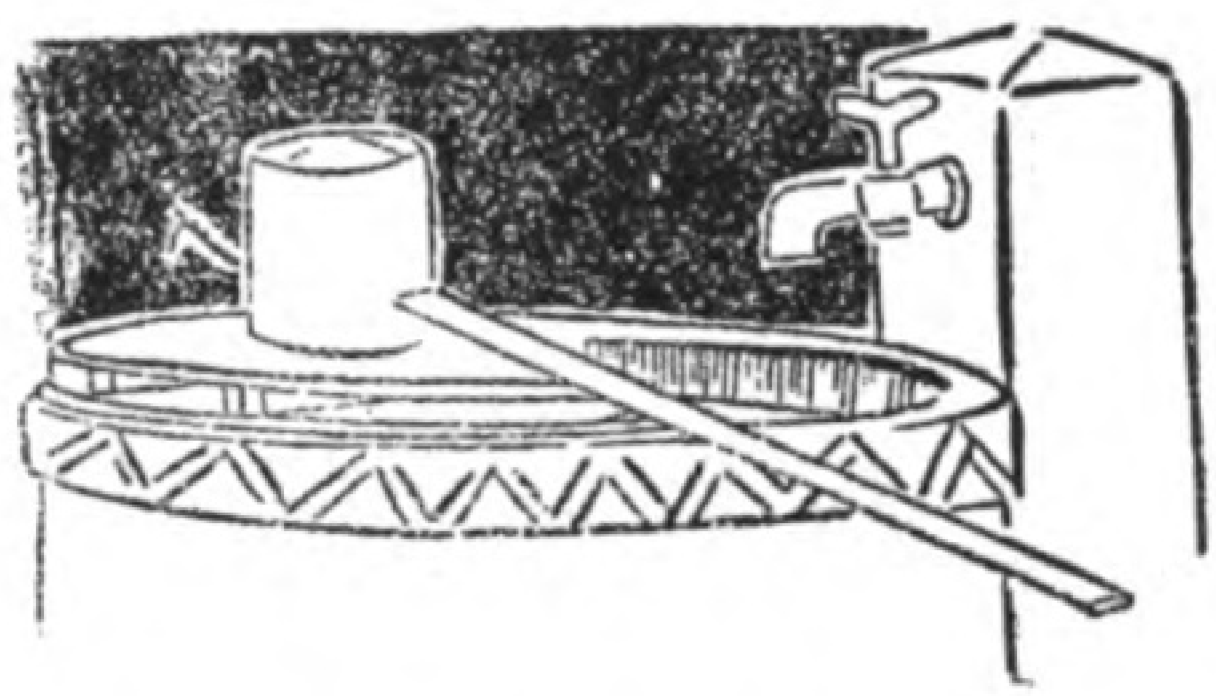
一般婦人方、特に夜明方の勝手元に働く婦人方には是非フランネルの半股引を御勸め致します。襦袢も出來る

ならば本フラ子ルが宜しい。上衣の絹をさつぱりした木綿物に代へて、其差を肌着のフラ子ルに御廻しになる御心懸けが一つありさへすれば、其家庭は誠に和樂圓滿、申分なきものと私は斷言出來ると存じます。

勝手元や洗濯・張りものなどの折に、東北の婦人の用ふる筒袖の「上張り」といふものは、一般に眞似すべきものと考へます、出來るならば、よごれのよく見える白で拵へたいものでございます。理髪人の着るやうな胸から裾までの前懸けも結構でございませう。今日諸方の女學校で筒袖細帶を用ひますが、少くとも仕事服としては、遙に今までの長袖廣帶に勝つて見えます。猶私は袷綿入の八つ口を塞ぎ、襦袢の袖口をシャツ仕立にしたいといふ考へを持つて居ります。袖口の方は大分やつて居らるゝ向も見かけますが、八つ口の方も是非一奮發欲しいものです。

終りに今一つ御婦人方の御考へを願ひたいのは、帶紐の締め括りです。ある醫者の如きは、日本婦人に子宮病、流産、胃腸病の多いのは、帶紐で腹を嚴しく締め括る爲だと言います。これは極端の論でせうが、其原因の一つには相違ない、西洋でも、婦人のコーセットをやかましく言ひますが中々止みませぬ。どこも同じことで、習慣といふものは、惡いと分つても容易には改らぬものですが、喜ぶべきことには、今日女學生の間には、袴を穿く新しい習慣が出來て、それがもはや製絲工女にまでも傳はるといふ勢で、袴を着ける結果は、自然今までの重い帶に代へて輕い帶を用ひ、其上袴の爲、着物の丈も今迄のやうにむづかしく考へる必要が無いところから、下紐や帶の締め方も、大分緩んでは參つたやうですが、

まだ一つ、お尻の大いのを隱さうといふつまらぬ考から、此締め括りを思ひ切つてやるものが少い。私はつまらぬ考からと申しました、全くつまらぬ、馬鹿げた、反自然の考からに相違ありませぬ。何故なら



ば、婦人のお尻の大いのはあれは婦人が人類として、男子以外に、極めて尊い、極めて重い天職を授けられて居る證據で、恰も男子が特別に頑丈な骨組や、太い音聲を授けられて居るやうなものですから、何もそれを恥に思つて、滿足に授かつた腰を無理に締め括り、好んで子宮や、胃腸や、肺を損ふには及ばない理ではありませぬか。西洋婦人のあの不具のやうな細腰をあなた方は決して美とは御覧なさいますまい。あなた方が西洋婦人の腰を非難するやうに、あなた方の腰を締め括るのを見て非難する男子の聲が高くなりつゝありますぞ。どうか毎朝起きて帯紐を締める毎に此事を考へ、段々に此愚な習慣を改めたいものです。朝は空腹で特に細くなつて居るその上を、痕の付く程締められて、御飯も滿足にまゐれませうか、御熟考を望みます。

着物を着ましたならば勝手元へ入るのですが、其前に夜具を跳ね返して置く、一寸とした手數を御忘れにならぬやう。これは夜具を空氣に曝して、綿の中に含まれて居る汗の濕ひを去る爲で、暖い夜具を其まゝ疊み込むことは、衛生上宜しくありませぬ。これに就いては又申上げるとして、先づ勝手へ急ぎます。

▲竈

勝手へ入りましたならば、何は兎もあれ、先づ御釜の下を焚き付けるが順でせう。御釜の下には、昨夜ちやーんと焚付けを入れ、其上に巧く薪を積んでありますから、マッチを擦つて火を點けさへすれば、あとはひとりで湯も沸き、御飯も煮えるやうに思へますが、さて實際は中々そんな譯には行かず、少からぬ工夫と手練を要することで、俚話にも「御釜の下が烟るやうでは婿には行けぬ」と言はれてある位のものですから、この事については、御參考までに、假に勝手元教科書と名を付けた、その一章を編んで御覧に入れませう。

▲火

(1) 火は勝手元の生命である、火の用は熱である。熱の本源は薪炭の燃燒である。

(2) 薪炭の燃ゆるのは、薪炭が空氣中の酸素といふガス

と結び付くからで、空氣の通はないところ、酸素ガスの無くなつたところでは燃えることは出來ぬ。消壺へ火を入れて蓋をすれば火が消えるのは其例である。

(3)しかしいくら空氣が通つても、薪や炭は只は燃え出さぬ。これを燃すには、熱をやつて、わる度に温めねばならぬ、薪は熱を貰へば先づ蒸されて崩れて、いろ〳〵の燃えるガスや、蒸氣や、細い炭粒になり、それが温められて酸素と結び付く、即ち燃える。炭はいくら崩れたくても、一種の炭素で崩れることは出來ぬ。適當の温度に熱せられゝば、たゞ酸素と結び付いて燃える。



(4)だから薪炭の燃えるには三つの物が要る。第一は燃ゆべき薪炭、第二は相手の空氣、第三は此二つを結び付ける媒の熱

(5)此三つの物は是非無ければならぬが、第三の熱は、一度媒人役を務めればもう入用は無い。一度燃え付けば其產物として、熱は續々出て來る。この出て來る熱が順に媒人になつて、段々次を燃して行く。かくて第一第二が甘く結び付けるやうになつて居る限りは燃え續く。

(6)薪が崩れてガス、蒸氣、細い炭粒の形になつて上つて行くのが燃えるから、火は焰になつて搖ぐ、其時若し急に此ガス蒸氣を煽いで追ひ拂へば、燃えるものが無くなるから火は消える。炭は居据りで燃えるから、いくら強く吹いても、煽いでも消えない。

(7)しかし炭が青い焰を放つて燒えることがある。あれは燃え盛つて來れば、そこに一種の燃ゆべきガスが出來て、それが焰になるのだ。炭が蒸氣になるからではない。

(8)針金を燒けば光る。凡て物が強い熱を貰へば火を出すといふのが規則だ。ランプや蠟燭の焰の上へ、冷い皿かなにか被せれば、油煙が着くだらう。燃えて居る薪が消えれば煙が出る。油煙や煙の大部分は細い炭の粒だ。焰の光はこれが本源だ。よく燃えるときは、これが逃げずに皆燃えてしまふから、いよ〳〵熱が出てます〳〵光るのだ。油煙や煙を逃すのは、熱や光を棄てるのと同じだといふ譯はこれで分るだらう。

(9)木炭を燃せば段々燃え盡きて、遂に僅かばかりの灰を殘す。灰は蒸氣やガスになれない、又燃えないものだから殘るので、其始め木が土から吸ひ取つた肥料の中に溶けて入つて來たものだ、其成分の主なものは、炭酸加里といふ洗濯曹達の兄弟分で、よく水に溶け洗濯曹達の代りをする。木灰汁と言つて皆がよく知つて居るもの。

(10)さて澤山の炭が僅かの灰になつてしまふのは、如何にも不思議のやうであるが、天地間の大規則として、あるものが無くなることは決して無い。只形を變へただけだ。目に見えぬ空氣のやうなガス類に變つたのだ其ガスの名は炭酸ガスといふ。自分も燃えず、他をも燃すことの出來ぬガスで、此ガスの澤山混つて居る空氣を久く吸つて居れば、段々元氣が無くなつて、頭痛がし、眩暈がし、甚しきは卒倒れてしまふ。それは其筈で、我々の生きて働いて居られるのは、我々の身體が薪のやうに、空氣中の酸素と結び付いて、燃えて、熱を出して行くからで、炭酸ガスの中では身體の薪が燃えぬから、體熱の源が塞がつて、元氣活動の流れが

絶えるのだ。勝手元は特に風入りをよくして置かねばならぬ譯はこれで分るだらう。

(11)炭の青火は、此炭酸ガスが炭と結び付いて、酸化炭素といふ燃えるガスを造る此ガスが燃えるのだ。此ガスは身體に毒だから、氣を付けて吸ひ込まぬやうにせねばならぬ。

(12)木を黒焼にすれば燃える色々のガスの外、色々の蒸氣が出る。此蒸氣を冷せば水や、木精、木醋などいふ、色々の物を集めることが出來る。薪の尻からジウ／＼黒い水が出ることがある。あの中にはこれ等様々のものを含んで居る。此等の蒸氣の中、木精なとは燃える。燃えて炭酸ガスと水になる。木醋などは燃えぬ。燃えずに立つて行つてしまふ。燃える色々のガスも燃えた後の産物は炭酸ガスと水蒸氣だ。

(13)さて以上は薪や炭の燃燒についての學理だ。これから御釜の下に此學理を當箝めて見やう。



(14)先づマッチを擦つて焚付けの下へ挿む。すると忽ち盛に燃え付く。盛に燃え付く筈だ。焚付けは大抵細いよく枯れた柴か、薄い枯れ

た鉋屑か、新聞紙の古か、炭俵か、杉や松の葉か、何かそんな物で、一般に廣く近く空氣と接して居る。枯れた柴や木屑は、木の理の中の水分が立つてしまつて其わとの孔へ空氣が入り込んで居る。炭俵の萱や、藁の洞の中にも、同樣空氣が入つて居る、新聞紙は木や草から造へるものだから極薄い板と同じこと、杉葉や松葉は細い柴と同じことだ。つまりもと〳〵結び付きたい山々の二人が、內外全く隔てなく交つて居るのだから、そこへ假令マッチ一本の媒人でも、持つて行かうものなら直ぐ結び付いて、燃えて、熱といふ活動の泉を溢らすのだ。

(15)ところが、何せ焚付けは體積張つては居ても、もと目方の少いものだ。目方が少ければ、燃えて出る熱の分量も少い。少い分量の熱が一度にパーッと出てしまふ。其上の薪を燃え付くまでの度に熱するには、いくらかの時間が要る。此時間だけ焚付けが燃え續けばよいが、さもなくば何の甲斐もない。そこで焚付けの分量といふことが大切の問題になつて來る。そこでお三どんの經驗といふものが光つて來る。

(16)さて薪だ。薪の端が焚付けで燃え出したとする。が薪は焚付けのやうに空氣と廣く近く接しては居らぬ。乾いた薪の理には空氣が入つて居る。しかし薪と結び付くに十分といふ譯には行かぬ。薪が堅木で理が細小い程益々然りで、木理を水分が占領して居る生木なら特に然りだ。だから薪を燃すには、新しい空氣を續々送り込まねばならぬ。そしてそこに出來る炭酸ガスや何かをドン〳〵追ひ拂はねばならぬ。そこでお三どんの手練といふものが光つて來る。

(17)そも〳〵ガスは、暖められゝば膨らんで輕くなり。輕くなれば上へ昇り、昇つた跡へは、周圍の冷い、濃い、重いガスが入つて來る。これが一般の規則で、空氣の運動、即ち風は皆此道理によつて起るものだ。

(18)竈の中で薪を燃す。するとそこに生ずる炭酸ガス、其近くにある空氣などは、膨らんで上へ昇る。上へ昇つて御釜の尻でつかへる。自分の來た跡へは外の空氣が來て、續いて昇つて來るガスは踵に接して居る。後

へは戻れず、上へは昇れず。推し合ひへし合ひ、辛く一方の血路を開いて逃れ出す。逃れ出す血路は竈口の上の方はか無い。そこを破つて出たガス隊は、ホッと一息つきも敢へず、四方へ散つて行く。

(19)竈口の下の方から跡へ入つて行く新しい空氣は、薪と接して暖められ、薪を燃して炭酸ガスなどになり、更に同じことを繰り返す。

(20)これだけのところでは、薪は差支なく引續いて燃えて行けるやうだが、さて困ることには、竈の中の古ガスは、自由に



外へ出られずに、込み合ひ壓し合つて居るが爲、此壓す力で、外から新しい空氣が存分に入つて來られない。特に薪を澤山詰め込んで燃さうとする場合、生木や堅木の太いのを燃さうとする場合に此困難が多い。

(21)若し竈に別に古ガスの出口を拵へて、新しい空氣の入口と分けたら、此困難は救はれるだらう。人込みに出口と入口を分けて混雜を避けるといふ、極簡單の工夫だ。

(22)ところが可笑しいでは無いか、日本の竈には此極簡

單の工夫がしてない。顏を煤だらけにし、眼を眞赤にしながら、朦々たる煙の中に蹲つて、火吹竹を唯一の武器に、苦戰を續くること一年三百六十五日。幾世紀の間てんな愚を續けて來たか、今後猶幾何世紀の間此の如き愚を續けやうとするか。見渡す限り民の竈は、軒一面の煙で賑つて居る。目や肺の衛生も構はない、容貌を損じても頓着しない、そして煙を棄てるのは實を棄てるのだといふ道理も顧みない。知つて居ても顧みない。それで竈改築に要する僅かの費用と手數を惜んで、子にも孫にも此野蠻的竈を讓らうと決心して居る。

(23)成程と合點したら、早速竈の後ろ上、家の外に、煙出しを作るべし、煙出しの太さ高さは、竈に應ずることであるが、あまり低いと火の子が吹き出す恐れがあるから、注意せねばならぬ。竈を二つ口にして、一方で火を焚き、其火が他の口へ廻つて、それから外の煙出しへ拔けるやうに作れば、他の口では火を焚かずとも、一緒に湯を沸すなり、汁を煑るなりすることが出來て、至極便利だ。

(24)炭火を用ふる改良竈といふものは此學理に叶つて居る。在來の焜爐七りんといふものも此學理に叶つて居る。西洋の暖爐や料理爐は無論申分なしに出來て居る理孔も何も無い石のやうな石炭でも、生木でも、無造作に投げ込んで、立派にドン〳〵燃える。少しも家中を燻煙にする心配も無ければ、薪の數を見計つだり古ガスが甘く拔けて新しい空氣が入るやう根を明けて抱き合せて積んで、其上を火吹竹で空氣を強く吹き入れてやる面倒も入らない。二十世紀の勝手元を預る婦人は、こんな非學理的の竈の前に坐るのは恥だといふことを考へねばならぬ。

(25)或は言ふものがある。成程煙は健康に害がある。煙を棄てるのは經濟上損だしかし、煙は消毒の効がある屋根裏には一尺もある煤が危げにブラ下つて居るやうな田舎家には蠶の違ひといふものは少い。新に建てた蠶室には、數倍注意して飼つても違蠶が多い。蠶病はかりでない。あの無頓着、不潔、不攝生、バクテリア

は何だか、傳染病と流行病とはとう違ふかさへも知らない程の田舍家で、若し自然の煙消毒を廢したならばそれこそどんな慘狀を見るかも知れない。竈や圍爐裏は非學理的に、相違ないが、一種の消毒機關と見たら其不利損失を償ふことが出來やうと。

(26)一理ある。煙はたしかに消毒の効がある。煙の中には一種ならず消毒藥を含んで居る。豚の肉や魚などを燻製にして腐敗せないのは全くこれが爲だ。しかし、かういふ論の決定は容易に出來ぬ。いよ〳〵傳染病が流行るとなると、勝手元の煙の來ない奥座敷に住んで居る人よりは、坐敷も勝手も區別の無い裏長屋に住んで居る人の方が餘計に斃れる。空氣の淸い、隣りの離れて居る田舍でも、傳播の勢は隨分都會に負けない。若し裏長屋や田舍で竈を改良したら、果して其上にどれ程の病勢を加へるであらうか、それは中々むづかしい問題だ。そんな分らぬ利益を以て、分り切つて居る利益に代へてよからうか。



顯微鏡デ見タル澱粉粒
実場ノ直徑ハ一分ノ百ヘ五粒以上千五粒ヲ並ベ得

(27)此位に止めて置いて、薪炭の燃えて生ずる熱の行衛を尋ねて見やう。そも〳〵熱の規則として、こゝに暖いものと冷いものと相對して居れば、熱は必ず暖い方から冷いものゝ方へ行く。太陽から地球へ熱の來るのも此規則、竈や火鉢の火が御釜の尻を暖めるのも此規則によるのだ。

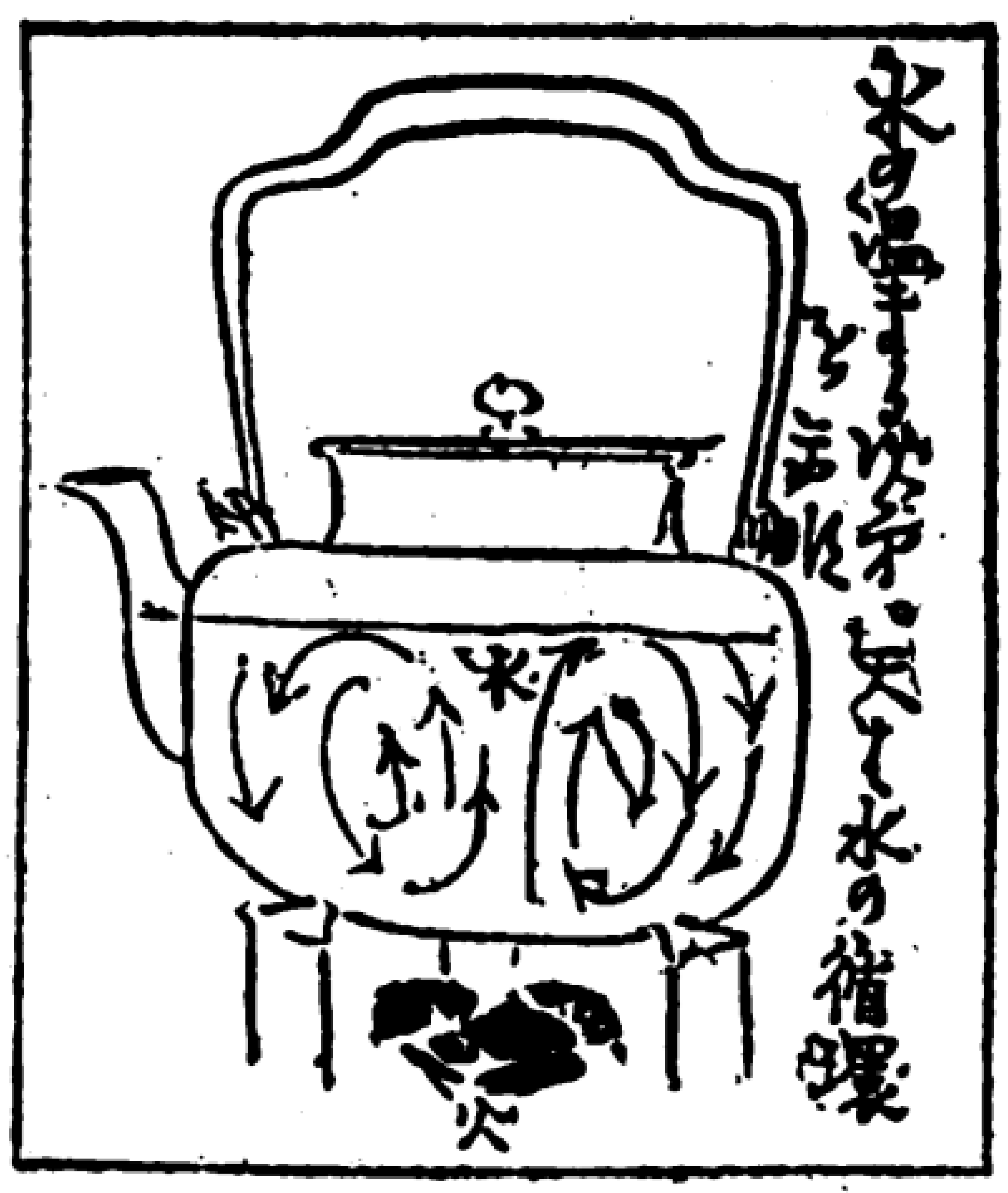
(28)御釜や鐵瓶など尻へ來る熱は、そこを暖めて、順に內部へ入つて行つて內部の水を暖める。暖められる水は膨らんで輕くなつて上へ昇り、昇つた跡へは周圍の水が入つて來る。火を焚き付けた後、中の水は絶えずこのぐる〳〵廻りをやつて居て、全體が段々暖まるのだ。御釜でも、鐵瓶でも、風呂でも、いつ

も上部から熱くなるのは此譯だ。

(29)水が段々暖まつて、つひに二百十二度(攝氏百度)といふ温度になれば、グラ〳〵煮え立つて、全體から蒸汽が出る。喩へて見れば、我々が何かに激されて極度になれば、一齊に起り立つやうのものだ。

(30)それから後は湯の温度は上らない。下から續々來る熱は、蒸汽が懐へ仕舞ひ込んで四方へ散つて行つてしまふ此仕舞ひ込んだ熱は、蒸汽が冷えて水に返るときは、滯なく懐から出して返納する。雨や雪の日に割合寒くないのは、此熱が氣候の冷えたのを調和するからだ。

(31)さて御釜の水が暖まる、其中に米粒は段々水を吸つて柔かになる。膨れる。つひに湯が煮え立つ。内部の澱粉粒は外の膜を破つて出る。米粒の膨らむ力に加へて、内部に浸み込んだ水の蒸汽になつて外へ出やうといふ力が膜を壓し破るのだ。



(32)穀物芋類などの澱粉粒は、皆それ〳〵異つて居る。形も違へば外膜の硬さも違ふ。薩摩薯や豆類の澱粉は膜が硬くて、煮ても容易に破れない。米の澱粉は膜が容易に破れる。内の澱粉は消化れよいが、外の膜は消化れ難い。通じの悪い時に薩摩薯や豆を食べれば通じのつくのは、澱粉が煮ても燒いでも破れにくい硬い膜を被つて居る爲、消化れずに其まゝ出て來るからだ。

(33)兎も角も、下で焚く火の熱で、御飯も煮えれば御湯も沸く。しかしこゝに注意すべきことは、かやうに實際有益に使はれた熱の分量は、薪や炭から出た熱の分量の何十分の一といふ僅かのものだといふことで、若し出る熱を殘らず使ふならば二升鍋一つの極冷い水は、十匁ばかりの木炭一片で煮立たせることが出來る勘定だが、實際は其何十倍か使はねば二升の水は沸かない。熱の此不經濟は全く前に言つた熱の規則から來ることで、誠に面白くない規則

のやうに思へるが、我々は又熱の此規則の御蔭で、火にもわたり、太陽の熱をも貰ひ、御釜の中の水をも沸し、米をも煮ることが出來るのだから、畢竟世の中の事は何れも天秤的で、其場合々々により、臂の傾がる方について、出來るだけこれを利用する工夫が必要だ

薪炭の價は即ち熱の價で、熱は此通り逃げ易いもの、從つて利用の餘地はらいくもあるのだから、熱の儉約活用といふことは、一家の主婦に取つては、極めて重大の問題でなければならぬ。

（以下續出）



季節總菜料理

附 手輕西洋料理



○白瓜のフライ

白瓜の良きものを撰び、皮を剝ぎ二十分はかりゆでたる後ち、水氣を能く拭ひ中實を取り去よき程の大さに薄く切り、よく溶かしたる鷄卵を塗りつけ、たる上に麵包の粉をふりかけ、牛酪又は豚のあぶらの沸騰せる中へ入れ三四度かへし、七八分間ほどこして取出し牡蠣ソースをかけて出すべし。

○鰕のフライ

いせ海老又は車ゑびの皮を剝き、肉を搗き碎きてさて麵包くず、細かに刻みたる芹、鷄卵などをよき程に加へ食鹽と胡椒の粉をも合せて右の品々と肉をよく混せ合せ大團子の如くまろめ、鍋にバタか豚のあぶらを沸騰たせて褐色になるまで揚げるべし。

○泥鰌汁

普通泥鰌汁の拵やうは先味噌をよき加減に擂り、水或は湯にてのばし煮るなり、又泥鰌は折々水をかへ、充分泥を吐せ置きたるを笊に揚げ、（若し死したるものあれば之を除くべし、殊に夏季の時杯は生たるもののみを遣ふべし）水を絶ちて丼様の器に移し、酒を少し入れ泥鰌を傷め（酒を入るゝ時は、擂鉢或は鍋に入て上より蓋を爲して後酒を入るべし、飛出の憂なし）或は鹽にて傷め、汁の煮立ちたる時は此泥鰌を入れ、猶よく煮て食するを通常の仕方とすれども玆に一種の妙法あり、其の仕方は泥鰌を前の如く充分泥を吐せたるを笊にあげ、水を絶ち別の器に移し、此に雞卵を割りよくかきたてゝ入るれば、其卵を呑みて弱ると きは汁に入れ煮るなり、さすれば泥鰌の腹中に卵入りて味甚だ佳なり。又たおろしにて傷むる時は佳香あり。

○クロッケ

馬鈴薯を湯煮して（尖りたる箸の容易く突き通るまで瀹るなり）皮を去り、擂鉢にてよく擂り水篩にて裏押漉をして牛酪を入れ、の形に拵へ、パン粉にてくろみ、フライ鍋に牛の製し油を入れ煮るなり、又牛肉豚肉を等分

にしてよく敲き潰し、鹽胡椒を少し入れ煮上げ之を裏漉の馬鈴薯に混淆して、右の形に拵らへ麵包、雞卵と砂糖を少し攪せたるものにてくるみ、前の如く煮るなり、之を肉入クロツケといふ、但し馬鈴薯を湯煮するとき葱、胡淑を入れ淪でるをよろしとす。

○黄瓜のサラット・

黄瓜の皮を剝き極く薄く切り之を皿に少量の食鹽を散布し、六七分間ばかり其儘おき後皿の片縁を高めて水を去り、之に適宜の胡椒とサラッド油小匕二三を掛け、黄瓜とよく和したる後、酢二三杯を注ぎ奇麗なる皿に入れ膳に供すべし、湯煮したる蝦及雞卵等を入れゝば尤美味なり。

○茄子の山掛

山茄子の皮を剝き小さく賽の目に切りて茹で夫より濃い煮出しにて煮込み醬油を少し落して、薄味を附けたる後皿に移して冷まし置き又山の芋を目の細い山葵おろしにて能くおろし开を擂鉢に入れ煮出しの冷めたるを割りて姫糊ほどに擂延し之へ醬油を少し落して味を附け更に又山葵をおろして醬油にて溶き前の茄子を和へて皿へ高く盛り其上より擂りたる山の芋を掛けるなり。

○茄子の刺身

中茄子の皮を剝きて二ツに割り縦に一分位づゝ刺身のやうに切重れて蒸籠に並べて蒸し又盛合せに蒟蒻を絹のやうに薄く剝ぎ水にて洗ふて能く茹でるなり次ぎに酢味噌は甘味噌を擂りて裏漉に掛けて其中へ砂糖を少し擂交ぜ一寸酢を落して姫糊位に延し更に裏漉に掛けて小皿に盛り前の盛合せの皿に添へて出すべし藥味は擂薑か、粉辛にても宜しく精進物としては一寸妙なり。

○茄子の鴫やき

茄子の核少なき大物の皮をむき輪切にして串にさし胡麻の油をつけて燒き、又味噌を甘加減にして干山椒の皮を擂りよせ右の茄子に塗りて燒き蓋物に入れ冷ぬ樣にして出すべし。

○卷するめ

するめの尾、頭を取りてざつと水洗ひして水氣を拭きとり、下の方より上へ卷くべし、但し俎板の上に置き板にて壓つけ卷くべし。さて紙につゝみ、糸にて硫く卷き結び水にてぬらしあつ灰へ入れ五六分間して取出し能く灰を拂ひ紙を取りて冷し小口より切り用ゆ又紙に包み湯煮にても用ゆ、又足を卷き込むは下等の品なり、いつれも取肴に用ゐてよし。

○胡瓜もみ

胡瓜の皮を剝きて二ツに割り錢にて中子を搔取りて能く洗ひ端より小打にして切りたる後鹽水にて洗ひ夫より又之を絞りて其中へ薑と紫蘇を切込みて交ぜ汁は味淋一合ならば五勺に煮詰めて酢を其嵩ほど入れ之へ醬油を節く割り此汁を前の絞りたる瓜へ半分ほど灑ぎて之を

絞り皿に盛りて膳に上す時残りの汁を漉ぎ其上へ花鰹を掛けるなり。

○鯵の塩焼

これは先づ蓼の葉を摘取り適宜に擂鉢へ入れて能く擂り、此中へ柔らかき御飯を少々入れて充分に擂潰し、酢を少しづゝ加へながら伸して程よき柔らかさの青酢に仕立て、これを小皿へ少々入れ、別の器に盛りたる鯵の塩焼へ添へてお客へ出すなり、尚右蓼酢の使ひ残りある時は、徳利又は空壜などへ入れコロップにて堅く栓を為し置かば、暑中と雖ども一週間以上保存し得らるべし。

○鯵の酢のもの

これは鰭の附きたる儘頭を切捨て三枚に卸し、腹の骨をば掬取りたる上両面に塩を振り置き、毛抜もて一々骨を抜捨て、それより塩を洗落して酢に漬込み、肉の色白く變りたる頃肩際より皮をめくりて奇麗に剝取り、よき程に切りて器へ盛り、別に大根を卸しこれを理の荒き布巾へ包みて目笊へ入れ、其上より水を掛けて充分に絞り、少々塩を加へたる酢の中に漬込み、それよりざつと絞り、浅草海苔の炙りたるを揉込みて能く交合せ、これをば右鯵の前に盛合せ甘酢を掛けて食膳に供するなり

○小鯵の煑つげ

小鯵のゼニゴとエラを取り腹鰭の上より庖丁を入れて腹を開き腸を出して其中を洗ひ鍋の中に數枚を敷き其上に鯵を並べ醤油に砂糖を少し入れ落蓋をして強火に掛け眼球の白くなるまで煑附るなり若し煑過ぎては首落ちるゆゑ宜しく注意すべし又細隠元の後先を剪取り濃き煑出しに味淋と醤油を少し割りて煑含め鯵の配合として皿に盛り新生薑を添へて差出すべし。

○鯵の金銀むし

鯵を三枚におろして小骨を抜き塩を振りて少しく程經たる後酒に浸し蒸籠に竹の皮を敷きて其上へ鯵を皮目を上に出して並べ蒸し茹で鶏卵を黄身と白身を二色に分け裏漉にして鯵の上に振掛け尚ほ一回蒸して釜より取出すべし△茄子の揚出し△茄子の皮を剝て五六分位に切り胡麻の油にて色の變るまで揚げ又醤油に鰹節を入れてザット煑立て之を毛水納に掛けて丼に漉し此汁を前の揚茄子に掛けおろし薑を添へて出すなり。

○海老素麵

海老の皮を剝き背腸を取り爼板の上に載せて庖丁の平にて叩き其を擂鉢に入れ塩を振掛けて能く擂り裏漉に掛けて之を漉し其の漉したる擂身を竹の皮又は洋紙にて包み其上を又美濃紙にて包み此紙へ穴を穿ち其を絞りて沸湯の中へ落せば糸の如く續くと妙なり汁は煑出し塩醤油の三ツの等分に割りて味を附け前の海老素麵に掛け之れに青く茹でたる隠元を添へて出すべし。

○稚鶏カレー

上肉のみを賽目に切り、球葱二三個、日本葱なれば白身ばかり三四本と林檎を薄く刻み鍋に牛酪を大匙に一杯入れて溶き其の中に右の品々を入れて能く煎りつけ又栗を四五個にと下して加へ、濟鍋に物し、好き肉汁を三合ばかり注ぎ入れ、四十分間文火にて煮たる後、カレー粉を大匙に一杯と温飩粉と牛酪七匁を加へ能く攪きまぜ、再び三十分間徐かに煮て小匙に一杯の食鹽とレモン汁を加へて飯と共に出すべし。

つけもの新世帯

◎印籠漬　全漬瓜の後先を切りて、中實を繰り抜き、其中へ穂蓼紫蘇の葉、若生姜、青唐辛等種々のものを押し込み、鹽甘加減にして、強押をかければ六七日で漬かる、之は瓜へ青唐辛の辛味など移つて至極風味がよい、輪切にした所宛然印籠に似てゐるから、かう名けたのでもありませう。胡瓜も亦斯様にして喰べます。

◎雷干瓜　全漬瓜の中實を抜きで、之を長く厚く剥き、一夜鹽押して翌日之を天日に干し付けば、丁度一節の繩のやうになる、酒か味淋かに浸して試みるに味頗るよい、又白瓜をかうすれば皮も軟かで一層上品です、之も誰やらが句に、「瓜むいて雷ぼしとするからに、かけたる時は稲妻のなり、」といつてある。

◎紫蘇漬　紫蘇の餘り實の入らぬのを取りて、之を一旦鹽水に洗ひて小虫など附着いてゐるのを去り、そしてから鹽漬にするのです。

◎胡蘿蔔味噌漬　胡蘿蔔の後先を切り、五六日風通りのよい所へ置き、甘鹽にしてつけろ、そして三四十日程經つて之を取り出し、一日よく天日に干して、今度は味噌をかへて漬けろ。又粕漬するには、鹽をからめにして漬けます。

◎渦巻漬　胡瓜の季の比、唐辛を澤山入れて、甘鹽に押をかけて漬け、水十分に上つた時分に、夫れを取り出し、二つに割り切らず竪に中實のある所まで庖刀目を入れ、そして、中實を取り去り、一日天日に乾して能くまた之を冷し、そして、片端より渦のやうに緊乎と巻きつけ、其縒りの戻らぬやうに笹の皮の片で帯し、糠五升に鹽一升を合せ、丁度澤庵漬のやうに漬け込み、強き押をかければ、やがて二週間も經て漬かろ、即ち糠を洗ひて結びを解き、小口切にすと、宛然渦のやうですから、かう名づけたので、味も辛く且つ甘くつて、至つて歯切れもよく上品なものであります。

◎捨小舟　白瓜を二つに割り、中實を能く浚ひとりて鹽を盛り、天日に干し付け、そして、其溶けた水を零さず、潤びるまでも干し上げて壺のやうな器に納め置くのです、冬季より春期へかけて味淋に浸し、珍客をもてなすには至つてよい。

◎糸瓜粕漬　糸瓜の花落ちて二寸位の所を取り、粕に食加減の鹽を混ぜたのに、押蓋を強乎としてつけるのですが、即ち糸瓜の鹽水上れば、屢々桶を傾けて之を零し、常に水氣のないやうに注意して蓄へればならぬ。又餘蒔胡瓜も斯様して漬けて置きます。

◎糠味噌漬(又酸醸漬)　これは何れの家も拵へております。大概人の知つてゐるものですけれど、又新らしくは急に出來ないもの丶やうに思つてゐる方も少くないから、今茲にちよつと記して置きませう。

で、これは先づ水五升に鹽五升を入れて鍋で煮かへし、一夜さまして置きて、そして漬樽へ移し、其中へ糠五升鹽一升を交ぜるで、新に拵へた當座は毎々手を入れて掻き廻し、そして陳い澤庵大根を四五本も糠のまゝ洗はないで入れ、又生大根や莖でも何でも、時の有り合ひのものを漬け込み、其度毎に少しづゝ鹽を入れて掻き廻はすのです。斯樣にして十日も經てば直くなれて陳い糠味噌と同樣になつて了ふ。又新しくてなれない内は、燗ざましの酒や、醤油のおり、酒の糟、味噌など、あるに任して入れゝば至極早くなれるのみならず、かやうにすれば物も廢らず、一擧兩得となるから、此邊にも注意せねばならぬ。

◎大根味噌漬　甘鹽で漬けた澤庵大根をよく洗つて水氣を布巾で拭ひ、そして二時間ばかり陰干にし、夫れからたまりがちな味噌に漬け、一年經つて又之を洗ひ、そして別の味噌に漬けて置けば、何年經つても其風味が變ることはありません。

一週間の献立

柳澤伯家の献立

女子新聞誌上に掲げられたる同家の献立中五月十四日より同廿七日までの分左の如し

◎五月十四日　△朝　かぶの汁　薩摩芋の煮付△晝　かき玉子の露、鳥、蓮根、こんにやく、いんげんの煮付△茶　ビスケット△夕　しらすと海苔の露、刺身、

◎十五日　△朝　千六本の汁、海苔△晝　惣菜料理△茶　そらまめの飯△夕　落し玉子の露、そぼろ、

◎十六日　△朝　あさりの汁、さや豌豆の煮付△晝　惣菜料理△茶　くづまんぢう、鹽せんべい△夕　鳥と菜の露、肴　酢付、

◎十七日　△朝　薩摩芋の汁、佃煮△晝　惣菜料理△茶　ちらしずし△夕　ちくわと菜の露、たゝき燒鳥、

◎十八日　△朝　しゞみの汁、いりゆば△晝　惣菜料理△茶　デセール、ドロップ△夕　ライスカレー、オムレツト、

◎十九日　△朝　若芽の汁、五分玉子△晝　惣菜料理△茶　赤飯△夕　ちらし玉子の露、鯛の鹽燒、

◎二十日　△朝　じやが芋の汁、なまりぶし△晝　鳥と菜の露、蒲鉾△茶　どらやき、鹽せんべい△夕　洋食、

◎廿一日　△朝　あさりの汁、いりゆば△晝　ライスカレー、海老のフライ、きうりもみ△茶　ビスケット△夕　鳥と菜の露、そぼろ、

◎廿二日　△朝　薩摩芋の汁、きざみするめ△晝　精進料理△茶　くず餅、かき餅△夕　はんぺんと菜の露、刺身、

◎廿三日　△朝　千六本の汁、たゝみいわし△晝　精進料理△茶　豆御飯△夕　卵と菜の露、牛肉のフライ、ぢやが芋、

◎廿四日　△朝　若芽汁、オムレツト△晝　精進料理△茶　ソーメン△夕　海老と菜の露、親子飯、きうりもみ、

◎廿五日　△朝　蕪汁、長芋の煮付、干物△晝　精進料理△茶　ちらしずし△夕　八杯豆腐、鯛の照燒露、つまみ菜のしたし、

◎廿六日　△朝　蜆の汁、いんげん豆煮付△晝　精進料理　△茶　そら豆腐蒸△夕　しらすと海苔のつゆ、鳥のたゝき燒　酢ばす、

◎廿七日　△朝　薩摩芋の汁　しらたけの煮付△晝　蛤のつゆ、蒲鉾△茶　カステーラ、コノハパン△夕　今風洋食、

西洋 少女の遊戯

巖谷小波

（上）戸外の部

其一　部屋借り遊び、

この遊戯場は餘り廣くなくつても可いが、平坦な庭の一部分で、周圍に樹があつて、眞中に空地があれば可いのである。遊手は各自に周圍にある樹を自分の家と定めて、そこに一人宛立つて居ると、鬼にわたつた者は眞中の空地に居て、誰でも適宜の人のところへ走つて行つて、『御免なさい！貸間が御在ますか、』と、尋ねるのである。問はれた者は『イヽエ、お隣へ行つて聞いて御覧なさい、』と答へるので、若しその時に、尋ねられた者が茫然して居て、自分の居る樹に隙間があつたなら、鬼はそこへ這入つて了つて、即ちその人の座敷を借りた事に成る。そこで今迄の家主が、今度は鬼に成るのである。

其二　鵞鳥取り

この遊戯をするのには、遊手が奇數でなければならない。即ち十一人とか十三人十五人と云ふやうな數で、一人が眞中に居て、他の者は手をつなぎ合ひ、圓く圈をつくつて『鵞鳥取り』即ち鬼の周圍を廣く廻りながら

『鵞鳥を取つたら泥棒よ、直ぐに返へせば、善い人よ』

と一齊に唱ひながら歩行くので、鵞鳥取りが合圖をすると、一同は立留つて、直ぐに連てゐた手をはどき、鬼と共に交つて、二人づゝ舞踏を初めるのである。そして遊手が奇數であるから、取り殘された一人が、今度は『鵞鳥取り』となるのである。これには成る丈はやく相手をこしらへて、踊り出す工夫をしないと、後も鬼に成らなければ成らない。

其三　猫と鼠

遊手の中から猫になる者と鼠になるものを定め、その餘は兩手を組みつらねて圈をつくり、その外側で猫が鼠を追ふのである。鼠になつた者は外側を逃げるので、捉りさうになれば圍の中に逃げて這入ることが出來る。この場合には、周圍の者が組んだ手を高くわげて、鼠を中に入れ、直ぐに手を下げて、猫の這入れぬ樣にするのである。猫が鼠を捉へて了へば、今度は又他の者が出て之に代るのである。

其四　鷹と牝雞

これは日本の「子を捉ろ〳〵」と同じ樣で、たゞその名が違つてゐるばかりで、鬼を鷹とし、親を牝雞とし、子を雛雞としてゐるのである。この遊戯では、親即ち牝雞になつたものは、始終鬼の擧動に注意してをつて、右からでも左からでも、鬼の來る方をよく防いて、子を捉られないやうにしなければ成らぬ、又子になつたものは、親の帶につかまつて、親の運動する方向に從つて動いて、列を離れないやうにするのであるが、それで子がみんな捉つて了つた所で、一番始めに捉つた者が、今度は鷹になるのである。

其五　鳥賣

一人が鳥屋になり、一人が客になり、他の者はみんな鳥になる。そこで鳥屋は客に知れないやうに、各自にいろいろな鳥の名をつけるので、例へば甲を雀、乙を鳩、丙を鶴と云ふやうに名をつけてをいて、それを鳥になつた者は、豫めよく覺えておくのだ。でその支度が出來ると、客はやつて來て、

『御免なさい！』

『何誰です？』

『鳥を一羽下さい！』

『何の鳥を上げます』

と問答をするので、こゝで客はその中にありさうな鳥の名を云ふ、



『それでは雁を下さい』

この場合に雁と名付けたるものが無ければ、鳥屋は、

『お生憎さま！』

と云ふので、客は又だん〳〵他の鳥の名を云ふのだが云はれた鳥があつた時には、鳥商は、

『御座います。』

『幾許です？』

（鳥屋）『一圓です。』

客『もつとおまけなさい！』

（鳥屋）『もう直段はひけません。』

など〻問答して、客はそれを買ふことになる。それから客は代を拂ふ眞似をすると、鳥屋はその鳥にむかつて、

『鳥や、お前は賓れたから飛んでお出で！そして、すぐ歸つてくるんですよ。』
と云ふのである。そこでその鳥は、かねて定めてある樹か、又は地に圈を畫いた『をか』としてあるところへ走つて行つて、再び以前の處へ歸つて來るのだが、その途中で客がこれを捉へるのである。若し捉へられなかつたら、また前から仕直すばかりだ。

其六　山羊〳〵油斷すな

この遊手は、二人づゝ列をつくつて、だん〳〵後にならぶのである。そこで一人は鬼に成つて、列の前に立ち、手をたゝきながら、
『一イ二ウ三イ、サア捉へるぞ』
と云ふのである。さうすると、一番後方の一對が、右左りに分れて走るので、そして夫が再び一所になれば、今度はその組が、一番前の列に立つのであるが、もし二人の中一人が捉まると、その者が今度鬼になつて、前の鬼ともう一人の者が、先頭の列に立つのである。

其七　袋廻し

遊手は互に密接して肩を列らべ、環をつくつて立つてゐるので、そして兩手は背の方にまはして、掌をひらいてゐるのである。そこで一人が袋を持つて
『後向いて見るな！
ブルンブ袋が廻る。』
と歌ひながら、靜にその外圍をまはつて行く。この「ブルンブ」袋と云ふのは、まづ「パッタリ」袋とでも云ふべきもので、手巾の四隅を結んだものでよい。それを鬼は歩行きながら、他の者に知れないやうに、或る一人の手に渡して自分はまだ持つてゐる樣な風をして、前の歌を唱いながら、すまして歩行いて行つて、いゝ加減なところへ行つた時分に、『サア渡した』とか『サアよろしい』とか合圖をすると、その袋を持つて居る者は、自分の右手に立つてゐる者の背中をたゝく。さうなるとその人は、直ぐに駈け出して、前に袋をわたした者を捉へるのである。但し右手に立つてゐる者は、自分の隣に袋が來てゐるのを知つても、鬼の合圖のないうちは、決して動いては成らないのであ

る。

其八　出會頭

この遊戯は二人宛手を組んで、庭の中を歩行くのである。しかし如何なことがあつても、後へは決して歸ることは出來ず、始終前へ〱と歩行いて行くのである。そこで他の一人の遊手は、右に曲つたり左に曲つたり、急いだり靜に歩行いたりしてその二人連の組に、眞直に出會ふ樣にする。しかし二人連の後方からは追付いて行くことが出來ないのである。もしこの時眞直に出會つたならその中の一人と腕を組んで組になり他の一人が鬼に成つてしまふのである。

其九　鬼遊び

仲間の一人が鬼になつて、庭の中に隱れてゐるの



だ。そこで他の者が一人または二人づゝ、一定の場所を歩行いてゐて、

『オヤ一時が鳴つた。まだ鬼は出ない。』

と云い、それからまた、

『オヤ二時が鳴つた。まだ鬼は出ない。』

とかう云ひながら、だん〱十二時まで云ふのだが、その十二時を云ふときに、鬼は隱れてゐるところから出て、他の者を追かける。それからは日本の『鬼ごつこ』の通りである。



家庭日記

滋賀　多喜龍子

七月六日晴天四時起床毎朝五時半頃なれど此頃貳番茶にて早きなり下女は茶を蒸し私は蠶に桑をやる弟妹皆々起來る皆其れ〳〵の業務をすまし朝飯なり弟妹等は七時登校す私は前日の洗物に糊附八時半又桑をやる今日は大工一人茶仕人一人桑畑の日雇都合三人の日雇なりなか〳〵いそがし十一時晝飯終り凡そ一時間計り休ゆゑ何か讀む物がなと思へど女學世界も來らず女學講義も未だ來らず淋しかりき茶を呑み一時頃より蠶のしりかゑをなす折しも大ぶん强き地しん起りぬ皆々驚く中にも突然の事ゆへ下女手に拭巾を持ながらくろ〳〵廻ながら表へ出たり其時の面白さ其れより私と下女藪見廻りに行今年はわずか貳千五百十一本より出ず去年の帳見れば五百本程劣れり歸りは草百合月見草などの花取歸りき夕景には出入の者より鯉と云ふ魚もらふ母上御氣に召たるか喜び給ふ七時夕飯終たり

夜は京都伯母樣への手紙書く九時半床に入る

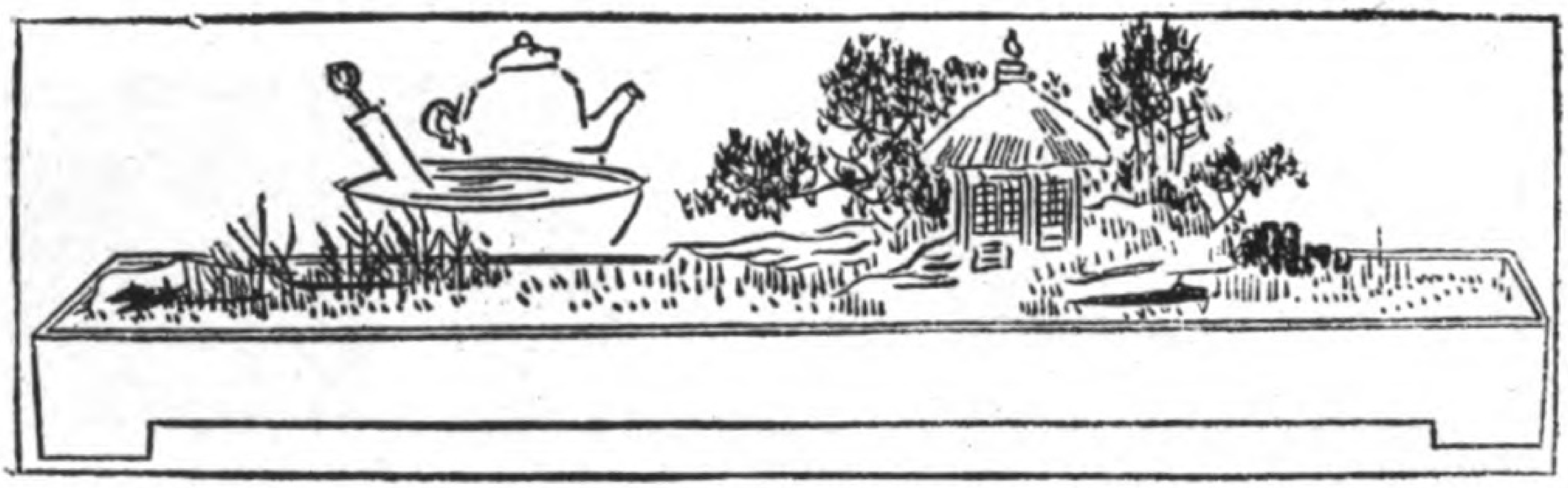
今日の出金昆布卷拾錢　下駄直し貳十六錢三厘也

七日　四時二十分茶仕人に起される前日の通り私は桑をやり下女は茶を蒸す今日は八時頃より雨降る昨日の晴天にゆだんし桑摘置ず其故下女を草苅にやる歸ればぬれ桑故こゝかしこに細引な□□□□を掛けかわくを待居れど今日は日雇一人なり八時過ぎ桑をやる十一時晝飯なり女學講義は來れり例の晝休みなり此間にとて女學講義を讀む國文にて工女のかぶみ讀み思はず淚出たり一時半一服茶を呑む折から表より歸り來る末の妹が姉さん今も昔かと問ふ何故と問返せば今男の人のかみ結たるを見たと答ふ皆々大笑なり

其れより蠶のシツカヱをなす蠶も入梅のあたりか貳三疋空頭病とやらにかゝる母上私等心配す午後七時夕飯なり終れば皆々集まる母上には今日は雨降にて氣くさくさするゆゑ一服よばれよかと仰給ふゆへ直ちに澁茶たてる弟義一は羽衣の謠を曰ふ妹は上尺工をならず中々にぎわしき今日の出金は茶仕立人に貳圓拂ふ此摘貸一圓三十八錢一厘入金は父上より小切手着す早速着狀出す弟妹皆床に入る折から待居し女學世界來り嘆しさいとも限りなし直ちに讀む三輪田先生の家庭と快樂種々面白き事限りなし下女親元へ歸る十一時過ぎ桑やり床に入る

博多　磯野いち

六日　鷄鳴一聲夢やぶられてへふと目さむれば室内うすぐらくまだ鳩も雀も目さめぬ頃なりいざや心地よきあさつゆをふまむと庭に下り立唱歌どれうたひつゝ虫の音をふむ事しばし內に入ればまだつれもろいも前後不知に夢路をたどれりされと朝餉の用意もあれば鼻つまみやりて起しぬ



我は座敷其他の掃除す
けふは兄上の誕生なれば晝餉は赤飯にせよと母ののたまへば早速小豆買ふ其間に野菜やも來れは茄子筍を買ふ合計三十錢支出すかれておむかへの兄上より姫樣のまゝごとゝあざけられし我手料理もやゝ熟練したればけふこそはおよび申してと一生懸命皿もりはきのふ鹽せし鯛の切身にて間に合す時をつくる掛時計いざ御馳走といやに氣取りてへ差出せはおつゆ甘すぎるとて又も御小言頂戴午後は縫かけの單縫終る五時頃夕餉の支度もあれは少し早けれど立つ此度はつれにもよく問合せて加減したれはおもひの外高評を博す夜に入りて女學世界新聞等を見る
七日　鳩も雀もつれもろいも起きたる頃目さめ驚きあわくゝ床を出つ朝の間は例によりて例の如く掃除す競爭せし肴屋の一人早くよりかつぎ込む進物用の大鯛贈用の中鯛各一尾代金六十八錢を支拂ふ
けふはなにかよき料理をと女學世界の割烹部をひろげさけ甘鯛茄子の山かけ等を實習すめづらしき煮方よなど母のほめ給ふ我も其時は眞にうれしくてうれしくて
夕方ゆあみどもすまして最愛の皙夫と近あたり散歩す無邪氣なる口とがらして正直翁さん灰まけば花が咲たかかれ枝にとうたひつゝうきを忘れし此夕あゝ樂しかりしよ

信濃なみ子

七月六日　母上の起き給ひし音に驚き臥床を出でしは五時空よく晴れ渡りいと心地よし降りみふらずみ定めなき今日このごろ斯る日ごそむなしうすべからずと洗濯糊付などに立ち働く九時過ぐる頃琴の稽古に行き三面の合奏をなし打興じて歸れど弟より小包來りしと直に披き見るに食道樂春之卷にてありき早速無事着の禮狀を認めていだす折ふし郵便〳〵のこゑ聞こゑ親しき友よりの玉章とる手もおそしと讀みあぐれば十日には歸國し給ふとの事久々にて積もる物語りせむとうれしさのあまり思はず聲を出して笑はれぬ
夕方に至り大路を賑かし通るは生繭の運送にて掛聲さへ勇ましく聞こゆ夜は兄弟折寄り女學世界の口繪など見れば妹は少女界を持ち出しいろ〳〵話の面白さにふけるうち小さき弟は晝の勞れかはやいれむりをはじめしが其餘念なき有樣忽ちにして全く眠れり
七日　今朝は母上に後れじと疾く起き出で空を伺へば一面に曇り涼しき風は何となく濕氣を含みて雨もよひあり例の如く琴の稽古を終へ歸る頃雨はぼつ〳〵ふり出し次第に大ふりとなる母上の膝近く裁を縫ちにいそしむ折しも伯母上より手紙來りさすがは都の事とて此頃瓦斯の竈をすゑつけしに經濟にして且甚だ便利なる由臺所の改良實にうらやましきことなり
午後小作人來り近頃の如く雨天がちにては田植もいと困難なりと語りしが農夫の勞苦察するにあまりあり



社交

貴婦人の嗜好

中村鈴子

鍋島侯爵夫人

溜池の畔を通る毎に、城のやうな大厦を對岸に見上げますのは、舊佐賀藩主鍋島侯爵の御邸でありますが、初めて參上致した時は、何の玄關から案内を乞ふて宜しいかと車夫諸共迷ひました、今度は二度目だけに迷ひませず、前に教えられた玄關へ參り白髪の朴直げな玄關番に名刺を出しますと、暫くして御家來出で來て導かれたのです、溪間の白猿、藤花に小犬を畫き分けた黒縁の幅の廣い衝立を据えた内玄關から幾室かを通つて、椽側なる應接室へ着きましたが御家來はチヨツト奥へ參つて出で來り、疊數十を横に連ね敷いた長廊下を歩み、鏡のやうな板の間へ出ました時、更に他の御家來案内を續ぎ、上草履を與へられて階三つを下り數十歩にして又十階程下り、迂折して奥の應接室に入り、金色燦爛たる置時計、陶製の人物及び動物を列べた竹製書棚を前にして椅子に掛け、恍惚して居ました處へ、直向手の入口より出で來られし夫人は、葡萄鼠の絹縮の單衣に、白茶滑珍の幅廣き丸帶、白縮緬の帶揚に藤鼠の帶止を締められ、薄鼠無地縮緬の襦袢の襟に、純金蜻蛉形の襟留を程好くなされ、前髪も鬢たぼもフツクリした小さい束髪に結ばれ、水の垂るやうな黒髪は長い三日月形の眉や豊かに艶々したお顔と配合好く見受け上げました、一應の挨拶濟みて――、

▲旅行

旅行は直大も好きで御坐いますから、大磯、日光の別荘の外に、折々は鎌倉や逗子邊に遊びに出掛けます、ハイ海は大好で以前は海水へも入りました、併し近年ばトント入りません、夏は大抵日光と定めて御坐います、旅行先では子供も私も歩く事に致し、榛名、妙義なぞへも歩いて上り下り致しました、辛いながらも……エ、下駄で上りました、

▲舟

舟は好きで船暈したとは御坐いません、却て滊車より滊船の方が好い位です、一つは洋行の當時印度洋などを渡つて慣れた故でせう、

▲和歌

和歌は下手の横好で始終致して居ります、イヽエ楽みですか、苦しみですか、判りません、

何時か何處かの御庭で大勢寫眞なされし中に、丸髷姿の夫人を拜見致した事を申上げければ、

彼れは確か松下太郎左衛門さんの御催しで、濱町の常磐屋の庭で佐々木信綱さんなぞと一處に寫したのでせう和歌の好きな者を御招なすつたので……、

此時ドーアを外からコッ／＼敲く者あつて茶菓を持つて來ました、夫人は立つて西側の窓を開けられました、



鍋島侯爵夫人

▲新聞と小説

新聞は毎朝御飯前に讀むとに定めて置きます、最早色々何でも、〇〇や〇〇のやうな悪口新聞も見て居ります、併し小供には小新聞は見せません、時々妙な記事がありまして、不都合ですから……、朝晩子供達の學課の復習を見て遣りまして、夜分は八時半まで致させ

それから自分で書見を致します、小説は別荘へ參つて
る內などは隨分讀む事があります、

▲髮

女中共は仕方が御坐いませんが、私を始め娘達も髮結の手にかゝらぬ事に致して御坐いまして、束髮は始終自分で結びますし、參り先の都合で丸髷に結ひます時は女中に致させます、娘共も皆人手を借りません、梨本宮樣へ上げましたのは、伊太利で持ちました娘で御坐いますが、丸髷でも獨りでお結ひになります……ハイ皆さんが珍らしいと仰しやいますよ、

▲服　裝

年を取つて居りますのに、一體搆ひません方で、洋服も流行を氣にも致しませんが、唯だ外國人と交際する場合に餘り廢つたのでは日本の耻辱と存じてチエ、帽子は今餘り大きいのは流行ません樣で、私など年寄ですから尙更大きいのは被りません、和服は何が好きッて矢張時と場合ですから一定しません、娘達で御坐いますか、これは學校の規則で皆綿服で御坐います、卒業式や其他儀式の時は、失禮と存じて紬か銘仙位着せて遣します、

夫人は年寄々々と仰しやるけれとも、記者には四十一二と見受けられました、

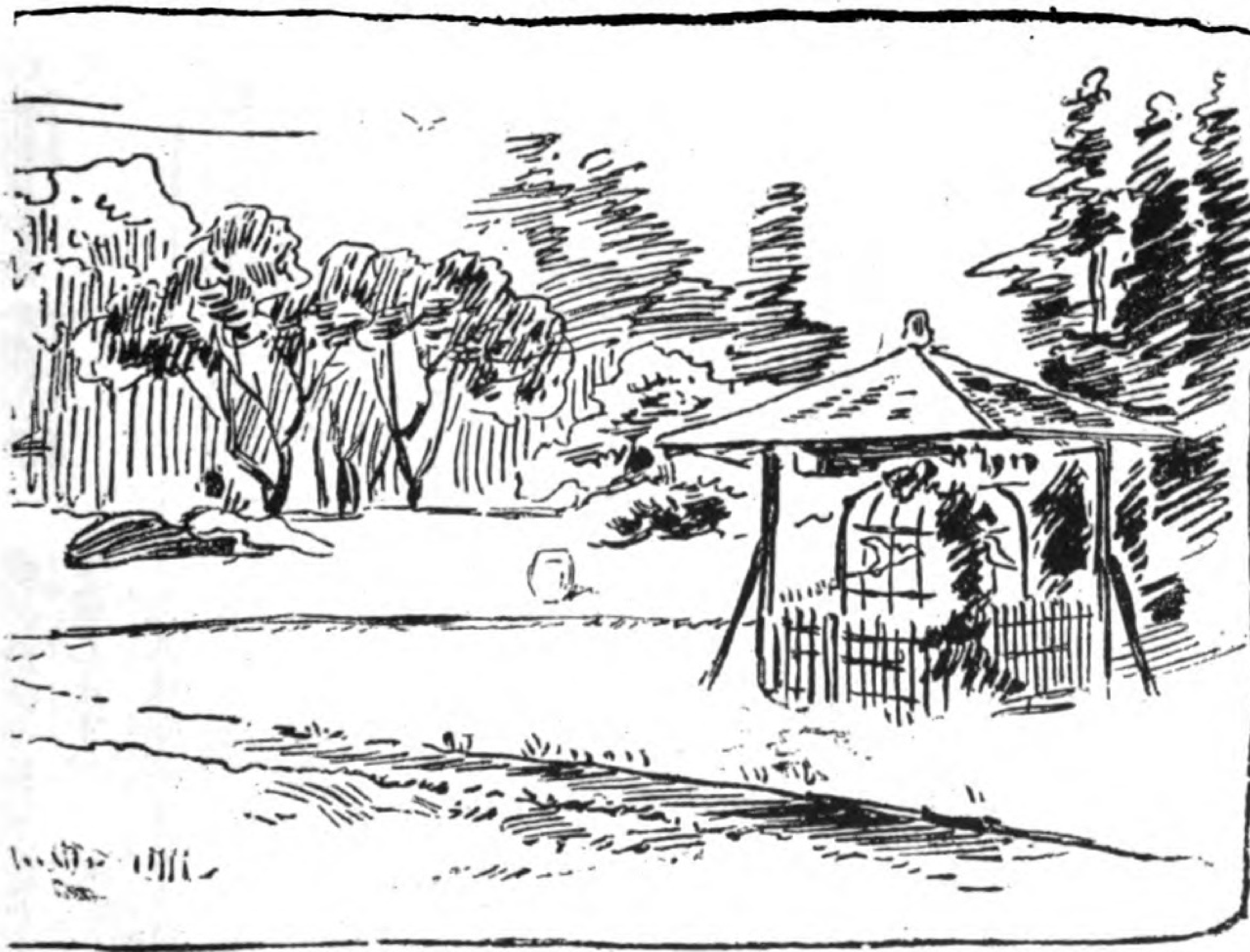
▲裁　縫

娘達には早くから各自の衣服袴まで一切仕立させますので、又如何いふ處へ參るやら判りませんから、成るべく自分で始末するやうに敎えて居ります、私ですか其裁縫が大好で良人のや自分のや娘共の積り物まで、時々他家のチヤン〳〵などを縫つて遣つたりして何より樂みなので御坐います、ハイ細工物なども好きで、

▲勸工場入り

衣服小間物類は定つた時に取りますが、偶に慰みに勸工場など出掛けるのです、ハイ地內(芝公園)のや新橋の千歲(博品館)などへ……それも一つは子供の爲で御坐いまして、私處の子供は學校で算術が一番下手で毎度々々先生に叱られます、これは全く價を知らないから迂濶なのでせうと思ひます、それで勘定を覺えさ

せる爲に連れて參り、鉛筆だの護謨、紙其他種々コマ〳〵した品を自分で撰ませて家令に買はせ、歸つてから子供に代價を一々計算させて漸々算術の智識を養ふやうに致して居ります、一體士族平民の子供は算術が上手で御坐いますが、我々の子供は一錢は如何な物だか、五錢は何だか知りません、其筈ですよ、必要な物は家令からチャンと調へて差出しますから、勘定する事がありません、それですから一月に一二度位づゝ勸工場の買物で、これは一錢ですよ十錢ですよと一々正札と品物を照らし合させて價を覺えるやうに稽古させます、我々の仲間はドチラでも同じだらうと思ひますよ、種々又妙な物を欲しがりまして子ェ子供達の學校用品が他のお子さんと違つて居ると、彼樣のが欲しいと申しまして鞄などでも態々粗い品を家令に買はせるのです、



鍋島侯爵庭

▲音樂

私は元は生田を致しましたが、此頃はトント止めまして雅樂の琴を主に致し、鍋島が琵琶を致すものですから、好く合せます、彼の牛込の雅樂講習所へ稽古に參りますが怠り勝で……雅樂は極古い物で上古唐土に行はれて日本に傳はり、昔は上主上より公卿までなすつたのですが、維新以

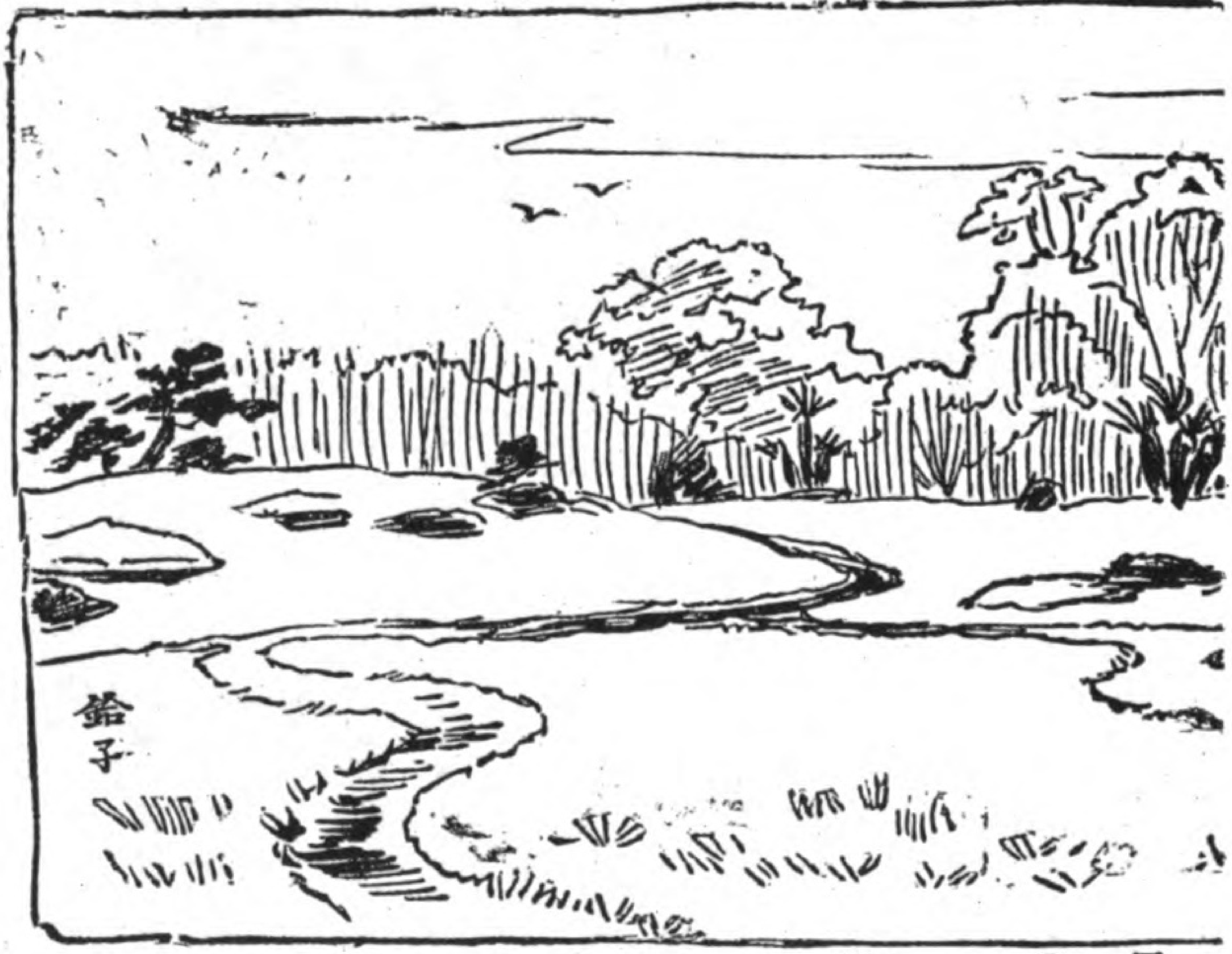
後は華族の間に殘つて居るのです、琴の形は普通のと少しも異りませんので唯だ爪が違ひます、左様々々此間の番組がありました、御覧に入れませう、

夫人は、ツと室外へ出でられ、暫くして錦の爪袋と半紙に認められし番組とを持ち來られました、

可笑しな爪でしやう、これでナカ〜〜強い音が出ますよ、



許を取ると此通り此處が金になるのです、爪の形は圖の通り爪先が小さい竹で、指へ



圖の一部

嵌める處が張子の様な物でありました、

樂器は御承知の通り、笙、篳篥、笛、箏、琵琶、太鼓、羯鼓で、調子は種々あります平調、一越、雙調と云ふやうに却々面倒な物です、先月十六日午後二時から、芝離宮に於て　皇后陛下の御前に御催しになつた番組がこれです、

▲雙調

音取
席田二段拍子
鳥破一返
鳥急殘樂
羅陵王一返
武德集二返

鍋島直大侯
久我建通侯
大原重朝伯
東儀季熙君
鍋島侯爵夫人
東世禧伯
綾小路有眞子
鍋島直人侯
園池公靜子
西園寺公望侯
室町公大伯

音取と云ふのが大切で、總ての調子を取つて行くので

す、西園寺さんは琵琶の家で御坐います、先頃参つた支那の學者に雅樂を聽かせましたら大層喜んださうです、

▲俗曲

以前女中に長唄の出來る者が居りまして、娘共に運動の爲に習はせましたが、それが亡なつてからは、態々黒人を聘んでまで習はせるにも及ばないと存じて止めて了ひました、私ですか、好で元は自分でも致しました、此節も女客の時はお愛想によく杵屋六左衛門を聘びます、ハイ下方も入れまして、相の手なぞは實に面白う御坐いますネエ、義太夫も好きで、大磯では土地の太夫……男でも女でも聘んで聽きますが、樂しみなもので……、

▲演劇

芝居は子供が御坐いますから餘り参りません、慈善芝居位で……、ソリヤ在來の芝居の方が好う御坐いますとも、川上の江戸城明渡なんぞ衣裳は粗いし、御老人に伺つたら『實際彼様な着付ッてありません』と仰しやいましたよ、それにモウ悪い場所で見せられて閉口しました、大山さんなんぞ實に御氣の毒の様な處で御覧でした、

▲茶の湯、活花

花は池の坊、御茶は宗遍に習ひました、子供は皆松浦の方で稽古中です、

▲動植物

植物は何でも好きで、花が咲くと随分遠くまで見に参ります、ハイ小金井へも、牡丹は金澤の泥龜へよく船で参ります、彼處は百姓家ですが、泥龜の牡丹と申しては有名なもので、東京に彼様な好いのは御坐いません、動物は餘り好きませぬ、直大が少し小鳥を飼ひますが、却々世話なもので、それに何ですか可哀相で厭で御坐いますよ、併し動物園には参ります、これも子供等の爲と存じて……、其他植物園でも展覧會でも子供を連れて能く出掛けます、成るだけ様々の物を實地に見せて置かなければならぬと存じまして、

▲書畫

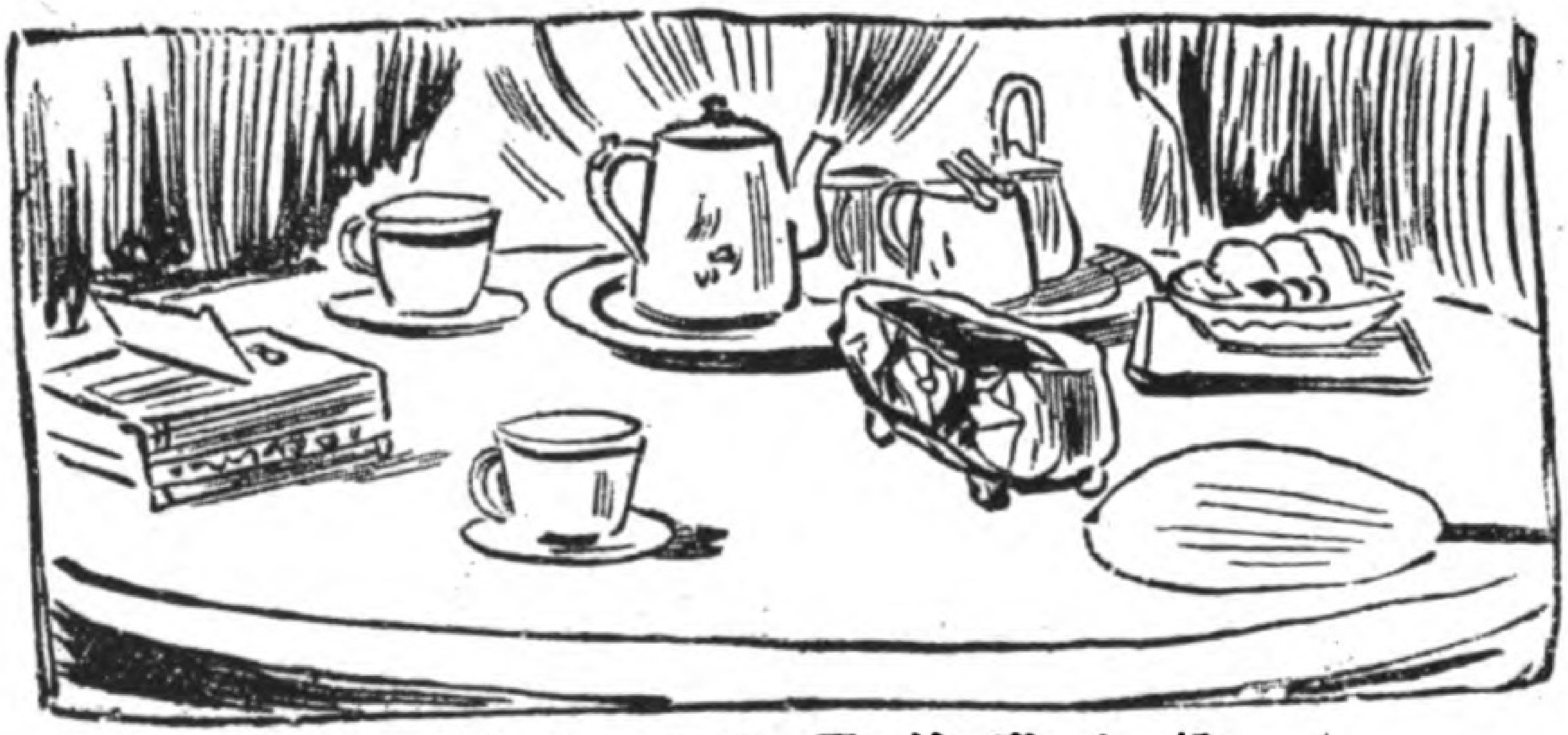
書畫は主なる趣味とせらるゝ由にて、此室に掛けられた伊太利の人物水彩畫二枚は、嘗て明治美術會の參考品として出されたると記者の記憶に殘つて居ります、記者は出でゝ前庭の一部分を寫生致さうとする時、夫人は手づから椅子を持ち來られ與へられました、寫し了つて元の室へ戻りました時夫人は珈琲へ牛乳をついで居られました、又もドーアをコツ〳〵敲くは、御家來が名刺を差出して一客の來訪を報じたので、記者は長坐を詫びましたが、

ナアニ何時も御出の御方で、アチラにイクラも御相手が居りますから……、

と夫人は尙も留められました、

▲食物、煙草

一週に一度洋食の時、子供に食方行儀を敎えます、私は何でも食べるとは食べますが、ソリヤ日本料理の方が好う御坐いますとも、果物類は特に林檎蜜柑などが大好でよ、煙草は喫みます近頃アチラから歸つた方に聞くと、今は西洋では何處でも婦人が吸ふさうで、公の席では飲みませぬが、部屋の中では烟草を人の前で遠慮するのは二三年前の昔し者と言つてドシ〳〵喫んで居るさうです、但英國人だけは別です、日本へ來て居る外國婦人が會話する際に、貴方上りますかと聞て勸めるのですが、彼の太い葉卷ではありませんよ、細い紙卷のです煙草も氣の結ぼれた時チヨット吸ふと新しい考が出ますネ、



婦人應接間のテーブル

▲佛蘭西語

私は佛蘭西の方で、モード、イリストリと云ふ週刊の繪入新聞を見て居ります他に倫敦の新聞も取りますから、アチラの事情は大抵知れます、近來各國の方々の御交際向に

は佛蘭西語が通り言葉になつて居りまして、宮中で御客を致す時に皆佛蘭西語なのです、

▲威嚴と愛嬌

夫人は笑はるゝ時に揃ふた細かい白歯を僅かに現はして深い愛嬌を漏らされ、談話を熱心に聴かれてヂーッと對手の顔を見つめらるゝは凛とした威嚴を有たるゝのです、記者は毛利公爵母堂へ御紹介を願つた序に、「女學世界」に出て居る高輪御殿で舞はれた話の事實如何を伺ひましたが、

ウツ〳〵〳〵、そりや嘘ですよ、と夫人は笑ひながら手にせられたる水團扇を遽しく打ち揮られました。

大山侯爵夫人

寄楓の間に観世音の濡佛を安置したるを右手に一曲して、玄關の石階六七を登り、小倉の袴を着けた書生さんに導かれ、二階の應接室へ入つて、白地に薄草色で秋草を染め出したメリンス友禪の坐蒲團を敷ける藤椅子に掛けました途端に夫人は入り來られ、丁寧に挨拶ありて長椅子に腰を下ろされました、夫人は記者の請を聞かれ『ホヽヽヽイーエ私なんぞ』と謙遜され、チヨット無言で居られました、此瞬間に夫人の御服装を窺ひますと、綾セルの單衣に黒の紋縮緬の羽織、白茶の平打の紐を下り目に結ばれ、無地の鼠縮緬の繻絆の襟は、天成の麗質を一際引き立たせて、厚く黒い前髪をバサリと額に切り下げ、油氣の少ない束髪にバラフの幅廣い釵を眞中に挿され、スラリと高き背格好、洋装は嘸かしと思はず見上げて居りました、以前の書生さんが來て日本茶と干菓子をテーブルに列べて立ち去つた後、『成程皆さん各々異つた御趣味があつて、面白い事で御坐いましやうネエ』と御口を開かれました、

▲旅行

私なぞは近頃斯様な田舎(千駄ヶ谷村穏田)に引込んで、何方へも參るのがオツクウになりました、旅行は夏冬に必ず致しますが、別莊へ參りつけてから旅籠屋

は窮窟です、それゆゑ他へは餘り參りません、冬は暖かいので沼津、夏は那須へ、大抵一ヶ月間位宛參るのですが、間にも時々出掛けます、沼津は我入道の先の處で、海が宛然庭の泉水になつて居る位ですから、浪の立つ時は椽の障子へ潮が打つかりますよ、大山は以前よく香貫山へ獵に上りましたが、此頃は獲物が無いつて止めました、左様で御坐いますネエ、ドチラも好い處ですが、子供達は沼津の方が遊び事があるので喜びますし、私は那須の方が好です、何にも無い土地ですが、年々開墾が進んで行くのを見るのが樂みなので御坐います、

▲書見

日本の物はホンの毎朝澤山の新聞をザッと見る位で、西洋の雜誌や書物ばかり見て居ります、書見はモウ何よりの樂みで、終日でも飽きませんが、餘り耽ると家の用事が出來ませんし、折角面白い處を下女が度々アレは如何致しましやうなど、聞きに來るとトント興が醒めますから、近頃は夜分だけと定めました、子供も私に似て、本好きで〳〵、陰氣にばかりなりますから、イクラ本を讀むなと申しましても、お母様も御覽なさるではありませんかと申し、暇さへあれば讀みたがつて困ります。新聞は西洋から取寄せますと大變後れて役に立ちませんので、主に雜誌や小說類を見ます後から〳〵種々出來まして何と云つて定められません……亞米利加の友人が世話をして送りますから、コチラで注文しないでも、今度斯う云ふ雜誌が出たと云つては送つて呉れますので、大きに都合が宜しう御坐います、先ハーパー、プロザースやセンチユリー、スクリツプなんぞ三十年以來續いた好い雜誌です、子供の雜誌はセント、ニコラスなぞで、子供は未だ英語の力が足りませんから、子供雜誌でなけりや解りません、昔の小說も好んで見ますが、先ア實地に據つた種類の物が宜う御坐います、亞米利加贔負の故か雜誌は米國が一番だと存じます。

▲同窓會

昨年の六月紐育の大學から同窓生卒業二十年目の同

窓會をするから、是非來いと申して參りましたけれど今は子供や家の世話で却々參る次第に行きません、で今年の三月に會の報告雜誌が出來て送つて與れました夫人は立つてドーアを開け、次の室から右の雜誌を持つて來られて、見せられましたが、四六倍版大で、ワットマン樣の紙へ印刷された結搆の品で、中には二十年以前の同級生が獨身者も一家の主婦も良人小兒諸共なるも交互排列せる寫眞版を始め、出席せざる夫人連の送りし子女の寫眞版數枚を挿み、各人より手紙或は卒業後の經歷及び子供の生年月に至るまで巨細漏さず、夫人より送られし二男一女の寫眞版も鮮かに載せてありました、



書齋に於ける大山夫人

若し生れ變つたら亞米利加に生れたい、と言つては子供に笑はれます位で、實に愉快な國だと思ひます、殊に婦人には幸福な土地ですチエ、

▲禮式

西洋室ばかりで

すと、娘共が日本風の禮式に慣れないで困りますから下には日本室も拵えて御坐います、外國人の所へ參ると、日本人は内股で斯樣な（此時足先の寄合ふ手眞似をされ）歩き方で可ないと笑はれますし、日本風の家へ參りますと、小股で腰を屈めねばならないと云ふ具合で、今は實に面倒な次第です子エ束髮の結方でも、娘共は呼吸を呑込んで、日本人の家へは油を澤山つけて結んで行きますが、西洋人の家へは成るだけ油氣なしに致して行きます、後れ毛は西洋人も氣にしまして、ホントウの毛髮を編んだのを生へ際に被せて小さい〳〵ヘイヤピンで留めますから少しも知れません、コチラのやうに毛色が一定して居ませんから、鳶色金色褐色各々自分の毛と出合つた色の毛



人

を注文して買ひます、却々頭や衣服には注意した者で、流行は勿論わりますが主に顔と髮の毛の釣合で反對色で引立たせる樣に作ります、

▲美人の標準

も日本のやうに定りません、鼻だけは希臘鼻を貴びますが、あとは目の瞳の色と髮の毛の釣合一つです、

▲衣　服

最早日本服ばかりで、矢張り見繕から夏冬洗張の差圖裁物、枕や蒲團の襟の汚れを一週間目に洗はせる世話や、何や彼や毎日左樣な事で日を暮すのです、如何しても自分で鋏を持たなければ、人が動きませんから子エ、洋服は實際費が多う御坐いますよ、それも流行を

袴はなければですが、唯さへ着て格好の悪い日本人が崩つた服を着けては外國人の前へ出て見られやしません、袴も穿いて見ましたが、子供がお母樣何だか變でずお止なさいつて厭がりました、われも宮女の緋の袴なら結構ですけれど……、併し一つは見慣れない故で一般に用ゐる樣になつたら好くなるでせう、……何處と定りませんが、三井か高島屋です、先達て濱の野澤へ買物に寄りましたら、西洋行の着物が澤山拵えてありまして、毎日平均一枚づゝは乾度賣れると言ひました、御承知か知りませんが妙なものですチエ、地は大抵淺黄繻子か桃色繻子で、金絲など入つた刺繍がしてありまして、フキは一寸位共色甲斐絹を用つてあります、袖はとめた三尺の振袖で揚卷に結んだ總が袂の先に下つて居ります、總丈は四尺西洋婦人にはついッたけださうです、腰の邊七八寸の間へ三角形のまちを入れて其上に帯を付けて、前で結んでダラリと下げるやうな仕組です、近來歐羅巴では一般に大流行で、漫遊にお出でた方は必ず土産に買つて行くさうです、……

これはチヨット茶話會の時ぐらゐに下着の上へ外套のやうにはをつて前はつッつき合せださうです、お高祖頭巾も矢張縮緬へ總縫したのを夜分外出するときチヨット被るのが流行るさうです。

▲西洋への土産

過日帝國ホテルにお泊りの英國貴族さんへ伺ひましたら、奥樣が此着物を澤山買つて居られました（親族知己への土産にするとて）、私に見せてこれは日本のホントウの禮服ではありますまいネと申されました又少し明るい英國婦人は獨逸武官の細君に向つて、日本で今流行の着物は下等の品で、貴婦人の禮服は鼠とか黒とかの紋付を用ゐると説明しました……、或方は三井で五十圓出して、羽織を拵えさせて、下等では無からうかと私に見せましたが、黒縮緬で無雙の染分の裏になつて、却々巧者な見立でした、私は五十圓なら先ア上等でしやうと言つて置きました、一般には芝居の衣裳のやうな物が流行るんです。

▲演劇

芝居は極好きですが、此節は年頃の子供等に見せて不都合ですから、慈善芝居だけしか行きません、英國人はオセロを面白いと言つて居ましたが、畢竟見慣れてるのと、他に比較する好いのが無いからでしやう、私は又ホントウの西洋芝居なら一番愉快ですが、オセロなどは見たくありません、壯士芝居など一遍も見ません、皆さんが左樣な頑固を言ふなと申されますが、在來の時代物の芝居が昔の風俗を思ひ出して面白う御坐います、私は深く感じる方で芝居で泣かない位なら面白味が無いのだと思ひます



大山侯爵夫人

▲義太夫

芝居が好きな位ですから、義太夫も好きです、義太夫を聴いて

感じないのは、無神經だらうと思ひます。

▲食　事

午は日本食、晩は洋食、朝は各自勝手と定めて、卵、珈琲、コ、アなど自由にいたゞく事として置きます、私は洋食好きで、第一自分の躰の爲に宜い樣です、併し澱粉質を好きませんから、斯樣に瘦せるのでせうと思ひます。煙草は以前大好きで、格別攝生に關係ないと思つて居ましたが、近來マッサージを致して居る位ですから、醫者に止められて居ります。

▲動植物

宅では家内中動物好きで、一しきり宛然動物園でした馬も居れば羊も居る、山羊、驢馬、モルモット、犬、猫、鳩、金魚まで、何でも飼ひましたが、衞生に惡いと云ふので、漸々方々へ片付けて、必要の馬ばかり殘してあります、尤も鳩は猫が取つて可けませんから止たのです、以前は馬に乘るとも御坐いましたが、醫者が私の躰には惡いと言ひましたから止めました、花類は薔薇が一番好きで御坐います。

▲書齋骨董

室の左右に夫人と御主人のチヨック畫を掲げられてあるのは、夫人が三十歳の時、キヨソ子氏が寫したもので、精妙高雅の筆と見受けました、

骨董は大山が大好きで、古い物を善く集めました。

▲白粉問題

話が白粉に及びました時、「報知新聞でよく〳〵」と笑ひ頽れて居られました、暫くして、

白粉がよいの惡いのと言ひ出したら、まだ〳〵イクラも氣になる事があります、斯樣な事を迚も止めると定める譯に行きますまい。

夫人は田中子爵夫人へ紹介しませうとて、階子の降口まで行かれ、手を鳴してオイ〳〵と書生を呼ばれました、而して軈て紹介名刺とお寫眞を持ち來られ記者に渡されました、記者はこれを受けてお暇を申上げましたが、折柄雨はドシ〳〵降つて參りました

鳩山夫人の手簡

前號の女學世界誌上に私方子供に就て御話したる事を掲載相成しか大分に相違致し居候まゝ一應御訂正願ひ上け候尤も話を取り違へ新聞雜誌へ掲載せらるゝ事は毎々の事にして自分の思想を往々世上に誤まられ候事に慣れ居候へば私は別段驚きは不申候つい先達も報知新聞社員が白粉問題に就き御尋れの際にも白粉は西洋人も隨分用ふるとの事を過般彼地へ參り親しく家庭の樣子を見て知りました（中等以上の家庭）が彼地の人は色か白き上に用ひ方か上手のせいか餘り目立たぬが色黑き顏に餘り厚つく塗りたて牛は剝げかゝり居り候などは隨分野鄙に見ゐます日本婦人も追々美的思想か進で參れば餘り目につくやうに厚く塗る事は追々改めて參りませう然し男子か斯る婦人の微細の祕事とも可申化粧事に彼是立ち入り世話さるゝのは何やら私共婦人には奇妙に感ずると申上候且つ校則で禁ずるとなると犯則者を罰さればならず男子の目より白粉を用ひ居らぬと思ふ者も實際に用ひ居等の事あれば隨分罰の適用には困るでありませう斯る事は校則を以て禁ずべき事と自分は考へぬ旨を申上候處西洋人は盛に白粉を用ひ人の目をひく云々と取違へてお出しに相成侯米國の記者なども新聞の賣れんことと斗を考へ居候爲何か記事を面白くせんと隨分作り事を加へて掲ゝるものも有之候間あながち我國の記者のみを尤むる譯にては無之候然るに今日貴雜誌の記事に限り殊に御手數を煩し侯次第は私の一身に關する丈ならば如何に間違ひ居候も御訂正を願ひ不申候得共私共子供に關しての記事は子供將來の爲めに取らさる次第子供の世間に誤解せらるゝ事は私の忍ひさる次第に候殊に其誤解か私に原因する事は尙更以て捨て置き兼れ候心地仕候間此義不惡御思召事の些々たるに拘らず御掲け被下度希上候

（一）私共子供はピアノが名人だと有之候が記者の名人と申さるゝ事はどの位の程度に御考へ相成候かは存し不申候へ共私か申上候はたゞ私共子供はピアノか好きにて比較的耳かよければ學校の唱歌などは大概自分で考へて彈きましたから少し指の使ひ方を稽古させました耳の比較的によきは幼稚の時分ピアノをならして守をせし故ならむと御話し致せしのみに有之候

（二）又日曜日會堂へ參り候は英語の練習の爲めの樣に御掲け相成候へ共。

雜誌に御掲け相成候英米四人の敎師には日曜日以外の日即ち長男は先日迄月、金、次男は水、土に參り英語其他の研究を致し候へ共日曜日には精神敎育の爲め會堂へ參り申候尤も會堂は大槪日本語の樣に私は承知致し居候

これは些細の事の樣に候へ共私共子供は利己主義の爲め即ち會話を覺ゐ度爲めに西洋人を欺き信者らしき風を裝ふなど卑しき種類の人間には無之日本人中に往々斯る傾きあるを慨しをり候事故特に取消しを願上候

（三）子供を買ひ被ては可けません野蠻な者と思て導かなければ云々

これは私の話の中の一部分を御掲け相成候爲め誤解を免かれすと存候

「よく人は性善だとか子供は罪かないとか申ますか人間か小兒から老成の人になる迄には丁度野蠻人種から文明人種迄に進むに等しき階級を經るものと私は信し居ます」

左れば幼稚時代には餘程干渉して規律を守る事、務を重する事、其他何事にも善良の習慣を養成する事か必要なれども追々成長するに從ひ干涉の度を減し青年時代には殆と干涉の必要なき樣にせねばならぬとお

話し申且つ現今私は「自分の子供の行為に就ては殆と何等の干渉も致しませんが 別に心配する事は何も御座いませんまづ子供の 理想と私の理想とは一致して居る様に私は信して居ます」と申上候然るに御記載の文によれば十八九の青年時代も 野蛮の如く誤解さるゝなきとも 限られれば為念御斷り申上候

記者曰く貴婦人の嗜好云々に就ては鳩山夫人の外濱尾夫人よりも申越れ候その 趣意は該記事に就き 別段相違の點は無之候へ共右は 訪問者が或る技術上の都合より請求されたる事とおもひて談話したものなれば貴婦人の嗜好云々として掲載されしは聊か意外なりしを以て取消を乞ふとの義に有之候為念茲に同夫人の御請求に應じ御斷申上候

右は同夫人より本誌編輯局へ御來訪に就て申上たる義に候が 該記者より御答仕候

前號「貴婦人の嗜好」に就て濱尾作子夫人より 電話を以て左の通り申込まる

中村鈴子氏が訪問せられし時は婦人に關する君子の為めと 申され候其節の話が貴雑誌に掲載せられ候は聊か 意外に存候

記者申す婦人に關する君子の為めに御話を承り候へ共 一度雑誌に掲げてのち君子と致す方然るべしと 相談纏まりたる故に御座候一應御伺ひ申すべかりしは高貴優美の御話のみにて 御差支なからんと存じたる油斷に御座候

鳩山春子夫人は同記の事に就て電話を以て 左の通り正誤を申込まる英語練習の一項に兩兒を教會へ遣すやう 記されたるは事實相違に付御取消下被度候

次號には

▲毛利公爵母堂

▲山脇房子夫人

を御紹介申上候

史傳

上古の女丈夫 大葉子

栗島狹衣

この間水交社で華族女學校出身の貴婦人連中が催ふされた活人畫は上古から近世に至るまでの日本歴史上にあらはれた女傑の事蹟について演ぜられたのでありますが、その中に就て大葉子といふのがありましたから一寸この女偉人の事蹟に就て申しませう。抑も大葉子と申すのは有名なる烈士調伊企儺の妻であります。これは欽明天皇の二十三年秋七月に起つた新羅と日本との戰闘の時、不幸にも伊企儺と共に敵の手へ捕虜となつた不幸な婦人であつたのです。全體三韓の中でも新羅といふ國は譎詐の多い國でありまして、神功皇后以來朝貢を奉るべき誓を結んでおきながら、欽明天皇の時までには幾度となく叛いて、隣國の任那百濟高麗をさへ侵した事がしば／＼でありました、ところで此天皇の二十三年七月の條を記した日本紀の上には、

新羅遣㆑使獻㆓調賦㆒其使人知㆓新羅滅㆓任那㆒恥㆑背㆓國恩㆒不㆓敢請㆒罷遂留不㆑歸㆓本土㆒

といふ事が見えてをります、これによつて見ますると、新羅は隣國の任那を滅してわが國恩に背たものに違ひありませんので、これはわが國から詰問を加ふべき問題でありますから、天皇は直ちに大將軍紀男麿に命じて彼國へと赴かしめたのでありましたが、此時の副將としては河邊臣なる者をおつかはしになりました。そこで男麿は哆唎といふ土地から入り、河邊臣は居曾山といふ土地から出て、新羅へ討ち入る手筈を定め、任那の薦集部首登弭といふ者に印書弓箭を授けて百濟へやり、百濟と共に兵を合せて包圍攻擊を採らうとしましたところ、登弭が印書弓箭を過つて路に落ましたので、軍略は不幸にも新羅の知るところとはなりました

けれども、戰爭の上には美事に勝を占めまして、遂々降服させるといふ段になりましたが、大將軍の男居は、軍馴れた人でありますから、固く軍中に令を下して、輕卒のないやう、勝ても兜の緒を締めておくやう、油斷してはならぬと警しめましたので、士卒はみな其心を奉じて、用心堅固でありましたが、副將たる河邊の臣は、兵法といふ事をわきまへぬ猪武者と見えまして、少しも大將軍の令にしたがはず、進みに進んで敵塞を衝きましたので、初めは此勢に乗が來て到るところ勝利を占めましたが、新羅の一將が降服の白旗を樹てゝ來るのを見て、その何の爲めといふ事をも知らずに、自分も白旗を押し樹てゝ進みましたから、新羅の一將はさて〳〵河邊臣は降服のこゝろを示して居る、この兵氣挫折の虚につけ入て、一揉に揉み崩せと、自分の方の白旗はそのまゝ押かくして逆擊しましたので、河邊臣は散々な敗北、兵卒は數多く傷きました。それ故今は退軍の已むを得ぬ次第となりまして悄々殘兵を驅り集め、野營の陣を設けて一息つかうといたしましたが、何分兵士が服しません、みな散り〳〵となつて營中人數の折柄、敵は夜擊の策をめぐらして、急に營所へ攻め込みましたから、あはれや河邊臣は其妻甘美媛諸共に生捕になりました。

新羅の鬪將は河邊臣にむかひまして、『お前の生命と妻の生命とどちらが惜しいぞ』とたづねました、河邊臣は早速に『一婦人の愛に溺れて自分の生命をむざ〳〵と取られましやうや、併し彼女とても殺さるゝ事は氣の毒千萬な事でありますから、どうぞ貴下の御側へお留遊ばして下さらば仕合至極の事であります』と答へて、不屈千萬にも最愛の妻を賣りました、又妻の甘美媛もおめ〳〵と賣られて、實に取返しのつかぬ恥辱をば晒らしました。何とこの夫妻はなさけ無い無節操な人物ではありませぬか、然るに丁度此時に捕へられた吉士調伊企儺、渠は勇烈無比な人物でありますから、なか〳〵降服いたしません、そこでいよ〳〵牽出されて殺戮さるゝ事となりましたが、新羅の一將は思にも伊企儺にむかつて『汝の尻を日本軍の方へむけて、日

本の大將わが臀肉を喰へといつて見ろ、そうすれば汝の罪を容して、生命をも助けてやる』といひ出しました、怪しからぬ狂態を演じて降服のこゝろを示せと迫つた此詞には、伊企儺の如き烈士が何んで服しませうぞ、腹の中でしたゝかに嘲笑つて、そのいふまゝに狂態を演じかけましたが、忽ち大音聲に『新羅王わが臀肉を喰へ』と叫びましたので、彼等の驚きは一通りではありませぬ、『這は圖太き痴者よ』と憤怒の刃は用捨もなく伊企儺の頭の邊へ、白蛇の奔るが如くにも閃めきましたが、この烈士の軀から流れた血潮は、櫻の花のそれよりも麗しく潔かつたであらうと思はれます、さあこれを見たその子の



棊は父にもまさる清い心を持て居る若者でありましたから、美事其場に自刄して仆れました。さて兆處に同じ捕はれとなつた伊企儺の妻、若者の母、乃ち大葉子は、この凄じい光景を眼前にして、心弱くも敵の前に憐伏たでありませうか、彼の甘美媛の如くに無節操至極なる所爲をしまひでせうか、いや／＼彼女は流石に伊企儺の妻であります、この傷ましき出來事を見て、一たびは愴然とかなしみ、一たびは凜然と振ひ起つて、聲も朗かに

柯羅俱爾能、基能陪爾陀致底、於譜磨故幡、比例甫
羅須母、耶魔等陛武岐底、

とうたひ出でゝ、同じ枕に殪れました。あゝこの間の有樣は壯烈といはうか壯快といはうか、伊企儺の憤死は素よりの事ながら、大葉子の國歌に心を寄せて、とこまでも神州秀靈の氣を吐きつゝ、難に殉じた健氣さは、眞に女丈夫の本領にかなふものではありませぬか、日本にむきて比例ふるその意は、束の間も國を忘れぬといふ眞心から湧きいでたやさしい詞で、假令辭の上からは眞率に過ぎた咎めはありませうとも、歌はその意を重しとするものであるから、この不撓不屈の精神を採つてやらねばならぬのであります。而も場合の同じ時に、腰の弱い河邊臣と、骨の硬い伊企儺とを較べて見ても、操を守らぬ甘美媛と、潔い大葉子とを較べて見ても天地の相違があらうと思はれます。嗚呼形名の妻といひ大葉子といひ、實に姉たり妹たり難き女傑の龜鑑で、上代の歴史を飾る花とでも稱へませうか、まだ其人をもとめるならば彼の御聰明なる神功皇后といひ、橘媛といひ、雄略帝の御后といひ、何れも男優りの御氣象に富んで、立派な女丈夫でおはしたに相違はありません、さればこそ御偉績の譽は赫々として千古にかゞやいて居りますから、誰れもその御有樣を能く知らぬなどといふ人もありませぬ、けれども此處に掲げた二女は左まで人には言ひ囃されて居りませぬ、而もやんごとなき身分ではなうて、下に列なる臣であります、されば能くその間に忠君愛國の思想も見えて居りますので、我が國體の上からいふても、殊

に記述しておきたいと思ふのであります。但し雄々しいといふ心は女の身に要らぬ事とも思ふ方々もありませうが、それは見識の狹い考で、あどけないお孃樣氣質とでもいふべきでありませう。先づ考へても御覽なされ、女は賢しき母となり、美しき妻となつて、男を扶けてゆかねばならぬ義務があります、この場合になつてたゞ〳〵婉々とした優姿や、ひき入れ勝ちの心をもつて、その義務を果す事が出來ませうか、往昔のスパルタといふ國は、わが國の武士道に似た一種の尙武主義が、其國家の精神となつて居りましたので、自然婦人の心も雄々しいのでありました、アリストフア子ースの戯曲の中に、アテーナイの一婦人がスパルタの婦人にむかひまして「實に貴女は美しい、實に活潑でいらつしやる、貴女のやうな强壯な身體の御方は、牝牛をも絞め殺すほどの勇氣がおありなさるでせう」といひかけました、すると其婦人が莞爾笑つて「妾もそのくらゐな事は出來やうと思ひます」と答へたそうであります、又同じ國の一婦人が五人の子供の從軍した後、頻りと市外へ出て軍の報知の來るのを待て居りますから、或人が「これは定めて子供の安否を聞たいからであらう」と早合點して「お子さん達はみな戰死なされました」と報知ましたところが、婦人は其人を叱して「えゝ左樣な事が聞きたうはありませぬ、わたしの聞きたいのは我國の勝敗何れに決つた事なのであります」と答へたので、其人も仰天して「いやそれならば我國は大勝利であります」といふと、婦人は欣んで「左樣ならば欣こんで悴どもの戰死した事をも承はりませう」といつたそうです、これといひ彼といひ餘りに極端な例ではありますが、健氣な心持はみなひとつで、堅忍不拔な精神といふものを酌み取る事は充分に出來やうと思はれます、さればこそ此スパルタなどといふ國は、人間の壘壁ありといつて誇つた位、武威をかゞやかした尙武國でありました、何も諸孃に對して筆者は巴板額の勇をのぞむのでもありませぬ、牛を絞め殺す壯氣を褒めるのでもありませぬ、たゞ要するに賢妻慈母たるの健氣さ、言ひ換へますればわが國風にそむかぬ男優りの氣象と、今日の世に應ずる社會的の勇氣とをもつて、どこまでも純良潔白なる日本婦人の德を、世界に誇ることの出來るやうにと望む丈けであります、それには尤も相應な例として上古の二女傑を御紹介いたしたのであります。

文華

皇子の御誕生（上）

（紫式部日記の一節）

鷹野止水

紫式部始め右衛門佐宣孝に嫁し、大貳三位、辨の局の二女を生み、夫宣孝逝去の後ち、一條天皇の中宮上東門院彰子に任ふ。寛弘五年十月十一日上東門院後一條天皇を生ませ給ふ。こはその十一日より式部がものせる日記なり。

十一日、うまの時に、空はれてあさ日さし出でたる心地す。たひらかにおはします、うれしさのたぐひもなきに、男にさへおはしましけるよろこび、いかゞはなのめならむ。昨日、しをれくらし、けさのほどあさ霧におぼゝれつる女房など、みなたちわかれつゝやすむ。

●釋義　○うまのとき　十一日の正午即ち十二時頃なり　○空晴れて云々　皇子御誕生ありし故、御産前よりあつまり居りたる人達安神して、心落ちつきたるを、雲空の名殘りなく晴れて旭日さし昇りたるにたとへしなり。俗に「清々した」といふが如し。○たひらかにおはします云々　昨日今日心にかゝりし御産、御安産なりしは、何よりも嬉しきに、其上に男御子におはしませば、主上を始め奉り皆々の悦びは、如何ばかりならむとなり、なのめならむは斜めならんにて、並大抵の事にはあらず、一通りの悦びかたにはあらずといふ意。○昨日しをれくらし　しをれは萎にて、昨一日はあまりの心配に、萎れかへりて元氣もなくくらしたりといふ意。○あさ霧におぼゝれつる女房　おぼゝれは月の朧などいふが如く、女房どものボンヤリしたる様をいへるなり。○たちわかれつゝやすむ　わかれは別れにて、今まであつまり居たりし女房だちは、立ち別れ〳〵て我局

に歸り休息したりとなり。

●大意　寛弘五年十月十一日皇子御降誕ありたれば、かねてより醫師よ藥よと心にかけて、神佛にも祈願したりし甲斐ありて、安らかに御產ありたれば、曇りの空の名殘なく晴れ渡りて、旭日のさし昇りたる時の如く、皆々の心落付きたり。心にかゝりし御產のかくも安らかにおはしますは、嬉しき限りなるに、やがては日嗣の皇子と仰がるべき男御子にさへ御はしませば、宮中の御悅び一通ならず。昨日今日心配に心配を重ねて、かしづき居たりし女房ども、皆安神して各自室にかへり休息したりとなり。



●評　こはもとより紫式部の日記なれば、式部が見し事聞きし事の有りの儘を記し。あまりに修飾を施さず、されば同女が筆になりたる源氏物語の如く、婉麗優美の妙はなけれど、簡にしてよく其事實を網羅し、行文圓熟、然も一點苦神の形跡を認めず、此作者の作者たる所。平凡作者の及ぶ所にあらず。此一段「空晴れてあさ日さし出でたる心地す」の一句に、心にかゝりし御產の安かりしを表はし。けふ日しをれくらし。けさ朝霧におぼゝれつる女房」といへては、かねてより如何に心を勞せしかを表はし、女房だちの心落ちつきて息ふ樣見るが如し。

御前には、うちねびたる人々の、かゝる折ふしつきづきしきさぶらふ。殿も上もあなたにわたらせ給ひて、月ごろ、みずほう讀經にさぶらひ、昨日今日、めしにて參りつどひつるそうのふせ給ひ、くすし、おんやう

しなど、道々のしるしあらはれたる、ろく給はせ、うちには御湯殿の儀式などかねてまうけさせ給ふ。

●釈義　○御前には　中宮の御前にはなり。○うちねびたる人々　ねびは老成の義にて、年長けて事に熟練したるをいふ。こゝは長く宮仕して居る、物事になれた人達といふ意。○かゝる折ふし　かやうの折にて即ち斯ういふ場合といふが如く、中宮の御産後をさしたるなり。○つきづきしきさぶらふ　つきづきしき人が、御前にさぶらふといふ意なり、つきづきしき人の人を省きたるなり。つきづきしは相應とか適當とかいふに同じ。○殿もうへも　殿は藤原道長公をさす、道長公は小宮彰子の父君なり、うへは中宮の母君倫子をさす。○あなたにわたらせ給ふ　彼方の間にて。常の御居間に渡らせられしとなり。○月ごろ　日頃などいふが如く、此間中幾月もといふ意なり。○みずはうどきよう　御修法讀經とかく。法を修め經を誦するとにて、こゝは中宮の御安産を祈るために加持祈禱をせられし修法讀經をさしたるなり。當時佛法盛んに行はれ隨つて迷信も甚だしかりし。されば此時代の日記物語等には、かゝる迷信尤も多し。○昨日今日召しにより云々　昨日今日道長公の召しによりて僧とも陰陽師ともの集りたるなり。○ふせ　布施と書く。佛僧にものを與ふるをいふ。○くすし、おんやうし　くすしは醫師なり。おんやうしは陰陽師にて、當時迷信深く、家相、人相、卜占等より、祈禱、祓などをなすものあり。これを陰陽師と稱したり。　みちみちのしるし云々　醫師、陰陽師など何れも其道々の効しあらはれたるに祿たまはりたるなり。祿は官人に物を賜はるものにて食祿、封祿などいふ、こゝは醫師陰陽師などに物賜はりしなり。○うちには御湯殿の儀式云々　うちは内々とか一方とかいふ意にて、こゝは一方では祿など與へ、一方では御湯殿の儀式などかねて用意せられしとなり。かねてはあらかじめなり。まうけは用意といふに同じ。御湯殿儀式は生兒に浴湯せしむる儀式、其次第は下に述ぶ。

人のつぼね〳〵には、おほきやかなるふくろつゝみとも、もてちがひ、からぎぬ、ぬひものゝも、ひきむすび、らてんぬひもの、けしからぬまでしてひきかくし、「あふぎもてこぬかな」などいひかはしつゝ、けそうしつくらふ。例の渡殿より見やれば、つまどのまへに、宮の太夫、春宮の太夫など、さらぬ上達部もさぶらひ給ふ。殿、いでさせ給ひて、日頃うづもれつるやり水つくろはせ給ひ、人々の御けしきともこゝちよげなり。

●釋義　人のつぼね〳〵　女房達の局々なり。局は部屋なり。後には局を有てる女房をもつぼねといふに至れり。○おほきやかなる云々　大きな袋つゝみ（衣を入るゝ袋）を、彼處此處と持ち歩るきたりしとなり。○からぎぬ　婦人禮服の上着なり。○ぬひものゝ裳、種々の模樣の繡物をしたる裳をいふ。裳は女の禮服にて、男の袴の如く腰より下に着くるものなり。○引きむすび　腰にむすびつけたるなり。○らてんぬひもの　らてんは螺鈿と書く。青貝を摺りつけて飾りとしたるものなり。即ち螺鈿の塗物といへば貝を塗りこめたる塗物にて。こゝは繡物に貝を入れたるものなり。○けしからぬまで　今俗にいふと同じく、甚だしき樣をいふ。こゝは飾りに念を入れて、あまりに目にたちたるよりかくいへしなり。○ひきかくし　目立つ樣に繡ものゝ裳などにて腰など引きかくしたるなり。○あふぎもて來ぬかな　かねて申し置きし扇は未だ持ち來ぬかな、早く持ち來よなどいふ意なり。○いひかはし　互に言ひ交はし語り合ふ事。○けさうしつくらふ　化粧し身つくろひする事なり。○例の渡殿云々　いつもの渡殿から見やればといふ意。渡殿は細殿と同じく、廊下といふに同じ。○つまどのまへ　妻戸の前なり、妻戸は今の開き戸の如き戸なり。○宮の太夫　宮は中宮をさし。太夫は長官なり。即ち中宮職の長官をいふなり。この時の太夫は齊信なり。○春宮の太夫　春宮坊の長官なり、この時の長官は懷平なり。○さらぬ上達部　其外の上達部もといふ意。上達部は公卿といふに同じ。○殿　道長公なり。○日頃うづも

れつる云々　中宮の御產のために手入れも出來ず、木の葉などに埋もれたる遣り水を、殿自らつくろひ皆々けしき如何にも心地よげなりといふ意、

●大意　女房だちの局々には、着物など入れたる大きな袋包みなど、あちらこちらと持ち步るき、けしからぬまでに身づくろひし「かねて申しつかはしたりし扇まだ持て來ぬか」などいへかはしながら、互に身づくろひし　渡殿の方には宮の太夫、春宮太夫などより上達部の人達さぶらひ。道長公は今まで中宮の御產のためにつくろはざりし遣水など自らつくろはれ、皆々の有樣如何にも心地よげなりとなり。

●評　御產後の宮の有樣。女房達の昨日にかはりて浮きたちて、たのしげにもけそうしつくろふ樣」殿上人の彼方此方に息ふ樣。道長公のたのしげに、自ら手を下して遣水をつくろふ樣く皆此數行に描寫せらる。「あふぎもて來ぬか」の一語の如き、如何に活動せるかを見る。輕妙の筆つかひ、殊に見るべし

心のうちに思ふことあらん人も、たゞいまはまぎれぬべき世のけはひなる中にも、宮の太夫ことさらにもゑみほこり給はねど、人よりまさるうれしさのおのづからいろにいつるぞことはりなる。右の宰相中將は權中納言とたはぶれして、たいのすのこに居給へり。內より御はかしもてまゐれり。頭中將賴定、今日、伊勢のみてぐらつかひかへるほど、のぼるまじければ、たちながらぞ、たひらかにおはします御ありさま奏せさせ給ふ。ろくなとも給ひける。その事は見ず。

●釋義　○心のうちに云々　心の中に何か心配事のある人でも、此目出度愉快なるに紛れて、心配なる事も忘るゝ程なるにといふ意。けはひは有樣といふが如し。○宮の太夫ことさらにも云々　宮の太夫即ち中宮職は、中宮の御安產ありたるなれば、殊更に笑みはこり、自慢はし給はねど、普通の人々よりも嬉しさは增りて、自ら面にあらはれたるは道理なりといふ意。○右の宰相中將　右近衛中將藤原兼隆なり。○權中納言　權中納言源俊賢なり。○たはふれして對のすのこにゐ給へり　兼隆と俊賢とは對の

すのこに戯れて居たりとなり。對のすのこは、對は本屋の左右及び後方にありて、本屋に對する家、すのこは簀子とかき。竹を編みたるもの、それを敷きある處をいふ。こゝは對に簀子を敷きある處にて椽側の如き所なり。〇うちより御はかしもてまゐれり　うちは内裏なり御はかしは御劍なり。こゝは内裏より御劍を持て參れりといふ意。皇子生るれば内裏より御劍を贈る例なり。〇頭中將賴定　内裏より御劍を持ちきたりし御使なり。〇伊勢のみてぐら使かへる程云々　みてぐら使は伊勢神宮への奉幣使なり、奉幣使は毎年九月十一日都をたち二十日に歸る例なり、こゝは今日伊勢へ奉幣使がたちたれば、其使の歸るまでは、御産のけがれある御殿へは御はかしの使は昇らじとて、道長公は家のうちに立ちながら、中宮の御安産の後も無事なるよしを、御はかしの御使に申して、奏上せさせ給ひしとなり。〇ろくなども云々　御使に祿なども給ひたるやうなれど、式部はその事は見ざりしとなり。



●大意　心の中に心配事の有る人も、今日の目出度さには打ち忘らるゝ程なるが、中にも中宮職などの悦びは人並ならず。別に笑みほこりはせねど、自ら其面にあらはれて、如何にも嬉れしそうなるは尤もなり。右の宰相中將と權中納言とは戯れ事して對の簀子に居たり。

内より御はかしの御使頭中將まゐりたれど、道長公は、伊勢の奉幣使は今日立ちたれば、奉幣使の歸る其れまでは、御産の穢れある御殿へは昇るまいと申されて立ちながら、中宮の御安産のよしを奏せさ

せられ。又祿なども賜はりたれど、其事は見ざりしとなり。

以上は皇子御誕生當日の周圍の光景を叙したるものにて、次段より、皇子に關する事即ち御産後の儀式ともいふべき事項を記されたり。

御ほぞのをは、とのゝうへ。御ちつけは、橘の三位。御めのと、もとよりさぶらひ、むつまじう心よいかたとて、大さゑもんのおもとつかふまつり。備中守宗時の朝臣のむすめ、くらう人の辨のめのと。

●釋義　○御ほぞのをはとのゝうへ　皇子の御臍の緒を切り給ひしは道長公の御臺所倫子なりといふ意とのゝうへは倫子をさす。○御ちつけ　初めて御乳を含ますする者を御乳つけといふ。○橘の三位　橘德子なり。○御めのと　御乳母なり。○もとよりさふらひ云々　以前より仕へて、睦ましく心の知れたよい人であるとて、大さゑもんのおもとを、乳母とされたりとなり。おもとは御許といふ儀にて親しみていふ語なり。○備中守宗時のむすめ云々　大さゑもんの外に、備中の守宗時のむすめ、藏人の辨を乳母となしたるなり。

●大意　御臍の緒は殿の上（倫子）が切り給ひ。御乳つけは橘三位德子つとめられ。御乳母には、以前よりさふらひたる、睦ましき心知れたる大さゑもんの御許ならびに藏人の辨のめのとゝ定められたりとなり。

●評　此一切、御ほぞの緒は誰、御ちつけは誰々とのみにて、某つかふまつる、某つとむとかいふ語を省きて煩をさけ、然も一讀其任を明にす。此種の書き方、簡にして明、日記のかき方として尤も妙なり御湯殿はとりの時とか。火ともして、宮のしもべ、緑の衣の上に白きたうじきて、御湯まゐる。其桶すゑたるだいなど、皆白きおほひしたり。尾張の守近光、宮のさぶらひの長なる仲信きて御簾のもとに參る。御厨子二、淸子の命婦、播摩、とりつゞきてうめつゝ女房二人、大木工、うま、くみわたして、御ほとき十六にわまれば斛る、うすものゝうはぎ、かとりのも、か

らぎぬ、さいしさして、しろき元結したり。かしらつきはえてをかしく見ゆ。御ゆとのは宰相の君、御むかへ湯は大納言の君(源遍子)。ゆまきすがたとも例ならず、さまことにをかしげなり。

●釈義　○御湯殿は酉の時　御湯殿は御降誕の皇子を湯に入れ奉る事にて、生れてより七日の間は朝夕一度づゝなり。こゝは酉の時とあれば夕方の御湯殿なり酉の時は今の午後六七時頃なり。是より御湯殿の儀式の事を記したるなり。○宮の下べ　中宮の下司男なり○白きたうじき　白き當色なり。當色は北位に相當した服の色なり。御産の時は白き物を用ゆる例なれば、白きを以て當色としたるなり。○御湯まゐる　御湯の事に立ち働くをいふ○桶すゑたる臺　湯桶の臺なり。矢張りこれも白きを用ゆ。○尾張守近光云々　近光と仲信とは御湯殿奉仕の役にて御簀のもとまでまゐれりとなり。○御厨子　棚なり。○清子の命婦播磨　清子も播磨も共に女房のよび名なり。○とりつゞきうめつゝ　引き續きて水をうめつゝなり。うめるは湯に水をませるをいふなり。○大木工　右馬共に女房の名なり。○くみわたして云々　十六の瓮に湯をくみ分け、其れがわまれは十六に割り入れるなり。○御ほとき　瓮の類なり○うす者のうはぎ　羅の上着なり。○かとりの裳　かとりは堅織といふ意にてかとりにて作りたる裳なり。○さいし　女の髪に飾る釵子なり。○御湯殿云々　此湯殿は皇子に湯を浴せ奉る意にて、宰相の君つとめたり。○むかへゆ　湯を浴せる相手なり。○湯まきすがたとも云々　今



日は湯まきも白きを用ゐたれば、いつもと異りてをかしげなりとなり。

●大意　酉の時に御湯浴せさせ給ふ、下部は綠衣に白き衣重ね着、桶の臺も白きものにておほひ、近光仲信等は御簾のもとにたち、淸子の命婦と、播摩とは水をうめ、それを大木工、右馬の二人にて十六のほとぎに分配し、その湯を宰相の君と大納言の君の二人して皇子に浴せ奉る、此時は皆白きものを用ゆる例なれば、調度より着物、釵子に至るまで皆白く常より樣かはりて、おかしげに見ゆるとなり。此段は即ち御湯殿の儀式なり。

新派和歌 作法問答（下）

與謝野晶子

（十二）問ふ、學校で御友達の話に、新派の歌は分らんと申して居ましたが、只今の例に御引き成された御歌で見ますると、如何にも分りかねます歌の方が多う御座ります。之は御講釋が願はれませうか。

答ふ。お分りにくいのは御尤も、中の思想も表面の詞づかひも頓と舊派の歌とは異つて居りまする。歌の講義は致して致されぬでも御座りませぬが、詩は如何も意味の面白さ計りで無く、音調なり詞づかひなりの面白さと一所に成つて居りますから、講義では其の十分な面白味が述べられません。利發な讀者と作者との心と心とで讀んで樂む性質のものである樣に承つて居りまする。之は貴姉が幾遍も御讀み成されさへ爲ますれば自然と分りませう。

（十三）問ふ、では只今お引き成されました御歌の中で、二つ三つ御大意だけを伺ひませう。

答ふ、『春の神の愛娘うぐひす』の歌は、連翹の花の美を歌ひまして、春の神樣の御可愛い〻御娘の鶯が御嫁に入らせられると申すので、連翹の花が金の扉を造つて待迎へて居まする。と連翹の色から思ひ附いた歌で御座ります。斯樣な事は外の人の歌の眞似では御座りません、全く作者の空想で拵へました愛娘うぐひす、

黄金屏など丶云ふのは前申した造語で御座ります。

（十四）『油のあと』の歌、物思ひの有る少女が此春を毎日この白壁の下に立つては愁ひに沈みました。今日氣がついて見ますると、壁に、自分の脊の高さの所へ、髪の油の痕が島田の髷の型なりに黒ずんで附いて居ります。毎日〱此處に凭れた自分の髷の痕と云ふ事が分りましたが、春も最う暮れまする事か、今日は其壁に李の花が散りかゝりまする。少女は此の暮春の景色に對しても愈々愁ひが増す容子に見えます『島田』の髷と申した丈で少女の事に想はせ、『油の痕』で毎日其處に立つて愁ひに沈んだ事までを想はしめますのが短歌の作法の面白い一つで御座ります。李の花の散るのも、其れで春の暮を想はしめます。

（十五）『わやしむな』の歌。紅い一重の花の小さい芍藥を歌ひまして、芍藥にも人のやうに戀の情がある樣に取りなし、（斯う云ふ作法を擬人法と申します。）御不審な事は御座りませぬ、自分で戀の焔に堪へかねて自分と痩せ細つた芍藥の花で御座りますと云ふ意です紅は情の色と申しますから、戀の情の燃えて身を焦す事に作りました。『焔』と計で戀の熱情の焔と云ふ事に聞かせまするのは詞を省畧してありますので、短歌の短い詩形の中に然う詳しい事は申されませず、申さ無くても利發な讀者には分ります。又詳しく申さずに讀者に分らせまするのが、文章と詩の形の相違で御座ります。勿論此の詞の省畧を上手に澤山致しまする程、歌の意味は澤山含まれまして讀者を喜ばせまするか、之を下手に省畧致しまするし卻て何の意味やら分らぬ事に成ります。

（十六）『白虹』の歌。之は幼兒の顔かたちを歌ひました。眼の凛々しさは白い虹が秋の日を貫く勢ひの父の眼に肖、眉は春の愁ひになやむ母の眉のけしきを帶びて居ます。眼と眉とを擧げまして、其外の美くしい所は讀者の想像に任せたので御座ります。之も詞を省畧（父にの下に肖ると云ふ詞が省畧され、又全体の上に、幼兒と云ふ詞も見えません。其れは一方の父母を擧げて、其對照の子と云ふ意を想像させたので御座ります。）した所があり、句法の目新しい所があるのに御注意下されませ。

（十七）『ゆめみする』の歌。少女が二十の盛りの我が美くしさを讃へ誇つた歌で御座ります。夏ですから清らかな泉に浴して立ちながら眺めまするど、宛ら泉の底に白百合が咲いて居る樣に映じた我が夏姿の、何處一つ缺けた所の無い美くしさ、我乍ら美くしと讃へずには居られぬので御座ります。

（十八）『水に飢ゑて』の歌。戀ひ焦るゝ少女の美くしい瞳が、彼の柔和な、水を求めて森を歩く小羊の眼には肖て居りませんか。

（十九）『花みなに』の歌。花と云ふ花を眞紅に咲かせる『夏』の力は劇しい力で御座ります。今わが身に何時その夏の力が移つて、此通りに情熱が燃えるので御座りますやら、と自分の戀する心の劇烈なのを驚いた歌で御座ります。『血』とは此處では。戀の情が身内に滿ち〳〵て、血と成つて脈搏つ氣が爲ますから申したのです、眞紅と云ふも花の色の中で最も濃艶な色ですし、夏と云ふも時候の中で一番勢ひの充溢した時ですから、其れが能く戀の血の句に適ひます。

（二十）『わめつちの』歌。戀を歌うた人樣の歌を讃美した歌で御座ります。貴方樣の其の氣高い御歌に比べるものは清淨圓滿な百合の花しか御座りませぬ。何故なれば、天地の間の最も高潔な戀の心は、如何云ふもので有るかと云ふ事が貴方樣の御歌で大畧表はされまして、其の足らぬ所を補ふて百合が咲いて居りますから。

（廿一）問ふ。お蔭樣で追々分りまする樣な心地が致しまする。今一つ御伺ひ致しますのは、詞は如何云ふ詞を用ゐましたら一番宜しいやら。

答ふ。何も定めは御座りません。自分の歌はうとする思想のを十分美くしう表はせる詞を御撰び成されませ。古い詞も宜しい、今の普通の詞の中から撰ぶのも宜しい。如何しても新しい思想を云はうとすると、時代の新しい詞の方が能く表はせます。其から如何撰んでも佳い詞が無いとか、句の調子の緊整をつけるとか意味を多く含ませる爲めに詞を省畧すると申す樣な場合には、前に申した造語を爲るので御座ります。之は決して漫りには出來ません能く〳〵工夫して穩かな佳い造語で無いと失敗致します。又語法も從來の文典を無理に破りは爲ませぬが、文章と違ひ、如何しても詩には破格を用ゐねば成らぬ場合、用ゐた方が面白い場合が有ります。何の國の詩にでも破格は許されて居りまする。

（完）

科學

倫理衛生 衣服の話

帝國大學講師文學士 村上辰午郎
醫士 糸左近

時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、誰も斯んな名を附けた學科を講じてはゐますまい、恐らく私等が始めて述ぶることでありませう、然らば何か人を驚かすやうな新奇の面白いことかと言ふに、さういふ譯では無くて、畢竟倫理學と衛生學とを、融和化合せしめた大切な學問である。試みに考へて見玉へ倫理に背いた衛生は衛生で無く、衛生を外れた倫理は世の中にある筈のものでは無いでせう、然るに從來倫理を講ずる學者に眞に衛生學を心得たる人が尠く、衛生を論ずる醫者が本當に倫理學を研究したる甚だ稀である、これ世が文明に進めば進む程、夫々專門に學ばねばならぬから、無理も無いこと〻言はねばならぬが、併し、光線に觸れないで、唯深窓の下に養はる〻令嬢を以て淑徳と心得、或は小人閑居爲不善といふ戒めが、何程衛生に關するかを知らず、甚しきに至つては、倫理を守れば衛生に適はず、衛生を實行すれば倫理に背く、即ち倫理と衛生とは、氷炭相容れざるもの〻やうに心得る者さへあるに至る、慨はしいことである。故に私等は衣服を始とし、次に食物住居など、あるとあらゆる倫理衛生を互に相談して、次第に述るつもりである。

偖衣服の目的は如何といふに、

第一、德義　第二、攝温　第三、目標

であらうと思ふ。

第一、人が衣服を着るのは、其の道徳が諸動物に長たることを著はす譯である。熟々考ふるに、草昧野蠻の

民は、身體何れの部を表はさうが、毫しも愧ること無く、唯寒を防ぐ爲に、自然の獸皮などを着る外は、裸體を以て常とす、然れと稍進歩して、道德の何たるを解するに至れば、必ず衣服を着て、身體を蔽ふ、これ古今東西の史上に徴しても、明らかなる事實である、故に文明の今日でも、下等社會に至つては、裸體を愧ぢざる者あるがために、警察は特に之を罰する所以である。

第二、體溫の調節は衣服衛生の起る源である、我等が其の生活を保つて、忠孝仁義の道を盡さうといふには體溫は何時も平均三十七度三分位を保つてゐねばならぬ、其れより低くても高くても、一つの病徴であつて迚も人間の職務を全うせらるゝものでは無い、然れば其の體溫を保つには、四時晝夜の別無く、其の溫二十七八度の大氣中を離れずにさへ居れば、裸體でも差支は無いが、斯樣な土地は廣い地球上にある筈は無いから、我等は身體の周りに、適度も濕度の空氣を作らねばならぬ、即ち夏は身體に蔭を作つて、太陽の熱を受けぬやうにし、冬は體溫を離れぬやうに工夫せねばならぬ、之をなすには、樹蔭暖爐など色々の方法もあるけれど、先づ第一に衣服を吟味するより、便利な仕方はありますまい。

第三に、衣服は實に目標とするものである。蝦茶色の袴をはいて居れば、女學生かと思はれ、赤い物着しで居れば、田舍娘かと疑はる、其の他兵士は兵士、巡査は巡査、學者商人職工丁稚乃至車夫湯屋男など、其の職其の身分の異なるに從ひ、夫れ相當の服を着けて自然に目標としてゐる、これ誠に便利なことである、啻に便利なばかりで無く、これが又德義上衛生上斯う區別せねばならぬのである、若も女學生が車夫の眞似をして短い股引をはき、湯屋男が兵士の服と取換たならば、衛生上にも道德上にも、甚だ合はぬことは如何なる車夫湯屋男も解せらるゝでありませう。然れど、如何なる衣服が、一般に道德上 衛生上 等に適するかと言ふに、左の八ヶ條に含まるゝでありませう。

（一）「らしい」を忘れてはならぬ。

(二)清潔といふことを勿論注意せねばならぬ。
(三)温度や濕氣の不良導體を以て作らねばならぬ。
(四)厚過ぎても薄過ぎても害わるものである。
(五)色は夏は白く冬は黒きを可とす。
(六)多人數共用してはならぬ。
(七)窮屈で無い樣に拵へねばならぬ。
(八)衣服の換氣を行はねばならぬ。
(一)夫れ衣服の如何に依て、其人の品性を他人に示すことの出來るものである。故に人は身分相應の衣服を用ゐ、華美に流れぬやう注意せねばなりませぬ、兎角人は身分を越えて美を裝ひ、贅澤な服を用ゐようとする傾きが生じ易いものであるから、注意に注意を加へて、質素を旨とし、それで紳士は紳士らしく、百姓は百姓らしく、何れも其のらしくを忘れてはならぬ、されど其の質素とは、敢て粗末なのを着よといふ意では無くて、矢張身分相應といふ意であるのである。又修學中の身でありながら、衣服の美を裝はんとし、昨年求めたのも今年は厭になつたから、それを打ち捨てゝ又新奇なものを買ふといふ樣に、外物の爲に、いつも心が動き、魂が奪はるゝやうでは、迚も淑々たる貞女の望みが無いと言ても可い。とは申すものゝ、既に流行遲れとなつた衣服を、何時までも着て平氣で居れよ頭の飾りなどは更に用ゐるなよと言ふのではありませぬが、唯學生は學生らしく、夫人は夫人らしく、返す返すも外物の爲に、自己あるのでは無いといふ考を、常に有つて頂きたいのである。今一つ例を擧げませうに、世間には前垂女とて、木綿の服を着て、前垂をして居れば、如何にも甲斐〲しくなれと、絹服を着れば、更に似合は無いのみならず、却て野卑に見ゆるのがある、これ皆所謂らしいに背いた身分不相應な物を用ゐるからである。我國の歷史に就いて見るに、奈良朝の頃から、平安時代の間程、人倫道德の腐敗した時は無いでせう、即ち嫉妬とか隱匿とかいふ不良な心が深く、それで老人や病人を、山や田舍道へ棄つるなど亂行極り無く、父子夫婦などの情は如何にも薄く、書くも忌はしい次第である、そこで此の時代の衣服はと

問ふに、いやはや一般に飾ることのみに心を寄せ、男子でありながら、化粧をなすなどの事が大流行であつたのである。嗚呼外形と心との關係は、實に深密なものでありませう。

(二)衣服を淸潔にするといふことは、非常に大切である、夫れ身體からは、常に汗と脂とを何時も絶えず出してゐて、其の汗と脂との中に在る鹽類などの固形物即ち老廢物が、皮膚の表に溜り、それが自然と衣服に附き、其の上外界の塵埃も亦衣服を汚す、斯うなると、夫れが又逆に皮膚に吸ひ込み、遂に病氣を惹き起す源となるのである。實に恐ろしいことゝ言はねばならぬしかのみならず、汚れた衣服を着てゐると、己れ自身は左程に無くも、我に接する人をして、不愉快を感せしむるは一通りで無い、其の汗臭い香を嗅がしめ、淸潔にしてゐる人にまで、病氣の源を傳ふるに至つては實に德義に背くところの罪人と謂はねばならぬ、故に衣服は度々洗濯して、汚れぬ樣に注意せねばならぬ。嗚呼淸潔といふことから考へて見ても、衛生と倫理とは、決して離れぬ所の關係があるでせう。

(三)衣服は溫熱を容易に導かぬ物を以て作らねばならぬ、今假りに金屬を以て衣服を製したとせんか、冬は身体の溫熱を奪うて寒く、夏は太陽の熱を導いて暑く夫れで重くて甚だ不便極る物と言はねばならぬ、次に濕氣も亦容易に導かぬのが肝要である、試みに吸取紙を着たとせんか、外界の水蒸氣や身體の汗を容易に導き、何時も濕つてゐる爲に、空氣は更に通らず、或時は非常に暑く、或時は非常に冷たく、感冒の絶ゆる暇が無いでせう、これは極端の話で、世には斯樣な物を衣服にする人も無いが、併し衛生學を心得ざれば、不知不識金屬的吸取紙流の物を用ゐるやうになるのである。然らば如何なる衣服が概して可いかと言ふに、毛織木綿絹麻といふ番附が概して適當な所である、毛織は空氣を含んでゐることが多くて、しかも濕氣を容易に導かぬから、甚だ衛生に適するのである。一體空氣も溫熱の不良導體であるから、之を含むこと愈多ければ、體溫を愈導き去らぬのである、木綿は毛織に亞

いで空氣を含むことが多いから、矢張體温を導き去り難いのである、絹は身體に觸るゝ感覺は甚だ滑らかであるけれど、木綿に比すれば體温を導き易いから、餘り宜しく無い、麻は濕氣を吸ひ込み、直ちに又蒸發し易いために、其の温熱を奪ひ去ることの甚だ速いものである。然れど盛夏でも毛織を用ゐて、麻を着るなよと言ふのでは無い、盛夏の日中などは、葛衣を着て赫赫たる炎熱を防ぎ、其の晩朝の涼しい時に、フランネルか木綿の單衣を用ゐるとせば、心身常に爽快を覺ゆるのである。嗚呼我を慈しみ我を育て玉ひし老父母や世の憂節知らぬ兒女には、夏と雖も大抵フランネル樣の衣服が善いと心得て可い。

(四)温かなのが善いと謂つて、餘り厚過ぎた衣服を用ゐてゐると、發汗が非常に多く、身體次第に疲勞するは勿論、精神常に倦み易く、道義を躬行するの勇氣を挫くものである、去りとて餘り薄過ぎても感冒を招く所の種となる、厚からず薄からず其の中庸を得んこそあらまほしけれ。

(五)衣服の色の寒温に關係することを、輕々しく看過してはなりませぬ、照りはたく夏の日も、白々としたのを着て居れば、如何にも涼しく見ゆる、否見ゆるばかりで無く、實際に太陽の熱を撥返して、一方ならぬ涼しさを覺ゆるのである。これに反して、冬は黒ッぽいのが可い、これは言ふまでも無く、太陽の熱を吸收し易いからである。又夏は流汗淋漓從つて衣服を汚し易いから、其の汚れの一目瞭然たる白が、殊に適當なのである、小兒は衣服を汚すからと言つて、夏でも汚れの分り難いのを着せておくと言ふは、矛盾極まる無慈悲の父母と言はねばならぬ、嗚呼倫理と衛生とは、一刻も離るべからず、さても離るべからず。

(六)一つ衣服を幾人も共用するといふとは、甚だ宜しく無いことである。時に結核菌の無いとも限られず、時に窒扶斯の種を宿してゐぬとも保證し難し、令ひ一家内の人たりとも、冥々の中に甲の病を乙に傳染せしめぬとも限られねば、大いに注意せねばならぬ、然るに古着屋にある何處の何人が着たのか分らぬのを、漕

毒もせずに其の借用ゐるに至つては、父母に受けたる身體髮膚を、抑々何と心得るか、鼓を鳴らして責ても可い。

(七)衣服は其人〳〵に應じて、寛濶とする樣に裁縫せねばなりませぬ、若しも窮屈であつて、身體の運動に不便を感ずるやうでは、或は血液の循環を遮り、或は身體の發達を妨げ、少なからぬ害を招くものである、彼の西洋婦人が、コーセットで腰を細め、或は我が國人が、帶を確く締めて、胸腔を狹むるに至つては、何れも道德衛生に背く蠻風と言はねばならぬ。

(八)夫れ人は、口や鼻の孔から空氣を呼吸するばかりで無く、皮膚の孔からも酸素を吸ひ炭酸を排き出し、さうして其の炭酸は衣服の間に溜り、溜れば其の幾分は大氣中に散るけれど、其の幾分は再び鼻や口から吸ふやうになる、抑々炭酸は誰でも知つてゐる通り、非常な害物であつて、少し多く吸へば、眩暈或は卒倒するに至るものである、然らば此の毒物を何如なる工夫を以て排除するか、曰く換氣である、我等は時々室内の空氣と、室外の大氣との交換をなさねばならぬと同時に、衣服も亦大氣に觸れしめ、或は着換たり、或は帶を解いて掃つたりして、其の惡氣を追ひ出さねばならぬ、夢忘れてはなりませぬ。

道理に適ひたる衣を着るは正妻を愛するに似たり。華美を目的としたる服を好むは情婦を近づくるが如し。前者は天地に俯る所無く、後者は本心に愧る所あり。

これにて衣服の本筋丈は、大畧述べましたが、事の序に、附屬品までも單簡に說いておきませう。

▲夜具――は夏冬に拘らず、通常衣服の三倍位を標準として重着となし、殊に胸腹部はフラネル樣の物を以て、溫包せねばなりませぬ、何となれば、睡眠中は何れの部も休んでゐるけれど、胸と腹とは、如何に熟睡してゐても、或は呼吸をしたり、或は食物を消化させたりして、絶えず運動してゐるから、血液は多く此の方面に集つてゐるからである。又夜具は甚だ汚れ易いものであるから、度々洗濯をせねばならぬが、併し之

を爲すは甚だ面倒なことであるから、白木綿を被ふておいて、時々清潔なのと取換るが可い、又夜具は屢々日光に晒さねばならぬ、日光は大抵の黴菌を殺すものである。

▲雨具＝勿論濕氣を通さぬが大目的である、これは言ふまでも無く、毛織類を撰ぶが肝要である。傘は蝙蝠傘よりも蛇目的が遙かに勝つてゐる。

▲穿物＝靴は少し大きめに製したのは、血液の循環及び筋肉の發育上に差支は無いが、さうで無いのは甚だ宜しく無い、偖足は左と右とは大小の差があるものであるから、靴を製する前、別々に寸法を取らねばならぬ。下駄は靴のやうな心配は無く、且つ足に大氣が觸るゝから、大いに善いとは言ふもの丶、靴に比ぶれば運動が不自由で、しかも塵埃がかゝり易いから、是非とも足袋を穿かねばなりませぬ。

▲襟巻＝寒風凛々面を刮るが如き冬の日に、外出する時はいざ知らず、常には可成用ゐぬが可い、夫れ頸は身體中最も温かい部であつて、殊更之を被ふ必要が無いのみならず、一度被ふ習慣が附けば、暫時取り除いても、感冒をひくやうになるものである。

▲装飾＝櫛　笄　根掛簪など、分に應じて淡泊とした飾りは衛生上に害無きのみならず、德義上に於てもお勸め申す方ではあるが、鉛毒を含んだる白粉を、コテ〳〵塗るに至つては、天然の美を害し、且つ鉛毒を皮膚より吸收して、少なからぬ害を、大切なる身体に與ふるものである、然れど鬢附梳油を髪に塗り、西洋白粉生臙脂を顔に化粧するが如きは、害の無いことで場合に依ては、之を用ゐて、婦人の天性を全うせらるる方が善いでせう。

（完）

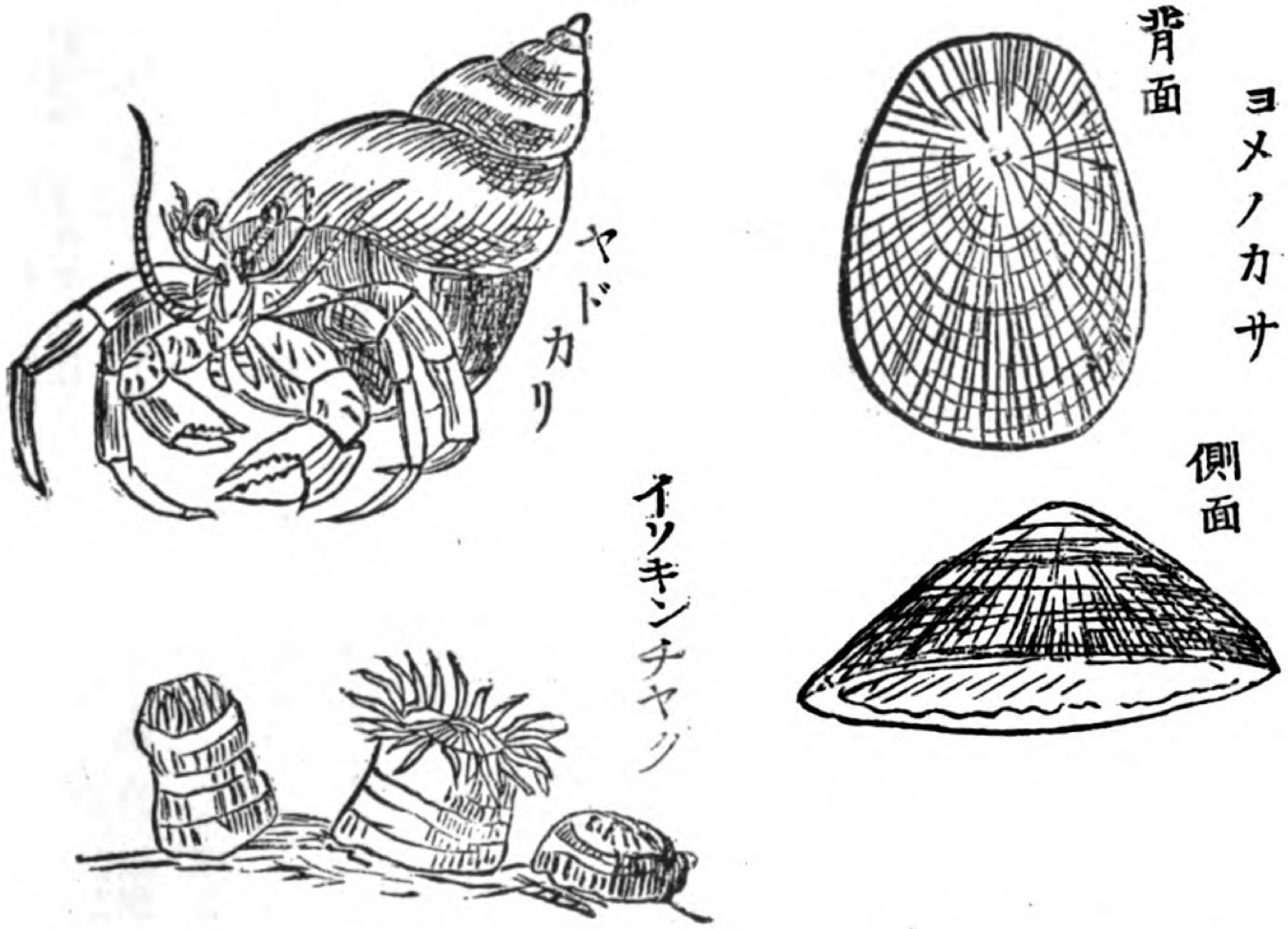
海水浴場の觀察

佐藤禮介

八月は夏中の最も暑い時で仕事も手につかない程に心も躰も倦む時であります、團扇や扇の力で涼しさを得やうとしても、庭の樹蔭で涼風を迎へやうとしても中

く々に暑さの苦しみを遣ることは出來ません、殊に塵深き都會や市街の地に居る人々は猶更身の置き處に苦しむのであります、斯かる時に海邊に行いて趣の變つた景色を眺め涼しく清き空氣を呼吸し或は海水に浴し或は散策を試みたならば第一皮膚が丈夫になり、胃腸でも血の循環でも皆強くなつて驚くほど健康を増すでありましやう。

海水浴の効能は只躰の上ばかりでなく心の上にも著しい効があるもので、生來多病な人は氣分もとかく鬱するものでありますが、海水浴によつて躰が丈夫になると、心も爽か



になり氣分も勝れて快濶になります、其の上、海水に浴する傍 其の近所に在りふれた貝類や魚類や海藻の類などを集めて観ましたならば天然の仕掛けの實に巧みなこと、生物の働く樣の奇妙なることなど一々眼の前に現れるので、夏の暑さも世のうるさゝも皆忘れる程でありましやう

▲磯の邊

海邊に出て時々海を眺めて見ると、海の水色の變ることがあります、空に一點の雲のない時には海の水が眞青で丁度藍を流した樣であります、又夕日が海に入る時には海の面が赤色に見えることがありま

す、又空が一面にかき曇つて夕立の降りさうな時は海水が一樣に灰色に見えます是は空の雲が色々な色に變るので其の色が海の面に映る爲であるといふことです、

磯の邊や海中に突き出た岩の邊を歩いて見ると淺い海の磯に色々な貝殼が附いて居ります、ウミニナや陣笠貝なども澤山居ります、ウミニナは長さ六七分ばかりで圓錐の樣な形して居ります、是は一寸人の手が觸れると直に水底にころげ落ちて貝の蓋を堅く閉ぢます、此の仕方は全く敵を防ぐ手段なので、蓋を閉ぢるのは敵の侵入を防ぐ爲、ころげ落ちるのは岩の間や藻の蔭などに隠れて敵の目を免れる爲であります、陣笠貝は一名ヨメノカサといふもので丁度陣笠の樣な形して居ります、蓋を持たない貝ですから其の開いた口で岩に附いて居ります、人が之を取らうとして手を觸れますと、益々堅く岩に吸ひ付いて到底動かすことが出來ぬほどです、是が此の貝の敵を防ぐ唯一つの手段であります。

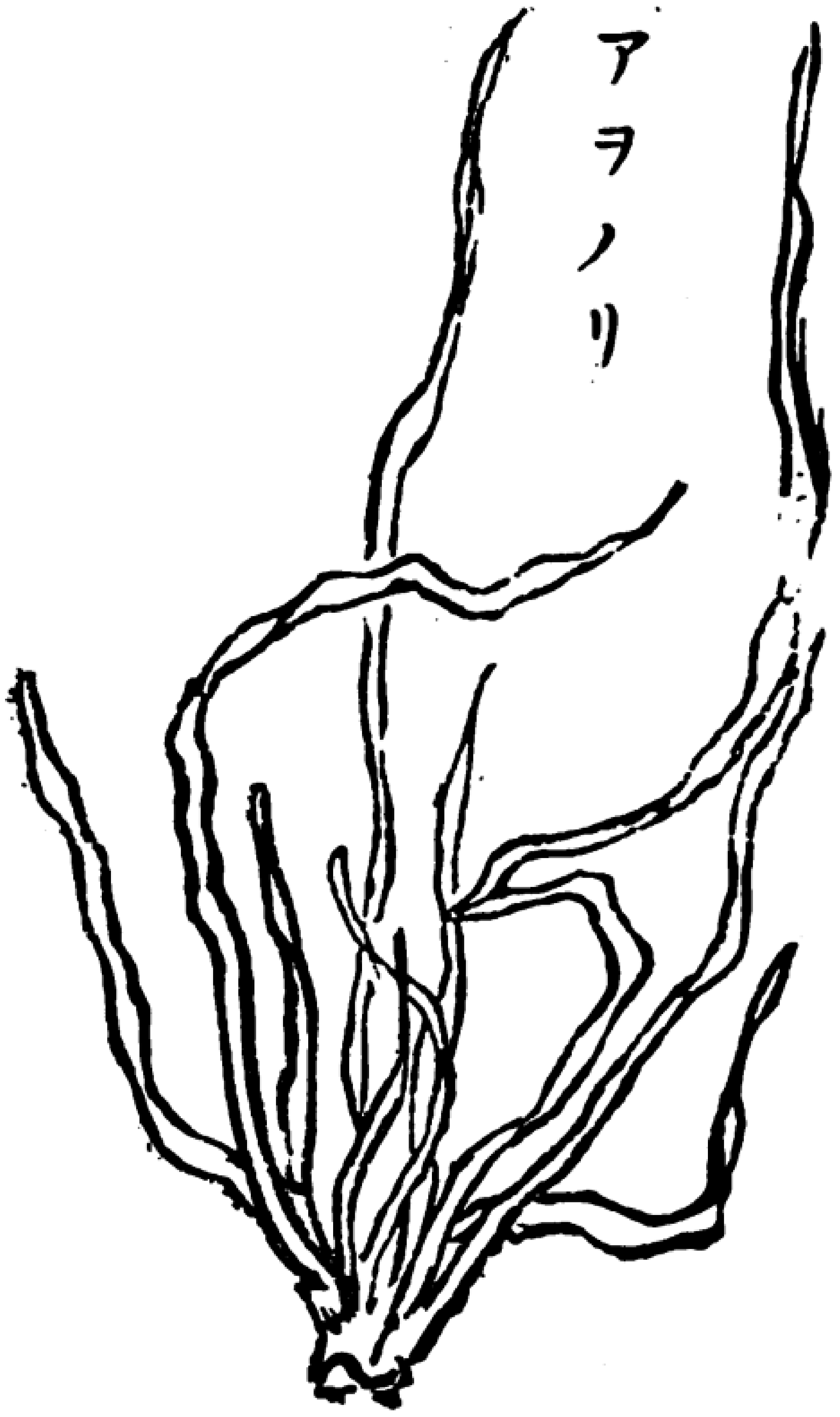
岩や磯の水ぎはを見て居るとガサ〳〵と隨分速に這ひ廻る貝殼があります、人が近寄ると手を觸れない前に水底にころげ落ちます、其の機敏驚くべきものであります、貝類にしては餘りに活潑過ぎる樣であると怪んで之を手に取つて見ると、早いも道理、之は貝ではなく、只貝の脱け殼にヤドカリといふ蝦の種類が借家して居つたのであります、此のヤドカリといふ蝦は年經てだん〳〵軀が大きくなると、從來の借家に軀が入り得ぬ程窮屈になるので又別に程良い大さの明き殼を搜して軀を入れ換へるものであります。

又水の淺い磯に美しい菊の花の樣な虫が居ります是はイソギンチヤクと云ふもので、形は短い竹の節に菊の花瓣を付けた樣なものです、色は赤いのや、青いのや紫のや、樣々であります、其の花瓣の樣なものは手であつて、之を擴げて食物を捕り、手の眞中にある口の中に入れるのであります、人が棒を以て其の虫の手に觸れると急に其の手と體とを縮めて小さくなり、丁度岩の瘤の樣になつて動物とは思はれぬ樣であります是

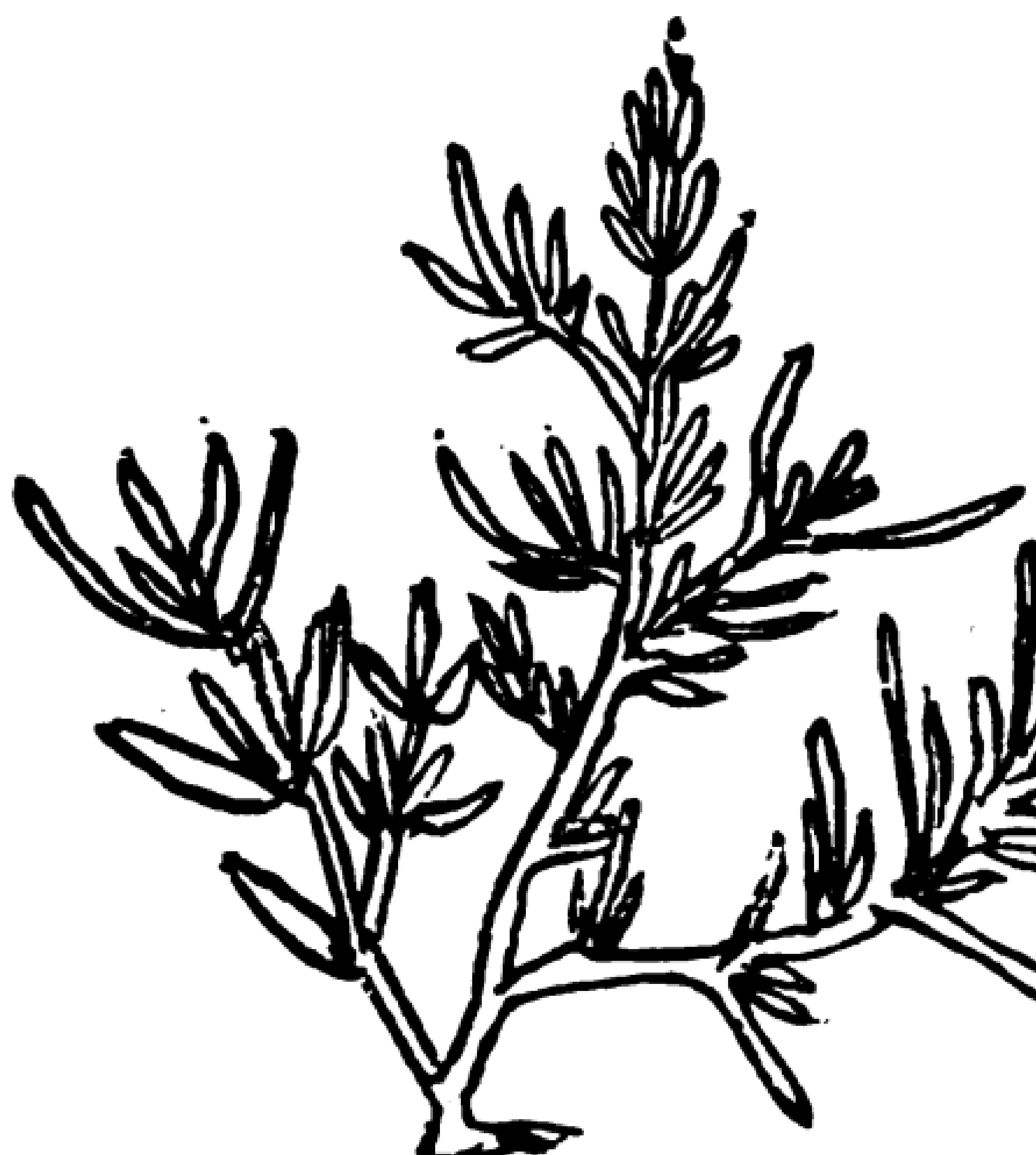
も此の虫が敵を免れる爲の策略に過ぎません。

波のザブ〱打ち寄する荒磯の上に行いて見ると一面に海の藻がついて居ります、ヒヂキ、アヲノリなど最も普通なものであります、此の二種は共に食用になるものでありますが、其の生鮮なものは乾物屋の店先にあるのとえらい違ひではありません、

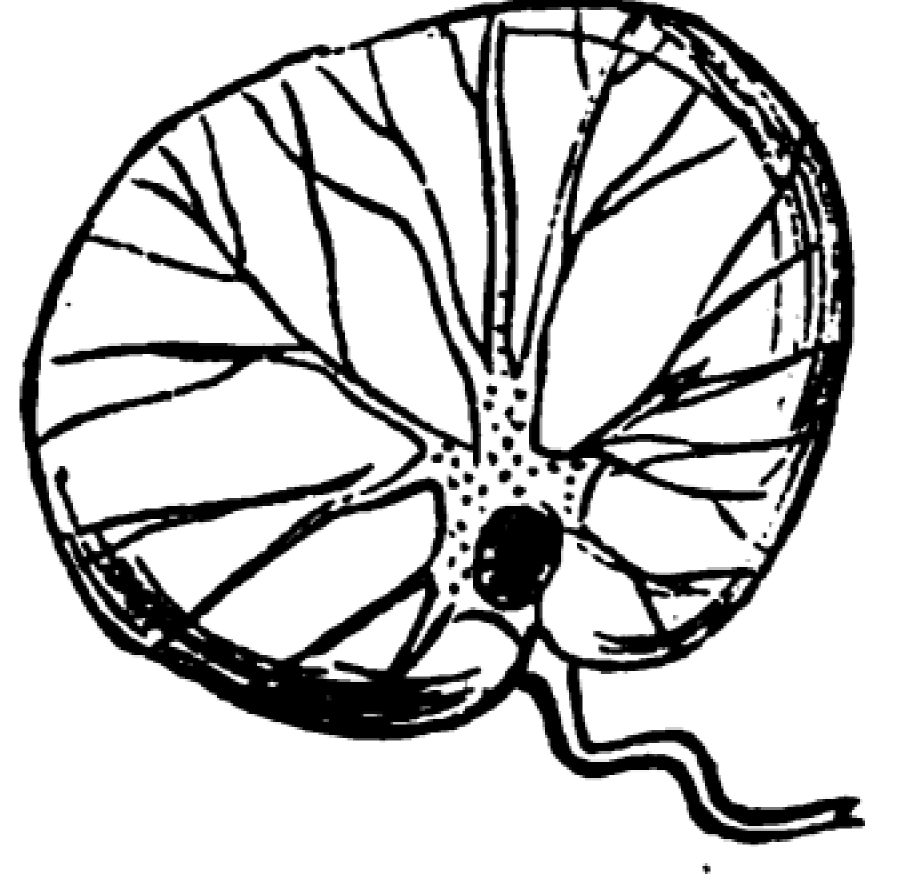
夜濱邊に涼みに出て、月は落ち星ばかり明かな時、家へと急ぐ歸り



アヲノリ



ヒヂキ



夜光虫蝕(廓大図)

路に不圖海上を見ると、波の上がピカ〱光る、折り節、釣り場から戻り歸つた漁舟などがあれば船路の浪が皆光つて道の如くになり、漁夫の動かす櫂の先も光るのを見ることがあります、是は水の光るのではなくて夜光虫と云ふ小さい虫が光を放つのであります、此の虫は肉眼で僅に見ることが出來るほどの小さな虫で其の直徑一厘か二厘の長さに過ぎません之を顯微鏡で見ますると、毬形であつ

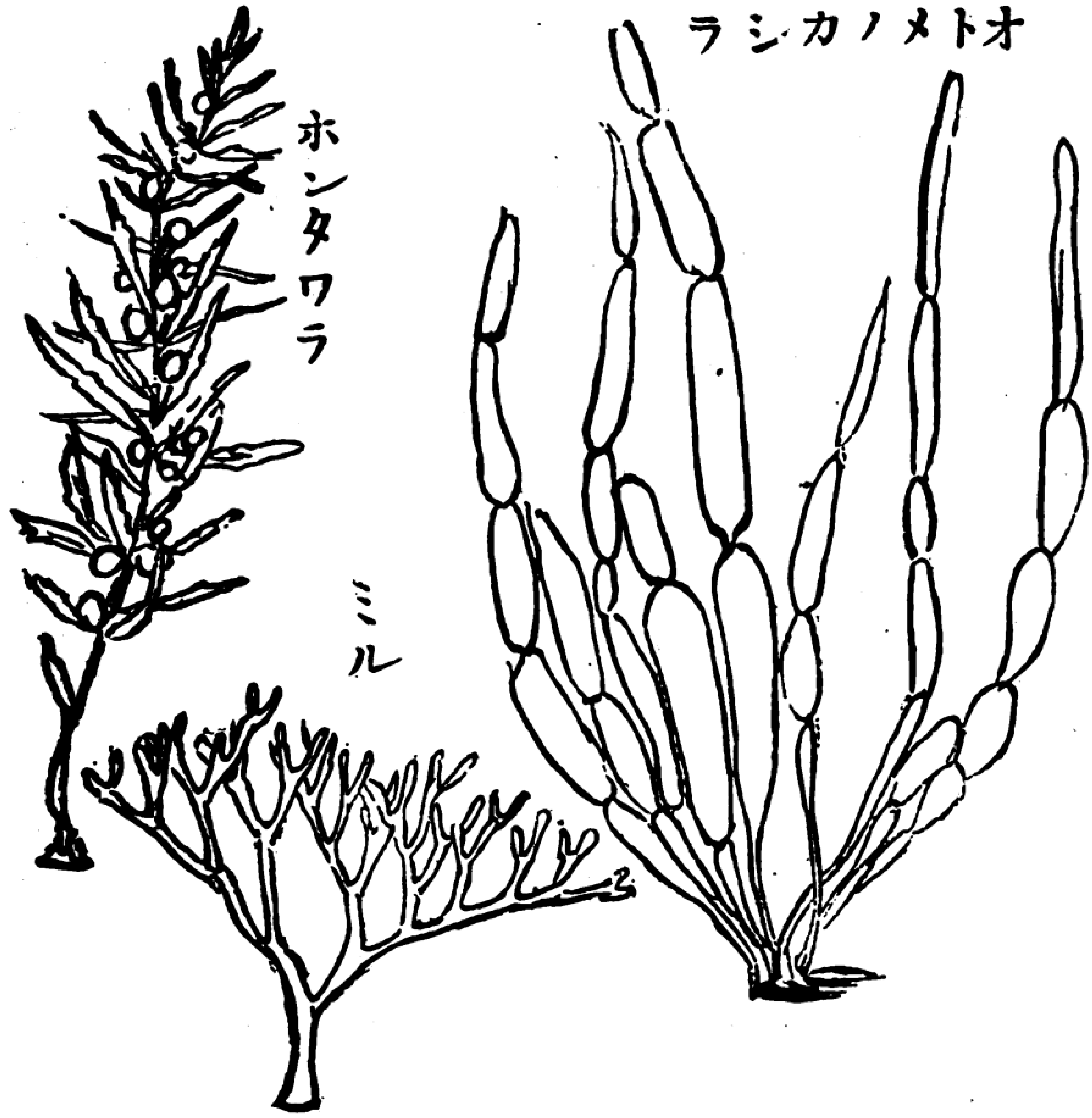
て其の一方に細い紐が付いて居り此の紐を動かして泳ぐのであります、昔の人は海の水の光るのは鹽の力である、海の鹽は浪を光らする魔力を持つて居るもの、樣に考へてあつたそれは全く迷信であるのです、

▲砂濱

海岸は磯ばかり多くて砂濱のない處もあれば其の反對で砂濱ばかり廣い所もあります、砂濱には海藻や、貝殼が澤山打ち寄せられて居る處があります、斯樣な濱邊には淺い近海の貝や藻ばかりでなく深い海底のものも、遠い大洋に生活する生物も皆海濱に打ち揚げられて居るのでありますから、注意して搜しますると意外に珍しい種類を見出すことがあります、さてどんなものが最も普通であるかといふとホツキガヒ、ハマグリ、アサリ、などもあるでありましやう、又ウツラガヒ、アクキガヒ、イトカチガヒ、なども往々見當るでありましやう、其の他種々な種類がありますから少しく貝類のある濱邊では四五十種を集めることは暫時の間でありましやう、往々貝殼の脊中に錐もみした樣な穴のある貝殼を拾ふことがある、此穴はツメタガヒといふ大さ二寸位の貝が明けたのであります、ツメタガヒは殼丸く卷くことも少く一寸見ると蝸牛に似て居ります、此の貝は軀から酸い液を出して他の貝の殼を溶かし穴を穿つて其の肉を食ふのであります

浪打ちぎはに積み重なつた海藻には種々なる種類があります、ホンダワラ、ツノマタ、ミル、オトメノカシラ、などもあるであらう、ホンダワラは細い葉と莖との外に圓い球が枝毎について居ります、此の球は中に空氣を含んで居るので此植物が水中にあつて眞直に立つて居ることの出來るのは全く此の空氣の球の爲であります、オトメノカシラも矢張り其の膨れた處に空氣を含んで居り其の効用は莖の直立を助ける爲であります、相摸の海に沿ふて居る濱邊には折々偕老同穴といふ海綿の種類が打ち揚げられることがある、長さ一尺許りで紙屑籠の樣な形して居ります、此のものは深い海底の泥の中に其の根の樣な處を挿しこんで直立して居り籠の周圍と上の面とには小さな穴が澤山開いて居る、

蝦の種類が此の小さい穴から籠の内に這い込んで其の中で生活して居ります。蝦は偕老同穴の籠の内に居れば第一、敵から襲はれる氣遣ひがなく、第二に食物は周圍や上面の小さい穴から澤山流れ込むので食物に不足しないといふ、種々な便利があるものですから蝦は知らず〳〵長く籠の中に逗留して居る、其の間に躰はだん〳〵と生長して來るので遂には周邊にある小さい穴から脱け出ることが出來ぬ樣になります、そこでとう〳〵籠の内に居殘りて命の終るまで居るのです、それゆゑ形完全であつて少しも傷もない偕老同穴を見るといつでも蝦の死體が入り居るのでしかも蝦は通例二疋入つて居る處から世人は、いつでも二疋入り居るものと誤信して偕老同穴と名づけたのでしやう、しかし實際は蝦が必ニ疋とは限らず一疋なこともあり三疋なこともあります。



▲家への土產

黑茶く燒け付いた顏色、肥え太つた手足・腦の力の增加、爽快なる氣質などは皆海水浴場から家路に持ち歸る貴い土產

でありますが此の外、浴場で觀察したり、採り集めたものを奇麗に整へて持ち歸るのも極めて有益なことであります。

濱邊から拾つた貝は大抵清潔ですから其のまゝ箱などに入れることが出來ます磯から集めた生の貝は一旦煠でゝ肉を取り去つた上に灰水か石鹼でよく洗つて仕舞ふのです、凡べて貝殻を種類分けしまするには貝の蓋が必要ですから成るべく之を失はない様にすることが肝要であります。

海藻を永く保存して家への土產にするには、先づ西洋紙のやゝ厚いのを買ひ求め程よき大さに切り、其の紙片と海藻とを一所に金盥の水に入れ、海藻を紙の上に載せながら靜に水の上に持ち上げ水を滴らし去るのです、次に漉き返し紙か又は古新聞紙を、吸取紙として下に敷いて其の上に、前に用意した海藻をのせたる紙を置き、其の海藻の上に寒冷紗か又は天竺木綿の切片を被ふのです、か樣にして吸取紙、西洋紙、海藻、木綿といふ順序に一層〳〵づゝ重ね最も上には板と重り（石でも木でも何にても宜し）とを載せ隔日位に其の吸取紙を取り換へて每回乾いた吸取紙を用ゐれば凡そ十日位で海藻は良く西洋紙に貼り付き色も變らず薄く且つ乾いて丁度畫に描いた樣に奇麗になります、斯樣な海藻の標本をば其西洋紙を綴ぢて立派な表紙を付けると、一部の書物の樣な標本集が出來ます。

あゝ貝と藻の土產は、實に智識を含める土產、健康を增した紀念の土產であります、其の土地の名產なる製作品、調理した食物の鑵詰類なども皆家路への土產となるのでありましやうが、しかも自ら手足を勞し丹精を凝して集め作つた貝と藻は亦云ふべからざる價値あるものではありませんか感を同じくする人々は宜しく此の益と樂しみとを擇り玉へ。

（完）

博物小話

木村小舟

其八　真珠は如何して出來るでせうか

真珠貝と云ふものは、其色と云ひ質と云ひ、真に品がよくて、且つ奇麗なので、昔しから種々の細工に用ひられ、分けて婦人用の装飾品として、なか／＼重寶がられます。

一體真珠は、アコヤ貝と云ふ貝に出來るものですが、世の中の人は、アコヤ貝と云はないで、只真珠貝と申して居ります、夫れで此の真珠と云ふものは、人こそ真に珍らしがりまするが、實際貝の身になつて見れば、甚だ厄介な物に相違ありません。

と云ふのは、アコヤ貝の介殼の内部に、或る作用で以て、細かな砂粒の一片が入りますると、其爲めに貝の外套膜は、一大刺激を被り、遂に其結果として、自分の貝殼と同質の物質を、續々分泌致し、以てこの砂粒を包み込んでしまひます、之こそ實に所謂真珠なるものです。

で今若し、一個の真珠を取りまして、之を破碎して見ますれば其中心には、必ず一個の砂粒があつて、明かに存するのを見ませう、果して其の様にして、真珠が出來るものなれば、アコヤ貝を飼養して、或る時ひそかに其の外套膜の間に、砂粒の一片を入れて置き五六年を經てから、其貝を破つて見れば、真に立派な大きな真珠が出來て居るのです、彼の真珠佛と云ふ、貝から、生れた佛體も、實はその初め小さな佛像の元型を、貝の内部に入れて置いて、自然に真珠質を附着せしめたものに外ならぬので、之は支那の名産だと云ふ事です。

其九　枝蛙の卵は木の上

枝蛙と云ふ蛙は、その形が小さくて、真に可愛いものです、彼は專ら木の幹や、又は葉の上に居て、蜈蚣や又は羽蟲を捕つて、盛に夫れを食ふて呉れますので、

何時でも布袋の樣な、便々たる腹を抱えて、クックと笑つて居ます。

玆にこの蛙は、面白いことには、體の皮膚の色が、時々樣々に變るので、例へば青い葉の上に居るのは、皮膚の色が眞靑で、まことに美しう御座いますが、木の幹や石の上に居るのに限つて、鼠色の穢い斑紋を付けて居ます、ですから氣のない人は、全く別種の者の樣に思ふのも、決して無理ならぬ事です。

西洋の農家では、この蛙を瓶の中に飼つて、晴雨計の代用とすることを聞きました、實際彼の感覺は實に鋭敏なもので、若し雨の前に當つて、空氣に變動を起すと、頻りに大聲を發して鳴き立てますでよく、其動靜に注意すれば、眞に完全な晴雨計とすることが出來るのであります。

さて又此蛙は殿樣蛙や蝦蟇などの樣に、池や沼の中で、卵を産するのではなく、全く山の木の上に、白い粘氣のある塊形のものが夫れなので、彼はこの內で蝌斗に變化するのだと申します。

其十　冬虫化して夏草

五月雨の降り止みし頃、庭の面の苔を分けて拔き出す菌類に、殊に怪しきものは、野虫蕈でせう。

野虫蕈は、その色は茶褐色で、長い拗みた樣な形で、夫れが生長して僅に三寸位にしか至りませんから、氣のない人は、別に何とも考えないけれども、若しこの菌を、だん／＼堀り下げて見たならば、誰しも其意外な現象に驚くことで御座いませう。

實に此の野虫蕈の基部は、擬ふ方なき一疋の蟬の蛹で、其蟬の蛹たるや、背中の處が少し破れて居る計りで、體は何ともなく、立派に原形を存して、木乃伊となつて居るので有ります。

ですから昔しの人は、冬虫化して、夏草となるとの說を持ち出して、冬虫夏草をのむしたけと讀んで居るのです。

併し實際、虫が化して草になつたり、草が化けて虫になるなどゝは、世に有らぬことですが一體これは又、

如何云ふ譯かと申しまするど、此の夏虫冬草の胞子が、一度地上に散り飛びまするど、夫れが雨や風の相槌で、逐に地下に潜り込み、だん／＼苦心をする內に、蟬の子の背中なり、又頭になり行つて、ベッタリ附着いて、こゝを本陣として、だん／＼手を伸ばし、菌糸を漲らします、附かれた蟬の子こそ眞にいゝ迷惑で、丁度肺結核の細菌に身入られた人間同然、體はだん／＼と衰へて、今に蟬とならうとする處を、酷くもやられてしまいます。

さて冬虫夏草は、いゝ養料を分捕りまして、折りを待つて居る內、五月雨空の地は柔かになり、頭を拔き出すにも、眞に都合のいゝ時機となるのを見濟まして、さてこそ庭の表に續々生ずるのであります。

其十一　雌雄一體の蟲

下等動物類の中には、一匹の體中に、雌雄兩性の生殖器を有つて居る、所謂雌雄同體のものが、甚だ多い樣に思はれます。で今其の一例を擧げて見まするど、田螺や蝸牛や蚯蚓などは、みんな夫れなのです、して見れば、かう云ふ動物は、別段交接の必要がないかと申すと、決してさうでは有りませず、彼等も又、雌雄相慕ふ處の本能性は、充分に認められます。

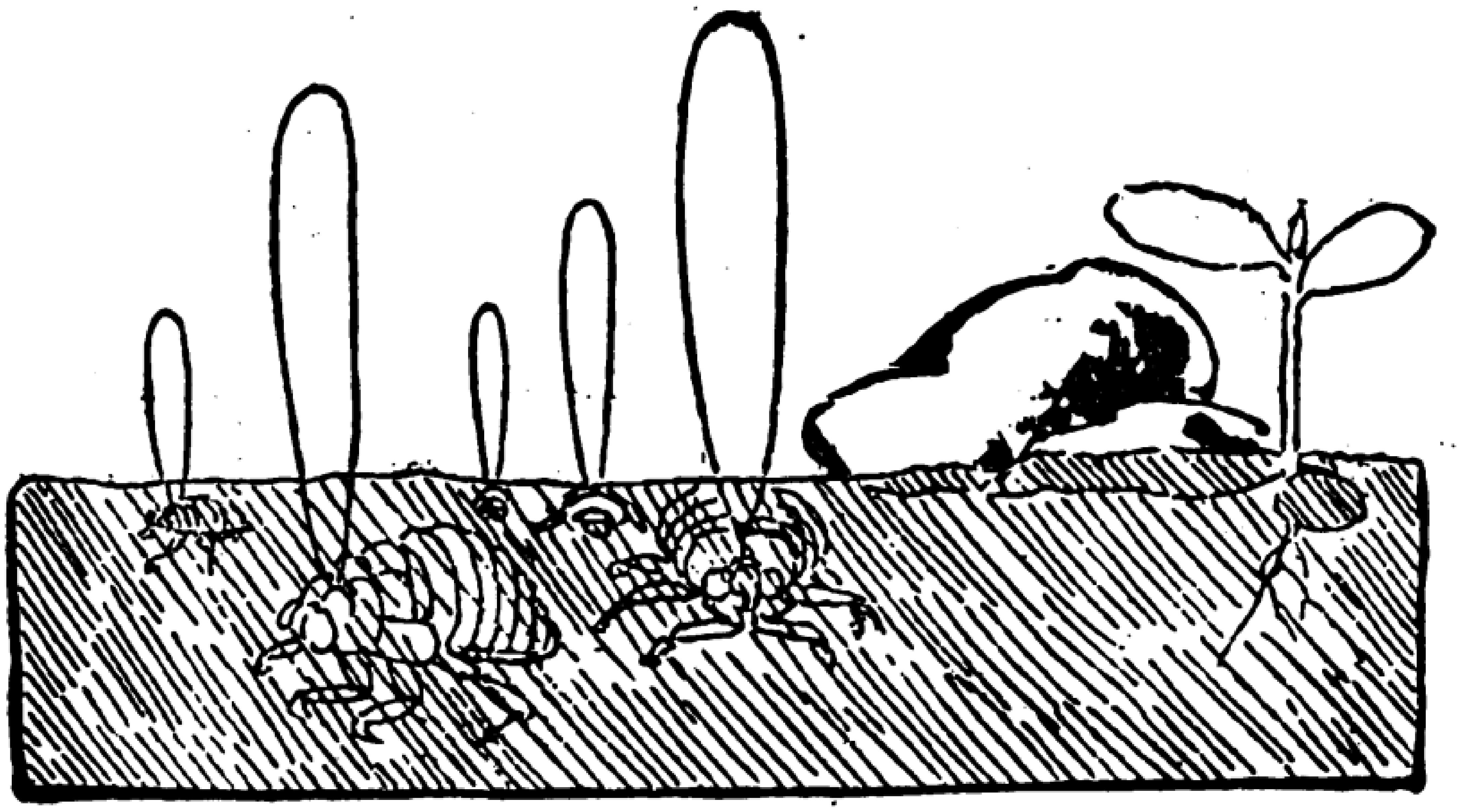
然らば何の必要に迫られて、雌雄同體をなして居るかと申すと、此の蚯蚓だの又蝸牛だのと云ふ虫は、一體に運動が不自由で、雄虫は思ふ樣に飛び廻つて、雌虫の在所を求むると云ふことは、どうしても出來ないのです。

で餘程都合のいゝ折でなくては、雄虫は左なきだに數の少ない雌虫に相會することは、出來ないので、是非とも各自に、兩性を具備するの必要が御座います、と云ふのは、其の交接期に及んで、偶然にも二疋が相逢ふて、互に受精作用の交換をなすことゝなつて居ますが、なんと天の配劑は、驚くべき微妙なものでは有りませんか。

其十二　夜の花と夜の蛾

暖かな日光のさも、威勢よく照り渡る内は、眞に立派に咲いてた蒲公英や蓮華草も、日の入ると同時に、みんな夜露を避けて、睡眠つてしまひますが、こゝに又奇妙なのは、月見草や待宵草の花は、大抵日が入つて、夜になるのを待つて開きます。

然るに晝の花は、蝶や花虻が、夫れ〳〵實を結ぶ手助けをして與れますけれども、この蝶や虻も、蒲公英や蓮華草も一緒に、花の陰やら葉の下で、夜風を凌いで眠りますので、折角開いた月見草や待宵草は、誰も來て手傳ふ者が御座いませんから、定めし花は開いても、實は出來まいと思ひの外、こゝに又妙なことには、かう云ふ夜咲く花を索めて飛んで來る夜蛾と申す虫が御座います。



之れは丁度蝙蝠や夜鷹と同じことで、晝の内は眞に勢がなく、たゞぼんやりと悄氣て居ますが、其の代り日が一旦暮れやうものなら、大きな眼を開いて、縦横無盡に飛び廻ります、そこで此の月見草や待宵草は暗の夜にもよく自分達の居所の判る様に、わざと黄色い花を開きますから、夜蛾は直に例の觸角で以て夫れをかぎ付けて、盛に受精作用のお手傳を致します。

で若し月見草の咲く頃、薄月を踏んで土手の邊を徘ふ時は、まだ充分花の開かないのを、この夜蛾が來て、無理に長い舌で以て、開かせやうとあせて、居る様な、面白い現象を見ることも出來るのです。

一體この夜蛾、即ち月見草へ來るのは、重に天蛾科の

背線雀だの、又は蝦殼雀だの云ふ種類で、之はみんな彼の氣味の惡い、芋虫共の親なのであります。

其十三　動物の壽命に就て

むかしから鶴は千年、又龜は萬年の長壽を保つなど、申しますが、又人生僅か五十年、人生七十古來稀なりと云ひます。

七十古來稀なる人間が、千年の鶴の壽を研究し、萬歳の龜の齡を調べたと云ふのは、聊か受取難い處の樣でも御座いますが、又全く荒唐として、捨つべきことでも無からうかと、私は信じて居ります。

ファラデイ氏の研究に依りますれば、總べての動物類の壽命は、大槪其の發情期から、五倍を以て、最も正確なるものとして有ります。又龜齡鶴壽以外に、これ迄泰西の科學家、又は生理家の手に依つて、研究されました處の、動物年齡の二三を記して見やうならば、先づ最大長壽をするものは、矢張り龜なので、之が凡そ五百歲、次がは之も海中の覇王として其名は高き鯨ですが、夫れで龜に及ばざることが一百歲、又蟇と云ふ仙人は一寸見ました處では、體も瘠せて今にも斃れさうですが、實際の定命は と云ふと、優に百歲を保つとの事です。

して見れば人間の五十年は、まことに短かいもので、實に慨かはしい話です、何んと皆樣一ばん充分に衛生法を講じて、龜の如く五百歲位の長壽をばせめて、保つことに致したいものではありませんか。

其十四　牽牛花の研究

朝顏と云ふ草は、その姿が何處ともなく女らしく、まことに優美なものですが、夏の朝の明くる間を待つて咲き揃ふ心地よさは、到底外の草花に、求むることの出來ない風情が御座います。

小丸蜂と云ふ小なさ黑い蜂は、朝顏の花の開くのを待つて居て、その花蜜を吸ひに來ます一體この蜂は、一面から見ますれば、朝顏の花を助けて、實を結ばせて與れますけれ共、夫れが爲めに、又折角の花を、わた

ら台なしにすることも決して少なくはないです、夫れは又どう云ふ譯かと申しまするに、小丸蜂が最初先づ花質のよくない、朝顔の花蜜を求めまして、次には花質の最も優れた、いゝ花を尋ねて來た時には、既に花質の疎惡な花で、自分の足には、澤山な花粉を付けて來て居ますので、夫れをみんないゝ花の方に殘しておきます。

この殘された花粉は、柱頭に止まつて、だん〳〵消化され、遂にいゝ花の子房に行つて、種子になつて仕舞ひます。かう云ふ風に、今年は牡丹咲の立派な花も、その種子は必らずしも牡丹では御座いません、これもみんな例の小丸蜂がおせつかいをするからです。

で今これを試驗して見やうと思へば、例へば白色の朝顔の柱頭に、瑠璃色の朝顔の花粉を移して、所謂人工生殖法を行ひ、そして結實した種子を採集して、翌年播いて御覽なさい、やがて咲く花は、最早や去年の白ではなく、瑠璃色を交へた、異種の花と變つて居ます。

其十五　深溪の魚族

夏の日に、若し試みに深山の奥に分け入りまして、其溪間に下り、僅に木の葉や小石を分げて、流れて居る谷川の、石を起したり枯れ葉を押し流したりすれば、不思議にも小さな魚が、さも物に驚いたかの様に、その石の下や枯葉の影から、躍り出ることが御座いませう。

水のある處に魚が居るのは、不思議ではなく、却つて水のある處に、魚が居ないのが不思議かも知れませんが、併しこの深流は、その水源は岩間の清水で、魚の湧いて出られる様な道はなく、又その下流はと申しますと、百尺高い斷崖の絶壁から、叫び落つる有様で、小魚の上る便宜は、どうしても御座いません、夫れに今この枯れ葉の陰、石の下に魚の影を認むるのは、矢張り不思議では御座いますまいか。

處でこの小魚は、一ばん最初は或る池か、又は河に居たのですが、不思議な縁で、そのまだ卵であつた、水

藻の葉に附いて居た頃、鴨か雁の様な水禽の足にかゝつて、此の處まで連れられて來たのです。實を云へば、再び孵化して、魚と云ふものになる運命はなかつたのを、幸福にも再び水に會して、日を經るまゝに、形を現はしたので御座います。して見ればこの溪流の魚こそは、親の顔を見なければ、波しづかなるお池、流れ廣き川も見たことは御座いませんが、その代り漁夫の網目も知らで、まことに呑氣に、天年を全ふするので御座いませう。

其十六　蓮の葉の色

蓮の葉の色は、何時見ましても、霞か靄でもかゝつた様に、曇つた薄緑色に見えますが、之は一體、どう云ふ譯であるかと申しますると、蓮の葉の表面には、まことに細微い、丸で天鵞絨の様な、小突起が一面にあり、この間に空氣が這入つて居りますので、夫れが光線に反射されて、充分の緑色を現はすことが出來ないのです、春の七草の中に、鼠麴草と云ふは、小さな黄色い花を開いて、大さう人にも賞美せられ、昔しは草餅の材料にもなつたのですが、この草の葉には、又夥しい茸毛が、透間なく密生して居り、その毛の中には空氣を含んで居ますし、又河原の瘠地によく繁生する、河原鼠麴草は、秋になつて白い色の花を開きますが、葉は矢張り白く御座います、で夏の曉に、眺めまする蓮の葉の色は、毒々しい緑ではなくて、却つて曇つた様な、薄緑でありましてこそ、まこと美しい様なもので、春の野に、百花色香を競ふ處、ひとりこの鼠麴草の葉の白いのは、一層は目立ちて、景色を整ふるものでは御座いませんか。

其十七　麝香を發する蝶

揚羽蝶の一種に、麝香揚羽と云ふのが御座いますが、この蝶の前翅からは、非常にいゝ香ひを發するので、かう云ふ名を付けられたのです、夫れから又、野蠶の雌蛾を、屋外の小籠に入れて、置きますると、夜に入つてから、何處からともなく、澤山の雄蛾が飛んで來

りまして、小籠の四方を取り巻くことが御座います。一體蝶や蛾の交尾期になりますると、雄蟲の體中からは、まことにいゝ香を分泌致します。そこで又雄蟲の觸角は、よく發達して居てどんな、遠方のものでも、よく嗅ぐことが出來る樣になつて居ますので、直樣これを嗅ぎ出して、飛んで來るのです。この雄蛾が香氣を嗅ぎ得る處の鼻の力と云ふものは、實に達者なもので、或生物學者が研究の結果に依りますれば、慥かに二十英里の先から、既に雌蟲の所在を知り得るとのことで、人間と雖も備ふることの出來ない、靈妙な機關を有つて居ます。

して見れば麝香揚羽蝶の、麝香を分泌するのも、全く雄蟲を呼ぶ機關なので、要するに繁殖の天職を全ふする、一の道具と云ふて、差支ありますまい。

其十八　種子の力

條蟲は萬難を排して猶生を保ち、肺結核のバチルスは砂と混じ泥に交はつても決して死滅するものでは有りませんが、玆に又植物類の種子の力と云ふものも、之を適當に保存致しますれば、なか〳〵強いもので、例のロビンソンクルーソーが、孤島の獨棲時代に、古い小麥を地に蒔いて、パンを製造し、久し振りで舌皷を打つたと書いて御座いますが、猶夫れよりも驚くのは或博物學者の實驗に依りますれば、紀元二三百年の頃に築かれた、羅馬人の墳墓に、その副葬物として收めて有りました、或る一植物の種子は、近く近世に至りて之を播きましたれば、猶立派に芽を出して花を開き且つ實まで完全に成熟したと云ひ、又埃及のピラミットから發見された小麥の種子は、之も今日まで生を保つたとの事です、或人が生きた虱を小箱に入れて、三年の後に開けて見たら、矢張り生きて居たと云ふ事をきゝましたが、實際下等生物の生存力！、分けて種子などの力は、到底吾吾の斗り知り得る沙汰では御座いません。

（完）

懸賞文募集

女學世界
定期增刊
（九月十五日發行）

花すゝき

投書〆切八月二十日限

才媛詞藻
秋の卷

我が女學世界は婦女文藝の進歩を圖るの目的を以て、來る九月十五日を期し、定期增刊『秋の卷』を發行せんとす『花すゝき』即ち是なり、意匠の斬新なると資料の有益多趣味なるとは今更喋々を要せずされば先づ編輯の準備として汎く作品を天下の女學界に募る、懸賞課題等は下に記す如し時は是れ初秋冷露虫喞の好時季に會す江湖の才媛乞ふ徐ろに錦繡の心腸を練り華麗の筆を揮はれんことを

文種

▲小說（文体隨意）
二十行二十四字詰
紙數十枚まで

▲和歌（秋季雜題）
葉書に一題一首の事

▲新體詩
三十句限り

▲消息文
二十行二十四字詰
紙數一枚限り

▲雜文
二十行二十四字詰
紙數二枚

▲寫生文
二十行二十四字詰
紙數三枚まで

賞品

甲賞　金五圓（圖書切符）三名
乙賞　金貳圓　仝　六名
丙賞　金壹圓　仝　拾二名
秀逸　金五拾錢仝　二拾名

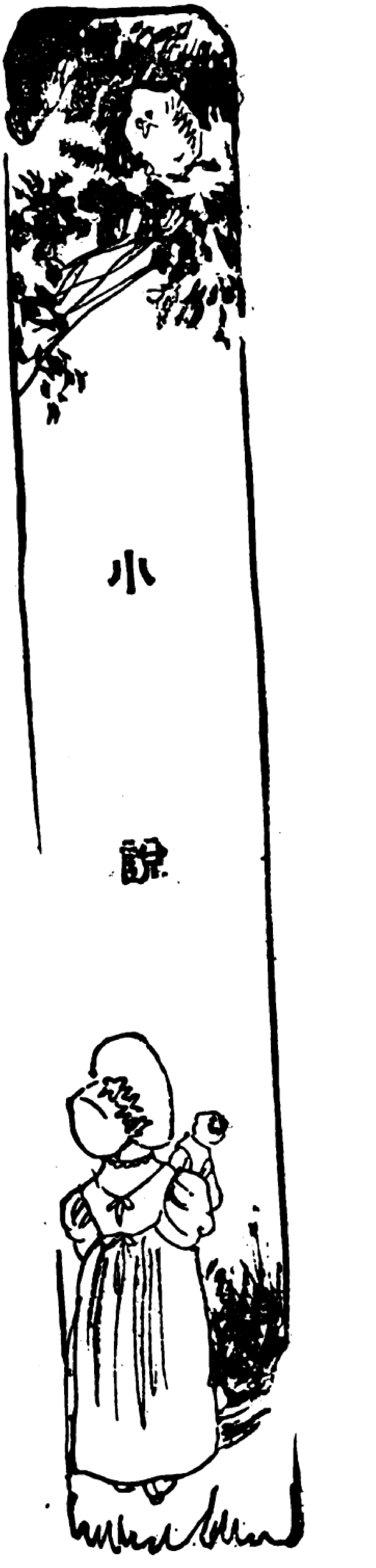
注意

▲和歌の高點は別に乙賞以下にて相當の賞品を呈す
▲寫生文とあるは寫實的の美文也
▲原稿二枚以上は紙捻にて綴る事
▲封筒には必らず『花すゝき』と附記すべし

美術家の妻

小說

江見水蔭



上

水車に引かれた樋の水を前にして、後は杉苗植ゑた小高い岡、北の風を之で防いで日當りの好い一軒家。右も竹藪、左も竹藪、丸木橋を切落したる要害此上も無い搆への内に、小犬が何に驚いてか吠立て、庭中を驅廻はるに連れ、藪の中の雀嘸いで、散る姿は椿の花

「何をムクは騷ぎます。誰も來やア仕ないぢやア無いかねえ」

椽側に立出でたるは、年の頃二十四五の婦人。舊式の東髪に筒袖の綿服。折柄掃出しに塵の飛ぶ方をも搆はず、小犬は鼻面を向けて椽に上らうとする危さ。柳に蛙の覺束なさよりも。

『ムクや、いけませんよ。ムクや、何故そんな行儀の惡い事を爲るのです。お前の母親のブチは決してそんな事を仕ないよ。いけませんねえ、泥足を其所へ遣ッて……』

箒の先で打たうとしても、主婦の慈愛を知ると見えてクン〳〵と鼻で鳴いて、尾の先を忙がしく左右に振分ける。斯うなると遉がに打ちも仕兼て、其頭を撫てやる時。春風が長閑に傳へる音樂隊の演奏し

『おう、始まつたやうだねえ』

其音樂隊の奏聲は、此家の後の岡つゞき、櫻池伯爵の別荘の方から來るのである。

と、此音樂に浮かされた樣な足つきで、丸木橋を渡りて入來つたのは、此村の住人を代表して居るやうな老婆。半ば朴訥、半ば狡猾、半ば東京風の氣の利いた處が有つて、半ば田舍流の間の抜けた處が有つて、白髮と黑毛と半々の頭を振立てながら、先づムクに御世辭を振り掛け。

「ムクや〳〵ムク〳〵〳〵ムクやお出でよ、好い犬に成つたぢやアないか。來い〳〵〳〵〳〵」

ムクは吠えた。餘り好意を表した聲では無かつた。

「貴婦、如何も快いお天氣では御座いませんか。チト摘草にでも入らッしやれば好いですのに……」と今度は主婦に向つて來い〳〵を極めた。

「まアお婆アさん、お上んなさいまし。本統に快いお天氣で御座いますねえ」

「左樣で御座いますよ。仕合とねえ、降りも仕ませんで、ねえ、好い鹽梅で御座いますよ。貧乏人の洗濯物でも仕ますと、生憎と雨が落ちて來ますが、華族方が園遊會をあそばすと、奇態にお天氣、運の好い方達は何處までも好いもので御座います」

踏石へ下駄を揃へて横捻りに椽側へ上つた老婆は、主婦の顏を覗く樣にして見詰めて。

「貴婦は何處か御加減でも惡くッて居らッしやるの……」

「いゝえ、何んとも……」

「で、御座いますか。それなら宜しう御座いますが、お顏の色が好く有りませんから、如何か爲さつたのかと、これでも心配致しますアね。旦那樣はお留守だし、御婦人と坊ッちやまとお二人で居らッしやるのですからね、いえ、家の爺なども、餘所ながら御心配申して居るで御座いますよ」

「本統に如何も御親切に……」

「貴婦、今日の園遊會を拜見に入らッしやいますかい」と意味の深さを目端の窪んだのに現はして、ぎよろりとした眼の玉。

「いゝえ……妾は……」

「入らッしやりは仕ますまい。近所の者でも、貴婦、心有る者は何んで見に行きませうよ。貴婦、酷い話ぢやア御座いませんか。華族と平民と、との位違うので御座いませう。お屋敷が岡の上に有るからッて、あんまりお高過ぎるぢやア御座いませんか。全體ならば、まア、村には村の交際の作法といふものが御座いましてね、それ相當の事を仕なければアならないので御座い

ますがね、身分が違ふからッて、三車村に住んで居るからには、三車村の人に相違御座いませんやね」

主婦が出した煙草盆、お先き烟管で一吹して。

「ねえ、貴婦、何も我々が華族樣の園遊會に、お招きを蒙つて、お客樣にならうとは思ひませんけれと、今度の樣なお目出たい時には……えッ、御隱居の殿樣が御位がお上んなさッたのですてッね。えゝ、從三位ですてッね……然ういふ塲合には、村中の者へで御座いまさア。なアーに貴婦、村中と云ッた處で、幾軒も有りは仕ませんさ。其村中へ菓子の一袋に手拭の一筋もまア配つて御覽なさいまし、どんなに喜ぶか知れませんですよ。いえ、僅かな物でも氣は心と云ひましてねえ、とんなに嬉しいか知れませんわ。村に居る殿樣の位がお上んなさッたのですから、鎭守神樣の格式が昇つたのとまア同じに思ふのが人情、つひ、詰らない物です、畑に出來た野菜物にしろ何にしろ、お祝儀のしるしにと云ふ譯で、村の者だッて拵つて行かうぢやア御座いませんか。それもで御座いますね……」

言掛けて一吹――最う疾くに吸切つて居た烟草に氣が着いて、ポンと灰吹にはたき落して。

「それもで御座いまさア、やれ、お庭の鶴が逃出したと云ッちやア村の者を手傳はせ、それ、お泉水の緋鯉が飛出したと云ッちやア、水車の堰を留めさせたり、隨分近所の者に迷惑を掛けて、そら、此間なんざアお馬車の馬が荒れ出して、ちよいとでしたが子供に怪我までさしたぢやア御座いませんか。ですから貴婦、斯うした時にはねえ、何んとか村の者に仕なけれア、いえ、全くの話で御座いますよ。乞食ぢやア有りませんから、見物したい者は幕の外から密と覗いて見ろなんて、えッ、心有る者は參られないぢやア御座いませんか」

主婦は唯笑顏で聽き流して。

「しかし、お婆アさん、何家でも大槪そんなものですよ。然ういふ處まで氣の着く華族方は滅多に有りませんからねえ、餘り氣に仕ない方が好う御座んすよ」

「ですがさ、貴婦のやうに云つて了へばそれまでゞすが、面白くないぢやア御座いませんか。ちよッ、其氣で聽く所爲だか、樂隊が騷々しくッて、何にも出來やア仕ませんわ。馬鹿々々しいぢやア御座いませんか。斯ういふ時に夕立か何か、急にドッと來ると好いのですがねえ」

ヒガミといふ字が現はれたかの樣、其面の皺の竪筋横

筋。
しかし、それに乘つて一向調子を合せぬ此屋の主婦の笑顏朧に落す。
『妙な事を伺ふ樣ですが、お宅では、たしか、彼の櫻池樣の、矢張、御舊臣ださうで……本統で御座いますか』
一寸、主婦は、ためらうた樣で有つたが。
『旦那樣の阿父樣は、御舊臣で有つたのですよ……最う何しろ、今の代では……』
『それアまア然うで御座いますねえ、𧘕𧘔を附けた頃の主人だらうが家郎だらうが、今では何んでも御座いませんからねえ』
『まアお婆アさん、お茶でも入れませう。此方へ入らッしやいな』
避けたのは話の頭、導いたのは長火鉢の前、鹽煎餅に蓬萊豆、老婆これより村中の裏路を舌の先きに縫歩き正午近くなつて此家を辭した。

中

老婆の去るのを見送つた主婦は、思はず溜息をホッと吐いて、椽側の柱に手を掛けると、又例の小犬が、うろ覺えのチン〳〵、何か與へてよとの催促であらう。
『光雄はまア如何したんだらう……』
丸木橋の方を見遣つたが、さし出た榎の枝越しに、麥畑が見えて、其先きは汽車の線路。樋に沿うた小路は束の間より見られぬのである。
良人は長の旅路、今は佛國に有るべし。如何で今といふ今、逢ひ見られじと諦めては、それよりも可惜しきは吾子とす。二時ばかり前に遊びに出たのも、早く戾つて來ねば心配で、物案じの折柄、意外の客來。シルクハットが阿彌陀。フロッコートが皺だらけ。眉毛と目尻と髯の先とが、同じ度で下つて居て、色の黑い上に酒に醉つた赤味が加はつて、カラーの白いのが一度で染りさうな、だらしなき紳士。
『此所だ〳〵、西藤の家は此邊だと思つたが、や、僕の記憶の好いのに吾身ながら敬服する。や、どッこい、こりや危險な丸木橋だ。畫師なんて奴ア無闇に風流がッて、這んな橋を架けて置くのだらうが、客に對して第一失禮だ。どッこいしよ、命掛けだぞ』
獨語ながら遣つて來て、今しも不意の客來に驚いて此方を見て居る主婦の顏を見返へし。
『よう、細君、西藤の細君、芳子夫人、や、御無沙汰

相濟まん御無沙汰で……」

「まア何方かと存じましたら、左柳さんで御座いましたか……」

「えらい御無沙汰……相濟まんといふ事は知つて居るですが、何しろ遠いですからな。や、同國でもあり、同町内でもあり、子供の内から一所に大きく成つた僕だから、紫角君が洋行の留守見舞に、是非一度は來んければならぬのだが。や、實際遠いからな。田舍も田舍も、えらい田舍で、全く用の無い處だけれど、や、打明けて云つた方が好いから云ふですが、實は今日とても、わざ〳〵訪問に來たのでは無いですよ。えい、舊藩主の園遊會へ招かれて來た、其序でにお寄り申したので、何んでも裏門から然う遠く無いと思つたから餘興の角力が始まらぬ内に、一寸これでも伺つたのですよ」

「如何も御親切に……」

主婦は困つたのである。しかし、打捨ても置かれぬで座蒲團を椽側へ出すと、ドッカとそれに腰を据えて。

「や、それもですな、實は貴婦が園遊會へ來て居られるだらうと思つて、それなら其席で挨拶をすれば好いと思つて居たのだが、見えない、姿が見えない。それに舊藩出身者から昇位の祝賀の意を表して、花瓶を獻上した其中にだ、其連名の内にも西藤といふのは無い。と云つて西藤君が留守だからと云つて、其所分の出來ぬ貴婦でもなし、これは變な具合だと吾輩考へたですな。や、それは、しかし、ぢや。其邊の消息は吾輩能く知れり焉ぢや。ねえ。西藤君の意志を酌んで、貴婦が加入しなかつたんだらうと、や、この左柳なればこそ悟り得れぢや。が、だが、それだが、それが不可。如何も西藤君が考へ違ゐを仕とるですな。相濟まんが喉が乾いた、水を一杯……」

主婦のさし出した洋盞、一息で空にして。

「や、何しろ櫻池家は我々の舊藩主で、我々の祖先代代、皆、御厄介に相成つた間柄で、今日では一天萬乘の大君の他に、君主といふものは無いけれど、それが昔では然ういふ風で無かつたので。なア、櫻池の殿様には頭が上げられぬ關係で有つたのを考へて見ると、今度の御昇位に就ては大いに祝さんけれアならん。ねえ、其尊敬の意を表すべきが我々舊藩臣の義務であるのに、敢て然らざる紫角君も間違つて居れば、その意を酌んで今日の園遊會に行かぬ夫人芳子其人も間違つて居る。ねえ、だから、芳子さん、行かうぢやア無い

ですか、これからでも好え、私と同行しやうぢやアないですか」

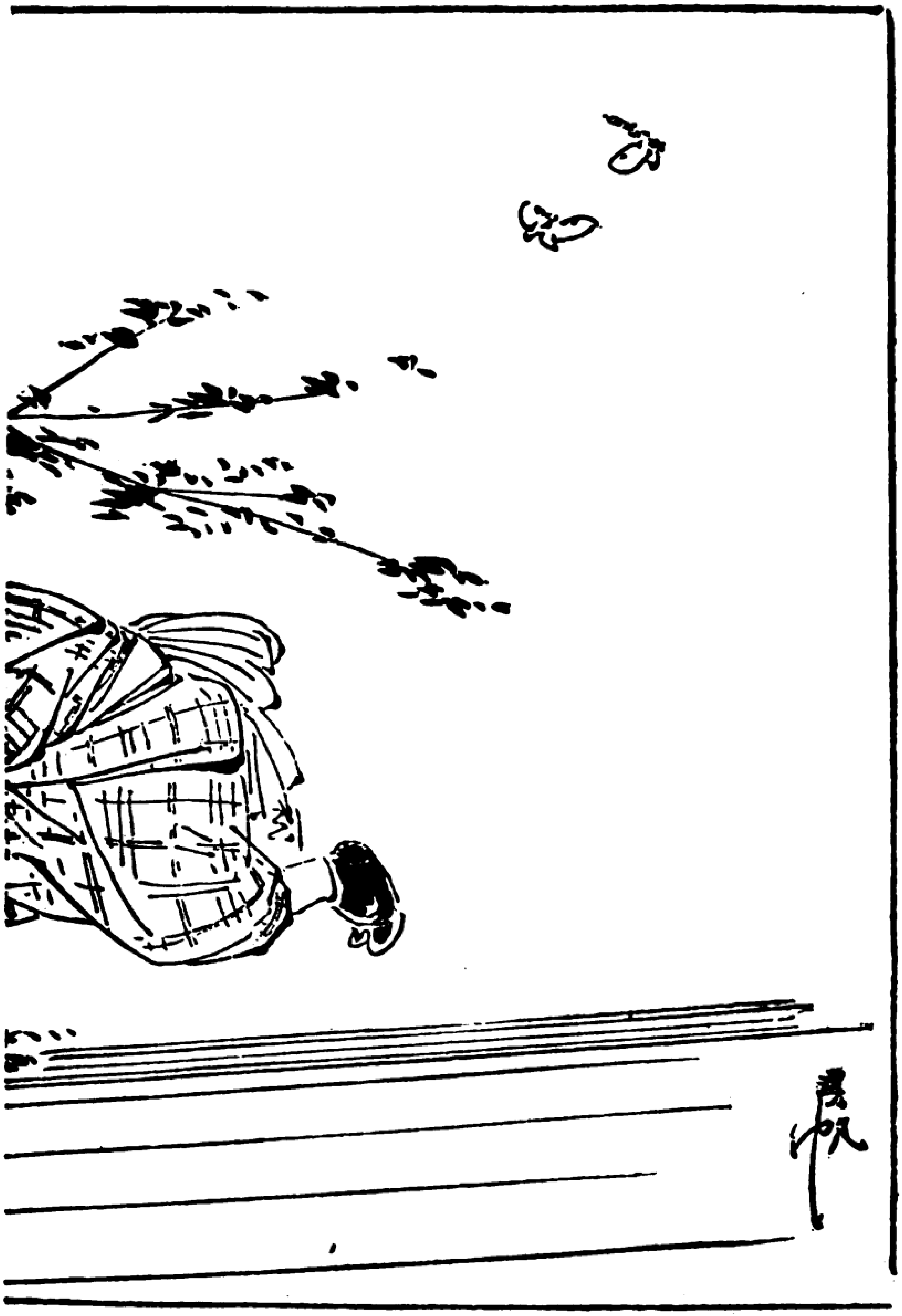
醉つて居る人、それとなく輕く受流して。

「左樣で御座いますが、別に……妾は……」と云はんとするを。

「まアさ、難しい事を云ふ可らず、それよりは……」と引立てんとする折しも、櫓太鼓のドヾンガドカ／＼／＼、音樂隊に代つて鳴り出した。

「さア大變角力が始まッた。や、こりや斯うしては居られぬ」細君、えッ、來給へ。後から來給へ、好いですか……」丸木橋から能くも落ちず、よろめき走りに走り去つた。

下



醉紳士とすれ違ゐに、飛んで歸つたはブチの大犬。ムクの小犬は喜んで縋りつくと、これも走りながら歸つて來た六歳ばかりの男の子草履脫ぎ散らして椽側に駈上り、母親にひしと抱付きて、わッとばかりに泣出した。

『如何したんだねえ此子は何をそんなにお泣きなのだえ』と驚きつ怪しみつ、いたはりつ。

『うゝん、母アちやん……皆んなが馬鹿に仕てよ……光を皆んな馬鹿にするんだもの』

『何處へまアお前は行つてお出でだッたえ。まさか園遊會を見に行つたのぢやア有りますまいねえ』

『母アちやん、行つたの……』

『えッ櫻池のお屋敷へ這入つたのかえ』



『何故われ程行くのでは有りませんと、能く分るやうに云つて聽かして上げたのに……如何してまアお出でゝわつたえ。如何したのだらう、光さん、お前は母アちやんの云ふ事は用ゐないのだね』

『うゝん……』

『うゝん……』

とは何んです。そんな言葉が有りますか』

『あの——お友達が行け〳〵ッて連れてッたの……』

『何故一人で歸つて來ませんでした』

『だッて一人ぢやア淋しいもの……つひ行ッちやッた

の」

「つひ行ッちやッたッて、まア、仕方が無い子だねえ
それから如何したんだい」

「あのねえ、植町さんの武ちやんだのね、中丸さんの文ちやんだのねえ、皆ねえ、阿父ちやんや阿母ちやんと、綺麗な衣服着て行つて居てね」

「それは招待を受けたのでせうし、又祝意を表したのだらうから、當前ぢやア無いかい」

「だッてね、何故お前の處の阿父ちやんや阿母ちやんは來ないの、何故お前は汚ない衣服着て來たのッて、いろんな事を云ふんだもの……」

「だから行くのはお止しと云ッたのに、何んといふお前は分らない子なんだらう。美術家の息子とは云はれませんぞ。サッ、西藤紫角の子が何んといふお前は愚かなんだらう」

芳子凛然たり、榮花に射したる日の光きらめき、水車の音も鳴を靜めたかと思はれた。

「ねえ、光さん。能くお聽きよ。お前の御祖父樣達がねえ、御維新の際にねえ、世の中で一番可愛い妻や子やをねえ、丸で構つて居る暇の無い程にねえ、唯一心で國家の爲にお盡しなさつた。その勳功に對して、皇室から櫻池の殿樣を伯爵に爲さつたと、斯う考へても差支が無いのだよ。櫻池の大殿樣も、なる程其頃國家の爲に隨分お盡し爲さつたでせう。けれども、それを其樣に仕たのは、お亡くなり爲さつたお前の御祖父樣それから其他四五人のお方が重な處で、奥州や函館で戰死した御家郎も亦、少くはなかつたのだよ。まア櫻池の舊領地の人々が、それ〳〵國家の爲に盡した其代表者として、大殿樣が伯爵……ねえ、それで肝腎身を粉に碎いて働いた人達は、士族といふ名目ばかりで、それア何んでも有りは仕ないのだよ。だけれど、これは仕方が無い、家のお祖父樣だからッて、御自分が位を頂かうの、華族に列しられやうのといふ、そんなお心で初めから、國事に奔走はなさらなかつたのだからそれは當前の事として、扨、それでだねえ、爵位を得たお方がどんな心でお出でなのだらうか。御自分の腕一本で此位を得たと思つて居らッしやるだらうか。病の爲で御祖父樣は早くおなくなりなさいまして、お前のお父樣がお前よりも幼くッて居らッしやッた時に、如何いふ風に櫻池家では仕て下さつたゞらうか……妾は、先年おなくなり爲さつたお祖母樣から、能く其邊の話を承はつて、本統にそれア血の涙をこぼしたの

だよ、阿父樣と一所に殿樣をお助け申した方達で、生存つて居る方達は、皆それ〳〵位もある、お役もある……いえ、何も羨む譯では有りませんが、西藤家が一時非常の悲慘な境遇に居た時に、勿論此方からも願つて出なかつたが、向ふ樣からも一向知らん顏で……ねえ、冷めたい〳〵氷見たやうな仲で、お前の阿父樣は成人なさッたのだよ』

今ぞ見る紅の淚――母を見てこれも淚の子。

『それでねえ、しかし、お祖母樣のお手でねえ、阿父樣は、今では立派な美術家にお成りなさつたのだよ。しかも自費で以て洋行なさつて、彼地で益々御勉强の最中なのだがね……お國から出た角力取り、鬼ケ城とやらが大關に爲つたといふので、立派な化粧廻しを櫻池からお贈りなされた。それからお妾の御ひゐきの役者で、何とやら云ふのが座頭になつたといふので、立派な引幕をお贈りなさつた。けれども、家の阿父樣が上野の畵堂へ、名譽の油畫をお出しなさつた時には、何んの御奬勵もなかつたのだよ。美術家は、しかし、引幕や化粧廻しは入りません。けれどもだねえ、一言のハゲミハ、との位欲しがつて居るか知れないのだよだからね、然ういふ譯だからね……』

ぢッと子を抱きしめて。

『お前、決して、お屋敷へお出でないよ。美術家としての天爵を頂く西藤紫角の家族として、招待された其時にはよろしい。さも無い限りは、ねえ、光さん、行くのでは有りません。決して行くのでは有りませんよ』

『おう、母アちやん、決して行かない』

『何をお前は泣いたのだえ。今日招待されないのが耻かしいかえ。晴衣を着ぬのが耻かしいかえ。祝賀品の贈呈に加入しなかッたのが耻かしいかえ。何んの耻かしい事が有りませう。ねえ、光さん、舊藩臣の其遺子に、家の阿父樣のやうな美術家の出來て居るのを、知らずに居るやうな今の華族の、それが後に萬が一、眼が覺める時が有つてだね、其美術家から今日の樣な目出たい時に祝されなかつた事を知る事が得られたらね却つて向ふ樣が愧かしからうよ』

プチはムクに乳を與へた。芳子は光雄に菓子を與へた。

又も聽ゆる音樂隊の『君ケ代』

（完）

薄命の乙女

生田葵山人

穏な晩春の一夜で、月は朧に霞むで、地の處々には白い、紅い花瓣の影。通りすがりの人影は薄墨に揣かれた樣に、其れとも影法師の樣に、足音なしに歩むで行く樣に思はるゝ。物靜めやかな唄ひ聲が高樓の間から洩れ聞えて來て、少し微暗い邊りには低い笑聲も交ちつた私語き聲が聞える樣に思はるゝ、奈何しても人を優しい夢路に運ばねば置かない晩なのである。

朝から何とはなしにそゝろ心になつて、眞裸の湯浴みし果た肌の上に、秋の七草を黄、紫、紅と七色に染め拔いた縮緬の單衣を、さらりと一枚着に着て、帶は白の紋羽二重、袂を扂う左の手先に搔いつまんで、廣椽から庭の八重櫻を見たならば、女見た樣な柔弱な心になつて居たのである。紅、白粉、振りの袖、鹿子帶、萠黄色とそんな言葉のみが思出されて、世界は艶麗の氣に滿ちて居る樣に思はるゝのであつた。

黄昏比の石壇を上つたので、杉の梢の下を通り、檜のいゝこぼれ葉の上を踏み、柳の下に立ち枝垂れ梅の姿を見上げ、社頭を三度廻つて、其の乾の方の崖に面した空地へ出たので、下は日吉橋から三平坂へと通ふ往還敢て梟は啼かないのである。

悄然と立つて、朧ろ〱の月の大空の下に、自分の影を透し見て、片手を擴げ、露か、其れとも星の雫を受けて見やうかしらと云ふ了見にもなつたが、溜池越えて田街の三味太鼓。此處は浮世なので。

いゝずつッと身を前に枳殼の垣根にと身を寄せて見遣る彼方は、街の灯、春の月を包む大空の下に、點つて、美くしさは沖の火とも見えやう。蒼い大波小浪は街の家並、物の響きは魚の囁き聲と思つてもいゝのである。傲然と我物顔に建つて居る高い建築、照らす光りに月と日ある如く、軈て額破る、時が來るであらう、蹲踞つて居る樣な低いのも、軈て大空突く銀杏の樹の樣に背を延す時があると思つてもよい。移り變る世に、何時見ても、常盤樹の榮え尊く見ゆる赤坂離宮の筋壁の土塀、彼方へと甍の門を挾んで長う延びる前の大通りには、月夜にも手提灯放さぬ優なる女の行通ふのか、乘車にも交ぢつて灯は行き通ふ。其の邊り、立つて此

方を眺めたならば、土手の松に月は懸つて、四邊は薄絹で包まれたかの樣、白い靄は低う垂れて、水がわる丈けに漂ふ灯が見えて、美くしさは此處で見るよりも增さうに。些と云ふのを忘れたが、自分が立つて居るのは、晝は烏の立ち騷ぐ山王臺の森、彼の新嘗祭の供物を埋める丘の下なので、五月雨過ぐれば蛙がヒヨイヒヨイ飛び出す所なのである。

今宵人の夢は穩かで、不平、不滿な思想を抱いて居る者は無からふと思ふ。食を人の軒に乞ふ者も、心の落付く程の寢床を得たらうし、親子三人破れ衾を引張り合ふ者にしても、其の夢に花瓣は散り懸つたと思ふ。況して金殿玉樓に厚き夜の物被ぐ人の身は、其の枕の下に夜もすがら鶯が囀つて居る樣な心地がするであらう。館の灯は優寂に、小屋の灯は圓かに、川の水は白銀となつて、汀の草に誇り、汀の草は、露と添寢の夢深く、森は白き霧に包まれて、其の幽艶の嬌態を誇る可く、林は總て其の葉の鳴りを靜めて、月との語らひ濃かならんと思ふのである。

不意に耳にざ、ざ、ざ、ざ、ざぶと樹立を騷がす風の音とも思はるゝのが聞えた。我が袖、袂は動かす、眼の前に浮摸樣と見ゆる櫻の花瓣は散り懸らぬにと思ひ廻して、此の山の下の小池へ、漲ぎり落つる瀧の音と知つた。永く此の邊りに住むもの、未だ其の瀧の名を知らず、近所の小童共、次郎、三郎、お染、お美代と總ておの瀧と呼ぶのを、自分は今宵白糸瀧と呼ばふ。定めし樹間を透して落つる月の光に、金糸、銀糸と輝がして居る事であらう。鳴るは瀧の音の落つる末は金絲雀の卵を縦に切つた風の池、蓮の卷葉、浮葉を漂はして、取廻した枳殼の垣の前方の腰懸には、必ず此の夜、此の月に戀の人の姿を見るであらうと思はれ其方へと身を向け樣として思ひ止まつた。

月光滿ちた此の樂しい春の夜に、交番の赤い燈火を見るのを恐れたからで‖池の少し彼方に駐在所がわるので‖其の灯は、雨風烈しき夜、然うでなくば星の姿さへ見えない暗黑の夜に見る可きものなのである。暗の夜道を只一人歸る心の物淋しさ、遠くから其の赤い灯を望むだ時は、沖へ漕ぎ出て宵の明星を望むだ時よりも、もそつと樂しい思ひの胸に湧くもの、斯らん夜斯る時其の灯を眼にしたならば連想せらるゝものは罪惡なる嫌な御影で、恰度樂園の中に、蛇が這込んだ樣、總ての興趣は根抜ぎに崩壞せらるゝものである。老人が歩く樣な沈んだ靴の音、威嚴のある劍の響き、

そは冬の暗夜に聞く可きもので、斷じて戀る夜に耳にし又連想す可きものでない。

大空を翼の渡る聲が耳にせられた。其の凄婉な調子も四邊の穏和さに化せられて、何の感觸をも與へず恰度春の夜の鳥の様に思はれて、自分は其の聲の後を追つて身を動かした、美くしい春の夜の薫りが、身に浸み渡つて、自分は花霞の中を渡つて行く様な心地がする。枝と枝と打交す立樹の隙を洩れて、地に落ちて居る月の影は、月世界の花瓣の蔭ではあるまいか。

山王の森、右手の樹立の下に殘る一軒の草屋は甘い物屋で、云はずとも年頃の姉さん、晝は赤い襷に、白地の手拭姉様冠りして、通るお客を小手招きす。今宵障子一重の彼方にさゝめ言の聲聞えて、灯の影明るう、影法師の動くのも、今宵の景色である。社の背後に出ると、赤坂の絃歌、風に送られて手に取る様に聞え、日吉橋を渡る車の音とゞろ〳〵と太鼓の様に思はれて浪の音はさしづめ樹立の騷ぎ、華やかに装うて、黒髪長く振り亂した六郷の渡しのお船が何處か其の邊から顯はれて來る様な氣もする。

社の坤の隅にある釣邊井戸、之が麹町で、一番深いので、汲めども〳〵盡きぬ水、手操れども〳〵盡きぬ綱、纖弱い女性の掌なれば血が浸むであらう。梅、櫻と花は散り込めども、滅多に月の光りは底の水迄差込まぬ。もとより清淨無垢の神饌水なので、よし盛夏の咽喉の炙り付く様に渇するとも、諸人立寄る可からずの制札附なのである。此の名所の井戸を前方へ過ぎると、繪にも描かれ、草艸紙にも書かれた山王のお猿の晝ならばさら〳〵と一本竹に掻上る面白い圖を見られるのだが、暮れてからの月に仕舞ひ込まれて、主は御留守の空箱が眼に付くばかり、葉越しの月は、冷やかに其の格子を照らして居る。

見渡す前方、右側は崖に並んでずらり軒を並べた茶店で、お誂への紅提燈に、洋燈の火影。景色のいゝもので、家の内わか〳〵、い〳〵と、若い人の影其處此處と動く手を叩く音、さゞめき合ふ聲もして、人は此の春の夜美くしい月影に醉つて、其の盛春の血汐を胸に踴らして居るものゝ、何處迄も清淨な社頭の物靜かさを失はず、決して高踏亂舞の狂態は見えないのである。我れ若し戀を語ふ友の一人だにあらば、其の軒に立寄つて微湯に開く櫻の香を賞玩するであらうが、我が手に我胸抱える身には話にもならず、半は花の散り失せた枝垂櫻の下に立寄つて、大空の月影、又も仰ぐと、今更

らしう孤獨者の寂寞をつく〴〵と感ずるのであつた。前の茶店の軒の下に、明い灯影に照らさるゝ人、纏て幸福と滿足の追從して居る人ではあるまいか、茶店の嚊も、引つめ髮の可憫な姿で立働く小女郎も、火鉢控へて脂下つて居る御亭も幸福者ではあるまいか。睫毛に露を宿す樣な事は、西の海へさらり、過ぎ去つた節分の厄拂の袋の中へと持せ遣つて、大勢の家族親族、足る事を知つて樂しい生活を爲て居ると思はるゝのである。

他を羨む念に自分の幸福の地位を低う落しめて見ると何處かに潛むで居る自負心は直と反抗して來て、昂然とし街を歩く日頃の態度に回らしめる。自分は不幸な身ではない。未だ幸福が自分を見舞はないのである、中に希望の想は燃えて、戀にも燃ゆる血汐も持つて居る。孤獨は寧ろ誇る可き事で、悲む可き事では無い。軈て手を握る人は出來やう。品物の滿ちた器具には、其上に盛り樣がない。器具さへ完全であつたならば、空しくして置かない自然の命運は、よし遲くとも自分にも廻つて來るであらう。今何處か其の邊に足音を潛めて自分に近付いて來て居るかも知れない。富札の樣な不思議な命運は、決して足音を立てるものでも無ければ、憤つて杖を振つても手應へのあるものでは無い。

よし情なく、秋の澄み渡つた大空を渡り行く小鳥の樣に過ぎ去るにしても、悲んで足を跟めかしてはならない。道を踏み外すと下は小川、裾を濡らす其の上の嘆きがあると、春の夜に思ふ可きでない這麼思ひに耽けつて居ると、慰むる樣に、櫻の二片、三片と月の落す光りに輝きながら、自分の衿にと懸つた。そを取つて掌に置いて、些と翳して見たが、自分が美しい振袖の乙女で無い事を、花は嘸興ない事と思つたであらう。然りながら緣わつて散り懸つたもの捨て樣とは思はれず、中懷へと納めると、不圖恁う思はれた。此の花瓣は、花の精で、戀ない自分を憫んで、今恁うして散り懸り、自分に纏はつて、宿に歸り、自分が床に就くと、枕上にはらり其の妖艶な姿——芝居で見る墨染上櫻の精の樣——なを立てゝ、其の花模樣の振袖を恁う兩手にしなやかに重ね、眠る自分の胸に置いて微笑むのでは無からうか……。

果敢ない思ひではあるが、今月今宵生ある自分が此の垂枝櫻の下に立つた紀念は正しく此の花瓣なので、中懷に納めても敢て怪しむに足らない。若し來年の今

月今宵、自分は花妻ある身となつて纎き手で疊まれた袂の口から此の花瓣がこぼれて出て咎められたならば顔赧めて、自分は有の儘を答へやう……之も其の宵の思出の一つであつた。

夜風吹來つて、花瓣の猶もひら／＼と引切りなしに自分に散り懸るので、惱ましげな思ひもして、惜氣もなく其處を立ち放れ、月に背向ひになつて、前刻踏むだ石磴を前方へ山門を拔けて　石段を下に懸る。背後から呼止めて與る人も無かつた。駒下駄鳴らして、てん／＼と足早にと降り、中程になつて、些と立佇つて回顧ると、石壇を挾んで兩側に亭々たる杉の梢。押つ開いた向ふ正面に朱塗の山門、半ば月光を浴びて、扁額の山王神社の文字が、明に讀まるゝ。若し猿が一聲啼いたならば、深山の奥の奥の一つ社の前に立つと想ふにと、思遣る耳に、思ひも懸けぬ清しい樂の音が聞えた。

洋琴の其れである。自分は曳かるゝ樣に其方へと行つた。此處が星ヶ岡の茶寮の下、石の一の鳥居を前方へと潜つた右側に、今一月經たば夕月忍ばす卯花垣の中樂音は其處から洩れるのである。云はゞ忍び男の爲體で、見附けられて水浴せ懸けられても馳け出すより外はない、身を半ば垣に埋め、片手を築地に突いて覗つたので。

障子を明け放つた廣間、月は斜に差込むで、半ば輝らされた樂器の前に腰を据ゆる乙女の姿、黑き髪を後にさばいて垂れたのを程よき所で、紫のリボンにて結びたる、又なう艶で、其の白い頰を樂器の片側に置かれた洋燈の火影は鮮明に照らして居る。もとより垣に寄つて見る人ありと知る樣はない、樂譜に其の鈴張りの黑い瞳を遣つては、鍵板の上を、然ながら白魚の水を潜る樣に、其の白い、細い指を前後左右へと滑に動かす。一音響いて、續いて一音響く、單音、重音と入亂れて高く低く、庭の樹の間を擡ひ潜つて外へと響き渡る。

自分は此の乙女を知つて居る、時過或る會衆の席、然なくば日光輝く途上の往來、色華かなリボンを風に搖曳かし、女靴穿く姿を見知つて居るので、話合つて、春は花時の櫻に說き及ぼし、夏は海邊の白帆の趣など話合ふそんな仲ぢやない。亡き人の數に入られし其の兄の君、姉の君とは親しう往來せし身の、軈ては之も苔の花として凋む肺病の血統を受嗣いだ人と哀れに知つて居るのである。

斯る血統の人とて其の才勝れ、なべての技藝人に勝れるのを聞いて、其の勝れるは軈て憎き病魔の、鋭く肉薄し來る前兆よと思ふに附ては戀ならねと、哀に感せずには居られない。病の血統は、美しかりし母なる人よりなので其の父なる人も、感染して墓石の下の土。今此乙女は、祖母なる人と暮して居るのである。思ひ見よ其の祖母なる人の心、己が生命の上に蔽ひ懸る夕日を忘れて、孫娘の成長に胸を惱まし、半夜夢圓かならず、運命の拙きを嘆いて、憎む可き病魔の前に、其の襲ふ事の遲からんを只管願つて居るであらうと思ひつゝ見ると、琴の前の其の人は、然ながら天女の如く淸く、其の儘白く薄霧の樣に消えて行くのでないかしらと思はれた。

其の小さき胸に戀を持つて居るであらうかしらと、不圖思付かれた。細面の肉の締つた、微笑の數の少なさうな風。よし頬に紅の血汐を寄すとも、薄紅梅の其れで、とても花は櫻の妖艶は見られない。乙女拾八、よし假に戀知らぬとしても、思ひを寄せて居る浮れ胡蝶の若殿原は多い事であらう。乙女氣の鏡に向つて、其の艶を誇る時、其れと思ひ至つて、何と想ふであらう。早世する人とて情を知らぬ筈はない。抑も此の處女、自分が早世せねばならない身である事を知つて居るであらうかと思はれて、更に悲哀の觀に打たれた。

彈いて居た曲は、一つのポルカであつた。今其れを彈き止んで、鍵板の上を走しつて居た手は樂譜の繰擴げにと向ひて居る。髮をさらりと動かし、小首傾けて、あれかこれかと樂譜の撰擇に思を惱まして居るらしかつたが、颯と一枚、多くの中から拔き出し樂譜臺に乘せるよと見ると、小指で髮の亂れを掻上げ、偖彈出したのは、ベウトウエン作曲のムウンライト、ソナタなのであつた。自分の好な曲の一つなので、上野の樂堂で、ケエベル樂師の手から耳にしたの二度、三度。世に知れ渡つた此の曲譜の由來に、一層の思を描くのが常であつたが、今宵此の垣の下に、懸る乙女の手から思ひも懸けず聞き得る幸を心潛に謝した。

妙じき調よと思つたのは最初であつた。美しき音よ、靜な諧音よと思つたのは次であつた。單音にて、とん〲と響く邊り、乙女の手に神宿るやと思はれ、もう恍然とした態の、眼の前には冷なる月光の人界の上に流れ渡り、貧しき者にはいと幸ひに、盲目の眼をも照らすよとばかり輝き渡るよとのみ覺えるらるゝのであつたが、不圖自分が境界りなき大海原の只中に月

の光のみ受けて漂ひ居るよと思つた時、曲は終つたのであつた。

心憎き擧動よ、乙女にしては小癪な程の仕打ちよと思ひながら、透し見ると、何をか思ふ、紫リボンの樂師は、樂器の撥に、片肱置いて、再び彈じ出さうとはせずに仰いで軒より差込む月を瞻上るのである。眞白き顔は神々しき迄に輝き渡り、其の瞳に眞珠や宿りしと思はるゝ迄に晴かに見ゆる、何を思ふか、ホット深い溜息を洩らすと、其の瞳に露は宿つて、一滴月の光りを帶びて、鍵板の上に落とすのであつた。

紫リボンの君よ何を思ひての涙よと、思つたが、自分は堪え得ず、彼方の心付かぬ様に心を盡しながら靜に身を曳いて、往來の道に立つたが、胸の中は、然ながら掻むしらるゝ様で、運命の不思議な謎に接觸した様な感が起つたが、それにも増して、涙は中に漲り渡る

此の乙女を戀する若者もあらう、乙女の戀する人もあらう。戀するも戀せらるゝも何?、骸の前には總て白紙一片の價をも持たないと想ふのが此の美しき人の心ではあるまいか。纖弱き身に美しき姿を抱いて、よしや鏡にのみ誇らるゝも、永遠の幸に何の價値であらうとは此の少女の思ひではあるまいか、我れを捨てゝ先立つて土の中に埋れ給ひし人と、已も同じ血統を受けし身の、軈て、長き黑髮に花の簪は飾れども、容顔色失せて、小鳥の骸を頬に當つるに相應しき身とならば如何せんとの思ひに惱むだのではあるまいか。慥く思慕つた悲嘆をボルカの曲に一旦に紛らし得られしも、ムーンライトの靜な曲に再び蘇生つて、大空の月の中によし春夜の朧なるをも厭はず、自分の零落の姿を見出さうとしたのではあるまいか。

美くしき姿を、紅、白粉、振りの袂と華かに装ひ、道行く人に回顧らるゝ樂は、身に覺ゆれと、誇つて甲斐なき身に、兎もすれば思は傲慢に流れんとするのを、敎えの言葉を信じ、優しき心懸けに押えて、飽迄謙遜な思を持つのを自分は知つて居る 道行くにも小股に顔を伏目に歩むのである。確に然うに違ひ無い、一滴落した涙に、身の總ての不幸を含まして居るのである

慥く思ひながら、自分は何時の間にか、先刻心に描いて、名付けた、白糸の瀧の邊へと出た。ざ、ざ、ざと變らず落す瀧の音、水は流れて月の光りを漂はして池に落つる處、自分は伏して見て今春夜とは思はれなかつた。冷たき風吹渡る蕭條たる秋の夜!然うした思ひ

が胸に滿つのであつたが、と、再び、樂器の音は耳に這入つて來た。

其の人の再び樂器に對したのであらう。と、鍵板の上を細き白き指の、水潜る白魚の樣に幻影に描かれ、其の美しき姿を想浮べるに付け、悲哀の感の胸に漂ふのを禁じ得なかつた。今こそあれ、鍵板の上を走る指、月の光りはいと靜に、接吻する樣に柔に照し、其の影を鍵板の上に、太く華やかに落して居るもの、、其れが果して其時迄續くであらう。軈ては紫リボンの色褪せて、日蔭の葡萄蔓の樣な、瘠せ細つた零落の影を落すに違ひない。

其の時甚麼想ひを其の小さな胸に宿すであらうと思ひ浮べられた。今月今宵の事を思ひ出し、鍵板に力入らぬ細き指を五本、恁う灯影に翳し、座ろに身の哀を惱ひであらう。指ばかりか、回顧つて壁に落つる凋落し果てた己が姿を見て、淚は今宵落せし比に非ず、身も世もあられぬ迄、悲嘆に掻き暮るゝ事であらう……。

思ひ至つて自分は大手を擴げ、月の光りの前に祈禱する念を禁じ得なかつた。

「年經て今月今宵の如き良夜。乙女病を得ながらも、興に觸れて樂器に對ふ時、願はくば、鍵板に落つる其の指影を、今宵の如く、華やかに落し給へ。壁に落つる姿をも。思出は悲しきものなれば。」

今宵始めて此の社頭に上つた時の思ひは總て消え去つて了つた。何の事はない、不幸な思を身に抱いて、深よく乃に伏した姉の姿を眼前に控えた時の樣な、身の廻りに冥土から吹いて來る風の立つ樣に思はれた。姉は失戀の苦痛を堪え得なかつたので、血汐は咽喉に白無垢の振の袂にも浸んだのである。其れは人の愛に見捨てられて、天運に遠ざかつたので、之は天の愛少なくして、次第に天運に遠ざかつて行かねばならないのである。乙女病を得た時、過ぎし昔しの春秋を夢むのは我が姉と一つで、半夜身の哀を知るは、枕紙と、椽の下に啼く蟋蟀の聲のみであらう。

美しき花は風に妬まれ散るもので、白魚は月の光りに水に溶けて行くものである。人として此世に產れ、此の世の大道を行くに、命運尠なきを恥づる理由は少しもない。人世に忌む可きは、不幸よりも屈辱なので、家路へ歸る道すがら、自分は、生き殘つて醜く皺多き老婆に遇はざらん事を願つて、足を上ぐるのであつた。

住居はつひ其處の三平坂下、白い月の光りに照らされて、小溝の側に、一軒悄然と建つ一階屋、とん〳〵と

敲いても淸しい聲はせぬ。机一つに二枚折の屏風、そも今宵の夢は甚麼であらう。（完）

故潮田千勢子刀自

潮田千勢子の永眠は婦人社會の爲め、一般社會の爲に、哀惜すべき事です。

女史は婦人の身にして能く社會に働いた方です。教育家としては道德を高め家庭を淸むる事に盡瘁せられ、社會改良家としては矢嶋楫子氏等と共に婦人矯風會を設立して風敎改善の事に努力せられ、又た博愛家としては時事新報の企に係る慈善旅行に斡旋の勞を執られ、近くは鑛毒被害民救濟の事に奔走せられたのであります。而して熱誠の心血を注ぎ、身を犧牲にして盡く之を成就されました。その旺盛なる精力には世人の等しく驚嘆する所で御在ります。

女史が勢力の絕凡なるは、鑛毒被害民救濟の一事を見ても分明です。去る三十四年冬の事ですが、女史は同志の婦人數名を引連れて、被害地なる渡良瀨川沿岸の慘狀を視察に參られました所、餓孚野に充ち、凍ゆる母は病める兒を抱いて、訴ふる所もないといふ淺猿しさを實見致されたので、早速鑛毒救濟婦人會なるものを組織して、其の委員長となられ、東奔西馳、涙を揮て此の慘狀を社會の同情に訴へ、集め得た義財を携つて、寒天上毛の荒野を跋涉し、堅氷積雪の間、草鞋を穿つて病者窮民を見舞はれたといふことです。その勇姓精悍なるには到底少壯の男子といへども企及し難いのでした。

女史が本年五月上毛矯風會に臨まれた折、傍人を顧みて「小供を亡した親が急に佛に歸依して、回國巡禮に出るのは昔から能く聞くことですが、私も昨年傳五郞（女史の長子）を亡したので、彼の人達の心持を知ることが出來ました、私も是から數年間は全國を巡歷して矯風會の爲に盡力しやうと思ひます」と語られた。所が悲しい哉、此時既う胃癌が萌して居つたので、間も無く病褥の人と成られたのです。

女史の人爲は言行一致で、言つた事は必ず行ひ、行つた事は貫かすには措からぬといふ雄々しい氣象を持つて居られました。女史は犧牲を理想として社會に盡されましたもの丶、其の一面は慥に家庭の人でお在なさいました。女史は若くして寡婦となられたので、家政の整理、子女敎育等の衝に當り、幾多の困難を排して能く之を處置されました。

其故女史は日本婦人の篤志躬行を求めて「家事があるから社會を顧る遑がないなど丶言ふのは、誠に意久地が無い話で、其人の無氣力を顯はすのですから、婦人の耻辱であります」と申されたことが御在ました。すべてが總ういふ調子で爲る事成す事雄々しく活々として、常に積極的に心掛て御在でした。而して活働的婦人の模範を垂れ有益な事業を社會に貽して逝かれたのですから、其人は死すも、其の功績は長く後人に記臆さるゝで在ませう。（舟人）

刺繡用




百合ニ蝶

雜録

倫敦淑女の化粧法

夕颸生

▲自然的修飾法

巴里婦人の化粧法は人工的の粉飾なり、倫敦婦人の化粧法は自然的の修飾なり、而らば我東京婦人否日本婦人の化粧法は如何、人工的なるか將自然的なるか、京名古屋の厚化粧、東京の所謂水道の水に研きあげたる余は孰も其正鵠を得たるものなることを信ずる能はず、殊に其非生理的非衛生的にして幽靈然たる柳姿細腰を以て美人となすが如き寧ろ愚の甚しきものにして、廿世紀の今日婦人も亦社會の半面を代表して大に爲すあらんとするの時に際し、其化粧法の如き宜しく亦時勢と共に進歩改良せざる可らざるなり、而して余は人工的粉飾の到底自然的修飾に若かざるを信ずるが故に、今此處に倫敦婦人の最も新しき化粧心得とも云ふ可きものに記したる事柄を紹介し、以て東洋の美人國をして愈其美を發揮せしめんことを欲す、請ふ、先づ順を追ふて左に説く處を讀め。

▲健康の美性情の美

人誰か美を欲せざらん、然らば人各顏を造り身を飾るは尤千萬の次第にして、殊に婦人の御化粧にうき身をやつす如き一槪に排斥すべきのみならず、寧ろ大に奬勵すべきことたり、又婦人們も宜しく自ら美ならんことを求めて天より享け得し麗質を蠹蝕す可らざるなり、然れども其美ならんことを欲するや、顏に紅粉を彩り身に錦繡を纏ふを以て能事畢るにあらずして須く先づ第一に身體の健康を期し、併て高尙優美なる性情の修養を期せざる可らず、造花如何に美なりと雖も生

花の美なるに及ばざるが如く、又生花の美なるは瓣を彩色して之を得るにあらずして實に其營養の精なるに基因すると均しく、營養の精にして始て燀妍たる麗容を表はし、馥郁たる香氣を放つことを得可し、則ち性情の美にして始て人の敬慕す可き香氣を發し、身體の健康にして始て人の欽賞す可き色澤を發揮せん、而して後之を彫琢せば是れ最善最良の修飾なり化粧法なり然らずして始より外貌の彫琢にのみ是れ努むるものは宛然是れ造花の美、死したる美、香なき色澤なきの美なり、彫刻物にして猶は其彫刻者の品性下劣なれば如何に技倆の巧妙なるも以て見るに足らずと謂ふにあらずや。

▲天然的化粧法の第一着、早起、粧飾時間

粧飾とは此處には顏を洗ひ化粧を爲し衣裳を着る迄一切引くるめて之を謂ふなり、則ち此粧飾時間は一時間の四分の三以内を適度とし、決して此の以上に時間を徒消す可らず、而して毎日夏は午前八時迄に之を濟し冬は午前九時迄に之を濟す可きなり、如何となれば、上下貴賤の別なく人が寐過すと云ふことは寐足らぬと云ふと同じく身體の健康を害し、從つて心身の働を不活潑ならしむるものにして、宜しく朝起きの良習慣は若い時より之を慣はさゞる可らず、然らざれば寐過し習い性となりて食慾を減じ血液の循環を惡くし、自と顏色の艶をそこなふに至らん、故に一家の主婦たるもの丶如きは須く此處に注意し、子女をして斷じて朝寐の惡習慣に馴さしむることなかれ、早起きは時間を儲け得るのみならず又實に身體の健康を購ひ得、同時に子女の美を購ひ得べきものなり、則ち早起きは婦人が天然化粧法の第一着。

▲洗湯

湯をつかふと云ふことは婦人が美を保存し美を發揮するに最も必要にして、斷へず身體を清潔にせざる可らず、然れども湯をつかふには一の適度ありて、冬は日に一回夏二回を好しとす、而して健康者は宜しく冷水浴を爲す可し、冷水浴は皮膚の抵抗力を强くし元氣を旺盛ならしむるものなり、然れども冷水浴は單に健康

的にして皮膚を美にする目的の爲には不適當なるを以て、此處に温浴の必要あり、朝一回冷水浴を爲し又夜一回温浴を爲すは殊に宜し。

温浴の温度は生理學者が研究の結果華氏九十六度以上百度以下の範圍内たる可し、熱湯好きは百八度迄は差支なし、然れとも熱湯は筋肉の力を弱はくし健康に有害なるを以て宜しく注意す可きことなり。



ロンドン淑女の化粧法

温浴可なり、然れとも微温湯は一層人に可なり、其温度は華氏八十五度より九十五度迄にして、健康者も不健康者も其身體の健康に適し、併て膚皮を美にするには、則ち此の微温浴を最上とす。

入浴時間は二分以上三分以内を適度とし、それより以上は寧ろ健康に害あり、美を保つに

不適當なり、三分乃至二分の入浴時間は以て垢を落し體を丈夫にするの適度たる可し。

體を摩擦するには大な荒い海綿が一等なり、始め海綿を以て摩擦し、それより良好なる石鹼を塗り肉刷子を以て顏を揩き體を揩く可し、垢を去るには此肉刷子に限るなり、若又人の顏を光澤あらしむるには肉刷子にて摩擦するより最良法はあらず、而して其上は土耳其手拭を以て奇麗に之を拭く可し。

此處に冷水浴を爲すものゝ爲に一寸注意しおくべきことは、則ち冷水浴を始めんとする際先づ頭を水にて僅か濡すことなり。

是を我國に鑑みるに、東京の如きは如何、古來江戸ッ子の熱湯好と呼ばれ來りしくらゐにして、實際我國の洗湯なるものは、強ち東京にのみ限らず、普通百四五十度に及ばざるものは稀なり、例へば我國は食物の相違或は英國等に比して空氣の濕潤を帶ぶるが爲め一概に外國の例に倣ふ可らずとは謂へ、熱くては決して人の健康に適したるものとは稱す可らず、殊に我國人の洗湯なるものは、其入浴時間十分乃至五分に渡り、二回三回或は四回を重ねて一時間內外に及び、婦人の如きは二時間に及ぶものさへ尠からず、而して其顏面手足を洗滌するや、手拭を以て之を摩り、其上に石鹼を塗つて摩擦し、又其上に洗粉を塗つて之を摩り磨き、或は垢すりはうの木墨を用ゐ、顏の全面より踵の先迄幾十回となく摩擦して猶足らざらんことを恐るゝに似たり又其御化粧を爲すや、七ッ道具に攻め立てゝ白粉を塗たくり口紅をさし、大抵一二時間に及びてそれより服裝に取りかゝり、是又一時間餘にして漸く此處に粧飾悉皆を了りたる一美人を完了す、而も其美人たるや香氣なく色澤なき美人にして、若し彼の顏面より粉脂を洗ひ落したらんには是れ顏色蒼白の生氣なき一美人たるに過ぎず、其年齡猶三十四十を出でずして早も衰殘の色ある元より當然の結果にして、背脈にも堪へぬなとゝ賞めたゝへしもの追々肺病やみ然としてるなどゝ惡評するものあるに至りしは、蓋し無理ならぬことゝ云ふ可し。

英國に於ける下婢の如き年二回位の外入浴を爲さず、多くは日々水を以て體を布き、猶は相當なる美を保つと云ふ。

又石鹼の種類は甚だ夥多なれとも、其良好なるものは最も少なし、先づウィンドソアーを用ゐば可ならん乎

▲歯

歯は婦人の美を形造るに最も必要なるもの丶一つなり故に婦人は殊に歯の掃除に注意を拂はざる可らず、若し幼少より之を注意すれば生涯歯科醫の厄介を受く可き必要なし、一體米國婦人は歯宜しからず、如何となれば彼等は熱い食を爲して又直に冷なる飲料を用ゆ則ち熱い肉冷き飲料を同時に用るは、歯に大害なればなり、又西班牙婦人も歯大に惡し、是れ一日中砂糖を嘗むるが爲なり、彼等は砂糖が大好物、墨西哥婦人も又歯の惡しき連中なり、是れ喫煙を好み斷へず巻烟草を喫するに職由せずんばあらず、然るに英國婦人は以上の諸國婦人の如く左したる不攝生を爲さゞるも餘り歯の養生に注意せぬ方なれば、從つて歯の善良なるを誇る可らずして、寧ろ其美を發揮せん爲には自ら進んで歯の養生を努ざる可らざるなり、則ち熱きもの甘きものを避け、又朝起きたる時及夜寐に就く際のみならず食事の後には必ず楊子を以て之を掃除せよ、而して其楊子は毛の硬きものは惡しきが故に成可く軟きものを用ゆ可し。

歯磨粉は複雜なる製品、則ち香氣を含み或は藥品を混じたるものより寧ろチョークの如き歯磨粉を一等とす。

次に女たるものは云ふ迄もなく葱類は大の禁物より、又葱のみならず彼の不消化物一切を退けざる可らず、不消化物は胃を害し自然と口に臭氣を帶び、且つ胃健全ならざれば根本に於て既に自然の美を破壞すべきなれば、好く／＼注意す可き事なり。

▲爪

爪は常に丁寧に之を切り決して垢を挾むが如きことある可らず、而して爪を切るには可成格好よく之を切り爪刷子にて圓く擦る可し。

▲手袋

手袋は外出の時必ず之を穿てよ、且つ美麗ならざる迄も清潔なるものを穿たざる可らず、彼の垢つきたる或は破れたる手袋を穿ちて他人の家へ行くは則ち其家人を侮辱するも同様なり、又家内に在る時も不絶之を穿つを好しとす。

▲頭髪

頭髪は華麗に修飾せんより寧ろ淡泊に修飾するを可とす、而して其毛質を光澤ならしむるには上等の毛刷子を以て奇麗に櫛ることとなり、然らば自然に光澤を帶び來り、黄金髪の美を爲すに至る可し、又其頭髪を櫛ることは日々朝晩二回を適當とし、毛刷子は毎日ならざれば些くとも隔日位に曹達を熱湯に投じて之を洗滌せよ、殊に紅塵萬丈の市街に住居するものは最も忽にすべからざる事なり。

又毛刷子を以て之を櫛るのみならず、折々は鶏卵の黄味を以て洗ふを宜しとす、或はグリスリンと石灰の汁とを水に攪交せて洗ふ可し、然らば脱毛等の虞なく大に毛髪の健康を保つ可きなり。

香油等は一切頭髪に禁せよ、然し海水浴を爲したるとき航海をなしたる時に於ては極些しく香油を温めて之を用ゐるを可とす。

又染粉にて頭髪を染むるものあれども、是れ抑も愚の極にして、人の頭髪に黄色灰色金色等の別あるは各其膚色を自然的に相適せしめたる者にて、例ひ頭髪の一部を染め得たればとて皮膚の資質を變更せざる限りは反て全容色の不調和を來し、又其品性を害すること尠からざるを以て、宜しく愚の如き事は倣ふ可きものにあらざるなり、加之ならず、彼のアリコマム（西洋の毛染藥）を用ゐ、唇に紅を施し、或は引眉毛を爲したり、顔にマダム、ラッチエルを彩つたりすることは、寧ろ天然の麗質を害毒する外に何等の益する處あらざる可し。

▲顔色

顔色を美ならしむるには白粉にあらず藥水の類にあらすして則ち天然の美を發揮せしむることとなり、天然の

美を發揮するには先づ食事を謹み、毎朝空氣の清淨なる邊を運動し、夏冬共太陽の光を避けんが爲に鍔廣の帽を被り、又顏蔽をなして風を避く可し、風は人をして色黑とするものなればなり、猶其他には前に述べたる如く夜早く寐ね朝夙く起出づ可し、而して又洗藥の如きは一切之を止めざる可らず、彼の狡猾なる賣藥商及び化粧品商が婦人の心をひかんが爲に如何に千言萬語の功能書を連ぬると雖も、遂には無効との單簡なる一句に盡き、而も多くは有害有毒にして、之を用ゐることは危險にあらずんば殆ど徒勞に屬す、然れども強て之を用ゐんと欲するものは、コットフレー氏の製造に係るホルダー(接骨木)の花を蒸餾したる液汁の如き特別の功能なきかわりに又何等の害なくして、香氣甚だ宜しきなり。

以上は顏色を美ならしむるに於て殆ど至れり盡せるものとも謂つ可し、若し以上の如くして猶且其美を發揮する能はざるものは是れ則ち天然の醜婦にして、又如何ともす可からず、醜婦の粉飾を凝して愈醜なることを知らば寧ろ醜婦は天然の醜其儘にて衒はざるの美なるには若かざるなり。

顏を洗ふには又其水の良否を撰ぶ可きなり、惡水を以て顏を洗ふ時は反て天然の美を損じ、良水を以て洗ふ時は愈其美を發揮することを得べし、而して最も洗顏に適當なる良水は雨水を以て第一等とす。

顏及び身體に腫物を生じたる時は直に醫師の治療を請ふ可し、其の徒に自藥を用ゐ、或は空しく放棄する如きは愚の甚しきものなり。

國民教育 寺子屋の話

菅原雅輔

唯今では教育上の設備が非常に立派になつて、如何なる田舍へ參つても、白壁塗の校舍が建てられて、テーブルとか椅子とか、ボールドとか、その外教科用のいろ〳〵の器具、書籍、石板、運動用の器械など實に整頓したものであつて、その教育上に費やす費用なども

又尠からぬ金額ですが、それに比較して見るとむかしの寺子屋の設備などは實に憐れ至極な有樣でした。併しそれにも拘らず、その內容に就ては決して侮るべからざるもので社會文明の程度に應じてそれ相應に有用なる國民を養成して來たのであります。皆さんはむかしの小學校、即ち寺子屋の狀況は多分御存じなからうと思ひますから、茲に本誌の數頁を拜借して當時の狀況を書いて見ませうもし皆さんがその御子達にむかしの小學校の事情を御聞せなさる御參考ともならば結搆です。

寺子屋といふのは昔の國民學校です、昔と言つても五十年も百年も前の古い事ではありません、今よりは凡そ三十年ばかり前——明治五年學令發布の以前までの事でありますから、我々の老父母は皆な此の寺子屋に通つて敎育を受けたものであります。

昔時は御承知の如く社會組織が、士農工商の四民に分たれ、士分は特別の權位を占めて居たが、士分と庶民即ち農工商の間には大なる懸隔が御在ましたのみならず其頃の政畧は所謂民をして依らしむ可し知らしむ可からずといふ主義でありましたから、斯民の爲に敎育機關を設備するといふ樣なことは無かつたので御在ます、唯だ士分及び之に準ずる僧侶、醫師の長袖連のみが、覺束ないながらも講學の便宜を有して居たので稍々高等の敎育も受けられたのですが、是とても江戶の御茶の水に聖堂といふ儒敎の大講堂が有つた位のもので、其他には學校と名付くべき程のものが無い樣な譯ですから、一般庶民に至つては僅に其の初等敎育を寺子屋に依つて濟まして了ふより外道は無かつたのでした。

けれども此の寺子屋に於て訓陶せられた我々の老父母及び同時代の人々は、立派に身を立て、家を興し、天晴なる國民となられ、而も今の人よりは手も能く書くし、道德も堅固でありますから、一口に寺子屋とは申しますもの丶中々馬鹿には出來ないのです。

されば此の寺子屋敎育なるものは、如何なる敎授法を執り、如何なる管理法を用ゐたかといふ事に就て御

話致してみやうと思ひます

▲校舎と教場

寺子屋といふのは元來寺院から起つた故の名前でありますが、明治の初年頃までも、田舍に行くと寺子屋の校舎は大抵抹香臭い寺院でして、お師匠樣と和尙樣と國音似寄つた如く、其の職掌の上にも、寺の和尙樣は寺子屋の師匠を兼てゐたものであります。けれども江戸及び其他の都會には專門の寺子屋なるものが御在ましたが、此とても師匠の住宅を其まゝ校舎に充てたのですから、建築に一定



の標準なぞはありません、呉服屋や薪屋と軒を並べたもあり、又は新道、裏通り、路次の内などに門戸を構へたのもあり、門口には何々堂と記した標札が打ち付てあり、師匠によると自分の手蹟を麗々しく額にして庇下に揭げ出すといふ樣な恐しい俗物も御在ました。

恁ういふやうに師匠に據て校舎の造り方、門口の體裁なぞは區々で御在ましたが、中に就て最も完全な、初から稽古場として建てられたものになると、表三間の間口を低い肱掛窓にし、其上を粗い格子張にし、其

處からは三尺も前に出た所に駒寄欄が立てゝ在つて、往來から覗き込めない樣に、外の子が惡戲をしても內の子の邪魔にならない樣に注意してあります、其柄此の肱掛窓と並んで一間の入口、そこを這入ると奥行五間からの長い土間で、左右は板張に成てゐる、土間の中央部――師匠の坐である中二階の下――に下駄箱がズラリ並んで、男生の入口がある。そこを通り越した土間の衝當には女生の下駄箱やら日傘壇やらが置かれ曲つて右手が女生の入口、其の奥が便所に成つてゐる。

　敎場即ち稽古場はすべて疊敷で、片隅には机や文庫が積み重ねてあります、而して橫手には生徒の名札が掛けてありますが、每朝出席の遲速に從つて此札を打つてゆきますから――中には登校の順序によつて机を排列した所もありました――自然通學奬勵の方便ともなり、生徒の勤怠を知るの便とも成つたのです。其柄場の正面、今なれば敎壇のあるべき位置に二疊敷の中二階が出來てゐて、机が二脚置いてあります。

　茲に師匠が坐つて居て、場中を監督する傍、生徒二名宛を交々呼出して、此の階上に昇らしめて、そこで師匠自ら生徒の手を取つて遣り、又は讀書、算術の各個敎授を行つたものであります。一寸こゝに斷つて置きますが師匠は壇上に靜坐したまゝで、決して生徒の席へは下りて來ませんかつた。

　此頃は敎鞭といふものを用ゐなかつた代りに、師匠の坐右には釣竿程の長い細竹が立て掛て在つたから、是でチヨイ〳〵と生徒の机の上を叩いたり、怠けてゐる生徒の草紙を引張つたり致しました。

　机の並べ方は多くは生徒同士對坐せる樣に置いたものでありますが、何の寺子屋も殘らず爾といふ譯ではなく、矢張今の樣に揃へて正面を向かした所も御在ました、かうして幾行にも並べた机の間に、約そ人が通れる丈の路幅を縱橫二通り明けて置き、その縱の通路を隔てゝ、左が男生の席、右が女生の席といふ樣に區劃してありました。而して生徒の席順は新入の子供を師匠の眼が屆く前の方に出し、古參に成るに從つて後に坐らせるやうに致して在ましたが、單級敎授には是

非共斯うなくてはなりません。で、最も後の列に坐つた子供の内より――一番年長者ではあるし、且つは優等者でもあるといふ理由で――男女各二人宛を撰び出し、之に其日の當番を命じますが、此の役に當つたものは、己が稽古の時間を割いて、稽古場内を見廻はり、前に坐つたいゝいろは子の手を取つて遣つたり、いろ／＼と氣を付て遣つたり、扨ては又退場の時刻が來ると、下駄傘の世話をして遣つたり、机を片付たり、餘程忙しい役廻、謂はゞ級長で助教を兼ねたやうなものであります。

▲師匠と寺子

寺子屋の教師なるものは一般に御師匠様と言はれて寺子からも其の父兄からも大した尊敬を拂はれてゐたものでありますが、之に從事する人達は、多くは僧侶や神官や、十二月浪人と言つて主家の食祿に放れた人達で御在ました、併し中には旗本の隱居とか、町人の内でも物識といはるゝ人達の間で、此の榮譽ある尊むべき仕事に身を入れた者も數ありました。

寺子即ち生徒の修學年限には、別段定まつた年數といふものは有りませんかつたが、大抵八九歳の頃就學し、男子は十二三歳、女子は十四五歳に成つて退學したものであります。當時は入學の事を寺子屋入と申しましたが、其節携帶致すべき教科用品と言つては、大方左に舉げたやうなもので御在ます。

一机、硯　二百五十文より二百七十文
一筆一本　四文
一半紙一帖　八文
一墨一挺　十二文
一煎餅百人分　四百文
一最中　一朱

右の内煎餅とありますのは、弟子入の當日他の生徒へ親睦を通する爲の贈物ですから、之を持つて行くと師匠の方で盆に開て、子供の頭數に應じて二つなり三つなりを、宜い樣に配つて與ます、其柄師匠には別に最中の折といふものか、又は目錄といふものかを差出

して、束脩の禮と致します。是で先づ入學が濟むと、次は授業料の段でありますが、當時は授業料や月謝といふ名目では納めませんかつた。其の代り

三十日錢といふもの月一回　五十文。
二十五日の天神講の御祝儀に　五十文。
五節句に　二百文づゝ、
席書の折　二百文。
疊錢として年一回　二百文、
炭錢として年一回　二百文、
盆の附届に砂糖　壹斤、
歳暮の御禮として鏡餅に魚類付。

是丈の金品を其節々に銘々が師家に持參したものであります。

▲學科及教科書

寺子屋の學科は習字、修身、讀書　算術の四科目で在て、此の内讀書と算術との二科が隨意科に成て居ります、尤も習字は寺子屋に於ける主科でありますから、一番重きを置いて專習したには相違ありませんが、其の習字の内には讀方もあり、作文もあり、地理もあり、修身もありといふ樣に、すべての科目が含まれてゐたので御座ます。此の事は當時の教科に用ゐられた手本を見れば、直ちに領かるゝのです。今日學科の連絡とか興味とかいふ事を八釜敷言ふ樣になりましたが、已に業に我々が舊弊時代と稱する三十餘年前の昔に在つて早くも實行されてゐたかと思ふと、驚かざるを得ない譯であります。

然し、當時の人は習字を以て教育の本位とし、先づ何よりも手習ふことに力瘤を入れましたから、從つて教授の方法も行屆いて居たもので在ます。で、最初いろは子の内は西の内一枚へ木筆で以て、(い)なら(い)、(ろ)なら(ろ)といふ一字を太く大きく習はせる。此時は書くといふよりは捏るのでありますが、其が段々進んで椎の實(筆の名)で四字書くやうになり、半心(是も筆の名)で六字を並べるやうになり、細筆で二段チラシを書くやうになり、席書の大文字に御家流の手蹟を

誇るやうになるのでありますが、其のかう成るまでに敎へ込む師匠の骨折、覺え込む生徒の勉強は一通や二通では御在ません。

扱て習字用の敎科書たる御手本は何んな物かといふに男子に在つては

▲いろは、▲數字、▲名頭、▲苗字盡、▲請取文、▲送り狀、▲江戸方角、▲書狀、▲商賣往來、▲消息往來▲庭訓▲往來▲千字文　等

又た女子に在つては

▲いろは▲御文の文▲都路▲名頭▲國盡▲女江戸方解▲女消息往來▲商賣



往來▲庭訓往來、などを一般に課したるものであります。

修身は別に獨立の科目としては御在ませんかつた一、六、三、八の日に師匠が忠臣、孝子、節婦、義僕と申すやうな類に就て話して聞かされました、彼の二十四孝傳などは能く引用された例話で御在ます。

讀書は隨意科で在つて、生徒の所望によりて素讀丈を敎へました——眞に素讀丈を授けたもので講釋は夢にも聞かせなかつた。その敎科書は、男子用に

▲實語敎▲童子敎▲古狀揃

▲三字經▲四書、五經▲文選などが有り、女子用に▲百人一首▲女今川▲女大學▲女庭訓往來、等のものが御在ます。

算術も讀書と同じく隨意科でしたから、所望が無ければ敎へませんでした。その程度は八算、見一、相場割位で、塵功記が唯一の敎科書と成つて居りました。

▲生徒心得

當時の生徒心得なるものは掟書と成つて、何處の寺子屋にも屹度掲示して在ました。男子を戒むる方のものでは、

一　師匠と父母の申付を守るべき事
一　禮儀を重んじ行儀を正しくする事
一　朋輩互に睦しくすべき事
一　喧嘩口論をなすべからざる事
一　食物金錢など持參すべからざる事

又女子に關しては

一、顏のよしあし
一、きものゝよしあし
一、家のくらしむき
一、中くち
一、いひつけぐち
一、耳こすり
一、たか笑ひ
一、男の子のうはさ
一、たんき
一、わがまゝのふるまひ
一、むだくち

右決してなす可からず、そむくものは七ツ時迄とめ置き候事。

としてあります、謂ふ所は唯だ是丈、誠に簡潔なもので御在ますが、少字句の内に能く小兒殊に女兒の病とする惡癖弊風を指摘し盡してをります。

この掟書の罰則に七ツ時とあるは　今の午後四時で、その退校時刻が八ツ時(今の二時)か又は八ツ半時(今

の三時）でありますから、衆生徒の退散後、一人跡へ一時間なり半時間なり留め置く事を謂ふので御在ます。是は在學中生徒が往々加へられた懲罰であります。其他机の上に乘せられ、水を盛つた茶碗と火の點いた線香とを持たせた罰則もありました。當時の子供はよく墨轉を爲ては此の罰則に觸れたもので御在ます。

▲清書と試驗

寺子屋の主科たる習字は毎月六回、即ち六日目毎に清書を致しました。清書の評語には唯今甲乙丙を用ゐる如く、其時分は上中下の三等を小分した「大極上々吉」とか「大上大吉」とか「上々吉」とかいふ語を專ら下したものです。然し中には「上達」とか「美事に上達」とかいふ褒詞を用ゐた所も御在ます。

次に月末演習と申して儀式的に手本を讀んだり、又た大演習と申して、年末に平素暗誦した數十本の手本を、生徒五六名宛交る〳〵、師匠の面前に畏つて誦したものであります。

斯くてこの大演習が終ると、その優等者の姓名を掲げ、奬勵の一助にもと、『油斷大敵』とか『精神一到何事不成』とか『手習は坂に車を押す如し油斷をすれば後へくる〳〵』とか申す警語を大書した額を掛て教場に掲示し、その後で筆二本、墨二挺位を夫々賞品として與へたものです。是が即ち古の試驗法で御在ます。

▲共進會と運動會

今日生徒の製作品を展覽せしむる共進會の如きものに似て、その單純なるは昔時の席書であります。是は四月八月の兩度に催されて、當日は奉書唐紙、西之内書箋紙などへ生徒が腕を揮つて書いたものを教場の四面に貼付て其の父兄をして縱覽せしめ、且つ批評を乞ふたもので、生徒に取ては仲々晴の場所でありました。此の日揮毫席には毛氈を敷き詰め、師匠は男子ならば麻上下に紋付、婦人ならば白襟紋付といふ装で、生徒も亦た身分相應に美服を着けて出席すると、師匠は之を一人づゝ呼び出し、二三字若くは七八字の大文字を書

かしめますのですが、來客環視の前をも迷めず臆せず物の美事に筆を走らす子供の殊勝氣さ、及びその美的態度には涙が溢れる程、實に立派なもので御在ます。

そこで、前述の如く教場の四面に張り出しましたその成蹟品を觀まするど、筆の運びといひ、墨の匂ひといひ、天晴の出來榮で、到底今人の夢想にだも及ばぬ所で御在ます。此日席書に連つた生徒一同へは師匠より赤飯の馳走を振舞ふことに成つてをります。

其柄、今日いふ所の運動會を、當時は花見と稱へて致しました。即ち毎年彌生の花咲く頃になりますと、上野とか向島とか飛鳥山とかいふ所に行つて一日遊び暮らしたものであります。此の催は生徒に取つて一年中の大愉快でありますから、二月の下旬から最う其日の來るを待ち構へて準備を用意して居たものです。

そこで愈々その當日となれば、時を期して師家へ集り、大概朝は四ッ時――今でなら午前十時頃――より行列を組んで志す方面へ繰出したもので、眞先に何々堂などゝ筆太に記した旗を押し立て、第一軍は男生、第二軍は女生を以て組立てゝあります、而して男女共に揃ひの手拭を襟首に卷き、銘々麻裏草履を穿き、女子に限りて一様の日傘を持たせて一層の景氣を添へたものです。次に師匠は小紋の股引尻引からげ、丸羽織といふ打扮で之に續き、跡は兩掛に荷、雇の小使之を預り、又中には師匠の內儀共々町內なる常磐津の師匠に三味線を擔がせ、之を後軍に充つるものも在たやうです。

さて目的地に達すれば、そこで鬼ごつこ、子を捕ろ、目かくし、下駄かくし、釜鬼、かくれんぼ、馬ごつこ等あらゆる遊戯をなし、興盡きるのを待つて、黃昏近くより以前の通り行列を整へ家路に歸るのであります

この花見の催された後二日間は跡片付と稱して、授業を休む例でありますから、生徒は御賽日が三度一緒に來た程に喜んだとの事であります。（完）

婚姻の話

法學士　戎焉散士

婚姻はまことに人生の一大事で、之れを小にしては一身一家の榮枯存亡の基で、之れを大にしては一國一社會の盛衰隆替に係るのであるそは、今更ら事新らしくいふまでもない。其位であるから、此婚姻のわれ〜〜に取りて、如何に肝要で、如何に深重の考察を致さなければならぬと云ふことも分りましやう。であるから、歐洲諸國に於ても、皆此事に關して、法律を以て規定が設けてある。我國に於いても、亦た民法の親族編を以て規定がしてある。今少しばかり其要を摘んで、お話しましやう。

◎婚姻を致すことの出來ない場合、は如何なる時であるかといふに

一、男は滿十七年、女は滿十五年以上にならなければ婚姻が出來ないのである。如何なる事情があつても、法律は決して之を許しません。

一、配偶者のある者は、重ねて婚姻を致すことが出來ません。即ち人の夫とか妻とかになりて居るものは、互に離婚せない間は、他の人とは婚姻が出來ません。若し婚姻すれば、刑法上重婚罪として罰せられます。飽くまで我日本では一夫一婦の主義であります。離婚しても婦人の方では、六ヶ月を經過しなければ、他の男子と再婚を致すことが出來ません。男子の方では今日離婚すれば、明日また他の婦人と婚姻することも出來るのであります。

一、妻が他の男子と不義を致せば、其妻も男子も姦通罪として罰せられることは右に一寸お話しした通りであります。そこで罰せられますと、其妻と男子とは生涯婚姻をすることが出來ません。罰せられんでも其爲め離婚されたならば、最早姦夫姦婦の間では永久婚姻が出來ません。

一、直系血族及直系姻族の間では婚姻が出來ません。直系血族及直系姻族とは實際骨肉を分けたか又は義理ある親子孫祖父母等を云ふのであります。

一、三親等内の傍系血族の間柄では婚姻が出來ません。三親等内の傍系血族とは、實際血統のある兄弟、姉妹の間、甥姪と伯父母との間柄等を言ふのであります。從兄弟姉妹は四親等であるから、勿論婚姻が出來るのである。けれども醫學上あまりよろしくはありません。

右の者の間は婚姻が出來ません。この他の者は出來るのである。

◎子が婚姻を致すに就いては父母の同意を得なければ

なりません。尤も子と父母と籍を別にして置けば、同意を得なくともよろしいのであります。子も父母も同一の籍であれば、是非共兩親の同意を得ねばならないのです。併し父か母かの中、一人の行衛が分らないときとか、死亡したときとか、別の籍へ往つて仕舞つたときとか、又は白痴だとか精神病などで己れの意志を表示することが出來ないときは、一方の親が同意さへすれば差支ないのであります。こういふ工合に子が婚姻を致すに就ては、親の同意を要するのであるから、我邦では前申した通り自由婚ではないと云ふのであります。併し男子は滿三十歲、女は滿廿五歲になれば、親が同意しなくとも、本人同志で自由に勝手に婚姻することが出來るのである　父母兩人共其行衛が知れないとき、死亡したとき籍を別にしたとき、意思を表示することが出來ない場合は、滿二十歲以上の男女は、何人の同意をも要せずに、自由勝手に婚姻することが出來ますが、滿二十歲以下の男女に於きましては、其後見人と親族會との同意を得なければならないのであります。

然うして若しも繼父母又は嫡母が子から申出てた婚姻に同意せないときは、子は親族會の同意をさへ得たならば、繼父母又は嫡母が不同意でも子は婚姻を致すことが出來るのであります　又禁治產者が婚姻を致すに就ては三十歲になつても、四十歲になつても、其後見人の同意を得ねばならないのであります。

◎一男一女が婚姻を致したならば・早速之を戸籍吏に屆出でねばならない・さうせなければ、法律上婚姻の効力がない。其妻か他の男子と不義を通じても、夫は姦通罪の告訴を起す權利がない。此屆出は新夫婦と滿二十歲以上の證人二人以上と共に戸籍役塲に往つて口頭で言ふか又は署名した書面を以てするのである。

◎そこで正當に婚姻を致し、戸籍吏への屆出も相濟みましたときは、法律上どんな効力があるかといふに、妻は夫と同居する義務を負ふのである、夫の方でもまた妻と同居するやうにせんければならん。この同居の義務は、實に夫婦の本分である。故に婚姻をして妻が夫の心に反對して同居せないときなとは、夫は妻を同

居さするやうに裁判所へ訴へるの權利がある。然うして又た夫婦は互に扶養を致すの義務がある。今日我國に於いては、通常夫が妻を養ふのであるが、若し夫に夫れ丈けの資力がなく、技倆もなく、夫自身すら衣食に窮するやうであつたならば、妻が自ら働き、自ら稼いで夫を養はなければならない。これらはまことに夫婦として當然なことである。それから今一つ大切な事柄は婚姻をすれば、妻は完全の能力を失ふことである。別に婚姻をしたからつて、昨日まで完全な能力を有つて居た婦人が、今朝から、其能力が鈍くなるといふ譯ではないが、法律の上で妻の能力を制限し、其權利を完全に行はしめません、即ち一旦人の妻となつたものは、重大な事件については夫に斷りなく、己れ獨斷で處分することは出來ない。夫を有たない滿二十歳を越へた婦人ならば、總べて獨斷で出來ますが、夫のある婦人は然うは出來ません。重大でない事は獨りで出來ます。重大の事件と申せば、人に貸付けてある資本を領收したり、其利子を請取つて其れを利用したり、人から金を借りたり、人の保證人となつたり、不動産だの又は重要な動産を賣買することや、訴訟上の事だの、人から物を貰つたり、又は互に爭ひになつて居るものを和解したり、仲裁の契約をしたり、相續をすることを承諾したり又は其れを拒むことだの、人から物を貰ふことを拒むことだの、又は己れの身体が自由にならないやうな約束を他人にすることなどで。人の妻であるものは以上の事を獨斷で取計ふことは出來ない。是非〳〵夫の許可を受けてせなければならない。其他の事は妻一人で取計ふとか出來る。是も我國で男女同權でない一つの點である。

◎序に男女同權と云ふことに就て一口お話しませう。我國で男女同權でない譯は、例へて申せば、刑法でも夫ある妻が他の男子と通ずれば姦通罪として罰せられませう、けれども夫の方に於いては、何程盛んに女郎買から藝妓遊、偖は妾狂をしても少しの罪にもならん、其他婦人は選擧權もないし、被選擧權もないし、兵卒となることも出來ないし、一般の官吏となることも出

來ないし、男子から見ると種々の權利が少いのである。かやうに婦人の方は劣つて居るのであるから決して男女同權ではないのである。それを男女同權だとか何だとかいふ人もあるが、其れは全くの空想で、現行法の議論ではない。尤も現行民法は大に女權を擴張してからに、種々の點に於て男女の權利を同一にしてあるが、また異なるところもあるから、決して全く男女同權と云ふことはいへないのである。世間で中には此の男女の權利を全く同一にせねばならぬと云ふ人もあつて、此の同權論は公平で餘程文明的であるやうであるが、今日我が國では全然同權にすると云ふことは出來ない。純理の上からいへば同權論は正しいのであるけれとも。今少し我が國が進歩して行けば、同權にすることも出來るかも知れんが、今日の程度では、どうしても同權にすることは出來ん。總べて物事を論ずるには、先づ其國の民情風俗を觀なければなりません。民情風俗は法律を造るの根底である民情風俗に適せない法律は行はれません、害わつて寸益がありません。我が二千有餘年の國史を繙いて、男女の關係が如何になりて居たかと言ふことを調べると、どうしても今日俄に同權説を採ることが出來ないことが分りませう。

◎離婚　歐洲の或る國に於ては一旦婚姻をすれば最早決して離婚をしてはならぬと定めて置く法律もあるが、我が國の法律では離婚が出來ます。尤も法律は男女が一旦婚姻をした以上は、輕々しく離婚すると云ふ事は出來ません。併し夫婦相互の都合で相談の上離婚するならば、法律は少しも干渉せずに、其れに任して離婚を許します。けれども滿廿五歳以下のものが離婚するに就ては、最初其婚姻を許して呉れた父母、又は後見人及び親族會、或は繼父母嫡母の同意を得んければなりません。又禁治產者が離婚するについては、後見人の承諾がなくてはならない。かやうに夫婦が互に離婚致さうといふことに相談致し、父母だの後見人が同意すれば、直ぐ離婚が出來て、別に面倒な事はありませんが、若し夫婦の間で相談が整ひませんければ、何うして離婚が出來ませうか。いひ換へれば一方で離婚

をいたさうと申込んでも、他方で厭だと申したときには離婚が出來るか出來ませんか。これは一方に不都合がなければ離婚が出來ません。不都合があれば、裁判所へ訴へて離婚致すとが出來るので。不都合の事とは左に申すやうなとである。

一、夫婦の一方が未だ己れと夫婦でありながら更らに他人と婚姻したとき

一、妻が姦通をしたとき

一、夫が姦通や、姦淫罪を犯して處刑されたとき。

一、夫婦の一方が僞造罪、賄賂罪、竊盜罪、强盜罪、詐欺取財、受寄財物費消罪、贓物（犯罪によりて得ました物件に關した罪で、故買犯の如きものであります）に關した罪、官の封印を破棄して其物件を盜取し又は毀壞した罪、賭博を開張して利を圖り又は博徒を招待して輕罪以上の罪に處せられ、又其他の罪によつて重禁錮三年以上の刑に處せられたとき。

一、夫婦の一方が、他方に對して同居するとが出來ない程の虐待か又は重大な侮辱を與へたとき

一、夫婦の一方が、惡意で他の一人を振捨てたとき。（但し資力がなくて仕方がなく振捨てたときには離婚は出來ません）。

一、夫婦の一方の親とか祖父母と言ふやうな直系尊屬から、虐待か又は重大の侮辱を受けたとき。

一、夫婦の一方が、己れの直系尊屬を虐待したり、又は重大の侮辱を加へたとき。

一、夫婦の一方の生死が三年以上分らない時。

一、婿養子の緣組をしたときに其を離緣したときか、又は養子が養家の婦女と婚姻を致したときに離緣か緣組の取消があつたとき。

右に擧げた項目に觸れるときには、其爲め己れの權利を侵されたものは、離婚の訴をするとが出來るのである。從て右に擧げないとは不都合な事ではないのであるから、離婚するとが出來ません、世間には相當の時期になつて婦女が懷胎しなければ、夫は離婚するとが出來るなとゝいふ天保時代の法律知らずの人間がありますが、今日は此んなとでは離婚は出來ません。要するに此離婚の裁判騷ぎなどは極めて喜ばないとでありますから、どうぞ皆樣はそんな騷ぎはせずに、能く道德を守つて頂きたいのであります。（完）

觀察

外人の見たる華族女學校

この月の十三日、東洋に於る教育觀察の任を帶べる巴里發兌の「ル、マタン」記者二名、來りて華族女學校を參觀す、左に記すは同校幹事淺岡氏の談片なり（六月十五日記）

この頃は支那人も西洋人も、始終參觀に來ますが、支那人は更に質問しない、見ッ放しで歸つて仕舞ふ、夫れは不思議です。

一昨日「ル、マタン」、毎朝新聞とでも譯しますか、その記者が來ました、來たのは朝九時で、觀たのは僅か一時間でしたが、質問で午後の二時過ぎまで係りました。

記者は先づ、學校で生理學を敎へ、衛生學を敎へ、育兒の事も敎へて居るのを見て、佛蘭西ではソーいふ論もあるけれども、未だ實施して居らない、夫れは驚くといつて居りました。

夫れから何につけ、彼につけ皆聞く、例へば貴校の方で敎へて居る書は、ドーいふ書を敎へて居るか、日本畫といふものと、西洋畫を敎へる。然らば西洋畫を學ぶものは何人あるか、日本畫を好むものと西洋畫を好むものとの比例はドンナものか、外國語は何を敎へるか、

外國語は英吉利語と佛蘭西語とを敎へて居る。

佛語を學ぶものと、英語を學ぶものとの比例は、ドーか、音樂は如何、ピヤノと琴を學ぶものと、ドーいふ比例か、繪畫は我々共が見ると、支那流の畫の樣だけれども……畫を敎へるに就ては美術の歷史でも敎へるとか、琴はいつ頃渡つたものか、漢籍を敎へる樣だが、此漢籍が日本に渡つた年數はドノ位前のとか、料理はドーいふ積で敎へるか、

是等の質問が續出する、根掘り葉掘り聞く、しかし費用の事丈けは、聞きません、是れは禮義ですから、聞きませんが、學校には秘密がないから、費用の事でも聞きたければ、お質問に隨つて御話する、と申した

ら、
イヤ夫れは辱けない、實は御聞きしたかつたけれども、費用の事をお聞きすると失禮だと思つたので、…ドーゾ敎へて下さい、授業料は幾干取るか、

二圓以上三圓以下。

ソーですか、佛蘭西だと、二圓以上三圓以下といへば、悉く二圓になつて仕舞ふ、貴校の方ではソレがないかと問ふ、

ソレはない、

ナゼ三圓に極めないか、といふから、

ソレは日本の華族には種類があつて、昔の大名で、六十萬石、百萬石取つて居たものは、今になつても古川に水絶えずで、大きな生活をして居れば、財産もある、同じ侯爵でも、公卿さんになつては……随つて公卿の手當も極く微々たるものであつた、矢張り今になつても、大名に比ぶれば財産が少ないので、同じ華族の内に財産があるものと少ないものとある、二圓以上三圓以下といつたら、少ない者は二圓しか出さぬ、大名で澤山金があれば、默つて居ても三圓出す、であるから御心配には及ばぬ、當校は勝手にさせてあるけれども、向ふからは貧富によつて分つて出すから、決して何圓から何圓までと規めてあつても、偏頗にならない、

ナル程、ナル程と言つて、非常に感服して居りました。

修身といふものは、敎へるのにドーやつて敎へて居るか、

勅語といふものがある、ソレは日本の古來の道は忠孝を本に立てヽ居る、朋友の信とか、夫婦の和とか、兄弟の愛といふ樣なことをも其中に含蓄してある、ソレは古人を手本として敎へたり、或は格言によつて敎へたりして居るが、西洋の哲學的の理論を以て、修身を敎へるとは一切しない、

ナル程、ソレはソーいふことであらう、ナル程といつて居つた、

モー一寸問題になれば、何でも聞く、巨細に聞く、又

ソレを一々書き留めて行く、たゞ評論はして行きませんでした、但し學校では、珍客が來た時には、生徒の製作物をヤル事にして居るので、殘り物だッたが、一人づゝ遣つた所が、大さう喜んで、歸國つてから同國人に見せませうと、持つて行きました、

たゞ育兒法と生理學と、ソレから看護法此等を教へて居るといふには驚いたらしい、佛蘭西ではまだやつて居らぬと見える、其他は外に不思議なこともなかつた樣です、只しかし佛蘭西では、生花などゝいふものを大層珍らしがつて、茶なンていふとは、尤も珍らしく思つたらしいが、是れは別に褒めも何もしませんでした。

婦人の見たる大阪

溪流女史

大阪は第二の都、商業の中心、第五回博覽會の開場地として、われひと共に見まくほしきを、況して己れは十年以前、三年の星霜をこの地に送り、知己も多く、なじみの場所もすくなからねば博覽會の夫れよりもなほ、促がさるゝもの多くて、四月八日といふに、一人夜を犯して新橋を出でぬ。

さなきだに西下の客多きを、けふはまた神戸なる觀艦式の二日前といふにぞ、客車の混雜いふべくもわらず、たゞ立たぬばかりを幸として、辛くも一隅に座をしめぬ。發車前八分、二等は滿員次の列車へといふ聲窓外に聞こゆ、毎日毎時かく人の西下せば、東京人はやがて悉く大阪にや移住しつべしと心細し。

函嶺にかゝる頃より、鮓の如くつまりし、兩隣の紳士が、青息吐息のきれめきれめに、絶えず眠らるゝものか、わが方へ堅き頭打つけたまふ、腦の重量尋常には過ぐれたらんやうおもはれ、よも普通の智惠の御方にはおはすまじと、尊敬の念はおこれど、苦しさの耐えがたければ、夜のほの〴〵と白む頃、靜岡に下車して、次の沼津發列車に乘り換ふ。おのれながらいしくもしたりけるものか、この客車はまことに靜かにて、わはよくは横にもなれぬべき有樣なり。かゝれば濱名

の朝げしき、名古屋の金の鯱など、面白く眺めて九日の夜の十時、梅田停車場に着きぬ。早く既に大阪のあら、目に映り耳に聞こえたれと、今は綿の如く疲れたれば、迎の人に伴なはるゝまゝ一口の批評も口にはのぼせで、こゝより關西鐵道の城東線といふに乘りかへて、宿なる桃山の旅館にとむかふ。

旅館は都はなれて景色のよきと、博覽會に便利なると、比較的廉價なるとを取得にして、撰みたる家なれば、この時期この土地として、待遇の厚薄など、いはんは大人げなかるべし。とにかく雨露を凌ぎ、飢ゑ渴えせざる事、望外の悅びともいふべしや。

あくれば四月十日、觀艦式の盛典と聞こゆ。ありとあらゆる大阪の人はいふも愚か、近鄕近在より足のこの地に向かはん限り、男といはず女といはず、老いたるも若きも、富めるも貧しきも、あらんほどの美服を競ひ、粧飾をこらして、西より東より、はた南より北より、船に汽車に、徒步に俥の差別こそあれ、午前四時といふ頃より、はやひし〳〵と梅田停車場に押し掛け、汽車は彌が上に人を充て、神戸へ神戸へと走せ去る。その光景戰地もかくやと凄じくも恐ろしく、とてもかゝる生存競爭場裏の人ならじと、みづから思ひ落して、觀艦式拜觀の念を絕ち、嵐山に花を訪はんと、西むける人々と背合に、京都へといでたつ。同じ思ひの雅人も少なからぬにや、この汽車もさまで苦しからぬにはあらねど、京都より嵐山の麓を通ふ、園部行の汽車は、流石に氣樂にて、二條花園なんどの各驛を過ぎて、嵯峨に下車す。こゝより嵐山へはたゞ六七丁のあはひのみ。名にしおふ山のけしき、花の匂ひも俗ならず、水の色橋の形、名所の名にそむかずとぞたたへらるゝ。名高き大悲閣にも詣で、溫泉宿に晝飯を喫し、歸路は輕舟に棹さして嵐峽をくだるの風流をもまなび、吐月橋畔に小督の局の墓を訪ひ、火ともす頃大阪へ歸りつきぬ。

十一日は博覽會に行き、一とわたりその大體を觀察したり。博覽會に就てはいはじ、世旣に定論といふものあればなり。歸路は市內を中の島へとむかひぬ。市

内はいつも變らぬ道路の狹きに、むかひより走せくる俥とすれ合ふごと、あたら膽を冷やし、胸を跳らすること、幾度といふ數を知らねど、車夫の上手なるか、耐忍強きか、俥の衝突割合に少く、よしや少しく過ちありても、罵りあふこともなければ、まして打ちあひなど見るべきやうなし。かく道路せまければ、鐵道馬車の類は用ふべき所もなく市民は市外を一周せる汽車の外、交通の機關はたゞ大川を走しる川蒸氣と、その他の川々にある早船といふはしけ樣の小舟とのみ。自轉車も市内を乗り廻るは稀にて、俥のみ誇りがに走しるを見る。

小賣店は、せまき道路の兩側より盛りこぼれんばかりに商品をつらね、多くは正札をつけて安價を競ふさま、東京の勸工場に似たり。小商人の無愛想にて、言語の鄭重ならぬやう覺ゆるは、いつもながら不快に感じぬ。

かくて十二日は散らぬ間をと吉野に花を訪ひ、十三日よりは博覽會ならぬ日は、堺にも奈良にも、また京都にも汽車の通ふかぎりは大阪の近傍を遊び歩きぬ。かくて大阪の貴夫人も觀たり、紳士も觀たり、令孃も學生も、兵士も番頭も、小僧も下婢も、田舍漢も老人も小兒も、車夫も馬丁も觀たり、花見客としての彼等を見たり、博覽會見物としての彼等を見たり、見て皮想の觀察を下したり、いでやわが目に映れる大阪の批評を試みん。

京の着倒れ大阪の食ひ倒れとは、古くより聞ける諺なり、まことや汽車の名古屋より西に走しるに從ひ、一驛ごとに乗り込む人の服裝、美しうなり增さりて、東夷の目を驚かせと、さりとてまた、有りあまる衣服を、無雜作に着たりとも見えず、衿には叮嚀に手巾をはさみ、帶には後の結目に、風呂敷をおほひ、裳すそは高くかゝげて、水を渉るべき心構へあるらんやう見ゆるも少なからず、男もまた、羽織を叮嚀にたゝみて懷に納め、俥に乗る人、必ずそを後にはをりて皺にならぬ注意するなど、用意劣るべしとも見えず、異に關東にて見受け得ぬ珍らしき始末といふべし。猶京

都より西して大阪の近傍に至れば、かの食ひ倒れの名あるゆえんか、僅か二十分三十分をもて終點に達すべき、短距離の汽車にも、需用あればなるべし窓外に喧しく物賣の集り來て、鮨菓子果物をはじめ、あらゆる飲食品を商ふてと珍らしからず。こを購ふものは、強ち三等客の小兒と老人とのみにあらず、一等の貴夫人も、饅頭買ひて食べたまふを耻ぢず、二等の紳士はたかき餅駄菓子を嫌ふべしや。その口の忙しげなる事、氣の毒の至りといふべく、忠實なる腸胃は、よくも練習せられたるものかなと感心するの外なかりき。されば博覧會内のベンチは朝の八時より、腰かけてお辨つかふもの引きも切らず、場内竹の皮を以て埋めらるゝも、尤の次第といふべし。

聞くならく、両　陛下行幸啓の際、奉送迎にたてる小學兒童も、亦立ちながら蜜柑菓子の類を貪るを憚らず、さなきはかき餅昆布の類もて絶えず口を動かしたりきと、まことに奇習ともいふべく、意知のきたなしとも評すべし。

これ一に習慣にもよるべけれども、若しこの供給が身體の自然なる需要によるとせば、かく殷富なる大阪人も、憐れや口腹を滿たせる食物に、營養量の不足ありて知らず識らず間食もてそを補充せんとするにはあらざるか。果して然らば、肉食人種と商業界に競爭する、日本唯一の商業人種としては心細さ思ひもせらる。

かゝる有様なれば、汽車中にて、書物みる人などは無く恐らくは新聞讀むも不思議がらるゝ程にて、たゞ口中の暇なる間は、婦人は懐中鏡を出して髮をかき、顔を直し、男子は烟草をふかすのみ。窓外に變る野山の景色、田畠に薫る若草の色など、目を止むる人もなし。たま／＼菜の花の咲きそろひ、黄金の浪の幾うねりともなく、見渡すかぎり續けるを眺めて、或る婦人が「あないにたんとの玉子焼で、お辨してゐたら、ようおますやらう」と垂涎せるに、實に眞情を吐けるものと、聞くも可笑く、思はずも微笑を浮べて、同行の人と顔を見合せたりき。

嗚呼實利主義の大阪よ、物質的の大阪よ、到底敎育を談じ美術を語るべきにはあらじ。二個の府立師範學校と、二個の府立高等女學校と、數個の中學校と無數の小學校とは、校舍の美しき設美の佳ろしき、共に三府中稀に見る所ときく。果して敎員諸氏の苦心空しからざりせば、數十年後の大阪博覽會の時期には、美術館に價格表のみあさりて、これは何千圓かれは何百圓と價のみにて品定めする人の減じもしつべく汽車の車長が、檢札に來たるまでは、無斷に赤切符もちて一等二等の列車に乘り居る人の跡も絕つべしと、聊か意を强うしつゝこの稿を終へぬ。

新聞と家庭

▲訪問に就て　(東洋畫報古老生)

人を訪問する時第一の注意は成可く早く暇を告げて歸るにあり、無沙汰を詫びる普通の訪問ならばよい程に話を切上げ、又用向の訪問ならば他の雜話を置き直ちに用談に入り話を終らば暇を告ぐべし、右は大切の心懸なり、兎角は主人をして今暫く留り呉れよと思はしむる樣に仕向くべし、斯くすれば主人たるもの大抵の用事ある時にてもいつも一寸にても面會し呉るゝものなり若し之に反して事由もなき無用の長談をなし、用事の外雜話をなし、彼れは長坐の客なりと常に厭せしむる時は肝腎の用事ありて訪問する時も主人は逃げ勝ちとなり此方に大なる損あり、凡そ何人も業務なきものはなし、朝九時十時には出勤して業を執り、午後四時前後に歸るを常とす、終日安閑として家に在る人は百人に一人もなきものなり、然れば出勤前には主人も己れの用事あるべく又午後退出の後は一日の勞を休め或は自個の用事を濟すべし、然れば在宅の時とても主人方は常に忙しきものと假定すべし、其時間に訪問して邪間をなす事故なるべく手短かに談話を切上げ歸らずしては實際主人に大なる迷惑を及ぼすものなり、或は人に因り今來て今歸るは主人に對して不敬なりなどと思ふ者あれども、そは大なる心得違ひなり、主人は

總じて客の早く歸るを喜ぶと知るべし、此方より訪問すれば主人は無理にも時間を繰合せて面會の義理を立つれどもそは我に對する厚意のみ吾が如く訪問する人も數多あるべければ主人の方の都合を第一に謀らざるべからず云々。(抄)

▲無聲の言葉 (毎日新聞)

無聲の言葉などゝいふと何となく禪宗の僧侶じみて聞ゆれど、實は Tell tere tougue といふ外國語の意譯にして、聲を發たずに所思を對者に通ずるとの謂なり、かく言へばとて聾啞者の爲にてはなく、普通人士に此應用を勸めんと欲するなり、尤も我邦にても古來目に物言はせるとか、身振で表情するとかいふはありしとなれば、今更事新しく言ふ必要は無きが如くなれど、更に能く更に多く實際に應用せられんことを望むものなり、扨て余の觀察によると整頓せる家庭ほど靜肅にて、不整頓なる家庭ほど騷がしき樣なり、同じく兒童を誡むるにも親が靜かに一二言した丈にて、ピツタリ改むる者もあれど、中には聲を嗄しても改めず遂には鐵拳を振翳はすに至るものあり、是一には親の信用にも由ることなれど又無暗に口喧しく言ふからの事なり、かゝれば一般の家庭に於て此の無聲の言葉なるものを研究し、兒童を導くにも下婢を率ゐるにも出來得る丈之を應用せしならば、家庭は靜肅にして而も事を速にするを得べし、倘又た來客の對遇にも此の應用は極めて必要なり、如何に言葉巧みに接待したりとて、其顏色、其の姿容の之に伴ふにあらざれば、客の方にても決して愉快の感を起さゞるなり、若し之に反し、言葉は少くも其目其口其身振が眞に歡迎の意を表出してありしならば、少からぬ滿足を來客に與へ得べきなり、併し注意の上にも注意を要するは客の前にて夫妻或は家族が之を應用する時なり、用ひ樣によりては却て惡感情を惹起するものなれば構へて心せざる可からず、云々。(抄)

▲男女の言語 (二六新報)

家庭は進んでは社會に對する出陣の屯田にして、退いては修養の道場なれば、初て婚姻するは即ち屯田村に移住したると同じく、又劍法、禪法の道場に入門したるに同じきなり、故に家庭には宗敎あるを要す、家庭をなすもの丶毫も宗敎的設備を缺くは、餘りに乾燥にして無味ならずや、今の學校の忠孝主義は人情の秘奥と千里萬里にして、何等心性の素養をなすものに非ず今の倫理主義は餘りに散文的にして、韻文的の興味無く、今の夫婦は餘りに生慾的、實利的にして、所謂スヰートホームの興味を知らざるなり、今の青年男女は心理學を學ぶ前に人情學を學ぶべし、社會學を學ぶ前に少しく世態を辨へよ、枕草紙、源氏物語を措くも寧ろ娘節用を讀め、今一つ吾徒の奨説するは男女の言語なり、言靈の幸ふ國と自負したるは遠き昔の自惚にして、足利の中頃より德川氏に至り漸く會話の技術を失墜し、言語の肢節に孤負するに至れり、公開堂に雄辯家無きは、近來人の唱ふる所なるも、其實二人三人の差向にも、會話の技能は見るべからずして、纔に之を下等陰晴の社會にのみ認む、張扇の講釋師は單に達者なりといふだけにて、落語家の如き故圓朝のみは老練を極めたりしかども、その他の餘子は碌々として數ふるに足らず、芝居の臺詞の如きは、近來益々惡劣にして聞くに足らず世人は言文一致と騷ぎ廻れども、話術の更に大に講せざるべからざるを知らず、殊に書生上りの紳士と、女學生上りの夫人とより成立つ今の中流社會の一般に言語に短なるは、いづれの點よりするも慶ばしき事にあらざれば、吾人は是等の欠點を補ふの方法を講せざる可からずと云々。(全文)

▲莊嚴の道場 (女學雜誌)

今の人家庭に和樂團欒を求め、英國人の所謂スウヰートホームにして天國の摸型を作せんと欲するもの、素より不可なし、然れども家庭は只幸福にのみすべきも

のと誤解する勿れ、家庭は單に休場所にあらず、亦學園なり、逸居團欒して樂しむは其一つの用なれとも、共に苦み、同に痛憂して之を理想の道場となし、人間進化の必要機關として、極めて之を莊嚴にせんこと、他の一つの至大なる目的なり。凡そ人相同居するときは、互に辛抱勘辨して各自に我儘を制してこそ、共樂の好結果をも得べけれ、初より幸福喜樂を得らるゝものと待構へ、偏に家庭の樂しきことを期する時は、人々の要求互に相戰ひ爲に意外の不結果を來して、一同に不平不滿を感ずるに了るものなり、今の新家庭を作るものが、大率不結果に歸する多き所以、只だ此一理に存す。

人亦切りに外國人の家庭の幸福を說けとも、是其の美に眩惑して裏面の眞相を知らざるに座す、外國人の家庭は一種の見せ物なり、公開して客に示し以て得意となすと、我國從來の家庭が他に向つて密閉したるの比にあらず、外國人は男女共に交際に長じたる國民なり故に其の家庭の狀況を他に示すことを一の得意とせり、是れその家庭が如何にも樂しげに見ゆる一大元因にして、其の實相は必しも然らず、彼等が人に見する外部の好狀態を見て、直ちに以て其の眞相と爲すべからず。

凡そ心得なき男女の同に集りたる所に眞の平和あらん筈なし、眞の平和は修養あり克己ある男女にのみ生じ來ると、古今東西常に然り、左れば家庭を平和にして其和樂を希望せば、必しも西洋風にあらず、必しも昔風にあらず、たゞ今の男女の今の心にあり、若し莊嚴にして謹虔なる克己にして、犧牲なる心を以て相對し、而して互に相敬し相愛せば、如何なる茅屋の下、如何なる貧小の室に於ても、天國の光景の現せざる理あらんや。(全文)

▲女子と美術　(愛國婦人島田三郎氏)

今日の如く婦人にして美術に心を寄するもの丶多き時は、自己に在つては自然に其精神を高尙にし、一家に

於ては美の觀念を發達せしめ家庭の樂を增すに至り、延いては一般國民の性情に善美なる影響を與ふるに至るべし、又た美術に依て婦人の位置をも高め得べし、人類として男子婦人の區別無き以上は、男子の爲す働も必要なれば、女子の働きも亦た同分量を以て必要なり、學者が文筆を以て世を開拓し、武夫が武力を以て世の波瀾を鎭むるは共に必要なるとなるが故、武夫が學者より貴しといふの理由なきと同樣に、婦人の地位や働の領分は男子の領分より狹い所もなく亦た低い所も無かるべきなり、されば人類平等に分業の觀念を以て男子は婦人を見ざる可からず、併しながら歷史と國の成立の關係より今日の所にては悲しむ可し、未だ男子と婦人とが同位置を占むる程度に至らずと雖も、早晩英米諸國の如く婦人が文明を產出する樣にならずばあるべからず、それには婦人の爲す領分を高尙にし其の働の必要の度合が、男子の働きに減せぬ丈の力を示せしならば、婦人自ら其の位置を高め得べし、婦人の位地を引上るに就ては婦人自ら其の位置を高むるべく社會に迫らざるべからず、それには自分の身を以て社會に重要視せらるゝものとならざるべからず、其の方法としては美術工藝界を開拓して世の文明を導く事に努むるが最も適當なるべしと思意す。（抄）

▲貞操とは肉體乎　（萬朝報鬼川生）

予は大膽に假定せん、才德容貌共に勝れたる處女が强姦されたりと、然らば世人の多くは異句同音に、彼女の貞操は破られたりと叫ばん。哀むべき哉、彼女の栄望を擔へりしは、玉をのべたる如き彼女の肉體にして才德も何等の効なく、彼女の貞操は肉體より一歩たりとも出づべく許されざりし也　意志の有無如何を問はず、婦女にして一度其肉體を夫婦と云ふ名稱なくして男子に犯されたらんには、假令淑德無比なりと雖も、最早神聖なる婦女たるべく世人の感情は許さゞる也。然れども予は竊に思へらく、貞操とは其精神に附したる名稱にして、他動的强制に依て肉體を犯されたる婦

女は決して貞操を破りし者には非ざるべく、また毀譽褒貶を全く離れ、貞操なるが爲に貞操を全うするは、婦女の美德なりと觀じ、自由自在に活動する婦女をのみ、眞個に貞操なる人と云ふを得べしと。世に色餓鬼多し、闇夜小間使其他の魔女を挑み、未來の賢母たる資格を有する婦女を、日蔭者として憂き一生を終らしむる者尠からず。嗚呼是誰が罪ぞ、加害者なる紳士?に其罪あるは云ふまでもなけれど、貞操即肉體と解し、一瑕を指て璧玉の美を否定する、舊式の道德に拘泥し而も是を脱する事能はざる世人の多くは、確に這般の婦女の殺人者として其責に任せざるべからず。(全文)

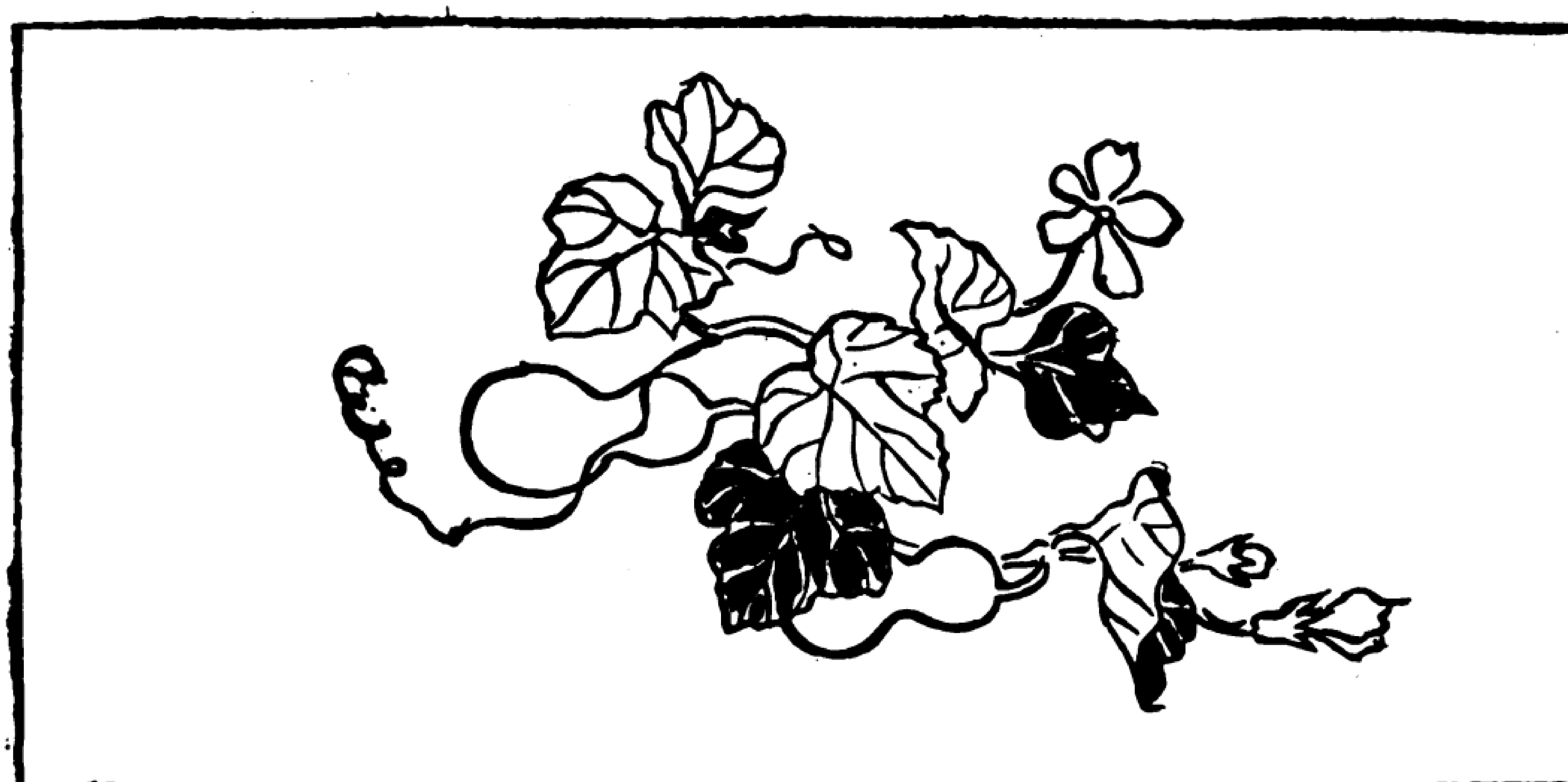
▲避暑地の選定 (讀賣新聞 佐藤醫學博士)

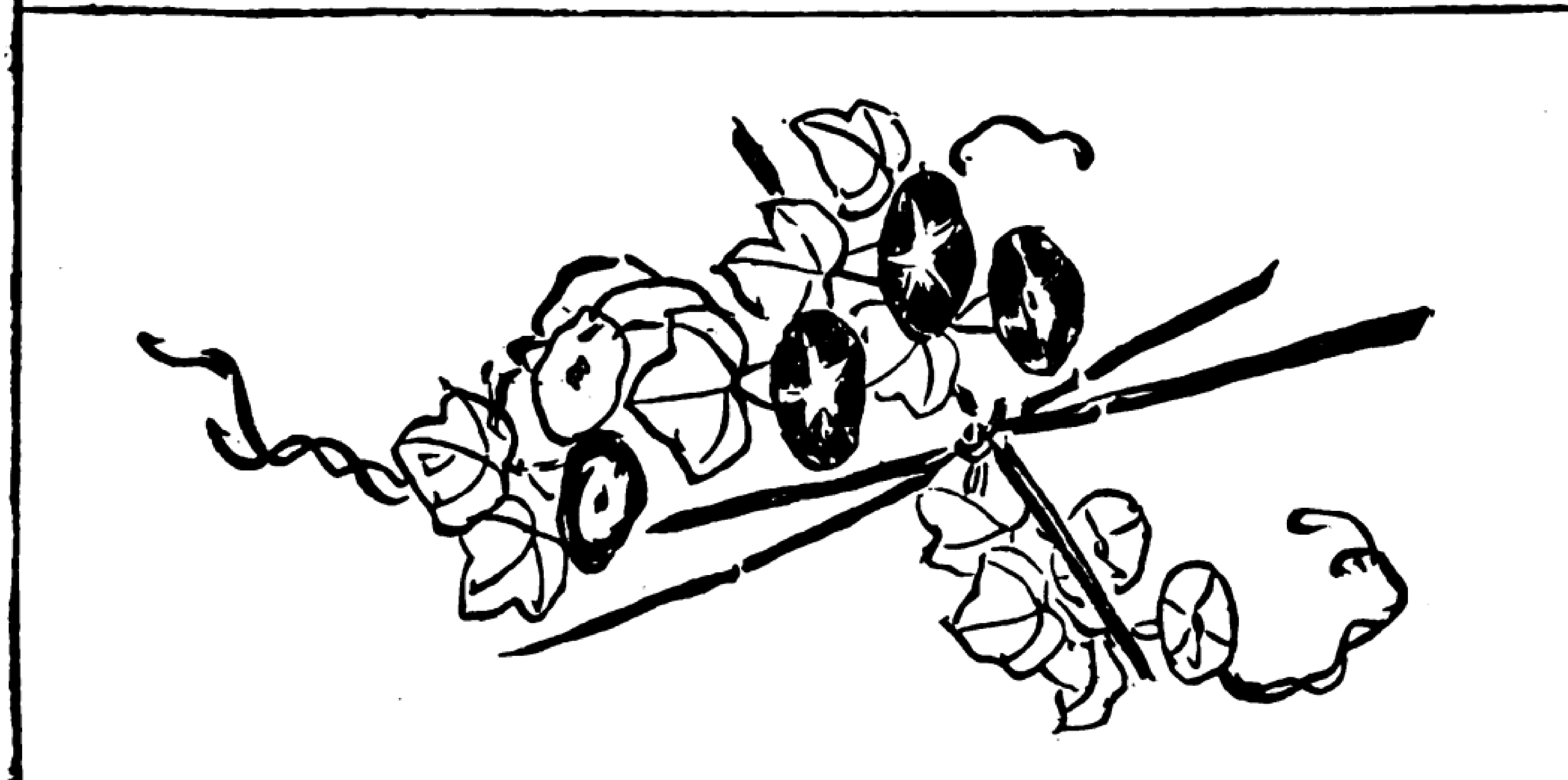
一般の衛生から云へば夏は誰も身體の新陳代謝少なければ其れだけ一體に鈍くなり居れり、故に、遠く塵埃の市街を去つた閑靜な山にでも行けば、空氣も好し涼しくもあれば、身體の新陳代謝を促して食慾抔も進み來るを以て、無論惡からう筈なし、然れどもこは其人々の體質に依る事なれば誰にても山が好いと云ふ譯にはあらず、先づ大別して體格の堅固した方の人は山を虛弱な人は海邊の方を宜しとす。

山には温泉がないと人餘り行くを欲せざれど、强ち湯がなくてはならぬと云ふ理なし、湯も熱い湯抔に入つては宜ろしからず、極微温くして度數も少きをよしとす。

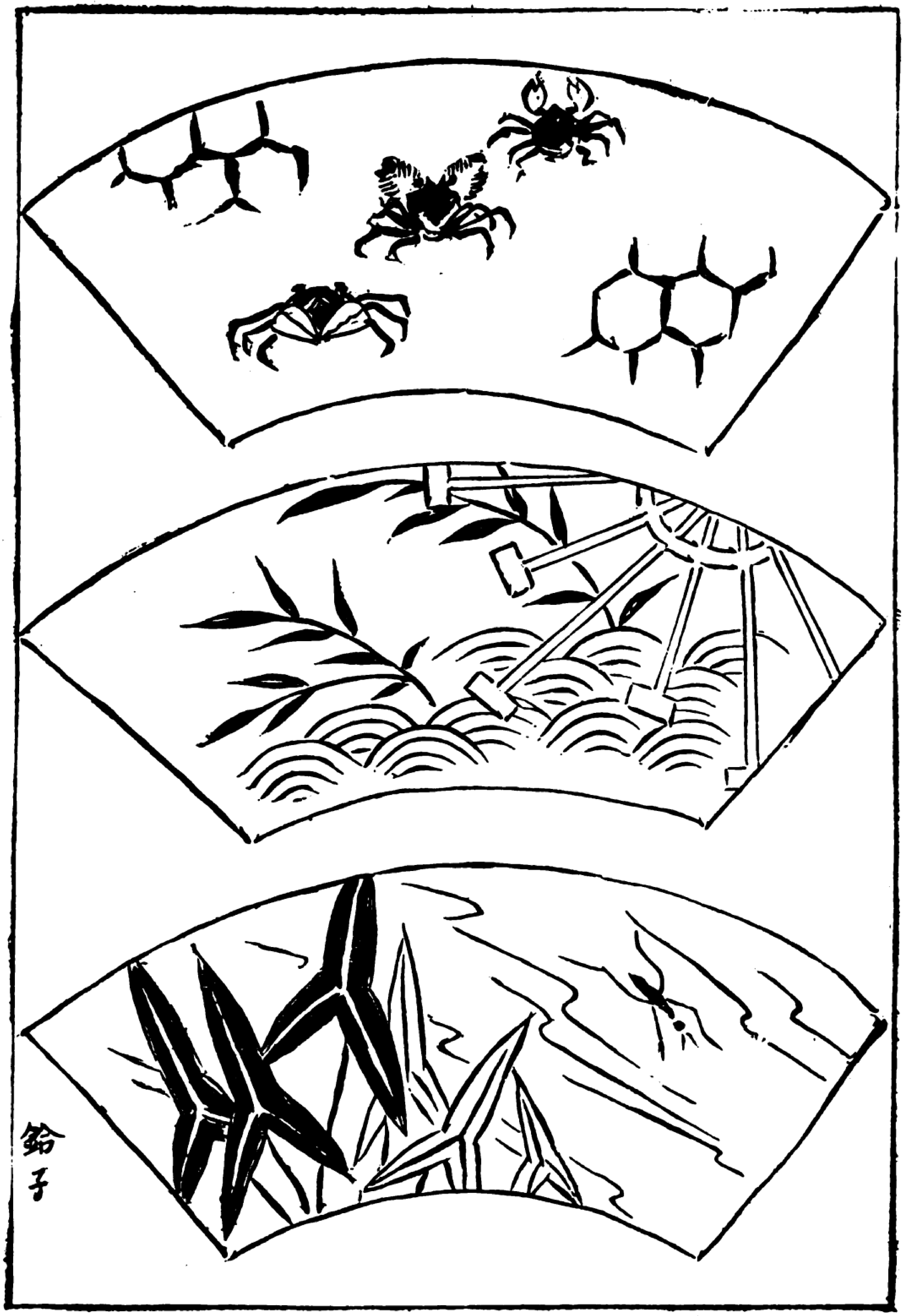
山が好いとしても東京抔は適當な山が近所にないから一寸困る、山と云ふと雨が多い、伊香保も日光も箱根も悉皆雨の多い處で、斷へず濕氣を含み居る故大して讃められず、高く涼しくて空氣の乾いた處は輕井澤位ゐのものなるべし。

兎に角日本には氣候や空氣の良否の專門に調べて居る醫師を欠くが故早く斯う云ふ事を專門に調べる學者の出んことを欲す。






鈴子


鈴子

日用雜俎

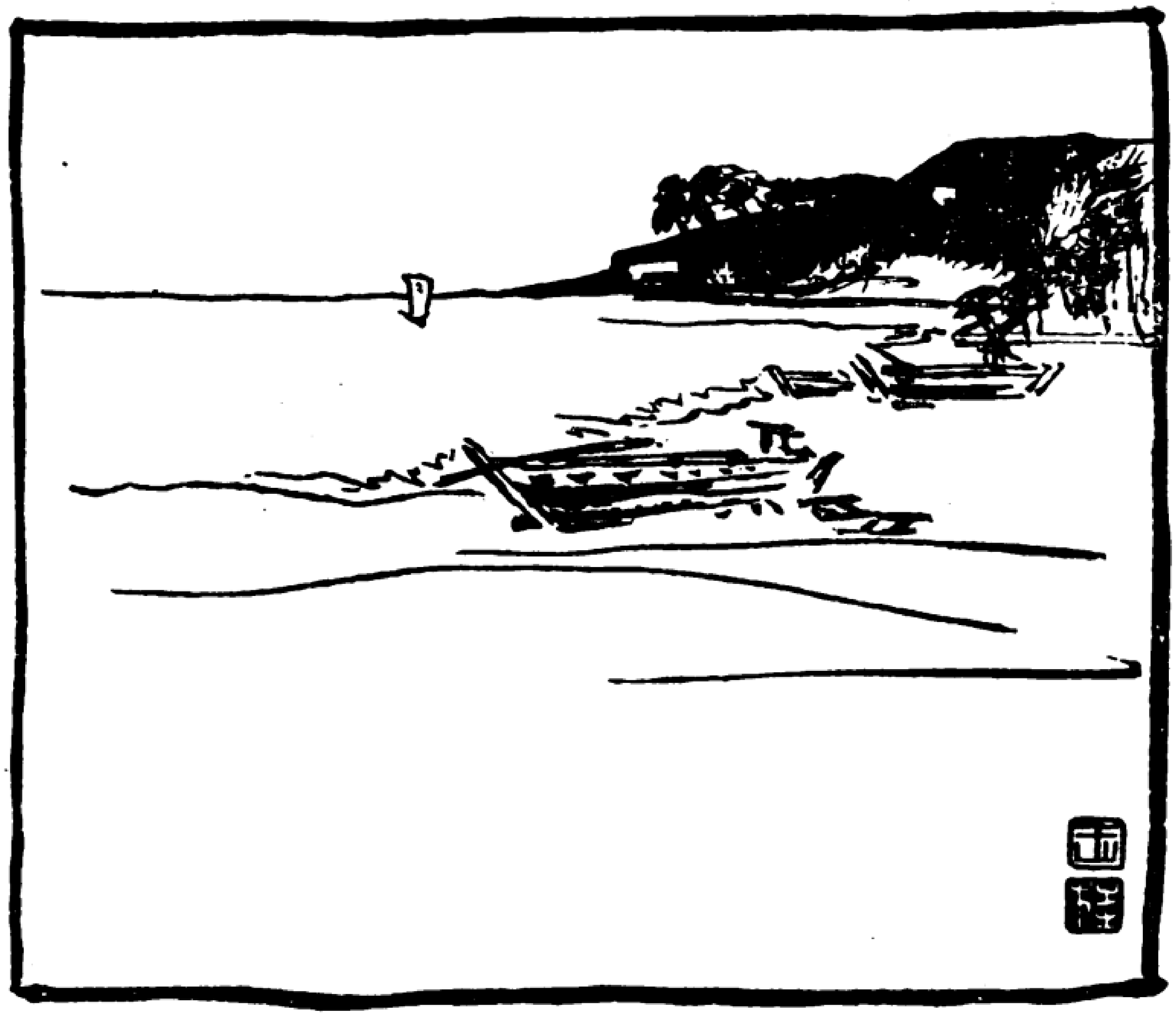
○接吻

最近の外國新聞に、接吻の衰頽と題して、近頃歐米諸國では、この習慣が段々に衰頽つて來たことを、仔細に記載してあるが、云ふまでも無く、これは病毒の傳播を防ぐのだ、然るに古來清潔を貴ぶ我が邦人間には、嘗てこの習慣が無かつた。と一般に云ふのは嘘で實はあつた。今日も猶この習慣が存じて居る。但し男子には稀で、女子の間に多くある。可愛い我が兒に對して、燃え立つ愛情を壓へかねて、母が我が兒の蕾のやうな、お乳臭い口に接吻するのがあるのみならず、他人の子供の頰を舐めたり、また手首を握つて吸つたりするのは、吾人が親しく實見する所である。けれども若しその人が善く無い病氣でも持つて居たならば、親は何んなにか有難迷惑を感ずるであらう。些細な事のやうであるが、害の及ぶ所少ではない。

○玩弄品

これも似たやうな話であるが、幼兒のある家に往くと、笛だの、おしやぶりだの、またでん〱太鼓だの幼兒が直接に口に入れるものが、場所を定めず轉がつて居る。すると客は御愛嬌にそれを拾つて、吹いたり振つたりして幼兒の御機嫌を取る。これも前と同じやうな點から、或る人に對しては、親は甚だ迷惑する。また他人の幼兒に玩具品(口に入れる)など贈つた場合に、先自分の口で吹いて見せたり、或ひは清潔で無い手で弄つたりして、直に幼兒の手に渡すなど云ふことも、世間に間々ある例であるが、これも成る可く注意すべきことで、その害たるや、前のに餘り劣らない。また親は現在それを見て、心にハツと思つた所で、人は存外下らぬ事に遠慮して、我が大切な兒供と木の片とを交換へるやうな、目に見えた愚なことをして、世間に三文の價ひも無い義理?を立てたがる弱身があるから、イヤそれは不可ませんとも敢て云はぬ、だから此處は先ア(物を贈るほどの厚意があるならば)客の方から遠慮して、お互ひに注意したが宜からう。近時は

雜誌にも、新聞にも、この邊の結構なお話が規則のやうに出て居るので、世間の人も大分この邊の事に注意して來たのは結構である。手近い例を擧げて見ると、去る婦人が自分の兒に、或る時笛を持つてくれたが、直接に幼兒に渡さずに、「一度洗つてあげて下さい」と云つて、先づその笛を母に渡した。はて注意深い婦人であると思つたが、自體この婦人は大そう子好きで、この以前にも似寄つた玩弄品を屢々持つて來てくれたことがあつたが、嘗てこんな注意を與へてくれたことは無かつた。何んな事から此んな事にまで注意するやうに成つたのかと、疑問多き自分は、この婦人に就いても、また一つの疑問を抱いて居つたが、それから三日目に、自

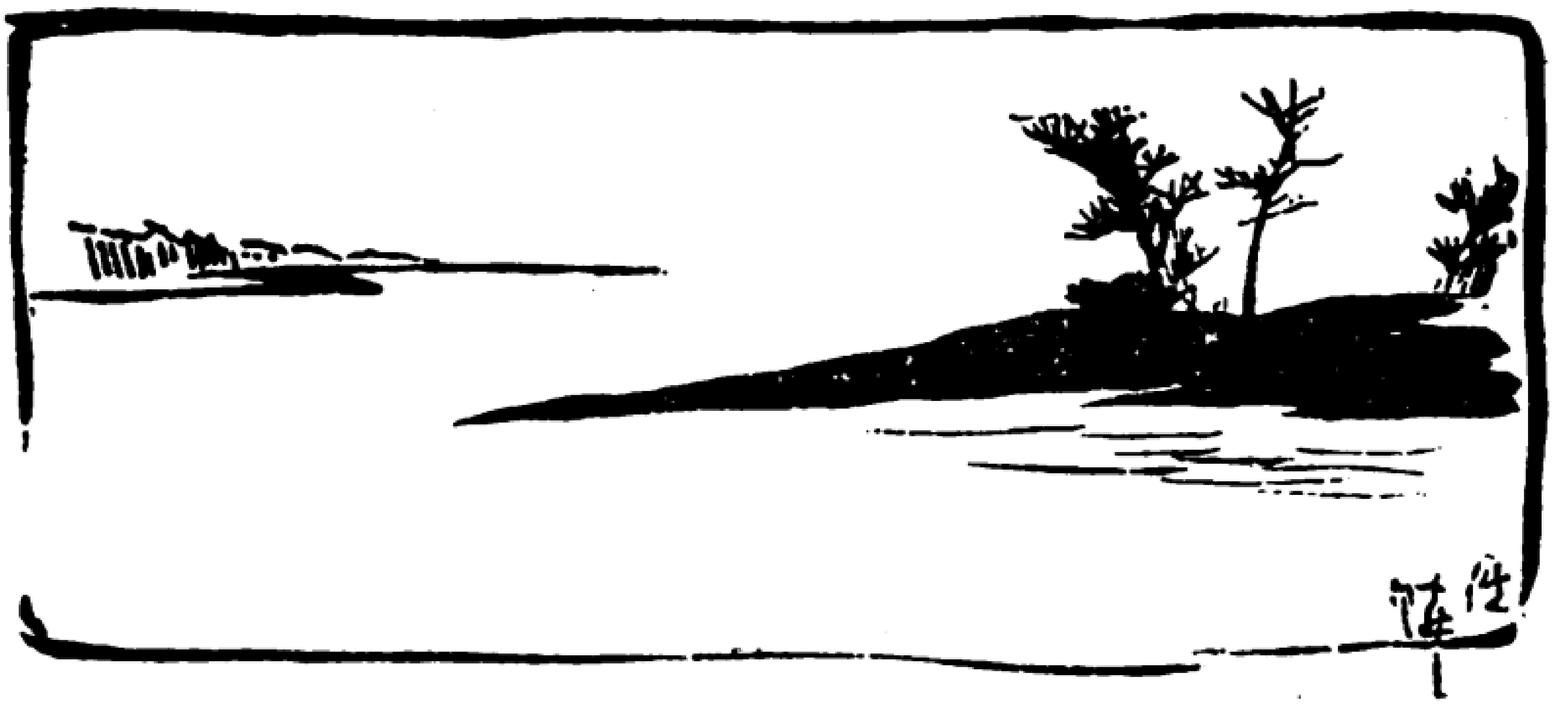


分は端無くこの疑問を解くことが出來た。婦人はこの日一冊の女學雜誌を返しに來て、その中の「小楊枝」の話に有益な事があつたと云つて歸つて行つた。後で自分はスグその雜誌の家庭欄を見ると——全體楊枝削の職人などゝ云ふのは、目汁鼻汁などの出る老人か又は、足腰の不自由な、病人が內職にするのだから、それを其儘口に入れるのは如何も穢い、單に穢いばかりで無く、それから何んな怖ろしい病毒を受けないとも限らぬ無い。だから楊枝を買つたら熱湯をかけて、一旦日に干して、それから楊枝箱に入れて置くが宜いと云ふ記事があつた。——婦人は恐らくこれに感じてこれを適切に玩弄品に應用したのであらう。若しこんな注意深い讀者

が、世間に多くあるとして見れば、雜誌などの人を敎育する力は實に大したものであります。

○人を使ふ人

或人の家訓に、「人を使ふ人は、常に我れ人を使ふと思ふ可からず。人を使はんと思ふ人は、常に人に使はるゝ心がけにて人を使ふ可し」と云ふ一節があつた。これを或る意義から換言すれば、「負けて勝て」と云ふ、少々人の惡い言草のやうにも聞えるが蓋し人を澤山使つた人の言葉で、人を使ふには、成程この心がけが無くては、人は巧く使ひ切れまい。人に使はれる氣で、人を使ふ人の、人を使ふのには、無理が少ないが、初めから人を使ふ氣で、人を使ふのには、何事にも無理が多い。ウンと脊負された荷物は、運ぶに運び切れ無いやうなもので、無理な命令には、誰も從ふのに骨が折れる。下の上を怨む心は、主にこの邊の呼吸から起



るもので。下から怨みを受けた日には、いづれ上は損が行くに極まつて居る。小慾大損と云ふ諺があるが、物は何んでも餘り慾張つては、却つて損をする場合が多い。總べて物事に、鰹節を搔くやうな鹽梅式に、薄く遣つて退けなければその結果は妙で無い。旣に使ふ人と使はれる人との間に氷が張つてゐては、その間は春の日のやうに、また冬の炬燵に兩脚を突込んだやうに、何うも暖くはッかりと行か無いものだ。兩者の間が寒夜の軌道を見たやうに冷却つては、使ふ人も心苦しく、また使はれる身も面白く無い。即ち何方も損が行くと云ふ中にも、血の出る金をかけて毎日使ふ方の損害は殊に大きい。だが兎角は云ふまでも無く、日常人に使はれる氣で人を使つて往かうならば、人は我が五本の指を使ふやうに、自由自在に動くものです。

○勤儉貯蓄

勤儉貯蓄と云ふ言葉は、近頃社會の流行語に成つて吾人は到る所にこの語を聞くやうに成つたのは、我が國家の爲に、誠に喜ばしいことである。併しこの説は今日にして始まつたことでは無くて、昔から何れの國何れの時代を問はず、心ある人は、常にこの議論を唱へて居つた。例へば此處に戰をするにもいざと云ふ時の逃場は是非とも準備して居らなければ成らないやうに、人も運命に變化の多いこの世の中に居る間は、いざと云ふ時の逃場として、是非とも多少の金は用意して居なければ成らぬ。地獄の沙汰も金次第、阿彌陀も金ほどなど云ふ諺も、皆この邊の消息を傳へたので、笑ふも泣くも喜ぶも悲しむも、世は皆約り金次第である。とは云へ成程と道理の上では點頭いても、さて實行仕がたいのは、例の衛生論と貯蓄論とで、斯樣に申す拙者なども



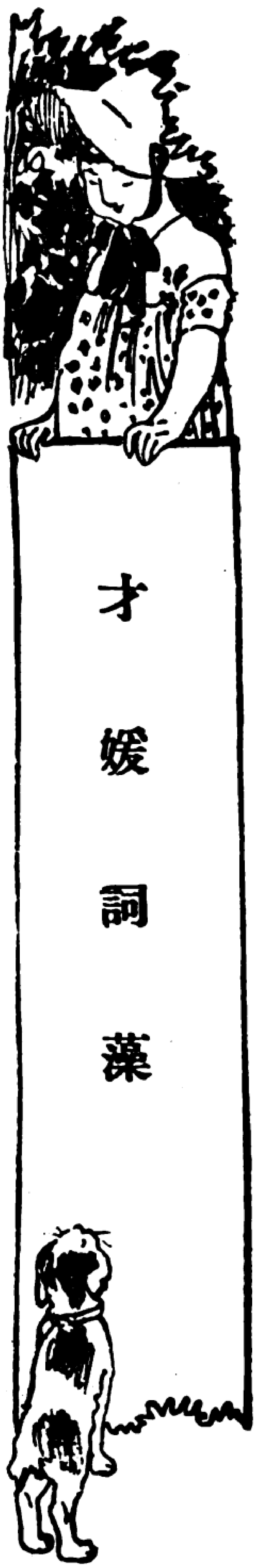
貯金と衛生とには、兎角怠り勝の立派な一人である。古人は、この邊の消息に就いて、その家訓として、左の一文が記して置かれた。

總じて一家の盛んに成るも亦衰へるのも、たゞ財の用ひやうに依るものなれば、至つて重きことなるが故に、常にその法を知りて守る可し。その法を知らざれば、やがて困窮に陥りて、家を破り自から苦しむのみならず、大切なる親を養ふことも成らず、君に事ふること勤め難く、人に施し恵むことも成らず、禮儀も行ひ難く、諸事のつとめも缺けて、貧苦の禍を子孫に遺すに至る可し。されば兼ねてより爰をよく〳〵考へて、常に益もなき藝能に大切なる時間をば費さず、はやく儉約を守る可し。その法と云ふは、勉強と儉約との二つ也。飲食、衣類、道具、家居等に至るまで、自から我が身に相應

なりと思ふものは、皆我が身に過ぎたるものなりと心得て、總ての物事控目に爲す可し。總じて一文一錢たりとも、益無きことにつかふ可からず。但し親を養ふは、本に報ずる道なれば、財を惜むことなかれ。總じて一年の收入を四つに分けて、その三分を用ひて、殘る一分を餘しおけば、三年にして一年分の餘りある可し。これ古の貯蓄法にて、不斷斯くの如く用意爲し置きたらんには、何時不時の損失ありても、決して家の潰るゝ恐れは無きものぞ。古へ聖賢の御代にありて、八年の洪水、また七年の旱ありても、難儀に及ばざりしは、兼てこの準備ありしが爲なり。第一借の一字は家を潰す本と知る可し。その當座こそ不足にて左のみ恐れず借りたる金も、年々利息を添へて濟すこととなれば、末々には家を失ふ例も珍らしからず、恐る可し怖る可し。されば、若し不時の入用ありて借りたらば、諸事儉約を旨として、寸時の間も速に返濟す可し。これ金錢を用ふる第一の法なり。必ずゆるがせに思ふ可からず云々。

○光線の受けやう

光線は左から受けるやうにしませんと目の爲めに非常に惡い、字を書く時などは誰しも晝にしろ夜にしろ手暗がりになるから左から受けるけれども、本を讀むとか畫を見るとかの時分は遂忘れて正面から受けたり、右から取つたりするので知らず〳〵大患を馴致して生涯拭ふ事の出來ない、目の病を起して仕舞ます、又家造りに由つて光線の入りの多少はあるが、どちらかといへば勉強をする人には西洋造りの方が宜しいのですべて空氣と光線とには能く〳〵注意して家の内外を奇麗さつぱりさせないといけません。



才媛詞藻

（天）　蓮　横須賀西月部町 百五十二番地　長谷川　さく子

床の間の菩薩の御像夢に似て
瓶のはちすにともし火淡し

（地）　軍艦　秋田縣南秋田郡 上井河村　佐藤　千代能子

脊の君の在りとし思へば富士號の
名をきくことに耳そばだてつ

（人）　山居眺望　伊勢國宇治 中の切町　河原　なでして

天つ神わもりますかと思ふまで
今朝は高嶺に雲たちのぼる

○選者吟　左川子

鴨のゐし枯葉の冬は夢なれや
蓮さきみてる不忍の池

秀逸

蓮　神奈川　川井あさ子

佛をかむ人影たえて夕月に
蓮の香高し大寺の池

蓮　播州　中村八千子

思ひ余り彳む池の花蓮
夕べの風にくづれて落ちぬ

蓮　土佐　梅子

白蓮を手折る袂にこぼれしは
池の女神の惜む涙か

軍艦　信濃　錦織幸子

波さわぎわし荒れ狂ふ海の上に
いよゝたけかれ我がいくさ舟

蓮　大阪　奥山せつ子

やゝにたかくやゝに近づく音すごく
村の蓮田に夕立の降る　熊本 安田文子

山居眺望
山里にのがれすめども柴の戸の
さすが浮世をながめやる哉　播州 中村八千子

蓮
夕立ははれて虹立つ山寺の
池の蓮に夕日かゞやく　伊勢 江島きく子

蓮
たそがれて小雨わびしき池のわたり
緋鯉のせなに蓮りはなちる　宮城 大友かる子

蓮
夕月にあすさく蕾かぞへつゝ
蓮の池をひとめぐりしつ　熊本 安田文子

軍艦
いくさふね數もそはりて浦安の
國にはよする仇浪も無し　長崎 田中たね子

蓮
浮草をはゝゑみながらかきわけて
出でしはちすの心ゆかしも　東京 西村茂子

蓮
更に又涼しさそへて池の面の
はすの浮葉にそゝぐ雨哉　下野 やなぎ子

蓮
またゝきて星はきえたるあけがたの
きよきにかをる白蓮の花　丹波 植村梅子

山居眺望
富士を左筑波をみぎに朝な夕な
みるめたのしき山すみの庵　長野 中原千代子

蓮
なにとなく物悲しくぞ思はるゝ
蓮葉折れて夕月淡し　岡山 橋本芳子

蓮
棹さして遊びし友は世にあらで
池に淋しく咲くはちすかな　熊本 豊子

蓮
なき友はうてなをわけてたれをまつ
おくつきところ蓮の花さよき　横濱 米原琴

軍艦
ますらをの家とたのめるいくさふね
なびく御旗のいさましきかな

佳調

蓮、軍艦、山居晩望　　島根　松濤女

●散り浮ぶ紅蓮の紅き花びらにのりて行かばや母上のもと　　下總　千葉秋琴

●世の中のにごりにそまぬしるしにと君のみたまにはちすさゝげん　　長崎　米田圖子

●蓮多き池のほとりに逍遙ひて今宵得し歌吾がものならず　　滋賀　うばら

●病めるまに山はみどりに變りはてゝかけひのもとに山ゆりの咲く　　信濃　安孫子紐子

●寺の小窓瓶に挿したる白き蓮經誦す尼が息吹にゆらぐ　　常陸　三好桂子

●蓮葉の雫を玉のさかづきにうけてのまばやひるのねざめに　　芝　　藤なばな

●獻燈のほのかにゆらぐ朝風にうき葉巻葉の露そこぼるゝ　　長崎　大村よれ子

●いくさぶねもやに包まれ消ぬゆくを濱べの岡にひれふるやたれ　　美濃　山内せん

●荒れ果てし野中の寺の古池に蓮の花白し夕月の影　　奈良　小片行子

●こぞの夏めでたまひたる此のはちす見るもかなしや君はいまさで　　田無　保谷いれ子

●恥しらぬ人に見せばや濁江に咲けるはちすの清き姿を　　神奈川　川井あさ子

●かやりたく賤の里はくれそめて遙にきこゆ鋼の聲　　長野　山本こまつ

●山寺のみ池は澄みて世の塵をつゆしら蓮の咲き出でにけり　　陸前　渡邊しげ子

●ときめきしむかしおぼゆる山寺の池のほとりにはすの香をかぐ　　本郷　東條のぶ子

●こぼれたる月のしづくを葉にうけてこりてさきけむ白蓮の花　　廣島　和知廣子

●月影は雲にかくれていくさぶね探海燈の光りさやけき

長崎　山口丸子

●きなふまではともに眺めし蓮の花手向けまゐらす今日ぞかなしき　　愛媛　片山寧子

●幼子の心もかくやはちす葉の月にみかけるつゆの白玉　　遠江　栗松美子

●山寺の御堂をめぐる古池にさくやすゞしき白蓮の花　　丹後　片島小やぎ

●白雲の崩るゝ巌の夕暮を溪の杉むら霧湧き籠むる　　千葉　米茛錦

●しら露も月もやどれるはちす葉につよくな吹きそ池のゆふかぜ　　岩代　齋藤苫子

●看經のかれの音さゐて山寺の朝しづかに蓮の花さく　　甲斐　波木井常子

●夏ふかく入江のはちす色はへてあした涼しき風かなるなり　　函館　横川とめ子

●蓮葉の露吹みだすをりばかり秋になしたる池の夕風

● 大阪 田中俊子
みほとけに供へし蓮あま君の經よみ居ます衣手にちる

● 長府 今藤欽子
我が國はものゝ夫の國海のくに男の子よろこぶみいくさのふれ

● 渡嶋 小林てい子
ふる寺のとふ人もなき蓮池に月の夜ごろを芝蘭はしき

● 長岡 照子
あかつきの空にひゝきてきこゆなり池のはちすの花ひらく音

● 上總 市原ゑい子
あまたある蓮の花の一本のうごくは魚のふれしなるらん

● 前橋 直井潔子
やれ寺のやぶのあなたの古池にさびしく咲ける蓮の一花

● 岩代 菅野和子
朝な夕な見ゆるかぎりは天地も窓のうちなり山のすまゐは

● 岡山 稲垣廷子
夕されば池のみぎはに風たちておつるも涼しはちす葉の露

● 神戸 岩松まさ子
不忍の池のほとりもくれはてゝ三日月淡く蓮の花白し

● 下谷 太田榮子
軍ぶれ港につきし其日より濱べに人の行かひ繁き

● 岐阜 山内ゑい
朝まだきそともの池に音たてゝひらくはちすの花の香ぞする

● 芝 瀬をばな
よもすがらやどりし月のかたみかも蓮の浮葉のつゆの白玉

● 靜岡 梅子
わがやどの池のはちすをみるごとにうき心さへすみわたるかな

● 函館 きく子
如何にして都の友につけてまし靜けき山のあかぬながめを

● 北海 白ゆり
蓮さく池の中洲に月まてばみづの上渡る風かほるなり

● 仙臺 うた子
亡き夫の逝かれしみたの淨き世もかくやとばかり白蓮の花

● 大阪 吉野ひさ子
大なだに朝日のみはた匂はせて白浪蹴つゝいくさ船ゆく

● 伊豫 織田政子
背の君とそゞろあるきのあさぼらけ池のはちすの花摘み取りぬ

● 麻布 蜂須賀あい子
なき人にたむくる蓮のしらつゆは昔をしのぶなみだなりけり

● 長崎 山口丸子
おさまれる御代は山居のながめにもたゞ一目にて知れわたるかな

● 播州 中村彌智子
漁殿の簾かゝげて月影に露のきらめく蓮を見る哉

● 靜岡 梅子
世の中はにごりぬるとも花はちす清き心に一人さくなん

● 米澤 潔子
追風にのぼる朝日のはた立てゝかゞやく空に軍艦はしる

● 熊本 しらつゆ
花ひとつひらく音して御書院の庭しづかなる朝ぼらけ哉

● 名古屋 定子
うすぎりに夕日のいろは包まれて乗人かへる峰の松原

●國守る船は濱岡に數見ねつ我戀ふ兄は如何にあるらん　茨城　菊地みね子

●花はちすかほるもあはれうたひめが操に死せし池のおもわに　北越　白ゆり

●亡父君が植ゑ置かれたる蓮花今日ぞ手向けぬ弟の墓　下總　稻垣松江

●朝な〳〵わが立つもとのしら露をこがれと染めて日は出で給ふ　信州　小林つれ子

●美くしきはちすの花の露をうけてけはひの手ふり可愛き妹　信州　鵜飼千代子

●白蓮の露の香白く雨はれて夕日さすあたり緋鯉ひれふる　岩手　金田りう子

●いくさふれ打出す筒の音絶て煙火すごき威海衞の沖　石見　宮内登美子

●池のおもをすゞしく渡る夕風にかをりをおくる花蓮かな　下野　清水すみ

●草庵の下ゆく川のほそ水に眺めし山もうつろひにけり　上總　齋賀うめ子

●城くづれあれたる濠の水の面に淋しく咲ける花蓮哉　山口　渡邊千代子

●忠勇の御旗輝くいくさふれつはもの滿ちぬいざ來れ敵　上田　成澤兎子

●兔ふむき山の細道夕くれてゆきかふきこり影そきぬゆく　大阪　上村しづ子

和歌兼題

曉風　（〆切八月十五日）

避暑　（披露九月五日）

橋

▲家庭日記　（〆切八月十五日）

▲寫生文　（披露九月五日）

▲課題　（幸福の個條）

人口が幸福と信ずるもの十二ヶ條を列記せられたし他人の言に依らず書物によらず各種の人が自から信ずる處を列記せられたし

▲各地料理　（募集）

投書文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界させらるべし▲投書原稿一切返却せず

我が家庭

高知　小西雅子

玉をつらね錦をよそひたる邸はいと美しさはれその邸のうちにそれよりもなほ美しくなほ尊き家庭の存すべきかむぐら生ひ軒かたむきし賤が家はいとあさましさはれその屋の中にはこがねしろがねいかに積まむとも得がたき美しき家庭を有せるにはあらざるか。げに尊きは家庭の快樂、之なくは富なにならむ。之あらば貧なにならむ

わが家富めるにあらず、されど幸ある家庭を有せり。人の世のわだつみ波風あらしと聞けどわが家庭は春の海の洋々たるが如しづかなり我等をおほしたてられ我らを愛し導きたまふたらちねの君は健かにそろひ給へり、相たすけ相樂しむ妹あり弟あり、父上が藥學雜誌をひもとく時よ、母上はたちぬひの業にいそしまれ己れ好める書どもとり出づれば弟はすゞしき靑葉のかげにて金魚に餌をやり妹はお手玉に餘念なきなり。殊にたのしきは日曜の朝、一家まとゐして朝げの箸とればのどけき朝日の笑ましげにさし入るもうれしく弟はボートレースにといでゆけば妹はこゑ高らかに來れや友ようちつれてと唱ひつゝ二三の友といづくへかいでゆく、我もそゞろに家をいでゝ散歩し、又は本町の市に花を見るなといづれか樂しからざらむ。互に心ゆくばかり遊びくらして歸れば夕日は西の空をいろどり、夕をつぐる鐘の音ひゞきてあたりはうすく暮れそめつ。夕げの折ぞさらに樂しき。とりぐ〵に面白かりしけふの樣とも語りけふどつゝ箸とれば母上が心づくしの手料理一入味ふかし。水うちし庭の面を風さと渡れば露の玉こぼれてすゞしき梢に月さへほのめきいでぬ。端ちかう琴とりいでゝかきならせば世のうきてふうき皆忘れられてその音にのりてうつら〳〵雲のかなたにわがたまの飛びゆくらむ心地ぞする。

けふ一日遊びつかれていと早うふしどに入れば今まで何をか語りあひし弟妹のはやあどけなくぞね入りたる。夢やいづこをたどるらむ、水清き川のあたりか、はた草靑き野邊なるらむか

あゝ平和、春の如きわが家庭のうちには慈愛の光もかゞやけり。めぐみの露はあまねく快樂てふ馥郁たるかは

りもみち〳〵たり。あはれ何をかまづしと云はむ。

世の海のあらき波風何かあらむ
愛の泉のわけるわが家

むらさき

肥前　淺山康子

赤、白、青、黒と數多き色の中に、紫こそいと氣高く美しく見らるゝ。麥穗浪よる畑のくろ、若葉涼しき木立のなか、わけて古びたる小さき祠のかたへなどに、色もゆかりの藤の花咲き亂れたるあやにかしこく。風吹き老ひし秋の野邊、見渡す限り草枯れて薄、苅萓など亂れ伏したるあはひに、桔梗の二もと三もと濃紫の色に匂える。さては訪ふ人もなき五月雨の日、佗しさに堪えで障子おしあけ、そことしもなく眺むる時、ふと池の邊に燕子花の咲けるを見出でたる目もさむると覺えてうれし。來だ十とはならぬ女の子の、紫のふさ下げたる簪さしたるいはん方なく愛らしく。築山のかゝり、泉水の摸樣なべてならず覺ゆる家のふみ石の上に、紫の鼻緒立ちたるうらつけの置かれたる、いとゆかしき心地ぞする。」美しう咲きたる山櫻の、心短き春風のまに〳〵空に知られぬ雪と散るあたり、紫衣の僧獨り佇める、何となう氣高く。夕陽漸く山のあなたに落ちて蟬の聲かしましき夕ぐれ、山は紫に匂ふて、淡き數遣烟の交りたるいと神々し。

さる人の紅は楊妃、綠は袈裟御前、紫は紫式部と云ひけむも理り。げに神々しく、優しきは紫にこそ。

海の四季

紀伊　白露女史

○薄くれなゐの刷毛もて一抹したらむ如き霞の、空にたなびける春のあした、のどけき風に誘はれて、そゞろ

たどりし濱のほとり、貝拾ふ少女のかげは霞に消え、ほのかなる磯崎わたり、汐干かるとや、むれゐる人の數も見ゆるに、春雨にやもえけむ。緑色こき浪の上に行方を風にまかせつゝ浮べる船の帆影白う、夕日はあかくてりそひたる頃、いづこより散りて來にけむ、櫻花の二ひら三ひら、ひら〳〵と漁人の渚こぐ袖にちりかゝるなど、げに物思ひなき世の景色とやいはまし。

○あらがねの土もさくてふ夏の暑き日には、おり立ちてうしほあみ、浪靜かなる夜は、友垣うち連れ舟を浮べて遠く磯山の月をもてあそぶも、こよなきたのしみにこそ。

○秋のさびしさいづこはあれど、海のほとりは又とりわきて、たつ白浪の音さへ身にしみ渡るに、月すむ夜半、雁の一聲枕にひゞきたるは、いふべくもあらず。ことに、浪の音おどろ〳〵しき雨の日など、打こもりてしづかに讀經せる聲のゆゑづきたる、昔物語にあるやうなり。

○岸のさゝ竹うらがれて冬めき渡る世の景色につれて、あれのみまさる海の上は、こぼれる如き寒風に友よびかはす千鳥のこゑ、磯邊にひゞく松風の音、げに物のあはれの限りなるを、只、雪の日ぞくちをしう、ひねもすかきくらし、ふりにふるかひもあらで、かたへ消へ行くはかなさよ。

思ひいでしまゝのそゞろごとを、浦のとまやの燈火のもとにかくなむ。

祭禮に就て

相摸　つゆ子

氏神を祭るてふ祭禮げにうるはしからずやそれにともなふ人々の馬鹿騷げに見苦からずや土地の有志てふ名の下に戸々に金員を募集し皆其騷ぎの材料となすに至りてはいかで唖然たらざるを得んや若之を以て公共事業慈善の資となさばいかにうるはしくさればこそ祈らずとても神は守らせ給ふならめ馬鹿騷の資たる祭禮費には百金をも惜まざる人々公共慈善の爲には厘毛を惜む。嗚呼世は何故にかゝる人のみ多きや國事多端世の人口々に富國強兵をとなふ夫何の謂ぞや

神は非違を受け給ず吾は彼百金を惜みて此厘毛を惜まざらん事を切に世の人々に望む

隣の庭

伊勢なでしこ

貧富のけぢめを一重の袖垣に分けた、隣の庭の美しさ。

三伏の暑さも知らぬ顔の、涼しい端居に打水の雫を讃めて居られるは、主人の翁。少し斜に、絹張の團扇を輕う使つて、華奢な浴衣のあでやかなおつくりに、當世風を凝らして居られるのは、孫に當る令孃の君なので。」

數奇をこらした庭の面には、振面白い、松や、梅や、櫻や、楓や、竹やら、萩やら、青芒やらが、奇態な石を點綴した苔地に茂つて、眞中に澄み切つて居る、瓢簞形の泉水に其芳ばしい雫を集めた樣子と言つたら。其處には、雪見燈籠もある、土橋もある、夕顔の花も咲て居る、紅の花も咲て居る、夏菊は勿論、撫子の花のいぢらしいのが、平和なホームを誇り貌に匂ふて居る。總ての配合が美術的に完全して居るのは、主人が私かに得意の語を以て語る處であつた。

其、美しい庭の隅に百年を過ぎた大槻が一本、老將軍の戰痕を語るかのやうに、古い落雷の跡をすばらしい樹體にあり〱と印して、雄渾な幹を霄漢に誇るのであつた。それに天女の眉のやうな、夕月がかゝつて、ある一種の幽玄な趣味をそへて居る。

木下闇から蝙蝠が出でゝ、籠行燈が椽端に運ばれた。序に雪見燈籠にも。

ついで、食卓、次いで、麥酒、水菓子。

令孃は、ヷワイオリンを、と所望されて、奧に入つた。庭の面には、涼しい夜の色と、美しい光彩と、實に樂園の夫れなのであるまいか。

まくは瓜

大阪 田中 しゆん子

となりの翁よりまくは瓜の苗五本六本貰ひて植ゑをきけるが、うれしや枯れずにいとようつきたり。物めづらしければ人の手からで己れ自ら水かけ養ひけるに、一葉ふえ二葉ふえ終に茂りにしげりて、蔓いで黄色なる愛らしき花さへ咲きぬ。花はいつしかしぼみて待ちにまちたる瓜は實のれり、其時の喜びはいかで拙き筆に記し得べきやは。

朝となく夕となく背戸に出でゝ、早く大きく成りてよきまくはに成れと瓜を撫やりつ。夫れかあらぬか今日此頃は目立ちて丈ののぶるよ。

あなよき瓜なるかな、みごとの御手なみよとはした女らにはめごと云はるゝも嬉しや。

オゝ瓜の熟しなん其折よ、都の友におくりて其の甘き露に我が眞心の程を知らさんかな。

あはれ日の神よ、願くば瓜に愛のみ手をたれさせ給ひて、我に一日も早く喜びの聲をあげさせ給へ。

登山日記

沼津 高木紅葉波

御殿場の町はづれの寂しき森の中に、燈火いとかすかなる淺間神社あり、登山のものは必ずこゝに參詣するなりと、剛力のさそふがまに／＼神社の前にぬかづけば、一人の神官出で來りて、御幣をわれ等の頭の上にふりつゝ、六根清淨を唱へてわれ等の風雨の災害にかゝらざらんことを祈る、錢を賽して厚く禮を述ぶ、まち里やう／＼遠くなりて道はやう／＼阪路となりぬ月は右手の山にさえ渡りて、芙蓉の峰は目前に突立ちて、細き雲烟の一つだになし、かくまで晴れ渡りたるは淺間の神の御守りにやと心ひそかに打喜ぶ、路のあたりに不如歸一聲といはで二聲三聲もなく、風流のありたるは、今朝のこのけはひの中にそなはれりとやいふべき。月入りて、日の出の東雲は箱根山のあたりに錦を引き纏ひたるが如く、いくたびとなく後ふりかへりて、そのあ

ざやかなるけしきをたゝへつ、さて三里計りも過ぎたりとや思ふころ、裾野の中にとある一軒の茶屋ありたれば、こゝにいこひて朝飯をたぶ、やがて一里許りも行きしに馬返しといふ茶屋あり、昔しはこゝまで馬にて來ることを得しが故にこの名あるなり、こゝにても暫く休らふうち、又杜鵑の聲を聞く、これより坂路やう〳〵けはしうなりて草木もやゝ多くなりぬ、半路計り過ぎて中食場あり、また五六町にして太郎坊といふあり、ここにて金剛杖を買ふなり、太郎坊をすぎては、たゞ草ありて木なし、見上ぐれば芙蓉の頂に雲かゝりて、その山腹には蟻螂の如く見ゆる白きものゝ動くは、登山者が上下するものなるべし、十時二合の岩屋につく、一合の岩屋は今つぶれて其の跡だになかりき、岩屋の入口は石垣にて築き、中はいと暗く、板間の上に蘭席を敷き、草鞋のまゝにて上ることを許す、十一時二合半の岩屋にて休む、是よりは路急にそばだちて砂甚だ深く、草至つて稀なり、十一時三合、午後一時四合に着せしに、今まで高しと思ひし山々は平地と同樣に見られ、伊豆半島は眼下に横はり、房總半島より東京灣の風光、叉手に取るが如し、されど頂上を見れば雲烟全く掩ひて、今降雨中なるが如く氣候寒く雪を此に貯ふ、一時五十分、五合近くまで進みしに身は忽ち雲中につゝまれ雨亦横さまに襲ひ來る、五合の岩屋までかけつけて休むこと一時間餘にして雨忽ちやむ、四時六合、五時七合、五時半八合に着す、八合の傍ら少しくくぼみたる谷間に千年の積雪猶解けざるものあり、八合より以上はむなつきとて難中の難路なり、岩石今にも頂上より崩れ來らんかと思はるゝもいと心淋しく、夕日は富士の裏手に廻りて芙蓉の影、倒まに富士の半腹にかゝり、影の線には金色の光線、分柝せられて紫色を帶びたる所、見ざるものに取りては、實に思ひ及ばざる風光なり七時半頂上に着す、名物の甘酒は山上に湧く所の銀明水を以て養たりといふ、渇きたるまゝ一杯を傾くるに其味甘露の如し、やがてパン鑵詰など取出して食はんとするに皆凍れり、旅亭より呉れたる茄子の汁は、何にも喩へがたき美味なり、飯は堅くして迚も食ひ難しとのことなれば、始めより用意せしパンにて夕飯を終り靜かに臥床に就く

夕の磯

藤田いさを

夕の磯や如何にと、枝折戸おし開きて松の下路、濱邊へと辿り行く。路のかたへに點々青草にまじりて咲き出でたる月見草よ、面やつれたをやめの影に似通ひて、涼風にゆらめく度に、過ぎ行きし白雨の名殘か月にはえてこぼるゝ露きら〳〵。

そこ過ぎていつしか波打際に立ちぬ。四邊人影もなし。水陸の間、只我身一つを點せり。

今朝までは都の塵に埋れて、むし熱き教室に、こちたき學科の講義に惱み、浮世の立引に縛られし身の、忽として今やこゝ紀伊の海邊、恍として夢の如き風色の中に立てば、古き新らしき樣々の感想山の井の清水の如湧き出でゝ想像の翼さは、高く〳〵天に、低く低く海底に、月にまとひ、波に搦まる。

清き潮に濯ぎ上げられしやうの夏月、ダイヤナの神今宵飽までもけさうし給ひしか、星稀なる碧空に靜に懸れり。そが追風か、香しく吹き來り玉藻の花に戯れ、松が枝に颯々の響殘して消えて行く。光は落ちて流れてちら〳〵と我が足下より沖の方へ長う一線うねる金蛇の外、雜賀の岬より松江の濱へざら一面の靜けき夜色、加太の岬、淡路島、うつとりと右に黑く、左には點々たる大島、小島、二子島、淡く繪でゝろに浮べり。細長くつき出たる洲崎を、折から上げ潮の一波二波、ほの白う打ち越す樣のかすかなる、さながら夢心地なり。連絕えず打ちかへりて、海のひめ言足下にさゝやき、濱邊一帶、霜を敷く砂子は何となう月の光に鑿を帶び、破れ舟の二つ三つかなたこなたに音なく横はる樣、古ぶりの趣味の豐けさよ。限りなき慰藉や、美しき眺めやとばかり、そゞろ敬虔の情に打たれぬ。

この刹那、しげき〳〵思ひは、一筋の太き流れとなりて、さながら月に融けあふ心地。

「登つてゐらつしやいよ、こちらへ」

驚きて、我れかの境をさめ出でつ。こゑする方を望めばうら若き二人の少女、小丘の上に登り行くなり。前なる人後ろを顧みて、眞白き腕さし伸し後なる人を助けむとする顏の半面、目鼻立の刻み、美しう遠目の月に活

きたる姿、月光の精か、花の精か、女神そのまゝの乙女ぶり、あたりゆら〳〵と香こめて、夜やふけししつとりと衣霑ひぬ。

朝顔

岡山 小山松枝

曉告ぐる鐘の音に夢を破られ起き出でゝ庭におり立てば、み空に殘りし月影は次第〳〵に淡くなりゆきて、ぞつと吹きくる風の冷かに心地よきこといはんかたなし。つくろはぬ垣根にはひひろごりし朝顔の、三つ四つ露ながらゑみこぼれたるさまのいうに優しさよ、見るにつけてもおのが寐くたれ髮の姿いと耻しきや。あはれこの花よ、つねにはかなきものゝためしにひけど、塵の汚れも知らぬ朝な〳〵色新しう咲き出でゝ、空せみの世の榮をむさぼらず、露のひぬまを我世と日影まちあへず心淸くも消えゆくぞ、かの足るを知るてふことはりしめし顔なるにやとなか〳〵に床しけれ。垣のむかひにてもてはやすらん、乙女子の愛らしき聲に花を數ふ、げにあさいする身のいさめ草とは、宜もいひけりなまことにたのもしき、あしたの友や。

夕立

廣島 加賀美 はるの

園の小笹に風わたるよと見る間に雷のひゞきおどろ〳〵しく篠を束ねたらんごとくに降り出でし夕立はさながらかげしげき筑波の山の岩根より碎けておつる瀧のしら玉かとぞ覺ゆる。足も空に走りまどう人かげのしぶきの間にうすらけく見ゆるこそいといたはしけれ。漸く黑雲のかげまばらになりゆけば雨は名殘なう晴れ渡りて月かげひときわさえて梢をつたふ松の雫、芝生に殘るしら露にやどれるいとなつかし。おばしまには、簾のひまもれて入風に風鈴の音たつるもいとをかしげに心ゆくけしきは、夏の夕にこそ。

夏の夜

大阪　富士田章子

西に照りたる天つ日は山のかなたに落ち、うばらに匂ふ夕映の光はまたくうすれ行きぬ。折しも入相告ぐる鐘の音いづくよりともなく響き來て、いづくともなく消え去りつ、ゆめみるごとき星くづは、奇しき光りを放ちつゝ神のゐませる樂園に導くが如く輝きそめぬ。家毎にくゆる蚊遣の煙いとあはれなるに、妹ともの散歩にと誘ふものから打ちつれ立ちて、宿を出でぬ。打ち渡す山田の稻はいつよりも緑り深き心地せられて、葉末に宿れる露の光、夕風にさそはれてはら／＼とこぼるゝ樣など、げに云はむ方なし。遙に見ゆる森に幾すじとなくたち登ぼる夕げの煙は妻が鮮魚濁酒に背子の歸りをなぐさめむとの心づかひや。田の細道をたどりつゝ行く程にとある川の堤にいでければ、かたへの柳の木陰に立ちて眺むるに、いつのぼりけん松の葉ごしにさし出づる月の光、さやかに水の面に宿りて吹き渡る風毎に長く短くゆら／＼とゆらめく景色げに夏のものとも思えず、さながら秋の夜の心地せられてなむ。かしこの森こゝの籔かげより出づる燈火の見えつかくれつ、つゞけるもいと床しや。折しも、あはれいかなる人のすさびなるか笛竹の音空にすみて、細く長く琴の音ならねども峯の嵐か松風かといひし、嵯峨野の奥さては平家の君のみやび、そゞろに昔忍ばれていと哀れ深し。月をそむけてみなみの方を見るに淸らけき流れは、くねり／＼て末はあなたの森に沒しつ、白帆の三つ四つ十分に風にはらみて走れる樣、實に畵中の趣あり、かなたのあぜを平和なるひな歌うたひつゝ過ぎ行く農夫の姿はつひに朦朧たる松が枝にさへぎられて見えずなりぬ、夜や更けぬらむ音するものは只せん／＼たる小川の流れのみ、さるにさるに妾等は猶此自然の世界を立ち去りかねつ。

納涼

岩代　横山きつ子

そらには、たなびける、雲もなく、梢には、風のそよともなし、けふの如き、暑さをば、いかにしてか、凌ぐべ

き　あはれ、なつかしき、松子の君の、來りたまふならば、すゞみがてらに、會津、舊城内を、ものせんになど、ひとりごつ、折から、うはさをすれば、かげすとか、はからずも、まつ子のきみ、來りたまふ、われうれしきこと、かぎりなく、よくこそ、をとづれ、玉ひしぞ、今しもおうはさせしなりと、我云ふに、今日は、日よう、なれば、定めし、まちわび、玉ひし、ならんと、思ひければ、おとづれたりと、云ひたまふ、されば、わか松の、しろあとを、すゞみかけて、見物せんは、いかにと、いふに、いとよろしと、うべなひ、たまひければ、我は、仕たくを、なして、出かけぬ、暑きこと、かぎりなく、させしかさも、いたづらなり、早く、すゞしき、木かげの多き、城内へと、あゆめば、一里にあまる、みちなれど、またゝく間に、つきにけり、昔のしろのかたは、石がきにのこり、さしたる、見ばえも、なけれども、さすがに、盛大なりし時を、思ひやらる、維新前までは、鶴ケ城とて、いとも、名高き、城郭なりしが、戊辰の役に、大に、やぶれてより、うつり變る、世のまに〳〵、今のすがたと、なりにけり、こゝに、きたりしより、今までの、暑さ、ゆめの如くに、うちわすれ、四方に生たつ、くさ〳〵の木々、日光を、おほひて、別世界へ、行きし、心地なり、をり〳〵、ゆるやかなる風は、こずえを、ゆるがしたるさま、たとへん、かたなく、口にも筆にも、のべつくし、がたきぞ、いみじきや、かくするまに、日は、西の方に、かたふきつれば、やがて、かへるさの、道となりぬ、友と大町にて、わかれ、只一人にて、家路へ、たどりぬ。

蓮池

島根　岸崎いし子

さら〳〵と流るゝ水音清く、折からさし昇れる朝日に映じてさながら五色の煉玉をかけたらんが如、やゝ高き築山の蔭より落ち來る水の、打注ぐ泉水には紅白のはちす美しう咲きたり。丈高う生ひたる青き葉越しに、或は長う、或は短う、紅なるは艶麗に白きは清楚に、いと潔う匂ひ出でぬる。朝の風清く池の面を渡りて花も葉も一しきり打ゆらぎつ。宿れる露の玉と亂れてえならぬ香りは空にみちぬ。

、、、はらりと音して打くづれたる紅蓮の一ひら、靜なりし水面を亂して所得たるげの浮葉のあなたに落ちて浮べり。淡紅に濃き口紅さしたらんが如いと淸けき花びらの散りて尙濁りに染まざる其けはひよ。巳が餌と思ひけむ一尾の緋鯉、すーと浮び出でゝさわ／＼と尾打ち振りつ、又沈み行きたる後は輪波次第に擴ごり消えて再び靜穩にかへる池の面は、莖長く拔け出たる白蓮の夏寒きさま、優になまめかしげなる紅蓮のすがた、或は卷葉の初初しげなる、高く低く生ひたる葉の其が白き裏などを、水際より倒に寫して一入の風情を增しぬ。蛙などにや水に飛び込む音のして、わづかに及ぶ漣が再び亂るゝ水底の影。築山の楓に一しきり鳴きたる日ぐらしの聲、暫し途絶えてたゞ靜に、そよ吹く風は若葉をめぐりてさや／＼と音立てつ、淸き芳ばしき香をたゞよはせぬ。」

あゝ靜なる此幽境よ。げに潔き此花よ。とこしへに穢さゞれな、浮世の塵に。

避暑地より

伊勢をぎ子

愛宕の山に入り殘る朝の月に別れを惜しみ候てより、我は二見の漁家に客となり候。こゝは、熱海、大磯などの如く都の塵は堆く候はず、又、須磨、明石の如く高襟的にては無之候。至極淸淨にて候、閑雅にて候、趣味多く候。有難、神風の伊勢にて候。日の女神が朝の粧ひを凝らし給ふとて、芳ばしき潮の水鏡に紫金のみぐしをとき給ふ御樣は、實に難有御事に候。夕ぐれ月讀男の女神の御あとを慕ひて波に思ひを碎き給ふ御樣も、實に尊き御事にて候。朝熊の夕立もおもしろく候。くゞり島の歸帆も面白く候。此頃盛に行はれつゝある御木曳の音頭を海士の子の口よりきゝとり候は、此地以外に得難き音樂かと嬉しう存候。強て難じ候得者、此地は規摸の小さき事に候、避暑地としての格好を有たざる事に候、されど雄渾なる詩はかゝる地に於て得らる可く存候。近き日、くゞり島詣といふが行はれ候由、承はり候得者、後便に其景況を御目に懸可申候。

都の友に

攝津 田中 しゆん子

なつかしき君よ、有明月に時鳥の一聲またるゝ今日此頃如何に過させ給ふや、定めし學の道に日々いそしみ給ふならんと推し候。こゝ靜かなる田舍に住む妾は晝は縫物をはげみ夜は讀書に親しみ居候。思へば幸福の子にて候よ。いづぞやの文にて八重子の君ふくよかにおはすよし記し置きしが、すぎつる五月御初產にもかゝはらず。いと安らかに男のみ子もうけさせ給ひて候。此君よかつて海老茶袴に紫の本つゝみかゝへ給ひし頃、今の世の輕薄男子に嫁して終生血淚にむせばんよりは寧ろ獨身なるがなと。優しき肩そびやかして論じ給ひけるがと獨ほゝ笑まれ候。み歌の御得意成し彼の露子の君此たび御緣談目出度とゝのひて、七八日前九荷のお荷物はなはなしく御こし入れ成給ひ候。聟君と申すは君よ驚かせ給ふな、學びやよりの歸り路に長き〳〵竹竿もて追へられ、鎭守のにわのまゝごと遊びに砂をもりわげて樣々なる草花をさし漸々の事にてつくりたる大切の庭をこわされて、小さき胸にもしみ〴〵とお恨み申せし定雄の君にて候。いふかしきは人の運命に候はずや。おな月がさやかに昇り候、故山遠くはなれて都に遊び給へる君、若き母上と成り給ひし八重子の君、さてはゆひ初めの丸髷おもたげなる露子の君たち今宵の月を如何にながめて居給ふらん。ならば空氣となりて御胸のうちをうかゞひたき物にて候。

こは。衰へ時なりとも昔の春をしのび給はれと、袂のぬるゝも知らで笹舟遊びに打興せし小川の水をくみてしたゝめし物に候。

是れにて惜しき筆おかん。さらば君よ。さきくて居ませ。

暑中休暇前友の許に

神戸 中村 菊子

軒の若竹の茂りあへる隙より淸き月影のくまなく文よむ窓をてらしゝかば心はいつしか故郷の空なつかしくな

り申候うつくしき此月よ定めし君が軒端にも同じく照り渡れる事と存じて一しほなつかしさのまさり申候此頃の山里の夏の景色は如何に候哉定めし稲田は今や植付け終りて田の面は悉く青色と變りしことならんと存候されど近日は雷のなりひゞき候が御地には落下致さゞりしか誠に心もとなく存候さては御許様にては御両親様初め皆々様何の御變りもあらせられず候哉嘸かし御一統様には茶摘み蠶飼ひに急しう御暮しの事と御察し申上候都にては一日一日と夏めき所々に氷店の設けに取りかゝれるも見受け申候わが學び屋は御存知の通り高燥なる地に御坐候間朝夕吹く風のいとゞ涼しくしてそゞろあるきは一しほの心地に御坐候私事はいつも乍ら少しも變りたることなくもはや學期試驗も迫り候へば日夜勉勵致し居候なれどふつゝかなるわらはの事とて試驗の成績誠に案じられ候へ共兎も角試驗のすみ候はゞ兩三日の内に歸省致すべきつもりにて歸省後はなつかしき御許様と去年の如く共に手をたづさへて語り興じつゝ後園のしげみに螢狩りをなし彼處の山彼處の岡に上りて樂しく月花を眺めんと日夜指をり數へ居申候今はたゞ歸省後のよろこびごとの心にゑがゝれて此せまき胸も希望の光りにみたされ居候「先はほとゝぎすの一聲にもよふされてわら〳〵かしこ」

樹陰

和歌山　藤田うら子

松林の中、ハンモックの上、詩集手にして我れは横はりぬ。

若葉の光きら〳〵と日に閃めき、下には露草や月草やの白き、黄なる花、或は高く或は低く、散けるが如く咲き亂れ、微風そよ〳〵と梢渡れば、葉は動き、松はさゝやき、花はうなづきて、忘れ難き人の面影、そこらさまよへるが如き心地。

波の音、ほのかに通ひて夢のうちに聞くらむやう。

松の葉のしげみをよけて點々見ゆる神秘の空色、一度はいぶかしみ、やがてながめ入りぬ。

樂しき夕

伊勢　濱　をぎ子

今のつとめをなしはてゝ、
洗へばかろき夕こゝろ
露にきらめく月かげの
我世てらせばおもしろく。

愛のみちたるさむしろに
兄も妹もよりつどひ
稚兒もかたればほゝゑみて
母もたのしくかたらひつ。

醉ひのすさびをされはみて
父なくさめの唄うたふ
平和のかぜの芳ばしき
夕顔棚の下すゞみ。」



泉

長門　植村せい子

神のみ胸のいと清き
乳房を漏れて湧出る
泉はしばしたゆたひて
こゝに岩間の淵なせり。

若葉がくれに深山鳥
神の御心まもりつゝ
天地の秘をば歌ひては
渇く咽をうるほせり。

仰げば天に星のはな
のぞめば淵に月の影
浮世の塵の穢れなく
いとも聖なる泉かな。

エデンの泉とこしへに
イーブの罪にそまずして
清く尊き境なす
あはれ人の子泉くめ。

彙報

●猶太人の大虐殺

キシチフは欧露ベツサラビヤ州の首府にして人口約十一萬を有し内數萬は猶太人なり彼等は露國の他の部分に於ると均しく土民の嫌惡を受くること甚だしく殊に近來同地新聞紙に於て盛に排猶太熱を鼓吹し人心日に不穩の狀を呈するより猶太人の重立ちたるものは幾度か地方官廳の注意を惹き豫防手段を執ることを懇請したるも毫も取合れず遂に一片の虛報導火線となりて近代未聞の慘劇を見るに至れり

去る四月イースター祭の前に於て露人の一小童行方不明となり軈で其屍體發見せられたるが端なくも右は猶太人が其鮮血を祭儀に用ひんが爲めに殺害したるものなりとの浮說起り愚民等之を信じて俄に激昂しイースターサンデー（四月十九日）なるに拘らず暴行を始め多數の猶太人の家屋は破壞せられ七名の猶太人は慘殺を蒙れり然れども右は大慘劇の序幕に過ぎず翌二十日には早朝より一層多數の暴民集まりて全市内に橫行し苟も猶太人と見れば老若男女を問はず虐殺し其家屋は悉く破壞して家具は道路に投出し稍貴重なるものは殘らず奪ひ去れり今試みにキシチフ公立病院長の目擊したる事實によりて如何に其慘狀の劇甚なりしかを示さんに

一、一婦人は其鼻孔より七寸釘二本を打込まれて死し居たり
二、一人は上下兩唇を切取られ釘拔を以て舌を引出され居れり
三、一大工は其自用の鋸を以て兩手を切斷せられたり
四、一婦人は數人にて輪姦の後兩眼を抉出せられたり
五、老人小兒等は數個所に於て階上に追詰められ窓より路上に投下せられたり其內一婦人は其上尙十字形に腹部を切開せられ襍物を以て腹内に詰められたり

其他強姦虐待等言ふに忍びざるもの枚擧に遑あらず露國內務省の公報に據るも死人四十九名重傷七十四名輕傷三百五十名奪掠を蒙りたる家屋千三百戶にして實際の數は無論之に超過すべく四千戶數萬の人口は住宅を失ひ饑餓に瀕しつゝありと云ふ

●セルヴィア王暗殺の實況

五月十一日の夜半セルヴィア國王アレキサンダー、王妃ドラガ、同國總理大臣、同陸軍大臣、及び王妃の二弟虐殺せられたることは當時ロイタル電報の傳へたる所なるが其後の詳報に據るに此悲劇は羅馬帝國の末年或は彼得大帝死後の露國に於て起り得べかりしと想像するの外歐羅巴の歷史に例なきものなり今其次第を記さんに革命の發起者は同國陸軍將校九十名にして同國各地衛兵の代表者と第六聯隊將校の多數とより成り張本人はミシツク中佐なりしが孰れも十一日の夜の十一時を期して同國首府ベルグラードのヘリマゲダン公園に集會することゝなりたるに直ちに計畫を實行すべしと主張する者多かりしよりミシツク中佐の指揮にて八組に分れ暗號を作り午前一時四十分王宮の諸門より亂入したり然るに王の護衛將校中ノーモヴイツクス大尉及び王妃の從兄なるマツシン大佐は豫て此計畫に贊助し居たることなれば內より之を援けたり革命者は通路を遮るものを悉く射殺し次第に王の寢室に迫りたるに突然王宮の電燈は消ゑ非常の狼狽と混雜とを極めたるも革命者の中に偶然の事より蠟燭を見出したるものあり孰れも之を點じて王を求めたるに王は此時寢衣の儘王妃と共に寢室を出で長き廊下を過ぎて逃れたる後なりしかば宮中を隈なく探し書室に通ずる小さき室

の戸の鎖ざゝれたるを發見せり即ち手斧を以て戸を打碎きたるに王及王妃は室内に伏し居たり年長の將校等は其塲にて王に讓位を勸めんとしたるに若き將校等は手溫き處置に滿足せず王及王妃を射撃したり混雜の際とて何人が最初に射撃したるかは明かならざりしかど多分少尉キスチックスならんと傳へらる王の丸傷は廿餘個所王妃も多くの丸傷と切傷とを受けて即死し王宮内の各室は甚しく破壞せられ血を以て淺され實に慘滑たる光景を呈せり慘劇の全く終りたるは午前二時十二分なりき斯くてマツシン大佐は宮城の門に現はれ群がる人々に向ひて「吾等は今ブレノヴイツチ朝及び悪魔なる王妃を倒せりセルヴィア萬歲と呼びたるに群衆は之に和して「陸軍萬歲」を唱へ十二年間瑞西に追放せられ居たるカラ、ゲオルゲヴイツチ親王を立てゝ王と宣言し茲に革命は首尾好く成功を告たり此カラ、ゲオルゲヴイツチは前世紀の初めに露國の援助を借りセルヴイブをして土耳古の覊絆を脫せしめたる同國の農民カラ、ゲオルゲの裔にして今日まで露帝の保護を受け居たるのみならず露帝の親友モンテチグロ王とは義子の間柄なれば自身には今回の革命に何等の關係なしと稱するも久しき以前より計畫し居たることと明にして確に露國の煽動を受けたるならんと云ふ又此事は革命に與りたる人々が其後著しく地位を進められたるに依りて證するを得べしとなり（萬報報）

●富士登山の栞

本年は中央線も甲府まで開通したれば富士登山者の東口よりするもの減少せんとて御殿塲より須走に至る沿道の旅館其他は孰れも費用を減額して北口の營業者と競爭中なるが鐵道作業局にても去月一日より本月三十日まで登山者の便を圖り新橋より御殿塲まで二割引の往復切符を發賣せり先づ須走口より登山を試みんとするものは新橋の一番汽車に投じ御殿塲に下車し夫より六哩間鐵道馬車に乘じ須走に着同所より馬返しまで一里半乘馬の便あり午前十一時三十分須走出立八合目まで登りて一泊、翌日午前十時一息に須走まで歸着同夜は須走に一泊翌朝四時出立するときは其日の午後四時に新橋へ歸着すこれを日山と稱す右の總費用五圓五十錢なりといふ

●入谷の朝顔

梅雨の季節も去りて暑さ漸く加はり朝毎の露の色一しほ懷かしき牽牛花の本塲入谷にては去月十四日より丸新外四五軒の花屋先づ開園したり人形細工の入久及び松本は雨天に妨げられて未だ準備整はれば一兩日後にて開塲の答なるが此外少し隔たりたる金杉上町なる東京製紐株式會社工塲の隣地二千坪を同工塲の谷氏が手入して築山泉水を設け水道を利用して雌雄の瀑布三條を遣り一の遊園地となしたれば朝顏見物の歸途小憩するに最も妙なり名けて入谷協樂園と呼びたり又入谷の入長にては例の大瓢を作りて縱覽せしめんと丹精中なり此外朝顏の開に伴ふて同所及び上野、根岸等の各飮食店など孰れも客を引かんとの準備怠りなし最も朝貌は兎角雨天勝の爲め蔓延びて稍や勢ひに乏しけれど晴天となりて照込まば忽ち肥て蔓太く花大なるを得べし

●慈善旅行と兒童の感謝

時事新報社の催しに係る慈善旅行は去月四日出發箱根塔の澤の溫泉に百人の貧兒をして六日間の遊樂を盡くさしめて歸京したる由なるが、貧兒童は同旅行に就ての喜悅を其親元に報じて、左の文字を連れたりと兒童の認めたる手紙の文中左の文字ありしと、

東京新橋から國府ツイテ汽車に乘つてチリテ電氣鐵道に乘りこんで箱根の福住で壹メシチ食ひ夜もタベテ又夜はゲントーカツドーシャシンヲ見マシタ朝（翌朝）もタベ晝もタベ一時頃玉スダレチ見物シ夜

のメシチヨベマシヨ

此の兒童は青山のものにて家に在るときは漸々三度の食事を爲さゞりしよしなれば朝も食べ晝も食べ夕も食べたりとて三度の食事を爲したるを此上もなき喜びとして家の兩親に報じたるなり字々血涙とは斯る手紙の事をいふなる可し蓋し此兒童の如きは幸に多少文字の心得あるを以て其喜を手紙に現はし得たることなれども旅行中幾多の兒童には其他にも之と感を同うするもの必ず多かる可し慈善旅行の趣意は即ち此種の貧兒に責めて數日間の快樂を與へ其貧苦を慰めんとするものにして時事社が慈善家の同情を得て毎年これを行ふ所以なり世の父母たる人々にして此手紙の意味を其兒女に說き聞かせ世間には斯る貧苦のものあるとを知らしめしならば自ら家庭教訓の一助ともなり兒女をして慈善愛憐の情を養はしむるの効ある可しと時事記者はいへり

新刊紹介

▲新撰女子作法書

作法を習ふは極めてむづかしきものにて、世上幾多の婦女子はこの一科に多大の苦勞をしつゝ修業の後にて實踐せざるもの多し、誠に勞して甲斐なきは何故ぞや教授の方法に病源の横はるが故なり本書はつとめて此の病源を改良するの目的を以て新なる作法十餘個條を選み座作進退の要點より物品進徹の法に至るまで現時の衣食住に適應せしめ一々圖解を以て丁寧に說明したれば女學校の生徒は勿論今日未だ禮法の門に入らざる家庭の少女と雖もこの書を指南として稽古を詳かにせば以て他日實踐するを得べし、(定價二十五錢文武堂發行)

▲家庭料理法

近頃は割烹流行で、講習會やら、通信教授やら、それに關する種々の雜誌も出來ましたから、奥様たちが料理の稽古には事は缺けませんが、會席や、幅紗の秘傳を免許になつても肝要な御總菜の献立がうまく出來ねば寶の持腐れて何にもなりません。横井玉子といふ方は女子美術學校の幹事として在職中に死去されたが。中々多藝で、就中女史の料理といふのは極めて實際的、極めて手輕流義で、高尙な料理法を總菜に應用して旨く食はせるといふのが此人の專賣特許であッた。此書は女史か多年の經驗上より四季は折々の日本料理、西洋料理を有合の器具にて購ひ易き原料を用ひて試み得られる料理法を極めて親切に記したもので臺所に於ける寶典と言つべきである(定價四十錢富山房發行)

▲新八犬傳下篇

これは上卷で御なじみの明治お伽噺此度第四の發行あり、此篇には皆様お待兼の新犬邂逅より、犬千島、手長猿の奇談に入り四犬奇遇のうれしき物語、八犬出陣の勇壯なる事柄より大狗子國の芽出度き大團圓に至るまでの結構壯快なる大物語評者は其のおもしろさに引かれて殆んと寢食を忘れしほどなれば、坊様達には如何ばかりの御樂みとならん、附錄には新題お伽桃の種　松の方の二篇あり巌谷小波（博文館發行）

▲水滸傳物語

通俗世界文學第四篇には支那四大奇書の一たる水滸傳を出したり從來世界文學といへば多くは歐州の著述に限られし如くなりしが此度支那小說を撰ばれしは嬉しかりき、これは水滸傳中の眼目たる人々と花々しき事蹟とに就て剪裁その要を得たり編者は高須梅溪氏

家政資料第一回懸賞文募集

懸賞 日本大地主の家事經濟

家事經濟に關する廣汎なる智識を養成し、智見を弘くして以て世事に應ずるは女子教育の主眼たり、學問は必ずしも理科、博物、歷史地理に限らず、活計を知り、世帶を知り、深く世上の生活狀態を識りて之が應用に敏なるものこそ眞に學問の活用を得たるものといふべし。本誌深く是に見る所あり今回全國各階級に於ける生活の事情を明かにしその得たる材料を取捨して是を十一月以後の定期增刊誌上に掲載せんと欲す、是れ一は現在世帶の主働者たる主婦の參考に供し、一は學窓生徒の應用に資し、普く家政的智識の普及を謀るの趣旨に出でたるものなり冀は江湖の家事に熱心なる諸氏の奮て寄稿されん事を（女學記者識）

（投書〆切十月十日）

懸賞金

一等　金貳拾圓　一名
二等　金拾圓　一名
三等　金貳圓　五名

（十行二十字詰紙數十五枚まで）

投稿注意

▲本文　現代家政學上の資料とすべき者なれば成べく文飾を避け事實有の儘なるを望む

▲大地主の標準　耕地十町以上、又は直接國稅三百圓以上を納むる農家、若しくは傍ら商工業を營む地主を標準とし、成べくは其地方にありて數代連綿たる名望家か、又は品位、德望ある家に就て記すべし。但し家名は變名にて差支なし

▲家の由來　祖先は如何にして家を興し如何にして身代を作りしか、勤儉忍耐家名を興せし著るしき事歷あればこれを記されたし

▲現在の地位　家の地位、名望、勢力並に家產の大躰を記し、その家の現在の特色を記すべし　又農家の外に商工業を營む家ならばその商工業の現在の有樣をも記されたし

▲生活事情　年中行事、冠婚葬祭、家族、雇人、衣食住、日常生活の狀態、其他小作人の關係。家風、娛樂、百般生活上の狀態を詳細に記すべし　殊に近來文明の進步に伴ひ、地方富豪の生活狀態も多少の異狀を來したる向もあるべし　それ等の事項は別けて詳しく記載し相互の參考となるやう務められたし

▲經濟事情　收入、支出、租稅、教育費用ハ物價、賃錢、給料、其他金穀の出納に關する事一切洩なく記載ありたし

▲收支計算表　一年間の收入、經費若しくは一ヶ月間の收支計算表を造り明細に記載あけたし

十一月以後募集の項目

▲都鄙中等社會の家計
▲日本小作人の世帶
▲舊大名奥向の經濟
▲現代華族の家政

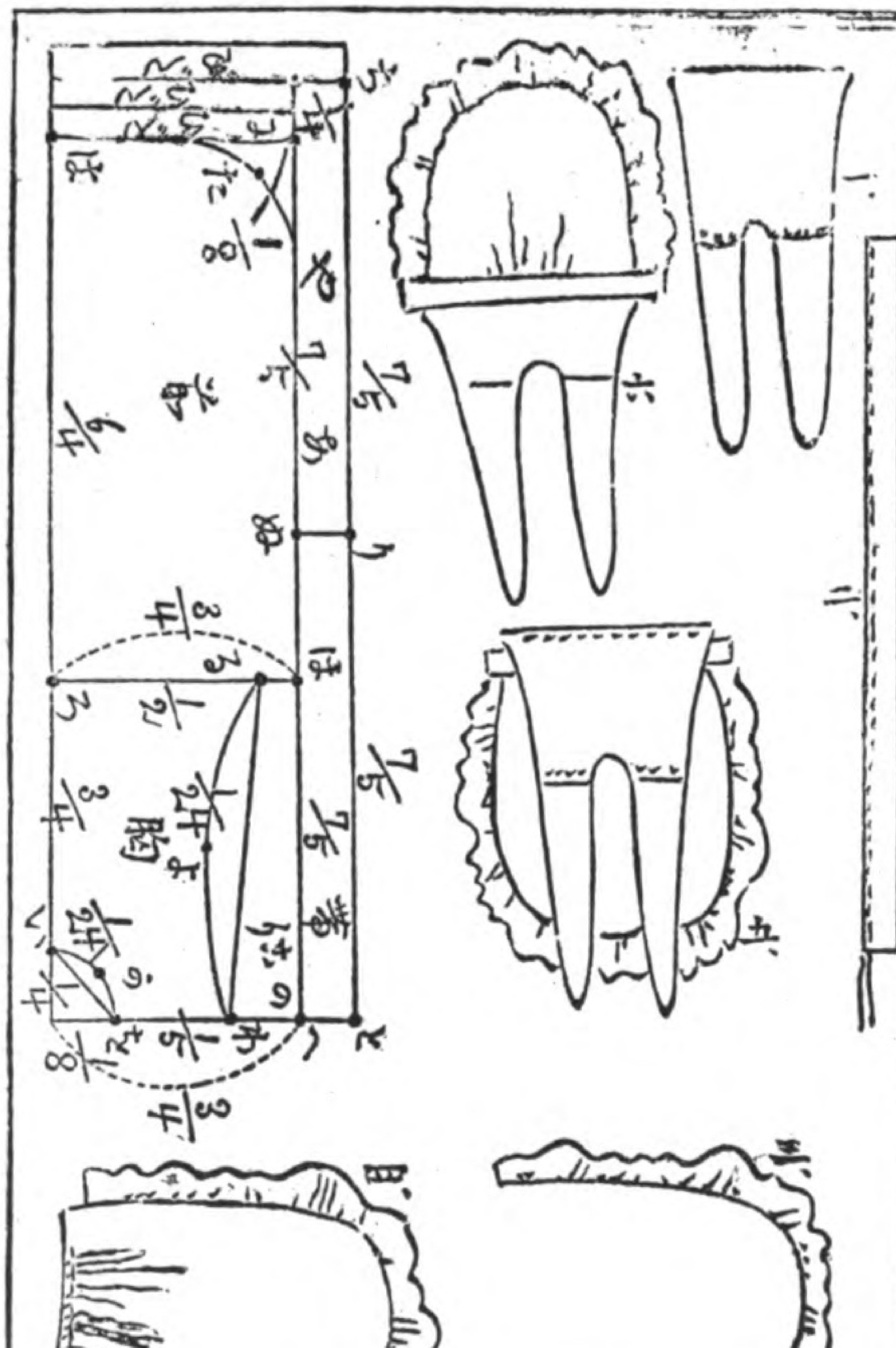
裁縫實習

女子裁縫高等學院長　小出新次郎

▲背あや胸掛裁方割出及縫方

今回は當校の夏季講習會の準備の爲め非常に繁雜を極め遺憾ながら玆に端物二種を記述してをきますゆゑそれで勘辨してください、其の變り此の端物の割出し方法は類推的教授方法である故に此の二種の割出分數を理解せし上は此の二種の類だけは大人小兒の分ちなく自由自在に其の子其人の身體に相應したものを造り出す事の出來る誠に都合のよい方法であつて是れも私しが多年苦辛して漸く考究した新式教授法の一つであるが此の類も、殆んど五十種斗りであるが故に間に〳〵挾んで記述する積りゆへ玆に其の端緒を開て置く事に致しますから試みに新聞紙を二尺巾二尺斗りにはり合せて夫れを縱に二つに折りて正敷おいて左の圖の如くイロハ番附によつて點を附け其點から點に亘りて圖の如く線を引き其線より裁ち試み見られよ然れば其割出の方法は始め此の胸掛を掛けさすべき子供の胸度即ち乳の上あたりで衣類の上から紐をぐるりと廻はして胸度何尺何寸であるかを計り其胸度の半分即ち半胸度が何寸であるかを知り其れよりイロハ番附の順を逐ふて點を附けるのであります今此に二三才の子供にして全胸度一尺二寸であると假定しますと其半胸度は六寸である因て其六寸を元として左の圖中に書入ある分數によつて點をつけて出すのであります縱令ば半胸度六寸なれば此の角度より左へ $\frac{1}{4}$ 即ち一寸五分去てイの點をつけ次はイの點より左へ $\frac{3}{4}$ 即ち四寸五分としてロの點をつけ次はロの點より左へ $\frac{6}{4}$ 即ち九寸とハの點をつけ次はハの點より向ふへ $\frac{3}{4}$ 即ち四寸五分としてニの點をつけ次はロの點より向へ $\frac{3}{4}$ 即ち四寸五分としてホの點とをつけ次は右の手前の角度より向ふへ $\frac{3}{4}$ 即ち四寸五分として への點をつけ、次にへの點より向ふへ $\frac{1}{4}$ 即ち一寸五分として

トの點をつけ次はニの點より向ふへ $\frac{1}{4}$ 即ち一寸五分としてチの點をつけ、次はチの點より向へ $\frac{7}{5}$ 即ち八寸四分としてリの點をつけ次はニの點より同樣 $\frac{7}{5}$ としてヌの點とをつけ次にロの點より向へ $\frac{1}{2}$ 即ち三寸としてルの點をつけ次は手前の角度より向へ $\frac{1}{8}$ 即ち七分五厘としてヲの點をつけ次はヲの點より向ふへ $\frac{1}{5}$ 即ち一寸二分としてワの點をつけ夫れより圖の如く總ての線を引き夫れより右の手前の斜の線より向ふへ $\frac{1}{16}$ 即ち三分七厘計り出してカの點をつけ其の所を圖の如く丸く線を引て次はルワの點に亘り居る斜の線より $\frac{1}{24}$ 即ち二分五厘斗り手前へ入れてヨの點をつけそうしてワヨルに亘つてなりをつけ次に二の點より $\frac{1}{8}$ 即ち七分五厘內に入れてタの點をつけ同樣なりをつけ夫れより裁ち切るのであるが此の方法で割出して行く時は何程大きくとも何程小さくとも胸度さへ分れば其の子其人に誠に相當したものを造る事が出來るのであります、縱令ば七才位の子で半胸度が一尺二寸であるとすれば角度よりイの點までが $\frac{1}{4}$ 即ち三寸であつてイよりロの點までは $\frac{3}{4}$



即ち九寸と云ふが如くいくら大きくとも小さくとも半胸度を元として此に書入たる分數によつて寸尺を割り出して點をつけて行く事にしたならば自由に造る事が出來るのである然れば此の背わや胸掛を一つ覺たならば背わや胸掛だけはどんな大きなのも小さなのも自由に出來るではありませぬか分りましたか一つ新聞紙でもはり合せて試みて其れからキヤコの白か何かで實際にやつてごらんなさいまし今年の夏季講習はシャツでも半股引でも皆んな此の方法で教へますので其應用は自由自在で在うと信じます。

其れから縫方でありますが縫方は先づ第一圖の如く胸にわやをはぎ附て夫れから左右の端をくけ夫れより殘りの布を一寸二分巾位に裂きて夫れで第二圖の如く片方をくけ片方を三通りぐし縫にして其の縫ひ糸を引く時は第三圖の如くひだが出來ます之れを第四圖の如く前掛にくる〳〵と縫ひ附け夫れより第五圖の如く前掛と帶胸と三枚重ねて縫ひ合せそして第六圖の如く帶を胸の方へ折り重ねてくけつけ兩はしを折り返して裏身にくけ附け帶の左右にボタンを附け又わやの兩はしへボタン穴をあけ、かゞり附けるのである、先づ是れで出來あがりました。

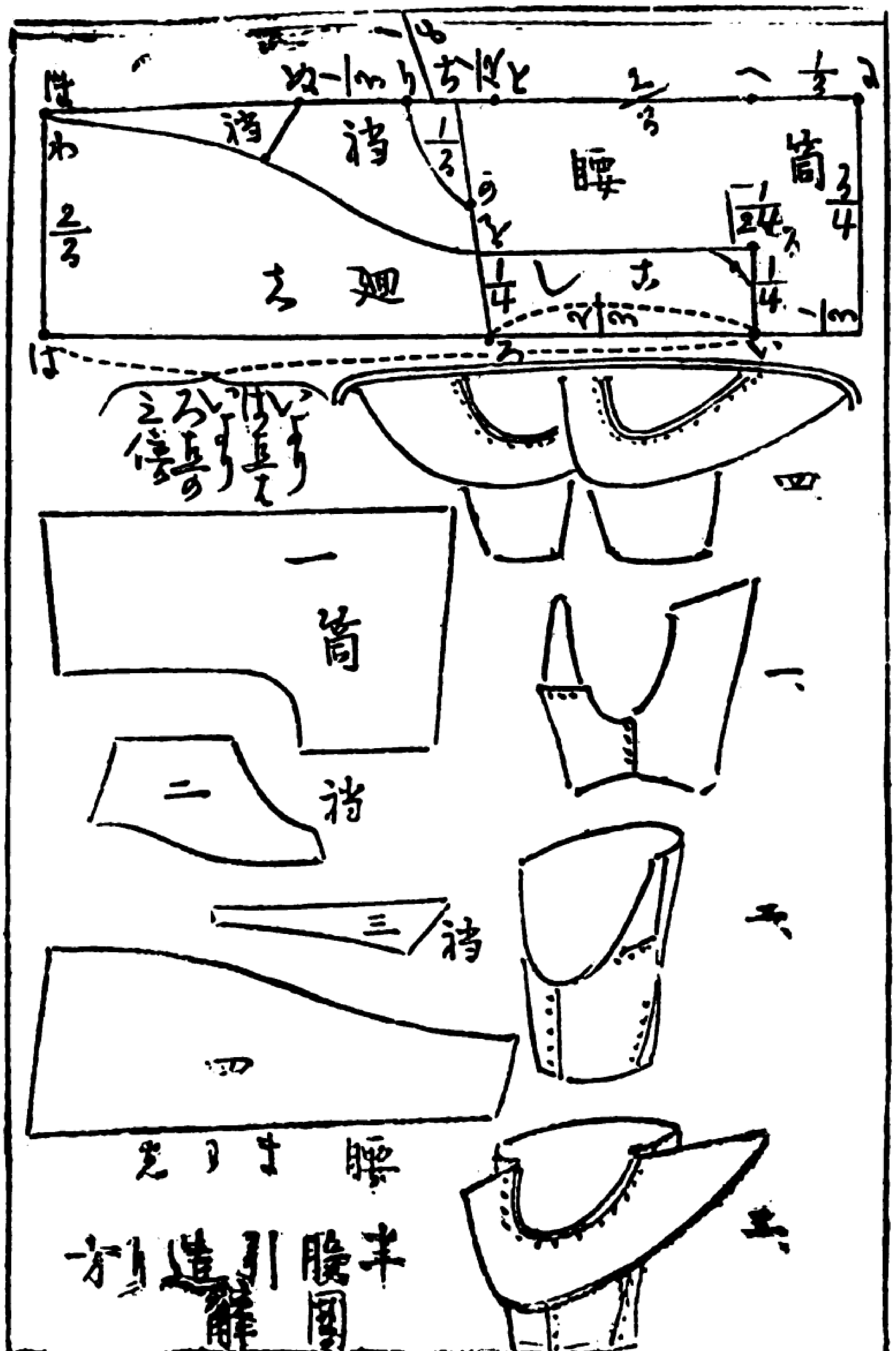
但胸わや共に裏附に造る時は此の表に習ふて裏布を裁ち切る樣になされまし。

▲半股引

此半股引を裁つのにも、やはり其の人の胸度を計り其の胸度が假りに二尺四寸なれば半胸度は即ち一尺二寸までゝある、因て其一尺二寸と云ふものを標準にして左の如き方法を以て點をつけ、夫れより筋を引き裁ち切るのである、因て半胸度が一尺一寸の人なれば夫れを標準にして割り出し又半胸度が八九寸位ゐの子供なれば其の八九寸を標準にして割り出すとどんな大きな人でも小さなる人でも單に胸度一邊を標準にして割り出せばよいのである。

先づ其の方法を説明すれば初め九寸巾五尺 計 の縮みか何にかの用布を横に二つにおり正敷をき夫れより圖

の如く右の手前の角度より左へ半胸度即ち一尺二寸の三分の一即ち四寸としてイの點をつけ次は又イの點より左へ三分の二即ち八寸としてロの點をつけ次は半股引イの點より左へ(イからハ迄の三進)即ち二尺四寸としてハの點をつけ次は右の角度より向ふへ $\frac{3}{4}$ 即ち九寸として二の點をつけ次は左のハの點より向ふへ $\frac{3}{4}$ 即ち九寸としてホの點をつけ次は二の點より左へ $\frac{1}{3}$ 即ち四寸としてへの點をつけ



次はへの點より左へ $\frac{2}{3}$ 即ち八寸としてトの點をつけ次はトの點より $\frac{1}{12}$ 即ち一寸としてチの點をつけ次はチの點より左へ $\frac{1}{8}$ 即ち一寸五分としてリの點をつけ次はリの點より左へへ $\frac{1}{3}$ 即ち四寸としてヌの點をつけ次はイの點より向ふへ $\frac{1}{4}$ 即ち三寸としてルの點をつけ次はロより向ふへ $\frac{1}{4}$ 即ち三寸としてヲの點をつけ次はハより向ふへ $\frac{2}{3}$ 即ち八寸としてワの點をつけ次はチより

ロに亘りて斜に線を引き次はヲよりルに亘りルよりイに亘り線を引きまたワよりヲに亘り斜に線を引き次はチより手前へ $\frac{1}{3}$ 即ち四寸去りてカの點をつけ次はリよりカに渡り丸みをつけて線を引き夫れより圖の如くワとホの間よりヲイに亘り裁ち切りの線を引き夫れより第一二三四圖の如く裁ち切るのである

●同縫方

縫方は先づ第一圖の如く本身と襠と縫ひ合せ折り目は本身の方へ返し尚は片はしを縫ひ合せて第二圖の如くにして夫れより第三圖の如く腰廻しきれを縫ひつけ折り目は腰廻しきれの方へ折り內躾をして夫れより裾をくけ左を上にして五尺計り縫目と縫目とより合せ夫れに紐をつけ第四圖の如く造りあげるのである

▲教授事項及び順序

凡そ團体教授の方法によりて教授をするには他學科と等しく教育學の原理に基き易より難に己知より未知に所謂途々として急ぐといふ教授法案を調製して教授せねばならぬ今爰に其大畧を示せば尋常三學年に於ては衣服器具材料の名稱より始め素縫及單衣襦袢の總合縫を以て學期の終りとするのである

然しこれが教授の順序及目的は素縫を根據として其の間に單純なる縫止、縫始躾絎待針等極めて簡易なる種類を教授し不知不識衣服裁縫に關する要所の大畧を知得せしめ漸く進んで單衣要所部分縫に移り尚は進んで始めて單衣襦袢の裁切へら附總合縫を以て學年の了さす

次は尋常四學年級の教授である此の學級に於ても前同樣素縫を根據として其の間に前年の練習より要所部分縫及一つ身單衣裁切へら附等に移り漸く進んで一つ身總合縫を以て學年の終りとするのである。

次は高等一學年の教授であるが此學級においても素縫を主として其間に要所部分縫より前年前々年の教授に關する種類の復習を爲して漸く進んで單衣三つ身四つ身の裁切へら附より總合縫を以て學期の了りとする

次は高等二學年であるが此の學期にても素縫を主とし

て其の間に前年前々年度の練習と要所部分縫とを爲しつゝ漸く進んで本裁單衣裁切へら附及總合縫單衣一つ身三つ身四つ身に於ける總合縫等を以て學年の終りとするのである

次は高等二學年であるが此の學年の教授に於ても前同樣素縫を以て主眼として其の間に前數年間の教授に關する種類の練習と要所部分縫より漸く進んで一つ身三つ身四つ身本裁等に於ける單衣綿入の裁切へら附及總合縫を以て學年の終りと致すのである

次は高等四學年級であるが此の學年に於ても前數年間

(四)練習及要所部分縫を爲し漸く進んで男女帶及三つ身四つ身、本裁羽織の裁切へら附及總合縫を以て學年の終りとするのであるが以上の順序方法に因りて教授せし結果は其四學年を卒業せしむるに及ては普通衣服の大畧は獨力裁縫し得らるゝ樣勉めねばならぬのである然し斯の事たるや技藝に屬するを以て其の教授の困難なる事は到底他學科に比類を見ざるものである故に要所部分縫を教授すると云においても一朝一夕の方法では決して完全なる教授は爲し能はぬものである故に前述の如く學理と實地とを應用して眞に完全無缺なる器具材料及び方法とも探究して毫も秩序を亂さゞる樣教授を致さねば教師たるの職責を全ふする事は出來ぬ

空氣を着る法

こゝに至極安價で、至極簡單で、至極衛生的の新法、空氣を着る法といふのを、個條書にして御覽に入れませう。

一、被服寢具は常に日又は火に曝し、綿を膨らませ置くこと、綿は常に目方の割に容積多きものを可とすること。

一、被服寢具は成るべく幅を廣く作り、裕かなるべきこと。

一、相成るべくは冬の着物に——下着だけにても八つ口を塞ぎたきこと。

一、冬日は股引を穿き、シヤツを着るを可とすること、中股引なれし婦人にても可笑しきことなし、袖を短くし、胸を稱狩遣にすれば、フラン子ルジヤツなど婦人に適當ならん。

一、足袋は成るべく裕なるを撰ぶべきこと。

一、袷一枚よりは單衣二枚、厚綿一枚よりは薄綿二枚の方暖かなり、素袷、素綿入などの寒きは此理なり。

一、男子の衣服など註文する時は、凡て裕やかに命ずべし、靴の註文亦同じ、窮靴の暖くして密着したる革靴の冷たきは之を證す。（河西氏著家政心得草）

次號記事豫告

（第三卷第拾壹號九月五日發行）

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ヶ月分）……前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊　增刊四回…三、六、九、十一月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引三十三圓
一等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十七圓
二等	二十九錢	九圓二十八錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ。

明治卅六年八月五日發行　第參卷第拾號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番　千八十八番

◀博文館藏版▶

此各紀行文集は古來英雄豪傑詩人騷客俗は優しき女性が旅途歷遊の際其耳目に映したる事項を麗彩優致

に書き記されし者にして風景と云はず風俗とい はず人情風土の異江山萬里の感一として茲に記せさるはなく其趣きの高きもの雅なるもの風尚なる者讀一讀故きを溫ね新きを知るに於ても往昔に於ける旅上の感懷を追想し何となく其境に入り征途の情を促さるものあり亦以て趣味ある銷夏の好讀物といふを得べし殊に北條氏康の武藏紀行に於ける太田道灌の故

故大橋乙羽君校訂

紀行文集

正價六拾錢 郵稅拾六錢

●東遊記……橘南谿
●西遊記……橘南谿
●日本行脚文集……呑空法師
●筑紫紀行……菱屋平七
●諸國里人談……菊岡米山
●おくの細道……芭蕉庵桃青

元紀行に於ける芭蕉翁の野さらし紀行に於ける蒲生氏郷

岸上質軒君校訂

續々紀行文集

―正價六拾錢――郵稅拾六錢―

●東關紀行● うたゝねの記●熊野紀行●高野日記●都のつと●住吉詣●鹿苑院殿嚴島詣記●北山行幸記●なぐさめ草●富士御覽日記●善光寺紀行●藤川の記●正廣日記●平安紀行●筑紫道記●東國陣道記●東國紀行●嵯峨紀●關東海道記●上下紀行●しのまくら●嵯峨遊覽記●日光山紀行●御鳥羽天皇御廟參詣記●蝶の遊●丁未旅行●常陸帶●三浦紀行●奥宮川日記●長野行役日記●津島祭記●道芝のの荒海●たびの命毛●小金の御狩●壬戌紀行●甲中旅日記●船路のゆき●豐後紀行●伊豆國懷紀行●夢のしなり●松傑里山莊遊記●加越日記

岸上質軒君校訂

續紀行文集

正價六拾錢 郵稅拾六錢

●高倉院嚴島御幸記●海道記●小島のくちずさみ●富士紀行●廻國雜記●東路の津登●高野參詣日記●あづまの道の記●武藏野紀行●吉野詣記●富士見道記●九州道の記●平安紀行●丙辰紀行●東路り●野ざらし紀行●伊勢紀行●西北紀行●椎の葉●甲戌紀行●富士一覽記●鄰遊稿●ぶりし地紀行●熱海紀行●常陸紀行●秋山の記●佐渡日記●見た京物語●外紀行文十數編

の平安紀行に於ける足利義詮の住吉詣に於ける小磯某女の奥の荒海に於けるが如きは名品中の名品にして昔の偲ばれ追想追慕の情に堪へず巻を措く能はざるものあり―

綠蔭銷夏之良友

鹽井雨江君著

美文韻文

暗香疎影

正價廿五錢郵稅四錢

雨江先生の文温籍にして流麗情熱溢れ氣韻自から高く恰これ寒梅一樹影清淺の水に落ち暗香黄昏の月に浮動す殊に其聲調なだらかにして盤上珠を轉ずる如きは實に方今詩壇獨得の長技なり天下の讀書家願くは一本を備へて優美清麗なる詞藻を味はれよ

故大橋乙羽君著

花鳥集

正價壹圓郵稅廿錢

小説あり、紀行あり、一種の眼光と一家の筆致とを以て社會觀を描寫し、風俗を記述したる雜文あり、以て著者の全集とも見るべきもの、花笑ひ鳥啼き風生じ雲湧く、晴誦雨讀、以て清閑を消すべく、又以て南船北馬の佳伴たるべし、

故大橋乙羽君著

風月集

正價卅錢郵稅六錢

著者は絶大の精力家なり三伏の炎天に晝寢もせず、夜も深更まで目を覺して、少しの間にも、ソラ散文、ソラ韵文、新聞讀む外は三分の隙も惜みて、作る程に書く程に、此集も成れり、山に行く人、海に遊ぶ人一本を手にして旅宿のゆふべ、書齋のわした、繙く所、風清く月白からんものなり。

博文館發兌　博文館發兌　博文館發兌

笹川臨風君著

雨絲風片

正價廿五錢郵稅四錢

瀟洒なること春雨の如く、悲壯なること秋風に似たるか、著者平生作る所の文辭、史論と云はず、文學論と云はず、風俗觀察に、紀行文に、小品文に、長篇短篇錯落として之を蒐ア幸に才人の一顧を煩さんと欲す

土井晩翠君著

天地有情

正價廿五錢郵稅六錢

峨々の山洋々の水以て晩翠君の詩を評すべし此集君が今日迄の吟哦を錄したるものにして新體詩中別に一旗幟を樹立するもの詞華爛熳誠に明治詩壇の新光輝たるに背かず請ふ愛讀を玉へ

大和田建樹君著

雪月花

正價參拾五錢郵稅六錢

其文は、清楚婉麗其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生するものは、大和田先生の筆と爲す。蓋し落寞振はざる今日文學界中の旗皷たるものは此書を措きて他に又た何かある。

綠蔭銷夏之良友

武島羽衣君著　美文韻文　霓裳歌話

正價參拾錢郵稅六錢

武島文學士が世の歌學者。其他文學に志すもの丶爲めに、歌に關する論說。叙事。隨筆。史傳を收輯して、一卷となしたるものなり。皆之れ山の峨々たるが如く、水の洋々たるが如く。琅々誦すべきものならざるはなし。

大和田建樹君著　美文韻文　深山櫻

正價四拾錢郵稅六錢

著者の文學に深く、措辭に妙なるは世既に定評あり。此書、其散文韻文を輯めたる者、其一たび繙かば櫻の山に分入るが如く、手を放つ能はざるの妙ある可し。

雨江桂月羽衣合著　美文韻文　花紅葉

正價參拾錢郵稅六錢

鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月三文學士の錦心繡腸、吐いて美文となり、發して韻文となれるもの、集つて此冊子に在り。才華爛發、紙上珠を聯ね、地に擲たば金石の聲を發せんとす。洵に明治文壇の奇觀たり、天下文を好むの士、讀誦に資せられよ。

博文館發兌　博文館發兌　博文館發兌

江見水蔭君著　月と梅

正價廿五錢郵稅五錢

詩泉滾々として湧き想地深々として溢る水蔭子の材料に富み短編に長ずるは明治文壇の珍となすべし。此編子が短篇の傑作數十種の他に相撲小說、時代小說、訪問實記等を添へたり、子の觀察が多方面に渉りて趣味百樣に躍出せるは景色鬆ふ月と梅

石橋思案君著　筆と紙

正價卅五錢郵稅六錢

此書收むる處滑稽小說に「正反對」「名物袋織」「細君大明神」等の奇編あり講義に「都々逸文學」論說に「和洋美人比較」「好男子變遷」等の妙編あり其他小品に雜記に收錄する所約四十種、讀者は殆んど送迎に暇なからん作者が十年の心血收めて此卷にあり、

國府犀東君著　龍吹鶴語

正價廿五錢郵稅六錢

犀東子の文は蜀棧を涉るが若くは楚峽を溯るが如く滿目嶔峨崔嵬奔激動蕩人をして動心駭魄怔忪定まらざらしむ。其詩亦縱橫排奡跌宕突兀一種伉爽豪邁の致あり今其篋中に就き擷采して此冊子を得たり、亦以て江湖讀者胸中の奇を皷するに足らん。

避暑旅行之好友

故大橋乙羽君著

千山萬水

正價五拾錢郵稅拾錢

本書は辱くも九重の御覽を賜ふの榮を得發售以來既に十五版を累刊するに至るの盛運に會す總紙數六百五十餘頁各地の名山大川古蹟勝景等優美なる寫眞版を挿入して一々懇切に詳述したれば實に一面完全なる旅行案內なると同時に婉麗なる大文章なり

博文館發兌

故大橋乙羽君著

續千山萬水

正價五拾錢郵稅拾錢

千山萬水は、其の記する所の地東北に止まりしを、烟霞の癖は更に著者をして、東海畿內中國西南より北陸諸州を跋渉せしめぬ、是に於てか續編わり之を初編に比するに、經る所廣きに從ふて寫眞に上れる絶景亦頗る多し。裝幀の美麗亦優るとも劣ることなし。

博文館發兌

故大橋乙羽君著

耶馬溪

正價四拾錢郵稅四錢

豐の耶馬溪は著者明皙の紀文と靈妙の寫眞に由りて本書となれり、從來斯勝を勞蹁する者は、獨り山陽の紀文わりしに著者は山陽の未だ到らざりし所迄到り其未だ寫さゞりし奇勝を寫したれば、斯書を一讀する者、遊意勃興好嚮導を得たるを謝せざる可からず

博文館發兌

江見水陰君著

滊車の友

正價參拾錢郵稅參錢

江見水陰君の『滊車の友』は鐵道に因みて想を搆へたる短篇小說滊車に緣ある滑稽笑話。鐵道客譚、鐵道俳句を輯めたり。若し夫れ滊車雜談に至つては、旅客に有益なる注意を促がし、滊車遊戲の如きは、遊士に簡易なる新法を示したり、加ふるに附錄としては、江の島の怪洞龍窟の冒險と、詩思溢るゝ山海初日出の二短篇を添ふ。

田山花袋君著

南船北馬

正價四拾錢郵稅六錢

隨意に感興を作り到る處に詩想を着するは花袋子の紀行文なりことに氏は諳勝の見に富みて、殘山剩水處として至らざるなく、處として探らざるなければ、その紀文には珍談奇話百出して或は溪村の夕或は深山の夜、或は怒濤岸を嚙むの邊、或は山中の湖畔など、他の紀行文にに見るべからざるの妙あり

田山花袋君著

續南船北馬

正價四拾錢郵稅六錢

目次

●雪の函館●淺間横斷記●草津溢な踰ゆるの記●狐島●南洋の遺跡●並木づたひ●陸羽の一匝●瀨戶內海●播摩名所●鎭西の諸勝●一步一景●箱根撮影記●雪中の木曾●綠陰と霧降と裏見●戰塲ヶ原●栗山鄉●老僧●三保の松●冬の日光●多摩の水源●富士川な下るの記等筆琉優致にして一讀山河の絕景に入るの思あり

山莊無聊之慰籍

大和田建樹君著

能の栞

正價一冊四拾錢郵税六錢

全部六冊和裝……………二冊既成

能を舞ふ人はあれども能を知る人は少く能を見る人はあれども能を解する人は少し、此書一度出でなば知るとも密かに解するとも速かなるを得ん斯道のため舟筏とも燈火ともなるべきは獨り此書か

大和田建樹君著

謠曲文粹

正價卅五錢郵税六錢

其文は金玉其曲は錦繡誰か謠曲を一讀して三嘆せざるものあらんや大和田先生其文に付き粹の粹なるものを拔き之を四季戀雜の六種に類別して一々題を設け文の妙處に批圈して要點を示されたり尚卷頭には謠曲の國別古來作者類別を掲げたれば讀者の便益亦少からざるなり

大和田建樹君著

謠曲通解

正價壹圓八拾錢小包六百

其文は自然、其意は幽玄にして神韵の掬すべきは謠曲にありて大和田先生の特珍なり此の書は大和田先生が現存の謠曲を悉皆網羅して註譯を付し妙處を示すと丁寧反覆一讀以て神道佛法を學ぶべく以て歷史故實を暗すべく以て詩歌文章を知るべし名所舊蹟を探るべし

博文館發行

博文館發行

博文館發行

大和田建樹君著

謠と能

正價廿五錢郵税六錢

謠を謠ふ人はあれども故事來歷を知る人尠く能を習ふ人あれども其慣例秩序を詳にする人稀なり人若し此書を懷にして能見物に行かばシテワキの名稱より舞臺橋掛の謂れ囃子方地謠の評舞の種別假面の名目に至る迄案内者の説明を受くる如くならん

幸田露伴君校訂

狂言全集

上卷正價五拾錢郵税八錢

中卷、下卷……………近刊

此書は和泉大藏の二流を纂めたるものなり古より狂言の書充棟啻ならずと雖も流派區々にして一に由て他を知る甚だ難し本書は諸派を對照知了することを得る樣編し尚和泉流を基とし大藏流の同しものを加へ露伴君の校訂せられたるもの寔に好者の好參考といふべし

谷信次君著

月の光

正價八拾錢郵税四錢

天文。地文。歷史。地理。文學。宗敎。風俗。歌謠等の各方面より玲瓏中天に輝く所の月を觀察して之に對する邦人の思想。風習。故事。美文等を綜合し此一卷に收め、加ふるに幾多の精畫を挿入して以て文字外の淸趣を發揮す月夜閑に此書を一讀せば淸涼の氣自ら心胸を洗ひ來らん。

山莊無聊之慰籍

大和田建樹君著

新文林

正價廿四錢郵稅六錢

雅俗古今を調合せるの新文林は遊記あり、紀行あり、諷刺あり諧謔あり論あり說あり傳あり序あり優美婉麗吉野の春を寫すもあれば凄涼寂寞日光の秋を描くもありて間挿むに新色滴る長短歌編を以てす實に閑窓の侶となる旅行の伴となる興味多し

石井研堂君著

萬物滑稽

合戰記

正價六拾錢郵稅拾六錢

本書は石井研堂君が老熟なる讀書眼によりて校訂せられたるものにして諧謔縱橫一言一句讀んで頤を解き臍を捻らさるなし試みに其一二を摘めば金銀太平記化物仲間割梅擒軍談茶漬原御膳合戰貧福合戰記、竈將軍謀畧卷等は滑稽中の滑稽にして讀む人社も一編を終り得さるべし

博文館編輯局校訂

滑稽名作集

正價六拾錢郵稅拾六錢

全二冊……本書亦稀代の名作を集めたるものにして著者は江戸時代の文豪十返舎一九式亭三馬山東京傳其重なるものなれば其可笑しさ云はん方なし此書を一讀せば終日笑ひ暮して不景氣は何處の空を吹く風なるかを嘯かしむるなり一寸と一例を擧くれば一九の世の中貧福〻三馬の狂言田舍操京傳の指面草等實に腹の煮え覆へるもの

博文館發行

博文館發行

博文館發行

博文館編輯局校訂

俳優全集

正價六拾錢郵稅拾六錢

●枝珊瑚京打算 ●三日月おせん ●開勇八幡祭 ●其俤夕暮譚 ●めしや誰問白藤 ●春の曙 ●風俗女三國誌 ●髮加天網島 ●伊達姿長巳八景 ●和歌三神由來 ●手前味噌

●色三味線 ●流行歌川船合奏 ●いろは假名姫席書 ●向人鄕山彥 ●蝶雙春花壇 ●傾城か獄 ●杜若紫再咲 ●姫客意氣地 ●尾上松綠 ●狂言袴

石橋思案君著

落語全集

正價卌六拾錢郵稅拾六錢

●醒睡笑 ●鹿の卷筆 ●曾呂利話 ●曾呂利狂歌咄 ●臍の宿替 ●初音草大鑑 ●俗談今歳花時 ●商資百物語 ●詩口噺 ●咄の開帳 ●口拍手

●落語笑嘉登 ●輕口春の山 ●田舍莊子 ●壽々葉羅井 ●獨樂新話 ●かろくちばなし ●河童の尻子玉 ●噺物語 ●輕口浮瓢簞 ●落噺六義

破竹居士著

健康と遠足

正價參拾錢郵稅六錢

凡そ政治家たると事業家たると學生たるとを問はず其身の健康を保全せずんば健腕も振ふ能はざるべく目的も達し能はざるべし本書は著者二十有餘年の實驗に徵し健康保全の最良法を詳述したるもの而も其議論文章の多姿多樣なる讀者をして覺へず嗒然たらしむ

海外紀行書類……博文館發行

（後付の八）

大橋乙羽君の歐山米水は氏が歐米の山水を週遊し各國の都府を觀察し更に巴里の大博覽會を見ライプチヒの大書肆を歷觀して書帙の絶美を歎し我出版業の幼稚なるに慨して歸朝后此著ありしもの其内容の警拔なる筆致は讀者の夙に知らるゝ處歐米小觀は歐山米水の不足を補ひし是亦趣味と稗益とを有す其鎌田君の歐米漫遊雜記及水田君の大英國漫遊實記亦必要なる事項を記述して彼の土の文明を精細に紹介して讀者に有益なる參考資料を供せり讀者必ず見落さるゝ勿れ

大橋乙羽君著
●歐山米水
正價壹圓五拾錢郵税八錢

大橋乙羽君著
●歐米小觀
正價四拾錢郵税四錢

鎌田榮吉君著
●歐米漫遊雜記
正價四拾五錢郵税六錢

水田榮雄君著
●大英國漫遊實記
正價七拾錢郵税十錢

松井柏軒君著
●米國漫遊雜記
正價參拾八錢郵税六錢

飯島立峯君著
●米國渡航案内
正價四拾錢郵税六錢

巖谷小波君著（全二冊）
●小波洋行土産
一冊壹圓廿錢郵税拾貳錢

内藤湖南君著
●支那漫遊燕山楚水
賣價貳拾七錢郵税六錢

松井君の米國漫遊雜記は殊に學生は勿論渡航者の不便を救はんの心より成れるものにして其記述は彼の土の文明を紹介すると同時に渡航者に有益なる參考資料を供せり飯島立峯君の渡航案内亦松井君と其想を同せるものにして讀者の必讀を要するもの其他小波君の洋行土産は最近の發行にして内容は最近の弊館各雜誌に廣告せり燕山楚水は支那内地の名勝絶景地理人情を紹介せるもの何れも讀者の一讀を要すへき物也

毎月一回十九日發行す　主筆竹貫登代多君　六月十五日發行す

數學講義錄

特殊之師友　壹ケ年卒業　唯一之餘師

本講義錄は言文一体にして算術代數幾何の三科目を平易に講演し其問題は何れも次號に詳解して自修者に便す

本講義錄は研究資料の一欄を設け知名數學家の論文を掲げ又篤志者の意見を掲げて斯學者有益の參考材とす

算術之部

第三號

諸等數、加減乘除、小數乘除ト其解義

代數學部

第三號

代數ト掛算ト割算

方程式ト問題解義

幾何學部

第三號

平行四邊形ト其解義

圓、中心、角、弦弓形

研究資料

▲本項は毎號各部▼

▲巻末に挿入せり▼

● 方程式に就て……田中攻玉社教授

● 消去法……松岡數理學館長

● 新初等幾何學……鈴木攻玉社教頭

● 懸賞問題解義 一等當選者中尾正雄

本書第一號第三版出來す

各科定價

一册(六十四頁) 正價金十錢

三册(三ヶ月分) 正價金二十九錢

六册(六ヶ月分) 正價金五十七錢

十二册(十二ヶ月) 正價金壹圓十錢

此外に郵税一册金五厘

本講義錄は時々懸賞課題を掲載して答案を募集し優等者には規定の賞品を與へ又臨時増刊をも發行し報道を勉む

本講義錄質問應答の一欄を設け何人にても質疑し應答する所とし又數學課題の一欄を設け學生諸子の出題を掲ぐ

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

女學世界
毎月壹回五日發行
(明治卅參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可) 第參卷第拾號 (明治參拾六年八月五日發行)

(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界 明治期復刻版㉑
明治36年7月（第3巻第9号）、8月（第3巻第10号）

2006年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN4-7601-3050-0 C3321